
バカとテストと紅き閃光

霧水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと紅き閃光

【Nコード】

N5132V

【作者名】

霧氷

【あらすじ】

ある日、スマートブレインの研究室から一つのベルトが盗み出された。後日、明久達は『死者が蘇る』という都市伝説を聞く。さらに、学園長である藤堂カオルから、ある物を渡される。そのある物が、明久達の運命を変える。バカとテストと召喚獣と仮面ライダー555のクロスです。もう一つの作品に比べたら、だいぶ更新が遅いかもかもしれませんが、楽しんで読む事ができたら幸いです。

序章（前書き）

まず、序章です。

序章

沈黙が支配する夜の中、その研究所だけは不気味な気配を放っている。

「うわあああああああ！！！」

そんな研究所に、鋭い悲鳴が響き渡る。

「どうした！？」

「侵入者です！！！」

監視室にいる男はそれを聞くと、監視カメラの映像を見つめた。そこには――

「なっ・・・！！！」

そこには、灰色の異形が通路を歩いていた。

ドンッ！！　と研究室の扉が打ち壊され、中にいた研究者達が逃げ惑う。

その異形は、研究室の中にあるケースに近づくと一気にそれを破壊した。

そして、その中からベルトのような物を掴み出した。

「・・・ファイズのベルトだけか。・・・後は全て奴の手に落ちたか、せめてこれだけでも・・・」

異形はそう言うと、そのベルトを持ち、研究所を去っていった。

設定（前書き）

この作品の設定です。

設定

世界観の設定を説明したいと思います。

・この世界はバカテスのパラレルワールドで、スマートブレインがファイズの原作のように大企業として君臨している。

・バカテスの時間軸は2巻と3巻の間。

・オルフェノクは世間に完全に認知されていないが、都市伝説として広まりつつある。

・藤堂カオルと元スマートブレイン社長の花形は親友。

・ライダーズギアはファイズの物以外は全てスマートブレインの物になっている。

・帝王のベルトである、サイガとオーガのベルトが開発されており、基本的にラッキークローバーなどしか変身出来ない。

設定（後書き）

コラボをカブトにするかファイズにするかすごく悩みました。最終的に自分的にはファイズの方が話を作りやすいので、ファイズにしました。

第一話 全ての始まり（前書き）

何かおかしい点があったらご指摘お願いします。

第一話 全ての始まり

「死者復活？」

文月学園、2-Fクラスで吉井明久はそんな噂を聞いていた。

「うむ、何でも最近死んだはずの人間が生き返って、生きている人間を襲っているという噂じゃ」

説明しているのは、明久のクラスメイトの木下秀吉。外見は立派な女子だが、本当は男子である。最近はその事実がクラスから忘れ去られているが・・・。

「でもなあ、そんなの誰かが適当に流したウソなんじゃないか？」

「・・・俺もそう思う」

呆れたように返したのは、同じくクラスメイトでありクラス代表の坂本雄二と、旺盛な性的好奇心とその気持ちを隠そうとする姿勢から、ムツツリーニと呼ばれている土屋康太だ。

「そ、そうですよ、ウソに決まってるじゃありませんか・・・」

「そ、そんなの信じるなんて、アキ達も子供ね・・・」

そう言いながらも震えているのは、数少ないFクラスの女子、姫路瑞希と島田美波だ。

「おいお前ら、何か学園長が学園長室にくるようになって言ったぞ」

明久達に、クラスメイトの須川が言った。

「あのババアが？ 一体何をしたんだ明久」

「今から謝って来れば許してもらえるかもしれないぞ明久」

「・・・ファイト」

「正直に白状してきなさいよ、アキ」

「明久君・・・、今度は何をしたんですか？」

「ちょっと待って！ 何で僕が何かをやらかしたって事になってるの！？」

あまりにもひどい扱いに、明久が叫ぶ。

「冗談だ、とりあえず行くぞ。あのババアがいい知らせを持つてくるわけないしな」

雄二の言葉に不安を持ちながらも、6人は学園長室に向かった。

「何の用ですかババア」

「早く帰らせろババア」

学園長、藤堂カオルに容赦ない毒舌が飛ぶ。ちなみに後の台詞を言ったのは雄二だ。

「・・・本当に礼儀のなっていないクソガキ共だね」

額に手を当てながら、嘆くように学園長が言った。

「・・・まあ、そんなことより本題に入らせてもらおうよ」

そう言うと、机の下から何かを引っ張り出した。

「実は、アンタ達にこれを預かってもらいたいんだよ」

机の上に出されたのは、一見普通のトランクケースだが、SMART BRAINのロゴが入っている。

「・・・おい、ババア、このスマートブレインってのはまさか・・・」

「ああ、あのスマートブレインさ」

日本で、その会社の名前を知らぬ者はいない。重工業や電子技術を中心事業としつつ、食品から医療から幅広い業種に進出している巨大複合企業で、日本有数の大企業である。

「こいつは数日前に親友から預かった物でね、預かって欲しいと言ったままどっか消えたよ、まったく勝手な奴さ」

「中身はなんですか？」

「知らないよ、まだ開けてないしね。ま、とりあえずあんた達に預かって欲しいというわけだよ」

「ちよっと待てババア、何でアンタに預けられた物を俺達が預からないといけないんだ」

「管理するのが面倒だからだよ」

「ふざけんなクソババア!!」

その理由に納得できないのか、雄二が叫びながら机を叩いた。まあその理由で納得できる人間も少ないだろうが。

「ごちゃごちゃわめくんじゃないよガキ共、言っとくけど、私はアంత達が校舎を壊したことを忘れたわけじゃないよ。文句を言うなら即刻停学でもいいんだよ」

「う・・・」

弱点を突かれてしまい、明久と雄二はたじろぐ。

「それにただ預かってもらうだけさ、それを使って何をやれってわけじゃない。簡単だろう？」

確かに、今までの事に比べたらはるかに簡単な条件だろう。それでも、明久達に何かメリットがあるわけではないが。

「さあ、これで話は終わりだ。分かったら、早く帰って次の授業の準備でもしな」

放課後、明久達六人は教室に残っていた。教室には彼ら以外誰もいない。

「どうしようかこれ」

「どうするも何も、まず中身を見てみるぞ」

「でも、勝手に開けちゃって大丈夫でしょうか・・・？」

姫路が不安そうに言った。

「これで中身が危険物だったら大変なことになるのは俺達だ。ましてや、あのババアの親友で良い奴がいるなんて思えないしな」

「ひどい偏見じゃの・・・」

雄二の言葉に、秀吉は少し学園長に同情した。そう言いながらも、トランクケースを開けると、

「・・・なんだこりゃ？ ベルト・・・にこっちはケータイか？」

「これは・・・デジタルカメラかしら？」

「・・・デジタルトーチライト」

中身は、意外と普通な物ばかりだった。それでもスマートブレイン製の物なので、かなり高性能なものばかりだ。

「こんなもん、何に使おうってんだ？」

「うーん・・・、運動会とかの撮影とか？」

「運動会にトーチライトは必要ないでしょ？ ベルトも何に使うか分からないし・・・」

その道具の数々に、一同は頭を悩ます。

「はぁ、考えてても仕方ねえ。とりあえず、これは明久が預かってくれ」

「何で僕なの！？」

「一人暮らしのお前の方が、事情とか聞かれなくて済むからな」

「ワシ等は全員家に家族がおるしの」

「そして・・・、預かるのが面倒だからだ」

「あのババアと同じような事言わないで！！」

その後何度も懇願したが全て却下され、最後には余計な事を言ったせいで美波に間接を逆に曲げられ、泣々下校したのだった。

「はぁ・・・」

明久はため息をつきながら、一人帰り道を歩いている。手には強制的に預けられたトランクケースがあった。

「どうしよう、これ・・・」

帰ったらそこら辺の床に置いてこうかな、と思っていた明久は、気が付くと前に一人の男が立っている事に気付く。

「えーと・・・、何か御用ですか？」

「・・・を・・・せ」

「えっ？」

「ベルトを……よこせええええええええええ！！！」

るとその男は灰色の異形となった。

「なっ・・・！」

形に変わったのだからそれもあるだろう。

「ふんっ！」

わす。

「はあっ！」

は、地面のコンクリートを破壊した。

「ベルトをよこせ………」

異形はそう言いながら、明久にじりじりと近づく。

「渡したら助けてもらえるの？」

「殺す」

「だろうね・
・
・」

律儀に返事を返してくれた異形の言葉に、明久は後ろに下がる。

言ってるけど、このベルトに何か意味が……？）

ライトとデジタルカメラの装着の仕方などが書かれていた。

「**忖してやるから**」

右側にトーチライト・・・、デジタルトーチライト型ポインティン

グマーカードバイス、通称ファイズポインターをセット、左側にデジタルカメラ型パンチングユニット、通称ファイズショットをセットする。そして最後にそれらがセットされたベルトを腰に巻き、ケータイを開く。

「無駄だ、お前如きではベルトの力を引き出せない」

さつきから怪人なのによくよく喋るなあと思ひながら、

「そんなの・・・、やってみないとわからないだろ！」

画面に表示されているコードを見て、一番上のコードを押し、ENTERキーを押す。すなわち・・・、『555』のコードを。

『Standing by』

ケータイからそう発声され、ケータイを折りたたみ、ケータイ・ファイズフォンを天に掲げ叫ぶ！

「変身!!」

そして、ファイズフォンをドライバーのバックル部・フォンコネクターに突き立て、左側に倒す。

『Complete』

「へっ？」

明久がそんな間拔けな声を出すと、異変が起こる。

ドライバーがフォトンストリームを生成、明久の体に沿ってフォトンフレームが形成され、ファイズフォンから一際強い光が放たれ、その光が止むと明久の姿が変わっていた。

その体を護るは、ダイアモンドに限りなく近い硬度を持つソル・メタニウム。胸部にある分厚い装甲は戦車の主砲の直撃を防ぐ、フルメタルラング。身にまとう黒いスーツは2000度の高温や絶対零度を防ぐ。フォトンストリームを通じて体をめぐるのは、安定性を重視した赤いフォトン・ブラッド。ギリシャ文字のΦをデザインとし、黄色の複眼を持つその名は、ファイズ。

「わわ・・・、な、何これ??？」

明久は今だ自分の状況があまり理解できていないのか、顔を触った

り、体を見たりしている。自分でもまさか変身できるとは思わなかったのだろう。

「クソッ!!」

異形は舌打ちをすると、明久・ファイズに襲い掛かる。

「うわっ!!」

「ぐはっ!!」

驚きながらも打ち出したパンチは、異形の腹に命中し、異形は吹っ飛んだ。

「す、すごい・・・、これなら・・・!」

ファイズは異形に近づくと、顔面を殴り、腹にけりを入れさらに顔を殴る。そして立て続けに殴り、最後に蹴りを異形の腹に叩き込む。

「ぐはっ!!」

異形が吹き飛ぶのを見ると、ベルトのポインターを外す。

「えーと・・・、ミッションメモリーをポインターにつけて・・・、

あ、これ?」

ファイズフォンからミッションメモリーを外し、ポインターにつけるが、説明書を見ながらやっているのていまいち緊張感が出ない。

『Ready』

ポインターの先端が伸び、そのポインターを右足にセットし、ファイズフォンを開きENTERキーを押す。

『Excited Charge』

発声と同時に、フォトンストリームを経由しポインターにフォトン・ブラッドが注入され、右足を異形に向ける。すると、ポインターから光線が放たれ、異形に当たると円錐状の赤い光になる。

「やああああああ!!!!」

その光に向かって跳び蹴りを放ち、異形を貫く!

「ぐああ!!」

そしてファイズは異形の背後にいきなり現れ、異形にΦの文字が浮かび上がると青い炎の爆発をおこし、瞬時に灰になっていった。

「・・・はあ・・・はあ・・・」

ファイズはファイズフォンを外し、ENTERキーを押し変身を解除をすると、深呼吸をする。

「・・・何が、どうなってるんだ・・・」

明久はふらふらとよろつきながら、家へと帰っていった。

第一話 全ての始まり（後書き）

初めて仮面ライダーの小説を書いてみましたが、どうでしたか？
感想お待ちしてます

第二話 敵の真実（前書き）

第二話です。

第二話 敵の真実

「お返しします」

「何寝ぼけたこと言ってるんだいバカ」

明久は学園長室でトランクケースを返しに行ったが、開口一番で却下された。

「昨日言っただよ、そのトランクケースを預からなかったら停学でもいいってね」

「あんな目に遭うなら停学の方がマシです!!」

「じゃあ退学にしようか？」

「こ・・・のババア・・・!!」

怨嗟の声を漏らす明久に、学園長はため息をつき、

「一体何が不満だって言うんだい、預かるだけだろう。それとも、預かれない理由でもあるのかい？」

「トランクケースを持ってたせいで化け物に襲われました」

「帰って勉強しな」

「待ってください！ 本当なんです！」

「信じてもらえるわけないよね・・・」

明久はこの間の文化祭で何とか取り戻した卓袱台に顔を伏せながら、負のオーラを出していた。学園長に何とかねばったものの、最終的には退学にすると言われ、しかも鉄人もとい西村先生がやってきたので仕方なく2-Fクラスに戻ってきたのだ。

「どうしたのアキ？」

「いつもに比べて元気がないの・・・」

心配そうな声をかけてきたのは、秀吉と美波の二人だ。

「放っておけ、どうせくだらないことで落ち込んでんだろ」

横で寝ている雄二が冷たい声をかける。

「失礼だなあ、僕だってちゃんと真面目なことで落ち込んだりするよ」

「くだらないことで落ち込むのは否定しないんじゃないかな・・・」

「お前が真面目なことで落ち込むわけないだろ、バカも休み休み・・・」

「霧島さん、雄二がこの間女子大生とデートしてるの見たよー」

「は、何バカいつぎやあああああああ！！！！」

「・・・雄二、浮気は許さない」

悲鳴を上げている雄二にアイアンクロウをかけているのは、Aクラス所属の霧島翔子だ。しかし、AクラスとFクラスはかなり距離があるのに、いつの間ここに來たのだろうか？

「明久君、元気がないならこれを食べてください！ 昨日家で作ってきたんです、きつと元気が出ます！」

「へっ」

姫路がそう言いながら出したのは、クッキーだった。・・・黒いオーラと死神の手招きが見えるのは明久たちの目の錯覚だと思いたい。

「よかったじゃないか明久！ 姫路がお前のために作ってくれるなんてまずないぞ！」

「運がいいのう明久！」

「・・・ラッキー！」

その威力を知ってる雄二と秀吉とムツツリーニが明久の肩を掴む。理由は単純、獲物を逃げられなくするためだ。

「ちょっと待ってよ三人とも！ 友達なら食べるの手伝ってよ！」

「・・・今は違う。・・・獲物！！！」

「アキ、作ってきてくれたんだから食べてあげなよ。・・・そのうちうちも作るから・・・」

「いいから・・・、さっさと食べくらあああああああ！！！」

「ぎゃあああああああ！！？」

さっきのお返しなのか、雄二が無理やり明久の口にクッキーを突っ

込み、明久は死と生の境をさまよう事になった。

「ひどい目にあった・・・」

「正直、お主が来世の事を呟き始めたときはもうダメかと思ったぞ・・・」

明久は今日は雄二達と一緒に下校していた。クッキーを食べて、その後放課後まで生死の境をさまよって明久と帰る時間が重なったためだ。

「だけど大丈夫アキ？ 本当に顔色が悪かったんだから・・・」

「大丈夫だよ美波、美波がそんなに心配するなんて似合わないよ？

美波はもつとがさいだだだだだだだ！！ ほ、骨がへしおれ・・・！！」

「だーれががさつで色気もないですって！？」

「そこまでは言っていない！ 色気がないのは本当だけといだだだだだだ！！」

「墓穴を掘った上に、さらに広げているな・・・」

「・・・バカ」

そんな明久を、雄二とムツツリーニは呆れた目で見つめていた。

「だけど明久君、本当に大丈夫ですか？ 具合が悪いなら病院に行った方が・・・」

「大丈夫だよ姫路さん・・・、今はその気遣いだけで嬉しいよ・・・」

「・・・雄二、病院でもし子供がお腹にいることが分かったら結婚・・・」

「そんな事は100%ありえないから安心しろ」

雄二達の会話を耳にしながら、明久は平和な日常を噛み締めていた。確かに、苦しいときもあるが、雄二や美波達がいるこの現実が嬉しかった。昨日のような異常ではなく、普通の日常が。

しかし、その日常は。何の前触れもなく打ち壊される。

「・・・」

気が付くと、一同の目の前に30代前半の男が立っていた。ただ無言で、視線は明久のトランクケースに向けられている。

（・・・あれ、このパターンって・・・）

「どうした？ おっさん」

雄二がその男に声をかける。

「・・・ベルトをよこせ」

「・・・雄二のベルトは渡さない」

「そう言いながら俺のベルトを引っ張るのはやめろ」

雄二が自分のベルトから霧島を引き離しながら言った。

「いいから、ベルトをよこせ・・・！」

そのやり取りに苛ついたのか、少し男が口調を強めると男の顔に模様が現れ、男は牛を模した灰色の化け物に変化した。

「「きやああああああああ！！」」

それを見た姫路と美波が悲鳴を上げる。

「・・・・・・・・！！」

「な、んだこいつ！？」

明久以外のメンバーはその光景に混乱している。その化け物は、姿以外は昨日明久が見た異形と似ていた。

「ちっ！」

雄二が舌打ちをすると、異形の顔面に蹴りを叩き込む。

「・・・これがどうした」

「何！？」

しかし、異形にはまったくその蹴りが効いていない。雄二が喧嘩慣れしている玄人であるにもかかわらず、だ。

「お前たち人間では、俺たちに勝つことはできないんだよ！」

そして、頭に生えている角を使い突進をくりだしてきた。

「おうわぁ！！」

雄二はそれを避け異形は一旦止まるが、今度は姫路と美波の二人に

狙いを定めた。

「やめろ!!」

「アキ!？」

「明久君!？」

明久が異形に飛び掛るが、

「邪魔だ!」

腕を一振りさせただけで明久は吹き飛ばされ地面を転がる。

「くっ・・・!!」

「目障りだ、お前を先に殺すか」

そう言いながら、異形は明久に近づいていく。

「明久! 逃げるのじゃ!!」

秀吉が明久に逃げるように声を出す、

「・・・ごめん秀吉、皆を置いて逃げるわけにはいかないんだ!!」

明久は叫ぶ。こんな状況で、友達を置いて逃げられるほど明久は冷酷な人間ではない。たとえそれが、常々ひどい目に遭わされている雄二だろうが。そして、明久はトランクケースを開け、ファイズポインターとファイズショットをベルトにセットし、腰につける。

「無駄だ、お前ではベルトの力を引き出すことなんてできない」

「・・・それ昨日も言われたよ」

言葉を返しながらファイズフォンを開き、5の数字を3回押しEN
TERキーを押す。

『Standing by』

ファイズフォンを天に掲げ、

「変身!!」

ベルトにセットする。

『Complete』

その音声と共に、明久の体に沿って赤いフォトンフレームが形成され、赤い光が強く放たれその場の全員の目が塞がれる。その光が収まり目を開くと――

「・・・アキ？」

そこには、ファイズに変身した明久が立っていた。

「な・・・、貴様あ!!」

異形がファイズに襲い掛かると、ファイズはそれをかわし横腹に蹴りを入れる。異形がそれに怯むとさらに殴って追い討ちをかける。

「調子に乗るなあ!!」

異形が怒ったように叫ぶと、握り手状の鉄球をファイズにくらわせ、ファイズは地面を転がる。

「アキ!!」

「痛たた・・・」

ファイズに変身しているとはいえ、その痛みはかなりのものだ。長期戦になればこっちが危ない。ファイズはファイズショットを取り、ミッションメモリーを差し込む。

『Ready』

ファイズショットからグリップが現れ、それを掴みファイズフォンを開きENTERキーを押す。

『Exceed Charge』

腕のフォトンストリームを通じ、ファイズショットにフォトンブラッドが注入される。

「うおおおおおお!!」

異形とファイズショットが交差する。ファイズは鉄球をかわし、ファイズショットを異形の腹に叩き込む!

「う、があああああああ!!」

ファイズの必殺技、グランインパクトが決まり、異形はΦの記号を浮かべながら爆発し灰になった。ファイズはENTERキーを押し、明久の姿に戻る。

「アキ・・・」

「明久君・・・」

声の方向に目を向けると、姫路と美波が心配そうな顔で明久を見つめている。

「二人とも大丈夫?」

「うん・・・、アキも大丈夫？」

「うん、二人とも無事でよかった」

「感動の場面のところ悪いんだが・・・」

そう言いながら、雄二たちが歩いてきた。

「あいつらは一体何なんだ？」

「お主のさっきの姿と何か関係があるのかのう・・・？」

「・・・詳しい説明が欲しい」

「・・・答えて」

雄二たちの質問に、明久は顔を雄二たちに向ける。

「・・・僕にも分からないんだ、あれが一体何なのか」

「それには私が答えよう」

その言葉は、いつの間にか明久の背後まで近づいていた老人が言ったことだった。歳は50代で、帽子を被っている。

「警戒するな、とは言わないから私の話を聞いて欲しい。私の名は花形、文月学園の学園長、藤堂カオルの親友であると同時にそのベルトを預けた者だ」

「ババアの？」

明久の横にいる雄二が言った。

「ああ、だが今はそんな話は後だ。今は君たちの質問に答えよう。まず、さっきの化け物はオルフェノクというものだ」

「・・・オルフェノク？」

「人類の進化形態とも呼ばれており、普通の人間の外見と、さっき君達が見た動植物の特性と高い戦闘能力を持つ異形へと変換することができる。オルフェノクの中には人間として生きようというものもあれば、その力に溺れて人間性を失い、人間を襲い自分たちの世界を作ろうという者もいる。そして、さっき君が変身したのはファイズ。オルフェノクを殺すためにスマートブレインが作った強化スーツを纏った人間を指す」

「おい、どうしてそんなに詳しいんだ？」

雄二が眉間にしわを寄せながら尋ねた。

「・・・今は知るときではない、しかし、これだけは聞いておきたい、吉井明久君。オルフェノクはこの後もそのベルトを狙い君の命を、友達の命を狙うだろう。そのベルトを使い、君の大切な人たちを護る覚悟はあるかね？」

その質問に明久はスツと顔を上げ、

「・・・覚悟も何も、オルフェノクとかいう奴らが何をしようかなんてわかりませんよ。だけど、僕の友達を狙うなら絶対に手は出させません」

その言葉に、花形はふつと笑った。

「・・・なるほど、聞いた通りのバカだ。しかし、そんな君なら、すべてを引っくり返せるかも知れないな。・・・君の家にあるものを送っておいた。後で見るといい、それと最後にベルトは肌身離さず持っておきなさい。いつ奴らが来るか分からないからね・・・」

そして花形はその場から去っていった。

「・・・何やら大変な事になってきたのう・・・」

「ま、このバカに任せるのは心配だが、仕方ないか」

「・・・無理はしないでくださいね」

「瑞希の言う通りよ、無茶はするんじゃないわよ。べ、別にあんたを心配してるわけじゃないんだから！」

「・・・素直じゃない」

「・・・吉井、気を付けて」

その場の皆から励ましの言葉をもらい、少し笑顔が出る。

「そう言えば、僕の家に贈り物って・・・？」

その言葉で、家まで急いで歩くとそこには・・・、

「バイクだー！！！」

届けられていたのは、結構格好いいバイクだった。ちなみに名前はオートバジンというらしい。

「うわあ、これがあれば遅刻しなくて済む！ やったー！！！」

「その前に免許証とれよ」

「いや、バレないように行けば何とか・・・」

「・・・鉄人にばれたら大変なことになる」

「・・・免許証って今からでもとれたっけ・・・？」

そんな会話をしながら、明久は目の前の友達の日常を護るために戦うことを誓う。たとえば、自分の命が危険にさらされようとも。

「ファイズが動き出しました」

スマートブレインの社長室で、秘書風の女性が言った。彼女の目の前には男がガラス越しに景色を見ている。

「そうですか、ではカイザの使用許可をオルフェノクに与えてください。ファイズが敵にまわるならば用はありません。駒はいくらでもこちらにあります」

男の口調は紳士的だが、途轍もない威圧感を感じさせる口調だった。

「・・・かしこまりました」

女性はそう言うと、部屋を出た。

「・・・花形さんも面倒なことをしてくれたものだ。しかし興味があるのはファイズに変身する少年、吉井明久君。普通の人間では変身できないライダーズギアを、なぜこの少年は使いこなせるのか・・・？　・・・まあいい、邪魔するのであれば消すのみ」

そう言うと、男――村上は机の上にある明久の写真を手に取ると、その写真は青い炎に包まれて消えてしまった。

第二話 敵の真実（後書き）

次回からは学力強化合宿辺です。

第三話 合宿と脅迫と新ライダー（前書き）

第三話目です。今回からタイトルをバカテス風にしました。

第三話 合宿と脅迫と新ライダー

『あなたの秘密を握っています』

「最悪じゃあー！ーっ！！」

青く澄み渡る青空の下、吉井明久の叫びが響いた。

「・・・なるほど、今朝下駄箱を見てみたら脅迫状が入っていたというわけじゃな？」

「なんだ。良かったあ・・・」

脅迫状と聞いて胸をなでおろす美波に、明久は少し疑問を抱くが、それは後回しにする。

「して、その脅迫状にはなんて書いておったのじゃ？」

そんな美波とは対照的に、秀吉は心配そうに明久に声をかける。これが原因で、明久の秀吉に対する評価がプラス1になった。

「これには『あなたに在る異性にこれ以上近づかないこと』って書いてあるんだ」

「ふむ。その文面から察するに、手紙の主は明久の近くにおる異性に対して何らかの強い気持ちを抱いておるな。大方嫉妬じゃろうが、つまり――」

「うん。手紙の主はこのクラスのたった二人の異性、つまり姫路さんか秀吉に好意を寄せているヤツだってことがわかるね」

「明久。金属バットを取りに行った。島田が戻ってこないうちに逃げのじゃ」

美波が戻ってきたら明久が見るのは地獄だろう。

「ところで何をネタに脅迫を受けておるのじゃ？」

「あ、そういえばまだ知らないや。なにに、『この忠告を聞き入

れない場合、同封されている写真を公表します』か。写真って、こ
っちの封筒に入ってるやつかな？」

同封されている封筒には三枚の写真が入っており、その中身を見る。
一枚目は、メイド服姿の明久だ。

「この前の学園祭の服装じゃな」

「い、いつのまに撮影なんて……」

「こうして改めて見ると、やはり似合っておるのう」

「それ、全然嬉しくないよ……」

明久から思わずため息が漏れ出る。こんな物が写されているので、
明久は自分以外に誰も見れないようにする。二枚目は……
メイド服姿の明久。トランクスのパンチラ

「……（ビリィー!）」

「あ、明久!? どうしたのじゃ!？」

「トランクスだからセーフ、トランクスだからセーフ、トランクス
だから……」

「自我が崩壊するほどのものが写っておったのか!？」

自我が崩壊しそうになるが、気を取り直して三枚目を見る。

写っていたのは――ブラを持って立ち尽くす明久（着替え中メ
イド服着崩れバージョン）

「もういやあああああっつ!！」

「何じゃ!? 一体何が写っておったのじゃ!？」

「見ないで! こんなに汚れた僕の写真を見ないで!」

明久が叫んでいるせいか、周囲の視線が明久に集まっている。あれ
だけの写真を見せ付けられたら、それも仕方ないと思うが。

「はあ、はあ、はあ……。恐ろしい威力だった。僕にここ
までダメージを与えるのは鉄人か美波かオルフェノクぐらいだと思
ってたのに……」

「考えすぎではないかのう。メイド服ぐらい、人間一度は着るもの
じゃ」

それは100%絶対嘘だろう。

「明久君、秀吉君、おはようございます」

二人の後ろから、二人に声かけられた。

「この声は——やっぱり姫路さんか。おはよう」

「姫路か。おはよう。今朝は遅かったんじゃない」

「はい。途中で忘れ物に気がついて一度家に帰ったので、ギリギリになっちゃいました」

姫路ははにかむように笑った。

「丁度良い。先ほどの写真が騒ぐほどの物ではないと姫路に証明してもらおうとしようかの。姫路、少々良いか？」

「はい、何でしょうか？」

「うむ。姫路に質問なのじゃが、明久のメイド服姿の写真があったらどう思うかのう？」

その切り込み方はどうかと思う、と明久は内心呟いた。

「うーん、そうですね……」

もしここで嫌悪感を表すのなら、写真の公表はなんとしても避けたいとならないだろう。代償に、Fクラスの女子二名とAクラスの男子一名は悲しむだろう。

「もしそんな写真があったら——とりあえず、スキャナーを買います」

姫路からの返答は、かなり理解不能なものだった。

「へ？ スキャナー？ なんで？」

「だって、その……」

問われた姫路は少し恥ずかしげに頬を赤く染め、

「そうしないと、明久君の魅力を全世界にWEBで発信できないじゃないですか……」

「明久落ち着くのじゃ！ 飛び降りなんて早まったまねをするでない！ それでもやるというのなら、せめて変身してからにするのじゃ——！」

「放して秀吉！ 僕はもう生きていける気がしないんだ！」

姫路の言葉に、自分は嫌われているんじゃないかと明久は思う。本

当はその逆なのだが、明久はその考えに至らない。

「そ、そうじゃ！ ムツツリーニじゃ！ ムツツリーニならばこの手の話し合いには詳しいはずじゃ！ 事情を説明して――」

「ムツツリーニに笑われる？」

「違う！ 事情を説明して脅迫犯を見つけ出してもらおうのじゃ！」

「おおっ！ なるほど！」

たしかに盗撮や情報収集のエキスパートとも呼ばれるムツツリーニこと土屋康太ならば脅迫犯を突き止められる可能性が高いだろう。そうすればこの写真を取り戻すこともできるかもしれない。

「ナイスアドバースだよ秀吉！ さすがは僕のお嫁さんだ！」

「婿の間違いじゃろう！？」

「あの……どっちも間違いだと思いますけど……さっそく相談しよう」とムツツリーニを探すと、本人は教室の隅で小さくなり誰かと話していた。

「助けてムツツリーニ！ 僕の名誉の危機なんだ！」

ムツツリーニのいる席に駆け寄ると、明久の行く手を塞ぐように雄二が邪魔をしてきた。

「後にしろ。今は俺が先客だ」

「あれ？ 雄二？」

よく見てみると、雄二の髪の毛が少ししおれているように見える。何かあったのだろうか。

「ムツツリーニ、何の話？」

「……雄二の結婚が近いらしい」

「雄二と霧島さんの結婚？ そんな既に決まってる事より、僕が校内の皆に女装趣味の変態として認識されそうってことが重要だよ！」

「なんだと？ お前が変態だなんて、それこそ今更だろうが！」

「黙れこの妻帯者！ 人生の墓場へ還れ！」

「うるさいこの変態！ とっととメイド喫茶へ出勤しろ！」

「……………」

「……………」

「・・・・・・・・・・傷つくならお互い黙っていればいいのに」
ムツツリーニの言葉通り、二人の目からは涙が流れていた。

「で、でもまだ結婚の話程度で済んで良かったじゃないか。僕はてつきり、あのペースだともう子供ができた事にされているのかと――」

「・・・・・・・・明久。笑えない冗談はよせ」

その言葉は、暗にその冗談が叶えられそうだということを示していた。

「そこまで言うなら一応話を聞くよ。雄二に一体何があったの？」

「一応ってのが癪に障るが、まあいいだろう。実は今朝、翔子がMP3プレイヤーを隠し持ってたんだ」

「MP3プレイヤー？ それくらい別にいいんじゃないの？ 雄二だって前に学校に持ってきてたし」

その後鉄人こと西村教師に没収されたが。

「いや、あいつは結構な機械オンチだからな。そんな物を持っていた、しかも学校に持ってくるなんて不自然なんだ。そこで怪しく思ってた没収してみたんだが、そこには何故か捏造された俺のプロポーズが録音されていたんだ」

「・・・・・・・・・・」

一瞬、明久は召喚大会の準決勝のシーンが頭をよぎるのを感じた。そのプロポーズを捏造してしまったのが自分だと知ると、明久は罪悪感でいっぱいになった。

「き、霧島さんは可愛いねっ！ そんな台詞を記録しておきたいなんて――」

「いや。婚約の証拠として父親に聞かせるつもりのようなだ」

明久は罪悪感で押し潰されそうになった。

「MP3プレイヤーは没収したが、中身はおそらくコピーだろうし、オリジナルを消さない事には・・・・・・・・」

そう言いながら雄二が取り出した物は再生用のプレイヤーだった。確かにオリジナルを消さない事には問題の解決にはならないだろう。

「そんなわけで、ムッツリーニにはその台詞を録音した犯人を突き止めてもらいたい。さっきも言ったようにアイツは機械オンチだからな。密かに集音機をしかけるなんてことができるわけないから、きつと盗聴に長けた実行犯がいるはずなんだ」

明久には台詞を録音されていたような様子は特に記憶になかった。となると、確かに集音機を仕掛けられていた可能性が高いだろう。もしくは姫路か美波の盗聴や盗撮を企てた誰かが、その台詞を録音したのかもしれない。

「……明久は？」

ムッツリーニが明久の方を向く。今度は明久の事情を聞くようだ。あまり長々と話したい内容ではないので、端的に説明した。

「——そんなわけで、その写真を撮った犯人を突き止めて欲しいんだ。写真を撮られた覚えなんて無いから、きつと盗撮の得意なやつがこっそり撮影したんだと思う」

「なんだ。明久も俺と同じような境遇か」

「……脅迫の被害者同士」

「こんなことで仲間ができて……あ、そうだ」

明久が何かに気付いたように、ポケットに手を入れる。

「脅迫状と一緒になんか変な手紙が入ってたんだけど。脅迫状の事ですっかり忘れてたよ」

「ふーん、何が書かれてるんだ？」

「ちょっと待ってね、えーと……」

その手紙を見た瞬間、明久の顔が陰しくなった。その様子に気がついたのか、雄二とムッツリーニが表情を変える。

「どうした？」

「……親愛なるファイズ様へ」

その言葉に、二人の表情が驚愕のものに変わる。明久もファイズということを知ってるのは、現在では雄二とムッツリーニを入れ、姫路、美波、秀吉、霧島、そして花形を加え7人のはずだ。それ以外

の者には誰一人として言っていない。

「このたびは、学力強化合宿への旅を心よりお喜び申し上げます。合宿先の卯月高原にて、あなた様の来訪を心よりお待ちしております、か……」

その手紙を読み終えると、手紙からはらりと一枚の写真が落ちた。

明久がその写真を見てみると、

「……何だ、これ？」

その言葉に雄二とムツツリーニも写真を見る。

「……………明久のファイズギアに似ている」

「何でこんな写真が入ってるんだ？」

写真に写っているのは、明久の持っているファイズドライバーに似たベルトだった。違いを言うならファイズドライバーが赤色を基調としているのに対し、こちらは黄色を基調としている所だろう。どうしてこんな写真が入っていたのかと三人が頭を悩ましていると、担任の鉄人が教室に入ってきた。

「……………とにかく、調べておく」

「すまん。報酬に今度お前の気に入りそうな本を持ってくるよ」

「僕も最近仕入れた秘蔵コレクションその2を持ってくるよ」

「……………かならず調べておく」

話は終わり、明久たちは鉄人ににらまれないうちに席に座る。……その後、明久たちFクラスは現地集合という案内すらない扱いに涙した。

「明久、起きたか！ 良かった……。電気ショックが効いたようだな……」

雄二は心底安心した表情でアイロンみたいな機械をしまう。

「……ええと、何が起きたの？ 確かみんなで旅館に行く電車に乗って……、それから確か……」

「思い出すな明久、この世の地獄というのを知るぞ」

一体明久の身に何が起きたのだろうか。

「ところで、ここは合宿所？」

「ああ、そうだ。まったく贅沢な学校だよな。この旅館、文月学園が買い取って合宿所に作り変えたらしいぞ」

作り変えたという事は、召喚獣を呼び出せるという事だろう。そんなお金があるのなら無料の学食とかを作って欲しいと明久は思った。

「む。明久、無事じゃったか！ 良かったのう……。お主がうわ言で前世の罪を懺悔し始めたときには、正直もうダメじゃと……」

部屋に入ってきた秀吉が胸をなでおろす。

「心配してくれてありがとう。秀吉もこの部屋で一緒なんだよね？」

「うむ。ムツツリーニも含めた四人でこの部屋を使うのじゃ」

見たところこの部屋は八人ぐらい寝られそうなのだが、班分けの関係で明久たちは四人で使う事になったらしい。問題児を一箇所に固めるためではないだろう。

「ムツツリーニはどこ行ったの？」

明久が尋ねると同時、ガチャッという音と共にムツツリーニが部屋の戻ってきた。

「……ただいま」

「おかえりムツツリーニ」

「……明久。無事で何より」

「あ、心配してくれたんだ。ありがとう」

「……情報も無駄にならずに済んだ」

「情報？ 昨日俺と明久が頼んだ例のヤツか。ずいぶん早いな」

情報と聞いて雄二が反応する。明久の盗撮写真と雄二の盗聴の犯人を探し出す件だろう。しかし一日しかたっていないのにもう情報を集めるとは、かなり仕事が早い。伊達に盗撮や情報収集のエキスパートと呼ばれてはいない。

「………そういうえば明久、知らない女性からこんな手紙をもらった」

「えっ？」

ムツツリー二から手紙を受け取ると、昨日も見たファイズドライバ―そっくりのベルトの写真と、『今すぐ裏の林にきてください』と書かれていた。

「……ごめん。ちょっとトイレに行って来るよ」

「そうか、早く帰ってこいよ」

「うん」

明久は返事を返すと、ファイズギアの入ったトランクケースを持ち部屋を出た。

「………相変わらず明久はウソをつくのが下手」

「うむ、普通はトランクケースを持ってトイレに行かぬのに」

「まあ、大丈夫だろう。あいつはしぶといしな」

雄二たちは明久が嘘についていることに気が付いているものの、あまり気にせずムツツリー二の報告を聞く。……彼がこれから会うのが、どんなものかも知らず。

「ここら辺だよね……」

明久は手紙の指示どうり、裏の林に来ていた。辺りはもう夜の闇に染められているが、何故か明久は昔からこんな暗闇でも、物体や景

色が良く見えるのだ。辺りを見渡しながら歩いていくと、一人の女性が立っているのが見えた。

「こんばんわ、吉井君。……いえ、ファイズ」

女性はそう言うと言とサボテンを模したオルフェノク、カクタスオルフェノクに姿を変える。

「オルフェノク……!!」

明久はファイズドライバーを装着、ファイズフォンを取り出しコードを押し、

『Standing by』

「変身!!」

『Complete』

ファイズフォンをベルトにセットし、ファイズに変身する。

「りゃあ!!」

ファイズはカクタスオルフェノクに向かって飛び掛り、顔面を殴る。さらに続けて蹴りを腹に入れる。

「はあ!!」

カクタスオルフェノクは負けじと針をファイズに飛ばすが、ファイズは横に跳びそれかわす。一気にカクタスオルフェノクと距離を詰め、カクタスオルフェノクが蹴りを入れるが左腕でガードし連続で殴る。

「くっ……! なるほど、つい最近ベルトを手に入れたとは思えない戦いぶりね……!」

普通の人間ならともかく、明久は日々バイオレンスな光景が繰り広げられているFクラスに所属している。そのせいか、実戦でも戦えるようになっていたのだ。

「……確かに、あれを使ったほうが良さそうね」

「?」

カクタスオルフェノクは距離を空け、女性に戻る。よく見ると、ファイズギアによく似ているベルトを腰に着けている。ベルトの右側にはXを模した武器、左側にはファイズの物と同じパンチングユニ

ットが装着されている。そして懷からターン式のケータイを取り出し、ケータイのボタンを押した。

『Standing by』

ファイズフォンより少々低い音声の流れ、

「・・・変身」

『Complete』

ベルトにケータイを装着し、黄色い光が暗闇を満たす。そして光が止み、カクタスオルフェノクの女性は別の姿に変わっていた。

複眼の色は紫色に染められ、フォトンストリームの色はファイズの赤色のフォトンストリームよりも高出力を誇る黄色。その高出力なフォトンブラッドの安定供給を図るため二本に分かれてマウントされたダブルストリーム。

「・・・ファイズ？」

その姿を見た明久が、呆然とした表情で呟いた。

「・・・ふふふ、違うわよ。これはカイザ。オルフェノクの王を護るために作られた五本のベルトの内の一つ・・・」

オルフェノクの王？ 五本のベルト？ 明久にはその言葉の意味が分からなかった。

「どういうこと・・・？ ベルトはオルフェノクを殺すために作られた物じゃないの？」

「確かにそういう機能もあるけど・・・。そんな事を聞くなんて、あなた何も知らないのね。オルフェノクについても、王についても、ベルトについても。まあいいわ、・・・あなたはもう死ぬんだし」
そう言うと、カイザはファイズに突進し、強烈な右ストレートをファイズの胸に叩き込む。

「がは！！」

あまりの威力に、ファイズの呼吸が一瞬停止する。さらにファイズの顔を殴り、よろけたすきに胸を蹴る。その蹴りでファイズは吹き飛び、地面を転がる。ファイズが起き上がった瞬間。

『Burst Mode』

カイザが右側に装着されているXを模した剣・銃一体型のマルチウエポン、カイザブレイガンを持ち、手前にあるコッキングレバーを引くと、音声が響きガンモードが起動、濃縮フォトンブラッドの弾丸をファイズに撃つ。

「ぐっ!!」

さらに銃弾を放ち、ファイズは火花を散らせながらまたもや地面を転がる。

「ほらほら! 寝るのは早いわよ!」

カイザはケータイ・カイザフォンにあるミッションメモリーをカイザブレイガンを挿入すると、『Ready』という音声と共にグリップ下部からフォトンブラッドを帯びた刀身が生成され、ファイズを何回も切りつける。

「うわあああ!!」

ファイズはよろけ、カイザはファイズに銃弾を食らわせながら剣で切りつける。そのたびに火花がちり、地面に倒れそうになる。ファイズは後ろに跳び、ミッションメモリーをファイズショットに挿入する。

『Ready』

すると、それを見たカイザもカイザショットを取り出し、ミッションメモリーを挿入する。

『Ready』

そして、二人同時にENTERキーを押す。

『Exceed Charge』

二人のショットにフォトンブラッドが注入され、相手に向かって勢いよく走り出す!

「うおおおおりゃああああ!!」

二人の距離がゼロ距離になり、ファイズのグランインパクトがカイザの顔面に突き刺さる……、寸前、カイザがファイズの腕をはたく。

「!?!」

そして、カイザのグランインパクトがファイズの胸に決まった。

「うわあああああああ!!!」

ファイズは大量の火花を散らしながら、樹にぶつかり倒れ、明久の姿に強制的に戻される。明久の体は傷だらけで、頭からは血が流れている。

「まだ生きていたとはね、これもファイズの装甲のおかげかしら？」

・・・いや、当たるときに後ろに跳んでダメージを減らしたのね」
カイザの言うとおりに、明久はグランインパクトに当たる寸前に後ろに跳び、直撃を避けたのだ。しかし、もはや明久は虫の息だ。これ以上戦う事は不可能だろう。

「ここまでの悪あがきのご褒美に、苦しまないように殺してあげるわ。じゃあね」

そして明久目掛けカイザブレイガンが振り下ろされる――――
――。

「・・・ここか？ 変な音がしたというのは」

「それに変な光も見えたって言ってましたね」

数人の大人の声が聞こえてきた。その声にかいザの動きが止まり、かいザブレイガンが止まる。おそらく戦闘の光や音を見られたのだろう。

「・・・ふん、今ここで騒ぎになるのはまずいわね。良かったわね、少しは長生きできたわよ。じゃあまたね」

そう言い残し、カイザは姿を消した。明久はカイザが消え去ると同時に気を失った。

第三話 合宿と脅迫と新ライダー（後書き）

結構戦闘シーンを書くのは難しいです。変なところがあったらご指摘お願いします。

第四話 看病とのぞきと急接近（前書き）

今回、あの二人の距離が縮まります。

第四話 看病とのぞきと急接近

明久が目を覚ますと、どうやらそこは保健室代わりに使われている部屋らしく、消毒液のにおいが鼻をつく。それに加え、体がおもりのように重い。どうやらあのオルフェノクにやられた傷がまだ響いているらしい。

「うん」

重い体を起こしながら、ゆつくりと目を開くと――

「ア
ギイイイイイイイイイ！！！」

「明久ぐうぐうぐうん!!!」

いきなり美波と姫路の二人に抱きつかれた。いきなりの事態に、明久は目を丸くする。

「!?!?!?!?!?!?!?!?!?!」

「うわ ああああああんんんん!!! 良がったよおおおお
おおおお!!!!!!」

「うゑ えゑえゑえゑえゑえんんん!!!」

二人の目からありえないほどの涙が流れ出る。

「ちよ、ちよつと二人共落ち着いて……」

ボタンツ！

「明久！　気がついたんじゃない．．．。良かった．．．、今回は本当にもうダメじゃと．．．」

秀吉が涙目混じりで言った、

「だから言ったら、明久はしぶといから大丈夫だって」

「……とにかく無事で良かった」

秀吉の後に、雄二とムツツリー二も部屋に入ってきた。

「僕、そんな危ない状態だったの？」

「・・・・・・・・・・傷だらけで林で見つかって、それからずっと寝てた」

「えぐ・・・・・・・・先生が・・・・・・・・、危ないかもしれないって・・・・ひぐ」

「明久君が・・・・・・・・、無事でよかったです・・・・・・・・」

美波と島田は大分落ち着いたが、目が真っ赤になっている。

「明久、お前にここまで深手を与える相手といったら・・・・、オルフェノクか？」

「うん・・・・。でも今までのヤツとは違ってちよつと変なんだ」
「何？」

明久は雄二たちに、オルフェノクがカイザと呼んでいたファイズに似たものに変身した事、自分のファイズギアと相手のオルフェノクのベルトを含めて五本のベルトがあること、オルフェノクの王のことを話した。

「オルフェノクの王？ 奴らにも王みたいな奴らがいるのか？」

「分からない、それ以上は何も言わなかったから」

「・・・・・・・・・・・・・・・・オルフェノクと戦ったなら、旅館に紛れ込んでいるかもしれない」

「そうだ！ 早く見つけないと！！・・・・痛っ・・・・！！」

明久は突然体にきた激痛に顔をしかめる。

「動いちゃダメ！ アキ、すごい傷だらけでここに運ばれたのよ！？」
「動ける訳無いじゃない！！」

美波が急いで明久の体を抑える。

「だけど、急がないと誰かが襲われるかもしれないでしょ！？」

「落ち着け、それが本当ならオルフェノクはもう誰かを襲ってるはずだ。（・・・・それに、俺達の盗聴や盗撮の犯人の事を忘れたか？）」

「あ・・・・」

雄二の後半の声は小さかったが、その言葉で明久は自分の盗撮写真や、雄二の盗聴の犯人についてムツツリーニが調べていてくれた事

を思い出した。

「(ムツツリーニの情報で、犯人は尻に火傷の痕がある女子という事が分かった)」

「(ムツツリーニは一体何を調べたの!?)」

普通なら名前や顔が先に分かるのに、何故尻に火傷があるということが先に分かるのかが分からなかった。一体どんな調査方法を使ったのだろう。

「(ムツツリーニが校内に仕掛けた小型録音機に録音されてたんだよ、俺のプロポーズの盗聴を売ってたヤツの特徴がな)」

「(それがお尻に火傷の痕なの?)」

「(ああ、だけど今の状況が悪くてな)」

「(どうして?)」

「(女子の風呂場の脱衣所からCCDカメラと小型集音機が見つかったんだが、女子はそれを俺たちが仕掛けたものと思っていらしくてな。お前が出て行った後、女子が押し寄せてきたんだよ)」
この時、明久はあの時部屋にいないで良かった少し思った。

「(お前は逃げたって思われてたんだが、林の裏から傷だらけのお前が見つかったんだ。頑丈なお前が転んだとかじゃすまない傷でな、教師は暴力事件として見てるらしい。しかも女子の風呂場からは反対側だしな。覗きに行ったとしても不自然だろ? だから女子もお前は白に近いグレーとしてみるらしい)」

どうやら止めを刺されそうになった時、あの時来たのは先生達だったらしい。

「(まあ安心しろ、後でその犯人見つけに女子風呂に覗きに行くかな)」

「(何言ってるの?)」

「(まあ聞け、俺の盗聴とお前の盗撮犯は手口が同じなんだ。そして、俺の声を録音した犯人と風呂場にカメラを設置した犯人はムツツリーニによると使用機器が同じらしい)」

「(・・・どういう事?)」

明久がそう言うのと、雄二は呆れた表情を見せ、

「（流石明久、この程度の事も分らないか。つまり俺とお前を脅している犯人は同じで、覗き犯の

カメラとマイクがその犯人と同じ物だった。そして、覗き犯は火傷の痕があるという話だから――）」

「（ああ、なるほど！ その火傷の痕がある人を探したら全部解決するってわけだ！）」

全部同じ犯人の手によるものだとすると、これは不幸中の幸いだ。犯人がバラバラだったら、探すのが大変だし、明久と雄二の未来は真っ暗だっただろう。

「とりあえず、犯人は探し出しておくからお前は休んでろ。オルフェノクもこんな場所で騒ぎを起こすほどバカじゃないだろ」

「・・・・・・・・・・任せておけ」

それは犯人探しなのか覗きなのか分からない。

「だけど看病人が必要だな。誰が」

「ウチがやるわ！」

「ああ！ 美波ちゃんずるいです！！」

先に手を上げたのは美波が先だった。雄二はそれを見て笑うと、

「じゃあ島田、任せたぞ。姫路はもうすぐ風呂だろ？ 早くしたほうがいいじゃないのか」

「うう・・・・。今度こそ絶対に・・・・」

悔しさまじりに言いながら、姫路は部屋を出る。

「じゃあな明久。早く傷治せよ」

「くれぐれも無茶はせんようにな」

「・・・・・・・・こっちも犯人を捕まえとく」

雄二たちも姫路に続き、部屋を出て行った。雄二たちが出て行った事で部屋に沈黙が訪れる。

「あ・・・・お腹減ってない？」

「うん、大丈夫だよ」

「そう・・・・」

美波はそう言うのと、顔をうつむかせてしまった。よく見てみると表情が少し暗い。何かあったのだろうか。

「・・・アキ、大変な目にあっちゃったね・・・」

「大丈夫だよ、これぐらい。いつも皆からひどい目にあってるしね」
明久は笑いながら言った。美波の折檻や、姫路の料理、FFF団の暴行に虐げられてきた明久にしてみたらこのようなことは日常茶飯事に近い。それでも、今日のような傷を受けたのは今日が初めてだ。

「・・・アキはどうして笑えるの？」

「えっ？」

「アキはさっきまで死んじやいそうだったのに、どうしてそんなに笑う事ができるの？・・・ウチはアキが死んじやうと思ってたのに、何もできなかった。アキがひどい目に遭ってるのに、くだらない事で怒ってた！・・・ねえアキ、もう無茶はしないで？」

美波は涙目で明久を見つめた。それは、普段の美波からは考えられないほど弱弱い姿だった。それほどまでに、明久の身を心配してたのである。気がつくと、明久の左手は美波の両手に包まれていた。明久はそんな美波の姿を見て、

「・・・ごめん、僕は戦いをやめるわけにはいかないんだ」

「・・・どうして！？死んじやうかもしれないのよ！？・・・」

ウチは、アキの側にいたい。アキがいなくなるなんて嫌だよ・・・」

「大丈夫だよ、僕は美波の側にいるから・・・死んだりしないから。約束する」

そう言うのと、明久は美波の片手に右手を添える。その言葉を聞き、美波はじっと明久の目を見て、

「じゃあ、約束して？絶対に死なない事。ウチの側にいつもいること」

「うん、約束する」

その約束は、他人からすればプロポーズのように聞こえるが、鈍感な明久はそんなことに気付かない。美波はというと――――

「（こ、これってプロポーズ！？ しかも今、ずっと側にいるって！！）」

内心滅茶苦茶混乱していた。もちろん明久はそんなことに気付いていない。

「でもまいったなー。この怪我じゃ何もできないや」

「そうね。合宿の意味なくなっちゃったかもね。でも安心なさい。ウチはここにいるから」

「へっ？ どういう事？」

「怪我人のアキ一人じゃ色々と不便でしょ？ だからウチが面倒みてあげるわ。感謝なさい！」

表では結構偉そうだが、心の中では大喜びしていた。

「ひ、卑怯です美波ちゃん！ 私も明久君の面倒を見てあげたいのに・・・」

姫路が何やら叫びながら部屋に入ってきた。手には何やら荷物を持っている。

「あれ、姫路さんその荷物何？」

「先生に坂本君が、美波ちゃんが明久君の看病をするって言ったら、美波ちゃんの荷物を持って行ってやれって言われたから持ってきたんです」

「でも何で姫路さんが？」

伝えたのはあくまで雄二だ。姫路が女子の部屋に入り荷物を回収し、雄二が持つてくるとというのが普通の光景だろう。雄二は明久には外道だが、女子に対しては優しい部類になる。

「それが・・・、坂本君たちが女子のお風呂を覗こうとして西村先生に捕まっちゃって・・・」

どうやら本当に覗きをしたらしい。

「・・・でもでも、美波ちゃんだけです！！ 一人で明久君の看病を出来るなんて！！」

「早い者勝ちよ瑞希！ 悪いけど、今回はウチに譲ってもらおうわ！！」

「えーと・・・、二人はなんでそんなに怒ってるの？」
怒ってるというより、ただ単に明久の看病ができるのを羨ましがって
るだけなのだが、明久がそれを知る事は永劫にないだろう。

第四話 看病とのぞきと急接近（後書き）

次回は結構話が飛びます。明久が何も出来なくなっているのので。感想お待ちします。

第五話 最終日と約束と変形バイク（前書き）

合宿編終了です。

第五話 最終日と約束と変形バイク

とうとう合宿最終日になった。この日まで明久は動けなかったが、その代わり旅館では大変ことが起こっていた。雄二たちが覗きを失敗して、鉄人に指導されたり、鉄人に指導されたり。簡単に言えば、失敗ばかりなのだが。しかも犯人である、尻に火傷のある女子はまだ見つかっていない。このままでは明久と雄二の黒歴史が増えてしまう。

「今日が最終決戦だ」

明久が寝ている部屋で、雄二が意気込んで言った。

「今日を逃したらお前の写真は帰ってこないし、俺の将来も真っ暗になっちまう。今、A、B、Cクラスに交渉中だ」

交渉というのは、覗きの協力のことだろう。

「……………今日こそ借りを返す」

ムツツリーニが密かに闘志を燃やしている。最初の覗きの時、ムツツリーニは保健の大島教師に負けたのだ。しかもその後も、大島先生とAクラスの工藤愛子に覗きを阻まれている。

「とりあえず、もうすぐ作戦決行の時間だ。行ってくる」

「うん、頑張ってね」

「……………必ず犯人を捕まえて、覗きを成功させる」

明久は雄二たちが部屋を出る姿を見届ける。何故かその姿は、戦場に向かう兵士のように見えた。……戦場に行く理由は不純だが。明久はベッドに寝転がり、手紙を取り出し見る。

『今夜、あなたと私が初めて会った場所で決着をつけましょう』

その手紙はいつの間にかベッドに置かれていた物だ。おそらく、あのオルフェノクからの手紙だろう。初めて会った場所はある林。……この決着で、どちらかの命が失われる。

「ん・・・」

呻いたのは美波だった。髪を下ろし、明久のベッドを枕代わりのようにしながら寝ている。

「・・・・・・・・」

この合宿の最中は、美波は明久につきつきりだった。一生懸命に明久の看病をしてくれた。嫌な表情を一度も見せず、ただ笑顔で笑っていた。自分は美波に嫌われている、と思っていた明久にしてみれば予想外だった。一度、夫婦みたいだねと言ったら顔を真っ赤にした。この合宿で唯一楽しかった事は、美波と一緒にいたことかもしれない。そう思いながら、明久は静かにベッドから抜け出そうとする。

「・・・・・・・・アキ」

突然、美波の手が明久の毛布を引っ張った。驚いて美波を見るが、起きている様子はない。どうやら、寝言と無意識の行動だったらしい。

「・・・・・・・・どこにも・・・・・・・・行かないで・・・・・・・・」

そう言いながら毛布を引っ張る美波の目には、涙が流れている。明久は美波との約束を思い出す。絶対に美波の側を離れないという約束を。

「・・・・・・・・大丈夫だよ。僕はいつも、君の側にいる」

そう言いながら美波の頭を撫で、トランクケースを持って部屋を静かに出た。

部屋を出ると、雄二とムツツリーニと秀吉が何やら話し合いをしていた。

いた。

「む？ 明久、どうしたのじゃ？」

最初に明久を見つけた秀吉が声をかけてくる。

「ちよっと、トイレに・・・・・・・・」

「そうか、さっさと言って来いよ。島田が不安がるからな」

明久が襲われた翌日、明久がちょっとした間先生と話をしに部屋を出て行ったら、美波が不安そうな顔をして明久のところに駆け寄ってきた。何でもいきなり消えてしまったので心配になったらしい。そして勝手に部屋をでた罰と言って一発殴られた。何も言わないで出て行った明久も悪いかもしれないが、怪我人を殴る美波も少し悪いかもしれない。

「うん、分かったよ」

笑顔で言いながら、雄二達の横を通りすぎようとしたその時。

「……死ぬなよ」

「……死ぬでないぞ」

雄二達が一言呟いたその言葉に、明久は黙って前を走る。ここで後ろを振り返ったら、覚悟がぶれそうだから。

「あ、明久君……」

今度は、前に姫路が立っていた。

「どうしたんですか？」

「ちょっと用があつて……」

「……そうですか、無茶しないでくださいね。明久君が死んじやったら、みんな悲しむんですから……」

姫路はなんとしてでも明久を止めたいはずだ。好きな人を戦場に行かせる人間などいない。しかし、引き止めても何を言っても明久は止まらないだろう。それが、姫路達の知ってる吉井明久だから。だから、行かせるしかない。明久は死なないと信じながら。

「……絶対に帰ってくるよ」

そう言い、明久は走る。

「……絶対！ 絶対ですよ！ 約束です！！」

姫路が叫ぶのを聞きながら、明久は戦場に走る。絶対に帰ると胸に誓いながら。

林に行くと、オルフェノクの女性が立っているのが見えた。

「・・・来たわね、ファイズ」

明久は腰にベルトを巻き、ファイズフォンを開く。

「一つ、聞いていい？」

「何？」

「僕はまったく動けなかったのに、どうして殺さなかったの？」

確かに、明久は怪我のせいでまったく動けなかったし、殺せるチャンスならいくらでもあったはずだ。それを何故、この女性は行わなかったのだろうか？

「旅館であなたを殺せば騒ぎになるのは目に見えてたしね、それにちよろちよろ逃げ回れても厄介だし。従業員に成りすまして行動を見てたのよ。さて、今日こそもうわよ、あなたの命」

「・・・死なないよ、絶対に帰らなきゃ殴られるから」

相手もカイザフォンを開き、二人は変身コードを押す。

『Standing by』

「変身!!」

『Complete』

赤色と黄色の光が溢れ、明久はファイズに、女性はカイザに変身する。そして二人同時に駆け出し、ファイズのパンチがカイザの胸に、カイザの蹴りがファイズの胸に当たる。

「くっ！」

ファイズ

のパンチがあまり効いていないのに対し、カイザの蹴りはかなりのダメージを与える。カイザはファイズの赤色のフォトンブラッドより高出力を誇る黄色のフォトンブラッドを持つ。その為、ファイズより力が強いのだ。ファイズはファイズフォンを取り出し、1、0、6の順にボタンを押す。

『Burst Mode』

音声で鳴りファイズフォンが横方向に折り曲げられ、銃のような形態・フォンブラスターになる。そして、アンテナの先から光弾が3発カイザに放たれる！

「きゃああ?!」

光弾がカイザに直撃し、カイザは地面を転がる。ファイズはその隙を見逃さず、カイザにパンチを食らわせる。カイザもパンチをファイズの顔面に繰り出すが、ファイズは顔を横にずらしパンチをかわし、左アッパーをカイザの顎に当てる。左アッパーを顎にくらいふらついた隙に、キックをカイザの胸に叩き込む。

「ど、どうして・・・!? 私のほうが強いはずなのに・・・!!」確かに、カイザのほうが力は強い。しかし普通では一つの部分を強力にする場合、何か一つを犠牲にしなければならない。例えば――一瞬発力。カイザはファイズに比べ、力は勝るが瞬発力では劣る。その弱点をつき、極力攻撃を避けカウンターをくらわせたのだ。

「くそ・・・、なめるなよ人間ごときが!!」

『Ready』

ミッションメモリーをカイザブレイガンに挿入し、ブレードモードにしファイズに襲い掛かる。ファイズはその攻撃をかわすが、カイザはカイザフォンに手を伸ばす。

『Burst Mode』

カイザフォンがフォンブラスターになり、光弾がファイズに直撃する。

「うわああ!!」

今度は逆にファイズが地面を転がり、立ち上がるとカイザブレイガンに切り裂かれる。ファイズはカイザブレイガンの持ち手を掴むが、逆の手に持っていたフォンブラスターに撃たれ手を離してしまい、再びカイザブレイガンの刃の餌食になる。そして、カイザブレイガンとフォンブラスターの銃口を胸に押し付けられ、一斉に射撃された。その衝撃にファイズは地面を転がり、動けなくなる。

「・・・手間をてこずらせてくれたわね。でもこれで終わりよ!!」

カイザは怒鳴り声を上げ、ファイズに駆け出す。ファイズは動けず、絶体絶命の状況だ。そして、カイザがカイザブレイガンを持ち上げた瞬間。

ドガガガガガガガガガガ！！！！

「うわあああああ！！！！？」

マシンガンのような銃声が聞こえ、カイザは何かにつけ、地面を転がる。空中から何やら音がするので空を見上げようとすると、その前にそれはファイズの目の前に降りてきた。

「・・・ロボット？」

それは人型のロボットだった。胸部にはΦの形のスイッチがあり、左手の位置にはなんとタイヤがあり、よく見ると16門のガトリングマズルが仕込まれていて、煙が垂れている。まさかさっきの銃弾はこのロボットのものか？

「これ・・・何だろう？・・・ポチッとな」

ファイズが胸部のボタンを押すと、そのロボットはたちまち花形からもらったバイクーラーオートバジンに変わった。

「うわあ、すごいなコレ・・・ん？」

見ると、左のハンドルにミッションメモリーの挿入口がある。試しにミッションメモリーをその挿入口に入れてみた。

『Ready』

ハンドルが引き抜かれ、フォトンブラッドの刀身が生成されたことによりハンドルはバイクハンドル型エネルギーブレード、ファイズエッジになった。

「よし・・・、これなら・・・！」

ファイズはファイズエッジを片手に持ち、カイザに切りかかる。

「ぐっ！」

カイザは何とかカイザブレイガンで防ぐが、ファイズはカイザの胸を蹴り、バランスが崩れたところを何回も斬る！

「りゃあ！！！」

そしてファイズが横薙ぎに振るったファイズエッジがカイザドライ

バーに当たり、カイザドライバーは吹き飛ばされカクタスオルフェノクの姿に戻る。

「く・・・そ!!」

カクタスオルフェノクは針を飛ばすがファイズエッジで弾き飛ばされ、袈裟斬りをくらい怯んだ所を立て続けに斬られ、最後に鋭い突きをくらい吹き飛ばされる!

「ぐわあああ!!」

ファイズはファイズフォンを開き、ENTERキーを押す。

『Exceed Charge』

ファイズエッジにフォトンブラッドが注入され、刀身が紅く光る。そしてファイズエッジを振るうとファイズエッジから赤色のエネルギー波が放たれ、カクタスオルフェノクに当たると円筒形の赤いエネルギーフィールドとなりカクタスオルフェノクを拘束する!

「やああああああ!!」

一気にカクタスオルフェノクに近づき連続で切り裂く。カクタスオルフェノクはΦの記号を浮かべながら、青い炎に包まれて灰になった。

「・・・や・・・った・・・!!」

ファイズは息切れしながらも歓声を上げる。そして落ちているカイザドライバーを拾い、変身を解除する。

「早く・・・帰らないと・・・美波に殴られる・・・」

力を使い果たし、息も絶え絶えになりながらも旅館に戻ろうとする。

『割りにあわねえーっっ!!』

「おわあ!?!」

突然響いてきた声に明久は驚きながら、旅館に入る。

「ちよつとアキ!! どこ行ってたのよ!! 心配したじゃない・・・!!」

明久を出迎えたのは、美波の今にも今にも泣きそうな顔と怒鳴り声だった。

(・・・やばい・・・、目の前が・・・)

かすれつつ視界を見ながら、明久はその場に倒れた。

「アキ！？しっかりして！！ アキ！！ アキイイイイイイイイイイ！！！！」

「本当に申し訳ありません」

「うるさい！ バカアキ！ 約束を破ったくせに！！」

合宿を終えた明久を待っていたのは一週間の病院の入院だった。ロボロに傷ついた体を治す為に、明久は現在入院中である。ちなみに、雄二たちは覗きをしたものの見れたものが学園長の裸という反吐が出る物。しかも学年の男子全員がその行為に協力したため、明久を除く全二年男子生徒が一週間の停学処分となった。そして現在明久は、ベッドの上で土下座しながら美波に説教をされていた。

「言っとくけど、この程度で済まず気はないわよ！！ あんたのあととあらゆる関節を逆方向に曲げてあげるわ！！」

「勘弁してください美波様！ 何でもいたしますから！！」

「・・・何でも？」

明久が気が付いたときはもう手遅れになっており、美波はSっ気全開の笑顔を浮かべていた。

「何でもって言ったわよねアキ？」

「し、しまった！ 美波の罠にはめられ・・・、嘘ですスイマセン何でもいたします！！」

拳を振り上げる美波に明久は急いで謝罪する。

「今度の休み、また駅前の『ラ・ペデイス』でクレープ食べたいな」

「喜んで！」

「今度、二人っきりで如月ハイランドに行きたいな」

「喜んで!!」

「・・・一生ウチのそばにいて」

「喜んで!!!」

明久はもう無我夢中で頷きまくっている。そしてそれを聞いた実波は顔を真っ赤にして、

「え・・・、本当・・・？　ウチのそばにいてくれるの・・・？」

「よろこ・・・!!」

「あ、あのー」

病室の扉から声が聞こえ、二人が目を向けるとそこには果物のかごを持った姫路が立っていた。

「お、お見舞いに来ました。　明久君、大丈夫ですか？」

「うん、大丈夫だよ姫路さん」

明久が答えると、姫路は少し頬を赤く染めて、

「そ、そうですか。それより、林檎剥きましようか？」

「うん、じゃあお願いしようかな・・・」

「ま、待ちなさい瑞希！　林檎剥くならウチがやってあげるわ！」

実波が姫路の手から、林檎とナイフを奪い取ろうとする。

「い、嫌です！　今日は私が明久君の看病をしてあげるんです！」

実波ちゃんはどうしたからいいじゃないですか！」

「いいわけないでしょ！　早く寄越しなさい・・・!!」

「嫌です!!!」

林檎とナイフを取り合う二人を見て、明久は呆然とするしかなかった・・・。

「カイザが倒された？」

その報告を受け、村上は動揺する。

「はい、カイザのベルトも奪われました」

「・・・そうですか。今はまだこちらに部があるとはいえ、向こうに花形さんが手を貸しているとなると、少し厄介ですね・・・」
村上は眉間にしわをよせ、秘書の女性に向き直る。

「スマートレディに伝言をお願いします。ラッキークローバーに召集をかけてくださいと」

第五話 最終日と約束と変形バイク（後書き）

次回から新章に入ります。もしかしたらオリジナル章になるかもしれません。

第六話 キスと拷問と断ち切れる絆（前書き）

後半少しシリアスが入ります。

第六話　キスと拷問と断ち切れる絆

明久は少し早い時間に学校を前にしていた。ようやく病院から退院できて、登校することが許されたのだ。

「やれやれ。なんだか随分と久しぶりに学校に来たような気がするよ……」

強化合宿の期間も含めると二週間振りである。だが明久の場合は入院なので、停学を出され山ほど課題も出されたクラスメイトに比べると、少しばかり幸運だったかもしれない。

「あ、明久君っ」

不意に明久の耳に、誰かが駆けてくる音が聞こえてくる。

「おはようございます。もう怪我は大丈夫ですか？」

「姫路さん。うん、もう大丈夫だよ」

何故か姫路は明久が入院してたときは美波と一緒に毎日明久の看病をしていたので、明久は久しぶりに学校に来たが、二人にとっては毎日会っているようなものだった。

「でも、もうあんな無茶はしちゃダメですよ！　明久君がいなくなっちゃたら、みんな悲しむんですからね！」

「わ、分かってるよ！」

姫路は明久が病院に入院しているときから、何回も同じような台詞を言っていた。よほど明久の身を心配していたのだろう。

「分かってるならいいです。また……明久君と一緒に学校に来て良かったです」

「う、うん」

姫路のその言葉に、明久は赤面した。

「……ふふ。明久君、顔が真っ赤ですよ？」

「そ、そういう姫路さんだって慣れない事を言うから真っ赤だよ！」
二人はお互いの顔を見ながら、お互いに笑った。結果はどうであれ、

明久にはいつもの日常が帰ってきた。明久には、それが嬉しくてたまらなかった。

「アキっ！」

そうやって笑いあっていると、遠くのほうから威勢のいい声が聞こえてくる。おそらく美波の声だろう。

「ん。おはよう美波」

声のした方を向くと、美波が走ってくるのが明久の目に入った。

「え？ あれ？ どうしたの？」

何故かは分からないが、美波はかなり真剣な顔をしている。何かあったのだろうか。

「美波ちゃん、どうしたんですか？」

その様子を見た姫路もキョトンとした顔になっている。

「アキ、目を瞑りなさいっ！」

「え？ は、はい！」

美波の大声に明久は驚いて目を閉じた。

「瑞希、ごめんね……………」

「え？ 何ですか美波ちゃん……………」

少しおかしい雰囲気にも明久が目を開けてみると、頬を染めた美波の顔が目の前にあり、気がつくと美波の唇が明久の唇に重ねられている。明久が呆然としてみると、美波は弾かれるように明久から離れ、「そ、その……………冗談とかじゃ、ないから……………っ！」顔をトマトのように赤くしながら、美波は去って行った。

「美波ちゃん……………やっぱり、明久君のことが……………」

明久には、近くで呟く姫路の声が妙に気にかかった。

「吉井、齒を食い縛れっ！！」

そして、不意打ち同然に鋭く重い須川の拳が明久の顔面に突き刺さった。よく見てみると、須川の後ろにFクラスのクラスメイト達が獲物を待ち構えているかのように近くにいた。須川は弾かれるように明久から離れ鋭い殺気のこもった視線を向け、

「そ、その……………冗談とか、じゃないから……………」

！・・・・・・本気でクロス」

「え！？ え！？ 待って待って！ 僕にも事情がわから――――ぎゃああああああっ！」

今までにない殺気と凄まじい暴力をFクラスから受け、明久は退院後初の登校日に意識を失った。

『諸君。ここはどこだ？』

『『『最期の審判を下す法廷だ！』』』

『異端者には？』

『『『死の鉄槌を！』』』

『男とは？』

『『『愛を捨て、哀に生きるもの！』』』

『宜しい。これより――――F異端審問会を開催する！』

目を覚ますと、明久の周りには覆面に口ウソクや鞭を持ったFクラスが集団で溢れていた。

「え？ あれ？ どういう事？」

暗幕が引かれているが、暗闇でもよく見える明久の目と畳の感触でそこがいつものFクラスの教室だと分かった。しかし何故明久はそんな所で手足を縛られ、拷問まがいな目に遭おうとしているのか。

「起きたか明久」

近くから聞きなれた声が聞こえた。明久がその方向に顔を向けると、そこには明久と同じように手足を縛られ転がされている雄二の姿が

あつた。

「…………雄二、何やってんの？」

「…………お前の巻き添えだ」

忌々しげに顔を歪ませながら雄二が吐き捨てるように言った。まさに檻に繋がれた野獣という言葉が良く似合う。

「巻き添えって？」

「お前のせいで『寝ている間に翔子にキスをされた』って話がアイツらにバレたんだ。とんだ迷惑だ畜生」

キスという単語に、明久の中に憎悪の業火が生まれた。

「皆大変だ！ 坂本雄二に異端者の疑いがある！ 至急異端審問会の準備を始めるんだ！」

「待て明久！ お前、如月ハイランドの一件ではむしろキスをさせようとしてなかったか！？ というか、お前こそが異端者だろうが！」

雄二が言い返すが明久は気にせず、

「雄二、見苦しいぞ！ そうやって謂れもない疑いを僕にかけて自分の身を護ろうって魂胆だな！ その手は食うもんか！」

「こ、このバカ野郎が……………！ 信じられないのならあいつらの言っていることを聞いてみる！」

明久はとりあえず雄二の言うとおりに会話に耳を傾ける事にした。聞こえてきたのは、クラスメイト達の奇妙な会話だった。

『…………罪状を読み上げたまえ』

『はっ。須川会長。えー、被告、吉井明久（以下、この者を甲とする）は我が文月学園第二学年Fクラスの生徒であり、この者は我らが教理に反した疑いがある。甲の罪状は強制猥褻及び背信行為である。本日未明、甲が同Fクラスの女子生徒である島田美波（以下、この者をペツタンコとする）に対して強制的に猥褻行為を働いていた所を我らが同胞が確保。現在に至る。今後、甲とペツタンコの関係に対して十分な調査を行った後、甲に対して然るべき対応を――』

――』

『御託はいい。結論だけを述べたまえ』

『キスをしていたので羨ましいであります!』

『うむ。実にわかりやすい報告だ』

その報告に、明久は一瞬呆然とする。

「明久。あまりのショックに記憶が飛んでいるようだから教えてやる。お前は今朝、島田とキスをしたんだ。しかも姫路の目の前で」

雄二が言い聞かせるように明久に告げる。しかし、明久にはそんな事は信じられなかった。自分は――だから、そんな事はない。

「ははっ。冗談はよしてよ雄二。だって、あの美波が僕なんかにキスをするわけじゃないか」

自分には勉強ができるわけでも、運動ができるわけでもないし、他に取り得があるわけでもない。そんな自分にキスをしてくれる人物なんて、世界中探したっていないだろう。・・・自分のように――に。

「まあそう卑下するな明久。確かにお前は容姿学力性格が最低だが、それらに目を瞑れば甲斐性と財力が皆無というだけじゃないか」

「この野郎! 言うに事欠いて僕の取り得は肩たたきがけだ!?!」

「その歳で肩たたき!?! 反論するにしても他に何か取り得はなかったのか!?!」

バカにするのも程がある、と明久は思う。おそらく手足を縛られていなければ掴みかかっている事だろう。

「それはともかく、お前が島田とキスをしていたのは事実だ。証拠も押さえられているようだしな」

証拠って何、と聞き返す前に明久の目の前に一枚の写真が突きつけられる。

「・・・・・・裏切る者には、死を」

写真を手にして低く呟いたのはムツリーニだった。いつもは存在感を消して写真撮影をしているというのに、今は暗殺実行寸前の忍者のように静かな殺気を放っている。

そしてムツリーニが手にしている写真に写っているのは、明久と

美波のキスシーンだった。

「ええっ!? これホント!? アレは夢じゃなかったの!?!」

「夢だったなら今こうして縛られるような事はないんだがな」

「……そう」

うつすらとそんな記憶はあるが、まさか本当の事だとは思えない。

「耳まで真っ赤になっているところ悪いんだが、質問がある」

「ち、ちがっ……!! これは、その、顔が熱いだけで……!!」

「わかったわかった。んで、どうしてお前はそんな事になったんだ?」

「……そんなの、僕が聞きたいよ」

美波が急にあんな事をした理由など見当もつかない。誰かに脅されたとか、自分を罠にハメルためとか、そう言った理由しか思いつかない。

「そのスポンジのような頭でよく考えてみる。最近何か様子がおかしかったとか、どこか思い当たるフシがあるんじゃないか?」

「……分からないよ。どうして僕にそんな事……」

「……分からないって、どういう事?」

その声は、教室の扉から聞こえてきた。そこには、たった今話題になっている島田美波だった。

「分からないって、どういう事? アキ、一生ウチの側にいてくれるっていったわよね? 嘘じゃ……ないわよね?」

その言葉は本当だ。病院の時、何でもすると言った明久に美波が言った要求だった。しかし、明久はあの時無我夢中で頷いていた。つまり、その時の記憶が曖昧なのだ。

そして、明久は最悪の言葉を放つ。その言葉が、どれだけ目の前の少女の心を傷つけるものか知らず。

「……そんな事、言ったっけ?」

「……!!」

美波の表情に、明久は絶句する。その表情は、まるで愛する者に騙

されたような。まるで、愛する者が死んだときのような表情だった。美波は唇を結び、明久に歩み寄り――――

高い音がFクラスに響き渡る。それは、美波の平手が明久の頬を直撃した音だった。

「……最低。……もうウチに話しかけないで。……大嫌い」

そう言うと、美波は自分の席に座る。

バキッ！！

また音が響き、明久が壁に衝突する。雄二が明久を思いっきり蹴り飛ばしたのだ。

「……明久……！ テメエって奴は……！！」

「お、落ち着け坂本！！」

「うるせえ！！ 放せ！！」

Fクラスの何人かが雄二を羽交い絞めにする。そうしなければ、明久を殺しかねない勢いなのだ。

「こら！！ 君達は一体何をしているのですか！！」

一時間目の先生が登場するが、それでも雄二は止まらず、美波は机にうずくまっている。

明久は、壁に寄りかかったままどこか虚ろな目をしていた。

第六話 キスと拷問と断ち切れる絆（後書き）

美波との絆を失ってしまった明久。果たして、また元のような関係になれるのだろうか？
感想お待ちしております。

第七話 危機と想いと護りたい者（前書き）

だいぶ遅くなって申し訳ありません。

第七話 危機と想いと護りたい者

バー「クローバー」。そこに三人の男女がいた。一人は眼鏡をかけた知的な外見の男性で、ウィリアム・バトラー・イエイツの詩を読んでいる。

二人目はバーテンダーの女性で容姿はかなり美しいが、どこか妖艶な雰囲気を漂わせている。

三人目は屈強な肉体を持つ黒人男性で、膝にチワワを乗せ撫でている。

「しかし僕達を呼び出しておきながら、村上さんは遅いですね」
眼鏡をかけている男性が言った。

「仕方ないわ。あの人は前からそういう人だもの。そういえば、北崎君も来ないわね。まあ彼もきまぐれだから仕方ないかもしれないけど」

「ぼ、僕は別に来てくれなくてもいいんですけどね」

北崎という名前が出た瞬間、眼鏡の男性が少し怯えたような表情を見せる。その時バーの扉が開き、紳士的な男――村上が店内に入り、席に座る。

「お久しぶりです皆さん」

「何の用ですか村上さん。つまらない事に僕達を使わないのは、あなたに協力する条件だったはずですよ」

「そう言わないでください琢磨さん。実は少し厄介な事になりましたね・・・」

眼鏡の男性――琢磨が不満げに言うと、村上が額に手を当てながら村上が言った。

「ファイズが動き出しました。すでにカイザのベルトも奪われています」

「ファイズが？ でもベルトは人間には使えないはずでしょ？」

女性が驚き混じりの表情で言った。その話には琢磨も興味がある

のか、村上の方に目を向ける。

「ええ、そのはずなんです。しかし現にオルフェノクはもう何体か消され、カイザのベルトも奪われていることは確かです。現在ファイズに変身しているのは文月学園2-F所属、吉井明久君です」

村上是明久の写った写真をカウンターの上に出す。女性はカウンターの上に出された明久の写真を手に取ると、笑みを浮かべた。

「へえ……、中々可愛い子ね」

「ここで『上の上』のオルフェノクである皆さんに、この吉井明久君を殺すことをお願いします」

その言葉に、その場の空気がピンと張った糸のように張り詰める。

「……この少年がそれほどの脅威だとも言うのですか？」

「ファイズギアを使いこなしている以上、油断はできませんよ。それに、あちらには花形さんがついているようですしね」

「花形って、確か前社長のことかしら？」

「ええ、敵には回したくありませんでしたが、こうなったからには仕方ありません」

村上是そこでため息をついた。

「まずは、ジェイ。あなたが行って下さい。成功したら、チャコと一緒に旅行に行くのがいいでしょう」

その言葉にジェイはコクリと頷き、村上是チャコと呼ばれたチワワの頭を撫でた。

「でも、ファイズとカイザのベルトはどうするの？」

「別に壊しても構いませんよ、影山さん。後の三本のベルトがあれば、どうにでもなります」

「……デルタのベルトと、帝王のベルトですか」

話を聞いていた琢磨が、ポツリと呟いた。

「あの三本のベルトがあれば、人間など虫けらのようなものですかね。ああ、それとジェイ。吉井君を誘き出した時は、彼と同じ学校の人間を狙えば良いと思います。彼は絶対に来ますよ」

ジェイはまた頷き、カウンターの上のビールを一口すすった。

「残念ね……。こんな可愛い子を殺すことになるなんて……」
影山は悔しそうに呟くと、写真に火をつけ燃やした。

「大丈夫かのう、明久に島田は……」

「島田は心配だが、明久は知るか。あのバカ」

「……明久があそこまでバカとは思わなかった」

放課後の2-Fクラスで、雄二とムツリーニと秀吉は美波と明久の姿を見て心配そうな表情を浮かべていた。美波は誰とも話さずただ帰宅の準備をし、明久は自分の席でうわの空の状態である。

「しかし、島田も凄まじかったのう……」

「ああ、姫路が明久の事を言おうとした瞬間、『あのバカの話をしてないで!!』だからな」

「……相当頭に来ている」

明久と美波は朝の一件から全く口をきいていない。明久は謝罪の一言でも言いそうだが、その様子はまったく見られずただボーっとしていた。

「……ウチ、帰るわね」

美波はそう言うのと荷物を荒々しげに持ち上げ、教室を早足で出て行った。それでも、明久はただボーっとしているだけだ。

「明久君、後を追わないんですか？」

その様子を見た姫路が心配そうに明久に言った。

「……追ってどうするの？」

「そんなの謝るに決まっておるじゃろ！ そうすれば島田も……」

「許してくれるわけないでしょ？ 告白を流して、それであんな事を言って、あんな顔をしてた美波にどういう言葉で謝ればいいのさ・

・・」

明久は、あの時自分が何気なく放った一言で浮かんだ美波の表情が忘れられなかった。見ているこっちが苦しくなるぐらいの、悲しみに満ちた表情を。いつも元気で笑顔が似合う美波に、あんな表情にさせてしまったのは紛れもなく自分だ。そんな自分が、どんな顔をして美波に謝ればいいのか。そんな明久を見て、秀吉が口を開いた。

「・・・明久。確かにお主はやってはならんことをしたかもしれん。だが、このままお主は終わる気か？」

このまま島田に自分の気持ちを伝えぬまま、一年間を過ごすつもりか！？ もう二度と口を利かぬ気か！？ みなを・・・、島田を護るのではなかったのか！？ 答えるのじゃ明久！！」

その声は、今まで明久が聞いた事のないぐらい秀吉の想いがこもっていた。そして、明久は机から立ち上がった。

「・・・美波に謝ってくる。許してくれるか分からないけど、・・・今の秀吉の言葉を聞いて、謝らないと後悔すると思うから・・・、謝ってくる」

その言葉に秀吉は笑みを浮かべ、

「うむ。では早く追いかけた方がいいじゃろう」

「うん」

明久は荷物とトランクケースを持ち、教室から駆け足で出て行った。

「秀吉、お前があんなに感情を剥き出すのって珍しいな。いつもならもっと冷静だろお前」

雄二が驚き半分で言った。秀吉は基本的にポーカーフェイスなので、あんな風に表情を変えるのは少し珍しい。

「うむ・・・、だが明久も島田も言いたい事を言えないように見えただのな。言えない事を言えぬまま終わるのは少し寂しいじゃろうと思っただのう」

「そうですね・・・。美波ちゃんも明久君も仲直りできたらいいで

すね」

「……………もしかしたら、仲直り以上になるかもな」

雄二が少し笑みを浮かべながら言った。その言葉に姫路は少し慌て、

「ええっ!?　そ、それは少し困ります……!!　でも二人には仲直りして欲しいです……うう」

「……………とにかく、二人の仲直りが最優先」

ムツツリーニの言葉には、その場の全員が同感だった。日々なんだかんだ言いながらも、明久と美波は同じFクラスの仲間なのだ。その仲間を放って置くなど、雄二たちにはできないのだ。

美波は一人、学校の帰り道を歩いていた。その表情は暗く、沈んだ雰囲気を出している。原因は言うまでもなく、明久との一件だ。あれから明久とは一言も口を利かず、話題に出れば怒りがこみ上げる。

「(……………アキのバカ……………大っ嫌い!)」

普段なら冗談でも言わないが、今の美波は本気でそう思っていた。それほどまでに美波の心は傷ついていたのだ。本気で一緒にいてくれると思ったのに、全てなかった事にされていた。……………一体あのキスは、気持ちを込めた自分のあの言葉は一体何だったのだろうか。そんな事を考えながら、一人道を歩いていた。

そして、それを見つめている男がいた。その男――ジェイはその少女が文月学園の制服を着ていること、文月学園の生徒を襲えばファイズが文月学園の生徒を助けるだろうという村上の言葉を思い出し、ジェイはワニの性質を持つオルフェノク、クロコダイルオルフェノクになり美波の前に出た。

「・・・！！　オルフェノク・・・！！」

突然自分の目の前に現れたクロコダイルオルフェノクに、美波は驚きを隠せない。クロコダイルオルフェノクはワニの歯を模したバツクラ―で美波に襲い掛かる。

「きゃああああ！！」

美波は間一髪地面を転がり攻撃をかわし、クロコダイルオルフェノクの攻撃は地面に当たる。しかしその攻撃は容易く地面を砕き、美波は恐怖で動けなくなった。クロコダイルオルフェノクはそんな美波に近づく。美波の頭には、今までの思い出・・・走馬灯が駆け巡っていた。そして、クロコダイルオルフェノクの拳が美波に振り上げられる――ブウンッ！！

その時、一台のバイクが拳を振り上げたクロコダイルオルフェノクに飛び掛かり、攻撃を中止させた。そのバイクは地面に着地し、運転手がバイク――オートバジンから降りヘルメットを脱ぐ。

「大丈夫？　美波」

運転手――明久は心配そうな声で呼びかけた。

「・・・アキ」

美波は今にも泣きそうな声で明久の名を呼ぶ。それを見て明久は、クロコダイルオルフェノクを睨みつけながらオートバジンの後部にあるトランクケースからベルトを取り出し、腰に着けファイズフォンを開きコードを入力する。

『Standing by』

「変身!!」

『Complete』

明久はファイズに変身し、クロコダイルオルフェノクに殴りかかる。しかし、その体はかなり硬くダメージをほとんど与えられていない。逆にクロコダイルオルフェノクに殴られ、地面を転がる。

「う．．．おおおお!!」

だがそれでも怯まず、クロコダイルオルフェノクにキックを叩き込む。しかしそのキックも効かず、胸に強烈なパンチをくらい地面を転がる。そして無理やり起こされ、顔面を殴られる。そのせいでまた転がるが、再び起き上がる。

「．．．．．もうやめてよ!!」

その時、美波の大声がその場に響き渡った。

「．．．もうやめてよ。どうしてそこまでするのよ。どうでもいいんでしょウチの事なんて!! もうウチの事なんか放って置いて逃げて．．．」

「ふざけるなよ!!!!」

その大声に、美波がびくりと震える。今まで聞いた事のない程の明久の大声に。

「美波のことを置いて．．．逃げられるわけないだろ．．．!!」

僕はバカだから、美波を傷つけた。もう絶対に傷つけない。美波を傷つける奴がいたら、絶対に傷つかせない!! 例え世界を敵に回しても、君を護る!!」

そしてファイズが再びクロコダイルオルフェノクに襲い掛かり、クロコダイルオルフェノクに強烈なパンチをくらう。だが、倒れずにふんばり顔面を殴る! さらにその隙にがら空きになった胸にキックを叩き込み、ファイズフォンを取り出しキーを押す。

『Burst Mode』

ファイズフォンをフロンブラスターにし、クロコダイルオルフェノクを撃ち抜く! クロコダイルオルフェノクは地面を転がり、その隙にポインターをベルトから外し、ミッシェンメモリーをつける。

撫でた。

「……気は済んだ？」

「……うん」

数分後、美波は泣き止んでいた。

「そろそろ帰ろうか」

明久はオートバジンを引きながら、美波と一緒に歩く。

「……アキ」

「何？」

「……さっきの言葉、嘘じゃないわよね？」

「当然でしょ？」

「……ふーん………ありがとう」

美波は最後の言葉は明久に聞こえないぐらい小さい声で言った。
抱えきれない気持ちを、胸に抱えながら。

明久と美波が去った道に、クロコダイルオルフェノクの残骸ともいえる灰が残っていた。その灰が風に吹かれた瞬間、灰が一箇所に集まり、その灰はみるみるクロコダイルオルフェノクの姿を形成した。クロコダイルオルフェノクはジェイの姿に戻り、そこに走ってきたチャコを抱き上げ、その場を離れた。

第七話 危機と想いと護りたい者（後書き）

たっくん流クリムゾンスマッシュが出ました（笑）
次回からはオ
リジナル章が続くと思います。
感想お待ちします。

第八話 ケーキと敗北と新たなカイザ（前書き）

今回、とうとうあの人物がカイザに変身します。

第八話 ケーキと敗北と新たなカイザ

「食べないの？ アキ」

「このケーキは美味しいですよ？」

「いや、食べるよ・・・」

「・・・雄二、あーん」

「遠慮しておく。何やら怪しい菓が入ってるのが見えたからな」

美波と姫路の言葉に明久は苦笑しながら返事を返し、雄二は霧島からの何か薬物が入っているケーキを食べないようにしていた。

明久、雄二、姫路、美波、秀吉、ムッツリーニ、霧島の七人は現在今流行のケーキ屋にいた。しかし、七人はケーキを食べに来たわけではない。

「おいおいお前ら、今回の話の目的を忘れてないか？」

「分かってるわよ。アキが持ってるもう一つのベルトでしょ？」

そう、今回の話の主題は明久が持っているファイズギアと、もう一つのベルト・・・カイザギアについてだ。ちなみにカイザギアは話し合いに出すため、明久が持ってきている。

「今現在の問題は二つ。明久がファイズに変身できた時のようにこいつにも変身できるか、そしてもう一つの問題は・・・」

「・・・俺達でも変身できるか」

「そうだ、ムッツリーニ」

「？ どうして僕以外が変身する事になるの？」

明久が首を傾げながら尋ねた。

「今は明久がオルフェノクを退治しているから何とかなっているが、この前の島田の時のように、明久がいないときにオルフェノクに攻め込まれたら厄介だ。奴らが何体いるかさえもわからないからな。戦力が多いほうがいい」

確かに明久が留守のときに攻め込まれたら、ただの人間の雄二た

ちには勝ち目はないだろう。抵抗するためには、ファイズと同じオルフェノクを倒す力を持つカイザの力が必要になる。しかし、カイザになるための条件があるかもしれない。だがそれさえ分かれば変身できる。

「くそ、せめて花形のおっさんがいてくれりゃあ・・・」

「呼んだかね？」

『うわあ！！？』

いつの間にいたのか、明久の隣に今噂していた花形が座っており、ケーキを食べている。

「いつからいたんですか！？ てかそれ僕のケーキですし！！」

「それは済まなかったな。だが私は謝らない」

「ウソダンドコドーン！！」

「落ちて着け明久。地球の言葉を話せ」

暴走してオン○ウル語を叫ぶ明久に、雄二が冷静にツツこんだ。

ちなみに花形は今だ明久のケーキを食べている。

「と、とりあえずそのベルトの事を話してくれませんか？」

「・・・良いだろう。君達もそろそろ知るときが来た」

姫路の言葉に、花形は口元を拭きながら言った。その場の空気が一気に張り詰める。

「五本のベルトの事はもう知ってると思うが、吉井君のファイズのベルトを含め、オルフェノクを殺すためのベルトは五本存在する。ファイズギア、カイザギア、デルタギア、そして『帝王のベルト』と呼ばれるサイガギアとオーガギアの五つのベルトがね。そしてこれらのベルトには変身するための条件があり、その条件を満たした者だけが変身する事ができる」

「・・・それは、ファイズギアも？」

霧島の言った言葉に花形は頷き、

「ああ、ファイズギアも例外ではない。しかし、私の推測だが吉井君以外の君達はファイズに変身する事ができないだろう」

「その条件というのは、一体何なのじゃ？」

「・・・・・・・・」

その言葉に、何故か花形は黙ってしまった。何故か言う明久に悪いという考えが漂ってきてしまう。

「なるほど・・・、つまり、明久レベルの馬鹿にしか変身できないということか？」

「だけど、そうなるとカイザになったオルフェノクもアキ並みの馬鹿って事になるわよ？」

「明久レベルの馬鹿となると、明久しかおらんような気がするのう」「ちよっと待ってみんな！！ 何で変身条件Ⅱ馬鹿ってことになるの！？」

あまりの扱いに明久が叫ぶ。その意見には花形も賛成しかねるのか、

「いや違う。もっと根本的な理由だ。だが、君達はカイザになることはできる。・・・大きなリスクを負うがね」

「何だそのリスクって？ 体力を消耗するとかか？」

「灰になって死ぬ」

「リスクがでかすぎるわ！！」

雄二が机を勢い良く叩きながら叫んだ。だが確かにリスクが高すぎる。灰になり死ぬのでは、戦力を増大するも何もない。

「仕方ないだろう。カイザギアはファイズギアと違って安全設計ではない。さて、答えた事には答えたし、そろそろ私は帰るところ」

「ちょ、ちよっと待ってください花形さん！！ まだ聞きたいことがいっぱい・・・！！」

しかし花形は人間ではありえないスピードでその場を離れてしまった。そのスピードは、下手をしたらムッツリーニの召喚獣を超えているほどに。

結局、五本のベルトの事は分かったがそれ以外の事は何一つ分かつらず、七人は撤収する事になった。カイザギアは今雄二が持っている。

「ったく、あのおっさん肝心な所で役にたたねーな」

「五本のベルトの事が分かったただけでも前進ではないか。何をそんなにいらついておるのじゃ？」

どこか不満げな雄二に、秀吉が尋ねた。

「分からない事がありすぎるんだよ。オルフェノクの王に、その王様を護る為の五本のベルト。あのおっさんは絶対何かを隠してる」

「でも、一体何を隠してるんでしょうか」

「さあな。だが、隠しているからにはロクなものじゃなさそうだな」
そんな事を話していると、目の前に黒人の男が現れ、そしてその男――ジェイはクロコダイルオルフェノクに姿を変えた。

「おいおい、話してるそばから来やがった！」

「でも、このオルフェノクはアキが倒したはずなのに！！」

「みんな下がって！」

明久はベルトを腰につけ、変身コードを押す。

『S t a n d i n g b y』

「変身！！」

『C o m p l e t e』

明久はファイズに変身し、クロコダイルオルフェノクに殴りかかる。しかし、やはり体が硬くパンチが効いていない。

「（なら前に効いたこれが効くはず・・・！！）」

ファイズはファイズフォンを取り出し、フォンブラスターに変形させ、コードを押す。

『B u r s t M o d e』

エネルギー弾をクロコダイルオルフェノクに連射する。だが、前に効いたはずのフォンブラスターが全く効いていない。それどころか銃弾を受けながらもワニの歯のような特殊な形状の剣を持ち、フ

アイズに斬りかかる。

「うわあっ!!」

さらに胸を何回も切り裂かれ、激しく火花が散る。地面に転んだ所を蹴り転がされ、さらに剣で追い討ちをかけられ吹き飛ぶ。

「明久君!!」

それを見た姫路が悲鳴じみた声を上げる。明久はポインターをベルトから外し、ミッションメモリーを挿入する。

『Ready』

そしてフラフラと立ち上がりながらポインターを右足に装着し、ファイズフォンのENTERキーを押す。

『Exceed Charge』

ポインターにフォトンブラッドが注入され、空中にジャンプし前方一回転する。右足のポインターから赤い円錐状の光を放ち、クロコダイルオルフェノクをロックオンする。

「やああああああ!!」

必殺キック・クリムゾンスマッシュがクロコダイルオルフェノクに直撃し、クロコダイルオルフェノクは灰になる。

「・・・・・・と思われた。」

「・・・・ふうふううう」

だが、クリムゾンスマッシュはクロコダイルオルフェノクの両腕に止められていた。

「なっ!?!」

「おおおおお!!」

次の瞬間、クリムゾンスマッシュを放ったファイズが弾き飛ばされ、コンクリートの壁を貫通し地面を転がった。

「う・・・・あ・・・・!」

クロコダイルオルフェノクは立ち上がったファイズに容赦なくパンチを叩き込み、剣と拳でさらにダメージを与える。

「明久!・・・・クソッ!」

雄二は手に持っていたトランクケースからカイザギアを取り出し、腰につける。

「何をするつもりじゃ雄二！」

「変身するに決まってるだろ!!」

「だが、変身条件を満たさなかったら灰になって死ぬのじゃぞ!？」

「・・・そんなのダメ！」

「じゃあ黙って見てろっていうのかよ!!」

「・・・!! それは・・・」

霧島が返答に詰まっていると、ファイズがまたクロコダイルオルフェノクに吹き飛ばされる。

「が・・・！」

もはやファイズは動く事すらままならない。そのファイズにクロコダイルオルフェノクは勢い良く突進し、強烈なパンチを直撃させた。

「明久あああああああ!!!!」

秀吉の絶叫が響き、ファイズは盛大に火花を散らしながら変身を強制解除され明久の姿に戻り、宙を飛び近くに流れている川へと転落し、水柱を豪快に上げた。それを見たクロコダイルオルフェノクは、もはや雄二たちには興味無いのかすぐにその場を離れてしまった。

「おい、待ててめ・・・」

「落ち着くのじゃ雄二! まずは明久を捜すのが優先じゃろう！」

「・・・つく!!」

雄二が秀吉たちと一緒に明久を捜しに行こうとしたその時。

「・・・カイザを使いこなす気はあるかね？」

突然、雄二の背後から声がした。振り返ると、ついさっき別れた花形が立っていた。

「もう一度聞く。君にはカイザの力を使いこなし、戦いに身を投げる覚悟はあるかね？」

「・・・何言ってるんだアンタ。カイザの変身条件を満たさなかった

ら・・・」

続きを言う前に、花形が口を開いた。

「ああ、灰になり死ぬ。だが、一つだけ死なずにカイザになる方法がある」

「・・・本当か？」

「君に戦う覚悟があるならば、今すぐにでも教えてあげよう」

「・・・いいぜ、その方法を教えろ」

「雄二！」

霧島が、普段では絶対に出さないような音量で不安そうな声を上げた。

「心配すんな翔子。すぐに帰れるし」

「雄二・・・・・・」

「それに、お前のストーキングから逃れられるかぐうああああああああああ！！！！」

「・・・・・・余計な事を言うからひどい目にあう」

霧島に一言多かったせいで、雄二の頭蓋が握り潰される一歩手前にされた。そして雄二と花形は一緒に行動を共にし、秀吉達は川に流された明久を捜す事になった。

数分後、雄二はどこか分からない地下の施設に座っていた。周りにはよく分からない機械が置かれており、何かの実験施設にも見える。

「これを見たまえ」

花形が指差したのは、ガラスのケースに入っている『X』の記号のような物だ。少し青白く、ケースの中でふよふよと漂っている。

「これはオルフェノクの記号を改造した物・・・、カイザの記号だ」

「カイザの記号？」

「オルフェノクの記号は元々人間をオルフェノクにする実験で使われていた。そしてこれは私が改造した物だ。オルフェノクの記号はその人間との適合率が強ければオルフェノクにする事ができるが、弱ければオルフェノクにすることはできず、カイザに変身しても灰になり死ぬだけだ。たとえカイザに変身しつづけても記号の力は失われていき、最終的にはその人間も死ぬ。だが、このカイザの記号はオルフェノクにせず、ただカイザに変身するためだけに私が作つたものだ。これを使えば記号は消耗される事なく、装着者を死亡させる事も無く、装着者をカイザに変身させる事ができる」

「そんな便利な物があるなら、最初から使えば良いんじゃないのか？」

確かに変身しても死なず、消耗もされないなら最初から使えば良いのかもしれない。しかし雄二の疑問に花形は首を振り、

「いや、そんなに単純な物ではない。確かに適合率が高ければカイザに一生変身し続ける事は可能だ。だがもし低ければ、カイザに変身しても死ぬ。それでも君はこれを受け入れるかね」

その問いに、雄二は笑みを浮かべただけだ。だがそれを肯定と受け取ったのか、花形は目をつむり、

「・・・しかし、何故戦うのだね。吉井君を助けたいからか？」

「馬鹿なこと言うなよ、誰もあんな馬鹿死のうが知ったこっちゃ無い。ただ・・・、あいつに良いところ取りされるのはムカつくだけだ」その言葉を聞き、花形も笑みを見せた。

「・・・良いだろう、では準備に取り掛かるから少し待っててくれ」

花形はその場から消え、雄二は大きな欠伸あくびをした。

『そうですか、ファイズは仕留めそこないましたか』

ジェイは現在、村上と連絡を取っている。ファイズを仕留め損ない、ベルトも明久と一緒に流された今、次をどうするか聞かためだ。『なら次はカイザのベルトの奪取か破壊をお願いします。邪魔する人間は、消しても構いません』

ジェイは携帯電話の通話を切り、クロコダイルオルフェノクとなりその場を去った。

「アキー!!!」

「明久ー!!!」

「明久くん!!!」

雄二が花形と共に去った数分後、秀吉達は川に落ちた明久を捜していたが、まったく影も形も見えず困っていた。

「困ったのう……。ここら辺まで流されていてもおかしくはないのじゃが……」

「そんな……。見つからなかったらどうしよう……」

「あ、諦めちゃダメです美波ちゃん！絶対に見つかります！だから諦めないでください！」

少し弱気になる美波に姫路が励ます。姫路も不安な気持ちは一緒だろうが、嘆いていても明久は見つからない。今自分達にできることは、明久を一刻も早く見つけ出す事だ。

その時、バイクのエンジン音が聞こえてきた。その方向に目を向けてみると、サイドカー付きのバイクが近づいてきている。そのバイクは秀吉たちの前に止まり、運転手がバイクから降りた。

「明久は見つかったか？」

その運転手は、野性味たっぷりの顔に短い髪の毛がたてがみのようにツンツンと立っている男——雄二だった。

「いや・・・、まだ見つかっておらん。それより、話はもう終わったのかのう？」

「ああ、ついでにバイクももらった。ばばあの親友にしちゃあいい奴だ・・・それに敵も来たみたいだしな」

雄二が横に目を向けると、その方向からクロコダイルオルフェノクがゆっくりと歩いてきた。

「明久がいない今なら、余裕で殺せるってか？・・・舐めるなよ」

雄二は余裕の表情を浮かべながら、カイザギアを腰につける。そして、カイザフォンを開き、変身コードを押す。

『Standing by』

カイザフォンを閉じ、胸の前にかざす。

「変身！」

『Complete』

カイザギアにカイザフォンをセットし、ファイズフォンより少々低めの音声が流れる。次の瞬間、雄二の体に沿って黄色いフォトンフレームが形成され、一際強く黄色の光が放たれる。そして、雄二はカイザへと変身を遂げた。

「おらあ！！」

カイザから強烈なパンチがクロコダイルオルフェノクに放たれ、クロコダイルオルフェノクは後ろに後ずさる。さらに強烈なパンチの連打が繰り返され、最後に胸を強く蹴りこむ。クロコダイルオルフェノクは剣を片手に突っ込もうとするが、カイザはカイザブレイガンベルトから外しコッキングレバーを引く。

『Burst Mode』

カイザブレイガンの銃口からフォトンブラッド弾が放たれ、クロコダイルオルフェノクに命中する。さらにクロコダイルオルフェノクに連射しまくり、クロコダイルオルフェノクは地面を転がる。

「はっはっは！！ 無駄無駄無駄無駄無駄無駄あ！！」

悪役のような事を叫びながら敵を撃ちまくるカイザは、悪役にしか見えない。さらにカイザはミッシェンメモリーをカイザブレイガ

ンに挿入する。

『Ready』

カイザブレイガンをブレードモードにし、クロコダイルオルフェノクを斬りまくり、さらにガンモードで撃ちまくる。

そしてカイザはカイザフォンのENTERキーを押す。

『Exceed Charge』

カイザブレイガンにフォトンブラッドが注入され、クロコダイルオルフェノクに黄色いエネルギーネットを撃ち出し、クロコダイルオルフェノクを拘束する。

「おらあああああ!!!」

カイザブレイガンを右手で逆手に持ち、黄色いXの記号と共にクロコダイルオルフェノクに突進し斬り伏せる必殺技・カイザスラッシュが放たれる。

クロコダイルオルフェノクは黄色のXの記号を浮かべながら、青い炎の爆発をおこし灰になっていった。

「・・・ふう」

カイザはカイザフォンを外し、雄二の姿に戻る。変身を解いた雄二に霧島が駆け寄る。

「雄二・・・大丈夫・・・?」

「ああ、心配すんな」

「・・・そう」

霧島はどこかほっとしたような表情を浮かべながら言った。そんな雄二たちに秀吉たちも駆け寄る。

「雄二、灰にならないということは花形殿の方法はうまくいったのか?」

「ああ、なんとかな」

「ふむ、どうやらうまくカイザの力を使いこなせたようだね」

突然声がしたかと思うと、雄二の横に花形が現れた。相変わらず神出鬼没な登場の仕方である。

「おっさん、今度は何のようだ?」

「君に渡すものがもう一つあってね。ベルトの後部に付けておきなさい」

花形が渡したのは、デジタル双眼鏡型ポインティングマーカーデバイス、カイザポインターだった。雄二はそれを受け取ると、言われたとおりベルトの後部につけた。

「さて、後は吉井君を見つけることだけだね。早く見つけたほうが良い、彼の今の状態ではおそらくオルフェノクに対抗できないだろう」

「おい待ておっさ・・・」

しかし花形は再びその場を離れ、どこへともなく消えてしまった。「ったく、なんなんだあのおっさんは」

「・・・・・・そんなことより、早く明久を見つけることが最優先だ」

「はい、川に流されてしまったなら絶対にいるはずです。早く明久君を見つけてましょう！」

明久を見つげるため七人はその場を離れる。その後、クロコダイルオルフェノクの灰が再びクロコダイルオルフェノクの形を成す。クロコダイルオルフェノクはジェイの姿に戻りその場を離れた。

第八話 ケーキと敗北と新たなカイザ（後書き）

カイザの記号は、自分のオリジナルで考えました。
感想お待ちします。

第九話 真実とオルフェノクと人間の心（前書き）

結構シリアスです。オーズ次回で最終回か……。面白かったのに残念です。

第九話 真実とオルフェノクと人間の心

「ぐ……」

明久は激痛に耐えながら、目を覚ました。辺りを見渡してみると、そこはどこかの廃工場のような所だった。何故か自分の体に毛布がかけられている。

（えーと……、確か美波達と一緒にケーキ屋に言って……、その後にオルフェノクに襲われて……、そうだ川に流されたんだ）

どうやら川に流された自分を誰かが拾ってくれたらしい。しかし廃工場に寝かされていたとはどういう事だろうか？

「あ……気がついた？」

突然、女性のものと思われる声が聞こえ、その方向に目を向ける。そこには、明久と同じ年ぐらいの少女がいた。眼鏡にサラサラとした黒い長髪が目を引く。その少女は明久が目を覚ましたのを確認するとホッとした表情になり、

「目が覚めて良かった。川で流されてたからびっくりしちゃった。それとあなたの持ち物はあそこに置いたわよ」

少女が指差した方向を見ると、ファイズギアなどが置かれていた。

「あ、自己紹介が遅れたわね。私の名前は蟹川飛鳥かにかわ あすかよ」

「僕は吉井明久。助けてくれてありがとう」

二人は自己紹介を済ませながら、状況を説明することにした。

「あなたは何で川に流されてたの？」

「えーと……転んだらすぐ前に川があって……」

「すぐにバレる大嘘をありがとう」

「どうやら明久の嘘はすぐにばれるようだ。」

「まあいいわ。私は少し前からここに住んでるの。ここ、見た目は

こんなだけ結構快適だから」

「でも、お父さんやお母さんは心配しないの？」

明久がそう言うと、飛鳥の顔が少し曇った。明久はその表情を見て、自分は何か悪い事を言ったのかと思った。

「両親は少し前に死んじゃったから。今は私一人だけなの」

「あ・・・ごめん」

「ううん。いいわ、もう死んじゃったの結構前だし」

蟹川はすぐに笑顔を戻し、なんでもないかのように言った。だが、さっきの表情から見て完全には気にしていないはずだ。

「そうだ。何か食べる？ おなか減ってるかもしれない・・・」

その時、何者かの足音が聞こえた。飛鳥が後ろを振り向くと、そこにはサングラスに黒コートの男が歩いてきた。

「まさか、こんな所でファイズが見つかる夢にも思わなかったな。まあいい、お前の命、貰うぞ」

男の顔に模様が浮かび上がり、男は蠚螂かまきりの性質を持つオルフェノク、マンティスオルフェノクに姿を変えた。

「オルフェノク・・・！！」

明久がとっさにベルトを取りに行こうとすると、飛鳥が明久を護るようにマンティスオルフェノクの前に立ちふさがる。

「邪魔だ。どけ」

しかしその言葉に飛鳥は耳を貸さず、そのまま立ちふさがる。そして・・・飛鳥の目が灰色になり、模様が浮かぶ。

「何!？」

「!？」

男と明久が驚愕していると、飛鳥は見る間に蟹の性質を持つオルフェノク・・・クラブオルフェノクに姿を変えた。だが普通のオルフェノクとは異なり、左半身が機械化している。

「はああああ!!」

クラブオルフェノクがマンティスオルフェノクに襲い掛かる。明久の目の前では、仲間であるはずのオルフェノク同士が戦うという、

奇妙な光景が作り出された。

「吉井君！ 早く逃げて！」

クラブオルフェノクが明久に叫ぶ。だが、明久は動けずにいた。今まで自分に襲ってきたオルフェノクは自分や友達を殺そうとしてきた。自分にとってオルフェノクは倒すべき敵でしかない。そのオルフェノクが自分を護る為に戦っている。目の前の二体のオルフェノクを倒すか、それともマンティスオルフェノクのみを倒すか。明久は、自分がどうすればいいか分からなかった。

「くそ・・・この裏切り者が！！」

マンティスオルフェノクの両腕にある鎌がクラブオルフェノクを切り裂き、クラブオルフェノクは吹き飛ばされ飛鳥の姿に戻る。さらに、マンティスオルフェノクは両手の鎌から複数の刃状のエネルギーを生み出し、それを一斉に飛鳥に放つ。飛鳥の姿は煙で見えなくなってしまった。

「ふん。これが裏切り者の末路だ」

マンティスオルフェノクが吐き捨てるように言った。明久はその言葉に怒りを覚えながらも、置いてあるファイズギアを取り、ベルトを腰につける。そしてファイズフォンを開き、コードを押す。

『Standing by』

「変身！！」

『Complete』

明久はファイズに変身し、マンティスオルフェノクの腹にキックを叩き込む。よろめいたマンティスオルフェノクの顔面を殴り、次にマンティスオルフェノクの肩を押さえ、腹に何回も膝蹴りを叩き込む。最後に強烈なパンチを叩き込む。マンティスオルフェノクは鎌を振り回すが、ファイズはバックステップでそれをかわし、ファイズフォンを取り出す。

『Burst Mode』

フォンブラスターから光弾が放たれ、マンティスオルフェノクは刃状のエネルギーを生み出し光弾に向けて放つ。お互いの攻撃がぶ

つかり合い、攻撃は相殺されるがファイズはマンティスオルフェノクの顔を殴る。マンティスオルフェノクは地面に転がり、ファイズはマンティスオルフェノクに馬乗りになり顔を殴りまくる。

「ぐは！　ぐお！　ぐあああ！！」

そして無理やりマンティスオルフェノクを立ち上がらせ、キックを腹に叩き込む！

「うわああ！！」

ファイズはミッションメモリとポインターを外し、ミッションメモリをポインターに挿入する。

『Ready』

ポインターを右足に装着し、ファイズフォンのENTERキーを押す。

『Exceed Charge』

ポインターにフォトンブラッドが注入され、空中にジャンプし前転一回転をするとポインターから赤い円錐状の光が放たれマンティスオルフェノクをロックオンする。

「ぐ……お……！！」

マンティスオルフェノクは逃げようとするが、体がまったく動かせない。

「やあああああ！！」

ファイズのクリムゾンスマッシュがマンティスオルフェノクに突き刺さり、マンティスオルフェノクの背後にファイズが現れる。

「うわああああ……！！」

そしてマンティスオルフェノクはΦの記号を浮かべながら、青い炎の爆発を起こし灰になっていった。

「飛鳥さん！」

ファイズは変身を解き、飛鳥に駆け寄る。飛鳥は仰向けに倒れていて、体から青い炎が出ていた。

「……吉井君？　……良かった、あいつに勝ったのね……」

「……飛鳥さん。どうして僕を……？」

何故、同じオルフェノクを相手にしてまで明久を護ろうとしたのか。明久にはそれが不思議だった。

「・・・少し昔話になるわ。私は昔、一回死んだの」

「えっ・・・？」

「・・・知らないの？　オルフェノクが一体どういう存在なのかを・・・」

「僕が知っている事は・・・、人類の進化系だとか・・・」

「どうして人類の進化系と言われているかは知らないのね・・・。・・・教えてあげる。オルフェノクは元々・・・」

そこで一回飛鳥は黙った。だが、意を決したようにその口から真実を話した。

「ただの、普通の人間だったの」

「え・・・？」

その言葉に、明久の呼吸が停止した。あの異形の存在が、元々人間だった？　そんな事、信じられない。信じたくない。

「オルフェノクは・・・、一度死んだ人間が蘇ってなった存在。だからオルフェノクは人類の進化系と呼ばれているの。とは言っても、自然死してオルフェノクになった人はそんなにいない。そのオルフェノクをオリジナルと呼ぶけど、ほとんどはただの人間がオルフェノクに襲われオルフェノクの力を注ぎ込まれて、オルフェノクになる。オルフェノクには人間をオルフェノクにする力があるから。と

は言ってもその力に耐え切れる人間は少なくて、大半の人はオルフェノクになれず死ぬ。・・・私はオリジナルだけどね」

自嘲するように飛鳥は笑った。まるで、そんな力を手に入れても嬉しくないと言っているかのうように。

「私がオルフェノクになった時には、もう両親はいなかった。そんな私にある日、スマートレディっていう女の人 came の。オルフェノクの事はその人に教えてもらったわ。彼女は言ってた、私がもしオルフェノクとして人を襲い、仲間を増やさないなら裏切り者として始末するって」

「・・・何だよそれ」

明久は腹がたった。元々は普通の人間だった人に、人間を襲えなんてふざけている。そんな事ができるわけが無い。

「だけど私は人間として過ごしたかった。だから私はその後も人間を襲わないで普通の生活をしていたの。・・・警察に捕らえられる日まではね」

「どうして警察が？」

「普通の人や警察官は知らないけど、警察の一部はオルフェノクが存在を認知しているのよ。そして、大半のオルフェノクを束ねている組織と、その警察の一部は結託していて、裏切り者の私を実験台に捕まえたの。・・・地獄だったわ。日々私の目の前ではオルフェノクの力を奪う実験や、逆に人間の姿を失わせる実験が行われた。私は左半身を機械化されたけど、何とか研究所を脱走したのよ。それ以来、私はここに住んでるの。逮捕された以上、もう家には帰れないから」

「・・・・・・・・・・」

明久は言葉を失っていた。人間の欲望が彼女をここまで苦しめた。そして、彼女の人生を奪った。なのに、何故彼女は自分を助けたのだろうか。

「・・・どうしてあなたを助けたって顔してるわね・・・」

「・・・はい」

「人間が好きだから」

「・・・」

「たとえどんなに酷い目にあっても、私は人間が好き。確かにあの人たちは酷い人かもしれないけど、全ての人が酷いわけじゃない。人間の中には、絶対に優しい人がいる。・・・あなたのような。・・・だから私は人間として生きて、あなたを助けた」

ただ、人間が好きだからという理由。自分が過酷な目にあつてきたのにも関わらず、誰かを助けようとし、人間として生きようとするオルフェノク。そして、飛鳥の体の青い炎の勢いが増した。

「飛鳥さん！」

「・・・もう・・・ダメね・・・。最後に・・・お願いを言つて・・・いい？」

「・・・はい」

「・・・大半のオルフェノクは、大きな力を手にして、人間の心を失い化物となって人間を襲っている。そんなオルフェノクから、何の罪も無い人たちを護ってください。・・・いつか、人間と人間の心を持ったオルフェノクは共存できるって、私は信じてる。だから・・・私の大切に、大好きな人たちを・・・ファイズ・・・護つて・・・ください・・・」

そして、飛鳥の体は青い炎に包まれ、灰になっていた。

「・・・さようなら。飛鳥さん」

飛鳥の遺骨とも言える灰を握り締めながら、明久は涙を流しながら静かに呟いた。

数分後、明久は廃工場を出て家に帰ろうとしていた。

「アキーー!!」

前方から聞き慣れた声が聞こえ、前を向くと美波が自分に向かってまっすぐ走ってきていた。そして、自分の胸に抱きついてきた。

「バカ！！ どこ行ってたのよ！！ 後で殴るからね！！」

「・・・・・・・・ごめんね」

「謝って許してもらえと思うってんじゃないわよ！！ バカ！！」

自分の胸で少し泣いている美波の頭を明久は撫でた。しかし、その顔はとても悲しげだった。

第九話 真実とオルフェノクと人間の心（後書き）

現在、原作ファイズを一話から見ています。啓太郎の二股の所が面白い（笑）

感想お待ちしております。

第十話 迷いと戦いと決意（前書き）

とうとうオーズ終わりか……。でもフオーゼも楽しみです。

第十話 迷いと戦いと決意

雄二がカイザに変身したり、明久が川に落とされたりした日から二日後。

「・・・・・・・・・・はぁ」

明久は、自分の卓袱台でため息をついていた。

「どうしたのじゃ？ 明久」

「少し元気が無いように見えますけど・・・・・・・・」

心配そうに声をかけた秀吉と姫路に、明久はゆっくりと首を向け、
「いや・・・・・・・・何でも無いよ」

そう言うのと、明久はまた卓袱台にひじをつきながらため息をついた。

「・・・・・・・・明久」

今度は、ムツツリーニが明久の側に現れる。

「・・・・・・・・新作入荷・・・・・・・・・・これは自信作」

少し自信ありげにムツツリーニが見せたのは、秀吉のメイド姿が写っている写真と姫路の水着写真だった。だが、いつもなら興奮して買おうとする明久が、

「・・・・・・・・そう」

まったく反応を見せず、そのままボーっとしている。

「・・・・・・・・！！！！？」

この異変には遠くで見ていた雄二と美波も気付いたのか、明久の側に駆け寄り、

「おい知ってるか明久！ 鉄人が結婚するらしいぞ！」

「・・・・・・・・そう」

「ねえ知ってるアキ！ ウチ、少し胸が大きくなったのよ！」

「・・・・・・・・そう」

「知っておるか明久！ わしは転校するのじゃぞ！」

「・・・・・・・・そう」

ツッコミが入りそうな発現が飛んでいるのにも関わらず、明久は上の空の状態で受け答えしている。そしてまたため息をついた。そんな明久の様子を見て、雄二たちは少し離れ輪を作る。

「（おいどうなっちまったんだ明久は！　いつもならすかさずツッコミが入るだろ！）」

「（うむ・・・・。確かに様子がおかしいのう。特に島田の胸であんな嘘が出たら、間違いなく余計な事を言い島田に関節技をくらいそうなのじゃが）」

「（・・・・・・・・あの写真にも、絶対に反応を示すはず）」

「（・・・・こうなったら仕方ねえ。島田、ちよつとあいつに何があったのか聞いてきてくれないか？）」

「（な、何でウチが！？）」

「（お前相手なら本当の事を言いそうだからだ。頼む）」

「（私からもお願いします美波ちゃん）」

「（・・・・し、仕方ないわね。坂本達がそこまで言うなら、行っであげるわ）」

本当は自分も聞きたかったのだが、それは少し照れくさいので雄二達の言葉を建前にすることにした。

「ねえアキ、どうしたの？　いつものアキらしくないけど」

「・・・・・・・・美波」

ゆっくりと明久は美波に顔を向けた。その表情からはいつもの元氣と明るさが無く、美波は胸が苦しくなった。

「アキ、ウチじゃ何の力にもなれないかもしれないけど、どうしたのか言ってみて？　そんなアキ見てるの、辛いの」

明久は美波の言葉を聞き、少し間を空け、口を開いた。

「・・・・・・・・もしもオルフェノクに、人間の心が残ってる奴がいたら、美波ならどうする？」

「・・・・・・・・それって、飛鳥さんの事？」

美波達は明久が廃工場から帰ってきて合流した後、明久からオル

フェノクの事、そして飛鳥の事を聞いたのだ。

「ううん。もしもオルフェノクに戦うとき、そいつに人間の心が残っていたら僕はどうすればいいんだろうって思うんだ。もしかしたら、そいつは人間の心が残ってるかもしれない。もしかしたら、そいつはもう化物かもしれない。そうだったら、僕はどうしたら良いんだろう」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「それに・・・・、オルフェノクは人間が生き返って復活してなったって言ってた。・・・・じゃあ僕は、・・・・人間を」

「違う！ アキはただウチ達を助けるためにオルフェノクを倒したのよ。アキのせいじゃない！」

「・・・・でも、これから先、オルフェノクが出てきたら、僕はそいつを倒して良いのか分からないよ・・・・」

明久の性格は一言で言えば『優しい』だ。別にその優しさは悪いことではない。その優しさに姫路と美波は惹かれたのだから。だが、今はその優しさが迷いを生み出していた。

オルフェノクでありながら、最後まで人間を愛し、人間の心を持ち死んでいった飛鳥。彼女は心を失ったオルフェノクから罪無き人々を護ってくれと言った。だが、もしかしたら彼女のように人間の心を持ったオルフェノクがいるかもしれない。そのようなオルフェノクがいたら、自分はどうすればいいのか。もちろん殺したくない。しかし、もしかしたら人を殺してしまうかもしれない。その時、自分はそのオルフェノクを殺すのか。それとも、また人間の心が宿るのを信じ、殺さないのか。

そしてもう一つの悩みは、オルフェノクを殺すことだ。オルフェノクは一度死んだ人間が復活した存在。ならば、オルフェノクは元は人間ということだ。自分がやっていることは、人を殺すことなのではないか？ そう考えると、明久はどうすればいいのかわからなかった。

「・・・・ごめん。今は一人にしてくれない？」

「・・・うん」

明久に言われ、美波は雄二達の所へ戻った。

「そういうことか・・・、あいづらいと言えばあいづらい問題だな」

「うむ。これは明久の問題じゃな。わしらが口を出していい問題ではない」

今明久が抱えている問題は、明久が解決しなくてはならない。そう思った雄二達は、明久にはこの話題を出さないことにし、この後にこの話題が再び出ることは無かった。

後日、美波と秀吉は図書館にいた。とは言っても、二人はデートなどをしている訳ではない。たまたま図書館に来ていた秀吉に、本を借りに来た美波が会っただけである。

「しかし島田よ。その本は明久のために借りたのかの？」

「な、何言ってるのよ！ そんな訳無いでしょ！」

「・・・そのような本を持っていても説得力がないと思うのじゃが・・・」

美波の持っている本には、『馬鹿を天才に変える方法』や『馬鹿を直す方法』、さらには『気になる彼を虜にする方法』などのタイトルが書かれていた。

「まったく、明久も憎い奴じゃ！ これほど想いを寄せられておるにも関わらずまったく気付かんとは」

「うん、ウチもそう思う。でも、そこがまた良いんだあ・・・」

少し顔を赤くしながら、美波が言った。

「それで、告白はいつするのじゃ？」

「えっ!？」

「当たり前じゃろう。明久は気付いておらんが、姫路にも好意を寄せられておる。うかうかしとったら、姫路に取られてしまうぞ?」

「・・・いつかはするわ。できれば、近いうちに」

美波ははつきりとした口調で、そう言った。その言葉に秀吉は笑って、

「まあ頑張るのじゃ。だがその前に素直になったほうが良いと思うがのう」

「わ、分かってるわよそんなの!」

美波が言い返したその時。

「きゃああああああ!!」

女性の悲鳴が館内に響き渡った。秀吉と美波がその方向に目を向けると、灰色の異形――――フライイングフィッシュオルフェノクが女性の首を掴んで持ち上げていた。そして、オルフェノクから銚のような物が飛び出し、女性の心臓に突き刺さる。すると、その女性は灰になっていった。その光景を見た周りの利用者から、悲鳴が響く。

「木下! アキに電話して!」

「分かったのじゃ!」

美波から携帯電話を受け取り、秀吉は急いで明久に電話をかけた。

その頃、明久は家のソファで寝ていた。数日前から考え続けている問題を考えながら。

(・・・僕は一体)

そんな事を考えていると、携帯電話に使っているファイズフォン

から、電話の着信音が鳴っているのに気付いた。相手は美波だ。

「・・・・・・・・もしもし。どうしたの美n・・・」

『あ、明久！ オルフエノクじゃ！』

「！？ 秀吉！？ 今どこ！？」

相手が美波ではなく秀吉だったことにも驚いたが、今はオルフエノクという単語の方が気にかかる。場所を聞くと、ここから近くの図書館だ。明久はファイズフォンを閉じ、ファイズギアの入ったトランクケースを持ちその図書館に向かった。

明久が図書館につき、中に入ろうとしたとき。

「うわあああああああ！！」

男の悲鳴が聞こえ、その方向を向くと男の目の前にアルマジロの性質を持つオルフエノク――アルマジロオルフエノクが立っていた。明久は変身しようとするが、あの時の飛鳥の顔と、自分の考えが明久の動きを邪魔した。

「あっ・・・・・・・・！ ぎゃあああああああ！！」

明久が止まっている間に、男はアルマジロオルフエノクの大剣を受け倒れた。アルマジロオルフエノクはそのまま立ち去ろうとしている。

「まっ・・・・・・・・！！」

明久が止めようとする、倒れた男が立ち上がって、明久に向かって手を差し伸べながら歩いてきた。そして、明久の前まで来たところで、その男は灰になり、明久に向かって倒れながら死んだ。

「・・・・・・・・」

明久は、倒れるときに自分の掌についた男の灰をただ呆然と見ていた。しかし、館内から悲鳴が響くと明久は館内に向かって走り出した。

「秀吉ー！ 美波ー！」

明久が二人の名前を叫びながら、明久は館内を走る。中に人はいなく、本やイスなどがメチャクチャに転がっていた。

「アキ！」

「明久！」

そして、ようやく机の陰に隠れている秀吉と美波を見つけた。

「二人とも、大丈夫？」

「大丈夫じゃ。明久も大丈夫か？」

「うん。・・・それより美波、それって・・・」

美波の両腕には、本が抱えられていた。『馬鹿を天才に変える方法』などという本が。

「べ、別にこれはウチの勉強のために借りただけよ！」

「素直に明久の為に借りたと言えば良からうが・・・」

秀吉が横で呆れたように言った。明久はこんな状況にも関わらず、そんな言葉に笑いそうになる。

そして、自分の事をこんなに思ってくれる人がいる事に嬉しくなった。

「！ アキ！ 後ろ！」

明久が振り向くと、フライングフィッシュオルフェノクが立っていた。明久は、自分の掌を見る。死んだ男の灰がついた手を。明久は思い出す。人間の心を持った飛鳥の笑顔を。明久は思う。自分の後ろにいる、大切な存在を。

「・・・僕はもう迷わない」

明久はトランクケースからファイズギアを取り出し、腰につける。

『私の大切に、大好きな人たちを・・・、・・・護って・・・ください・・・ファイズ・・・』

「戦う事が罪なら、僕が背負ってやる！！」

そして、明久はファイズフォンを開き、変身コードを押す。

『Standing by』

明久はファイズフォンを天に高く掲げ、

「変身！！」

『Complete』

ベルトにセットし、紅いフotonフレームが明久の身を包む。紅い光が館内を照らし、明久は紅き閃光の戦士——ファイズに変身した。

「うおおおおお！！」

明久がフライングフィッシュオルフェノクに向かって突進し、窓を割り外の駐車場へ飛び降りる。そしてフライングフィッシュオルフェノクの腹を殴り、怯んだところで膝蹴りを何回も叩き込み、最後に拳を頭に叩き落とし地面に倒れさせる。さらに倒れているフライングフィッシュオルフェノクを蹴り転がし、起き上がるフライングフィッシュオルフェノクに蹴りを叩き込む。フライングフィッシュオルフェノクが水中銃から銃を発射するが、ファイズはそれを弾き落とし、再びフライングフィッシュオルフェノクに拳を叩き込む。

「オオ！！」

さらに攻撃を加えようとするファイズに、突然現れたアルマジロオルフェノクが羽交い絞めにする。それを見たフライングフィッシュオルフェノクは水中銃を構え、ファイズを撃とうとする。だがファイズはくると回り、アルマジロオルフェノクをフライングフィッシュオルフェノクの方角に向ける。

「グハッ！」

フライングフィッシュオルフェノクの銃がアルマジロオルフェノクに当たり、ファイズの拘束が解かれる。ファイズはアルマジロオルフェノクを蹴り飛ばし、アルマジロオルフェノクは車のフロント

ガラスに激突する。ファイズはポインターを外し、ミッシェンメモリーを挿入する。

『Ready』

右足に装着し、ファイズフォンを開きENTERキーを押す。

『Exceed Charge』

フライングフィッシュオルフェノクに向かって高くジャンプしながら空中一回転し、ポインターから赤い円錐状の光が放たれ、フライングフィッシュオルフェノクを拘束・ロックオンする。

「やあああああああ!!」

クリムゾンスマッシュがフライングフィッシュオルフェノクに突き刺さり、ファイズがフライングフィッシュオルフェノクの背後に現れると同時に、フライングフィッシュオルフェノクはΦの記号を浮かび上がらせ、青い炎を上げながら灰になった。

そして次到大剣と盾を持ったアルマジロオルフェノクに殴りかかるようにした瞬間。

ドガ!!

「ぐわあああああ!!」

人型の形態——バトルモードとなったオートバジンが現れ、アルマジロオルフェノクに殴りかかる。さらに前輪、バスターホイールから銃弾を乱射し、アルマジロオルフェノクを地面に倒す。

「ありがとう」

オートバジンに駆け寄りながら、胸部のスイッチを押すと、『ビークルモード』と音声流れながらオートバジンはバイク形態に戻る。そして、左ハンドルにミッシェンメモリーを挿入する。

『Ready』

左ハンドルが抜かれ、紅い刀身が生成されハンドルはファイズエッジになり、アルマジロオルフェノクを数回斬り付ける。アルマジロオルフェノクは盾で防ごうとするが、鋭い突きで盾が壊された。そしてファイズエッジと大剣が数回ぶつかり合い、鏝迫り合いになる。

「りゃあ！」

ファイズが下からすくい上げるようにファイズエッジを振るうと、アルマジロオルフェノクの大剣が弾き飛ばされ、空中を舞う。武器を失ったアルマジロオルフェノクを何回も斬りながら、最後に蹴りを入れ吹き飛ばす。そして、ファイズフォンをのENTERキーを押す。

『Exceed Charge』

「はあっ！！」

ファイズエッジの刀身にフォトンブラッドが注入され、紅色に輝いた刀身をアルマジロオルフェノクに向かって振るう。赤いエネルギー波がファイズとアルマジロオルフェノクの間にあつた車を切り裂き炎上させながら突き進み、アルマジロオルフェノクに当たると円柱形になりアルマジロオルフェノクを拘束する。そのアルマジロオルフェノクに、ファイズは突進し一気に距離を詰める！

「はっ！！ やあ！！」

ファイズエッジでオルフェノクを切り裂く技、スパークルカットで数回アルマジロオルフェノクを切り裂き、アルマジロオルフェノクはΦの記号を浮かべながら青い炎を上げ灰へと変わっていった。

「……………」

変身を解除した明久は自分の掌をじっと見る。死んだ男の灰は、もうそこに残っておらず、明久はその手を握った。

「アキ！」

横を見ると、美波と秀吉が駆け寄ってきた。

「もう大丈夫かう？」

「うん、もう大丈夫だよ」

その言葉に、秀吉と美波はほっとした表情を浮かべる。

「良かった……。アキが元に戻ってくれて……。これで遠慮なく殴れるわね」

「……僕が元に戻ったから殴ろうとする理由を何でか聞きたいけど、今はいいや」

そして、いつものように三人は笑った。笑っている明久の表情は晴れやかで、迷いは無かった。

第十話 迷いと戦いと決意（後書き）

感想お待ちします。

第十一話 葉月とチャコと最後（前書き）

平成仮面ライダー英雄伝と変身伝を買いました。どちらもライダーファンにとっては面白いものでした。

第十一話 葉月とチャコと最後

明るい日差しが差す中、カフェテラスに二人の男が座っていた。一人はスマートブレイン社長、村上。もう一人はラッキークローバーの一人、クロコダイルオルフェノクのジェイだ。いつも通りチワワのチャコを膝に乗せている。

「今日は別にあなたを責めに来たわけではありません。激励しに来たのです。あなたは『上の上』のオルフェノクだ。それに、三つの命のうちの二つの命を失ったからあなたが怯えているとも思いません。・・・チャコにも会いたかったですしね」

村上はそっとチャコの頭を撫でた。

「・・・しかし、あなたは吉井君の命も、カイザの所有者の命も奪えていない。このままではあなたも裏切り者になってしまう。チャコはあなたの温もりの中で生きてきた。あなたが死んだらチャコは生きていけない。・・・その為にも、早く吉井君を殺したほうが良い。この仕事が終わったとき泊まるホテルはすでに探しています。チャコも連れて行ける極上ホテルをね」

「very good」

ジェイはそう言うと、またチャコを撫でた。村上はそんなジェイとチャコを見て笑みを浮かべていた。

場所を離れて、ジェイはチャコを連れて公園にいた。ジェイの手にはボールがあり、今にもそれを投げようとしている。そしてボールを投げ、チャコはボールを追って消えた。

「・・・チャコ!?」

だが、待ってもチャコが帰ってこない。

「チャコ!」

ジェイは慌ててベンチの下などを探すが、チャコはいない。急いで周りを走ると、一人の少女がチャコを抱きかかえていた。少女はツインテールに、アーモンド状の目を持つ小学生ぐらいの少女――島田美波の妹、島田葉月だった。

「チャコ!」

「? このワンちゃん、お兄さんのワンちゃんですか?」

「yes」

「そうだったんですか。それならお返しします! もうチャコちゃんから目を離しちゃダメですよ!」

「ゴメンナサイ」

ジェイは葉月の前に駆け寄りながら目を離してしまったことに謝り、チャコを急いで受け取った。そして葉月に軽くお辞儀すると、その場を去った。

「葉月!、何してるの?」

「あ! お姉ちゃん!」

葉月は自分に近づいてきた美波と合流し、その場を離れた。

「はぁ……。また水と塩の生活か……」

明久は自分の手にあるゲームソフトが入っているゲーム店の袋を見ながら、ため息をついた。仕送りがきてから、即欲しかったゲームを買ったのだ。しかし、これでまた家の食費が苦しくなってしまう。

「……。本当にバイトしないとまずいかも。今バイト募集してる所ってあ「バカなお兄ちゃん！」ったかなあ!？」

突然、みぞおちに衝撃が走った。見てみると、葉月が自分の腹に抱きついている。

「バカなお兄ちゃん! お久しぶりです!」

「な、何だ葉月ちゃんか。久しぶり」

「葉月!、一体どうしたの……。ってアキ?」

美波が小走りでやってきた。両手にはスーパーの袋がぶら下げられている。

「美波、美波こそどうしたの?」

「別にウチは今日葉月と一緒に買い物に行ってただけよ。アキは?」

「僕はゲーム買いに。でもこれでまた食費が無くなっちゃったよ。」

今日の昼はまた塩だよ。はは……」

明久が力無い笑いをすると、美波が何かを考え込むような表情になった。何やらぶつぶつ言っているようだが、どうしたのだろうか?

「ね、ねえアキ」

「? 何?」

「ちょ、ちよっと食料品買いすぎちゃったの。それで、もし良かったら、ウチがお昼ご飯作ってあげるけど……」

「本当!？」

美波の提案に、明久は迷い無くとびついた。食費がまずい今、その提案は何よりもありがたい。

「ふえ? お姉ちゃん、確かその量で良かったと……」

「ありがとうございます!」

「べ、別に食材が余ってたただけだからよ! そうと決まったら早く

行くわよ!」

美波は顔を赤くしながら、明久の手と葉月の手をつないで明久の家に向かう。

「それで、アキは何を食べたいの?」

明久の家に向かいながら、美波が聞いた。

「うーん……。別に何でもいいけど」

「そういうのが一番困るのよ」

「葉月はオムライスが良いです!」

「オムライス……。うん、僕もオムライスが良いや。そうだ、料理手伝うよ。僕も結構料理してるし」

「いいわよ。今日はウチが作ってあげるわよ」

「でもそれじゃ悪いよ」

流石に女子一人に任せるには悪いと思ったのだろうか明久が言った。

「いいわよ。ウチが言い出したことなんだから」

「でも……」

「いいから!」

「……はい」

ここまで強気に出る美波も珍しい。そこまでして明久に昼ご飯を食べさせてあげたいらしい。そして曲がり角をまがる。

「……………!!」

その時突然、美波が止まった。突然の急停止に、明久と葉月は前につんのめりそうになる。

「どうしたの美波……?」

明久が尋ねながら前を向くと、そこにはクロコダイルオルフェノクが立っていた。手には巨大な大剣を携えている。どうやら最初から戦闘態勢のようだ。

「お、お兄ちゃん……」

明久が下を向くと、葉月が自分のシャツの裾を握っており、目からはうっすらと涙が滲んでいる。明久はしゃがみこみ、葉月と目を

合わせる。

「・・・大丈夫だよ。葉月ちゃんと美波は、絶対に護るから」

明久は改めてジェイと向き直り、ゲーム店の袋を握っている手とは反対側の手に握っているトランクケースからベルトを取り出し、腰に着けながらファイズフォンを開きコードを押す。

『Standing by』

「変身！」

『Complete』

明久はファイズに変身すると、クロコダイルオルフェノクに突進する。クロコダイルオルフェノクは大剣を振るうが、ファイズは身をかめ剣をかわし、腹にパンチする。クロコダイルオルフェノクが横殴りに殴ってくるが右腕で防御する。少し右腕が痛んだがそんな事は気にせず、左腕でまた腹を殴る。

「グオアアアアアアアア！」

クロコダイルオルフェノクが吼え、ファイズに剣を振るいファイズは剣をかわす。しかしその直後にクロコダイルオルフェノクのパンチがファイズの胸に直撃し、ファイズはコンクリートをぶち破りながら地面を転がる。

「あ・・・が・・・」

ファイズはよろよろと立ち上がるが、クロコダイルオルフェノクは即座に距離を詰め、大剣でファイズを何回も切り裂き、キックをファイズの胸に叩き込む。ファイズは火花を散らしながら地面を転がる。そんなファイズにクロコダイルオルフェノクは容赦なく拳を何回も叩き込み、最後に大剣を大きく振りかぶりファイズを吹き飛ばす。

「が・・・！！」

大剣の直撃を受けたファイズは地面を転がりまともに動けなくなつた。

「アキ！！」

美波がファイズに駆け寄ろうとするが、足が動かない。助けたい

のに助けられない。自分はこんな時明久を助けたいというのに、肝心な所で助けられないというのか。美波が唇を噛もうとしたその時。「頑張ってください！ バカなお兄ちゃん！」

突然、葉月が叫んだ。その声は明久に届いたのか、指がピクリと動いた。

「負けないでください！ 死んじゃ・・・嫌です・・・！」

葉月の目から涙がこぼれる。その言葉に、美波も叫ぶ。

「頑張ってアキ！ 負けないでアキ！ ううん、そんな事より・・・、死なないで・・・！」

美波も叫びながら、目から涙がこぼれている。その声が聞こえたのか、ファイズはポインターをベルトから外し、ミッションメモリーを挿入し、右足に装着する。そしてファイズフォンを開き、ENTERキーを押す。

『Exceed Charge』

ポインターにフオートンブラッドが注入され、右足をクロコダイルオルフェノクに向ける。赤い円錐状の光が放たれ、クロコダイルオルフェノクは両腕で防ぐ構えをとる。

「りゃああああああ！！」

クリムゾンスマッシュがクロコダイルオルフェノクとぶつかり合い、そのまま激しい音を鳴らしながら、二人の力が拮抗する。

「うおおおおおおお！！」

激突の末、クロコダイルオルフェノクがファイズを真上に弾き飛ばした。クロコダイルオルフェノクはそこで勝利を確信する。だが、ファイズはまだ諦めていない。真上に弾き飛ばされたファイズはファイズショットを外し、ミッションメモリーをファイズショットに挿入し、出てきたグリップを掴み、ファイズフォンのENTERキーを押す。

『Exceed Charge』

そして、そのまま重力に従って真下に落ちる。その真下には、歓声を上げようとしているクロコダイルオルフェノクが無防備に上に

体を見せていた。

「うおおおおお!!」

そのまま落下し、グランインパクトがクロコダイルオルフェノクに直撃する。クロコダイルオルフェノクは倒れ、青い炎を上げながら灰へと変わった。

「・・・あ、危なかった」

ファイズは変身を解除し、明久の姿に戻る。事実、かなり危なかった。はっきり言って、真上に飛ばされなかったら勝ち目がなかっただろう。

「バカなお兄ちゃん!」

「ぐふっ!」

クロコダイルオルフェノクとの戦いでボロボロになった明久のみぞおちに、葉月がぶつかってきた。戦いの影響もあってか、かなり痛い。

「う・・・、バカなお兄ちゃんが、無事で良かったです・・・」

「ま、まったく、あんな相手に苦戦してんじゃないわよ! バカ!」

美波が目を真っ赤にしながら言った。美波は知らないが、相手はラッキークローバーと言われる『上の上』のオルフェノクの一体である。それを倒せたのだから、明久は結構実力をつけたことになる。明久が二人をなだめていると、一匹のチワワ、チャコが明久の足元にくっついてきた。

「ん? 何だろこの犬」

「あ! そのワンちゃんはチャコちゃんです!」

「チャコ?」

「はい! 公園で会ったお兄さんのワンちゃんです! だけどチャコちゃんまた一人になっちゃったですか? あのお兄さんはどうしたんですか?」

明久が周りを見渡すが、飼い主らしき人物はいない。となると、チャコというチワワは捨てられてしまったのだろうか? 飼い主を探してもいいが、誰なのか分からないし、そもそも本当に捨てられ

てしまったのかもしれない。

「・・・うーん。仕方ないわね。葉月、飼い主が見つかるまで、ウチ達がこの子の面倒を見てあげましょ。もしかしたら、捨てられちゃったのかもしれないし」

「本当ですか！？　ありがとうございます、お姉ちゃん！」

葉月は花が開くように笑顔を見せた。何だか、その笑顔を見ただけで日常に帰ってきたという気がする。

「でも知らなかったです！　バカなお兄ちゃんは正義のヒーローだったんですね！」

「へっ？」

「葉月たちを護ってくれました！　本当にありがとうございます！　おっしくなったら、絶対に葉月のおむこさんにしてあげるです！」

その言葉に美波は慌てて言った。

「な、何言ってるのよ葉月！　こんなのと付き合っちゃダメよ！」

絶対苦勞するからやめなさい！　・・・それに、アキのお嫁さんにはウチが・・・」

「えっ？」

「な、何でもないわよ！」

美波は顔を赤くしながら、首を振った。明久は、何故美波が顔を赤くしているのかまったく分からなかった。

—BAR『クローバー』—

その時間には、まだ影山しかいなかった。影山が店の準備をしていると、電話がかかってきた。

「はい。もしもし」

『ジェイが倒されました』

電話の相手は村上だった。そして、その言葉は影山の表情を一変させ、その場の空気を張り詰めさせる。

『あなたの出番ですよ。影山さん』

その言葉に、影山は妖艶な笑みを浮かべた。

第十一話 葉月とチャコと最後（後書き）

次回予告をしておきます。

次回、『ピザとバイトと音速の戦士』

感想お待ちしております。

第十二話 ピザとバイトと音速の戦士（前書き）

投稿遅くなって本当に申し訳ありません。

第十二話 ピザとバイトと音速の戦士

あるビルの屋上に、一人の男が佇んでいた。その男は一見スーツ姿で、どこかの社員に見える。実際は会社の部長なのだが。

「乾杯は済ませたかしら？」

そんな男に、近づいてきた女がいた。女――影山はゆつくりと男に近づく。

「君か？ これを送ってきたのは」

男が手に持っているのは、シャンパンだった。何の知識も無い者が者が見ても、かなり高級なものだと分かるほどに。

「・・・あなたはオルフェノクでありながら、人間を襲うのを拒んでいる。悪いけど、生かしておくにはいけないわ」

影山はそう言うと、男にさらに近寄ろうとする。男は軽く悲鳴をあげながら影山から遠ざかろうとする。

「どうしたの？ 変身しない気？」

影山が聞くが、男はただ後ろへ下がる。影山はそんな男に失望したように小さく息を吐き、手にワイングラスを出現させる。そしてワイングラスに透明な酒が満たされ、やがてワイングラスからこぼれる。

「う、うわああああああ！！」

男はその酒にかかり、灰になって消滅した。

「――乾杯」

影山は微笑みながら、ワイングラスを傾け酒を飲んだ。

影山が酒を飲み干すと、携帯電話に着信が入った。相手は村上だ。「どうしたの？ 村上君」

『あなたに吉井君を殺すほかに、もう一つやってもらいたい事があるのです。琢磨さんにも言ったんですが、急いでやらなければなりませんからね』

「・・・ラッキークローバーの欠員の補充かしら？」

『流石です』

ラッキークローバーには、『幸せの四葉』という意味がある。つまり、四人が揃ってなければ意味が無いし、戦力的にも大きくダウンしてしまう。それを防ぐためにも、ラッキークローバーに入れるもう一人のオルフェノクを見つけないといけない。

『しかし、ラッキークローバーに入れる程の力を持つオルフェノクなど、そうそういません。それに、あなたが最優先にやることは吉井君を始末する事です。できたらで良いのでお願いします』

「分かったわ」

影山は通話を切り、携帯電話をしまいながらその場を去る。ビルの下まで下り、車に乗りエンジンをかけようとしたところで、若い男が車のガラスに顔を出した。

「ラッキークローバーの影山冴子さんですよ？ 実は自分、ラッキークローバーに入りたいんです。何かお手伝いできる事はありますか？」

影山はただ顔を笑顔を浮かべながらこう言った。

「積極的ね・・・、嫌いじゃないわよ」

「なるほど、それでまたバイトを探していると」

「うん。仕送りも使い切っちゃったし。またバイトしなきゃならないんだよ」

明久は昼休みの教室で、アルバイトの相談をしていた。この前にゲームを買ったせいで、また金が底をつこうとしているのだ。しか

もそれだけではない。食費だけでなく、ガス代、水道代、電気代などが払えなくなる状況になりつつある。このままでは唯一の食料である水と塩さえも買えなくなってしまう。そうなったら明久の辿り着く結果は餓死だ。何としてでも、それだけは避けねばならない。

「そういえば、この前ピザ屋でバイト一人募集してたぞ。何でも店員が辞めたらしくて、その穴埋めらしい。時給は確か、千円だったと思うが」

「結構いい条件だね。でも、どうしてそんなに時給がいいんだろう？」

「何でもその店長のおっさんが中々いい奴の上にピザの味も良いらしくてな。そのおかげでお得意さんと結構いるらしいし、売り上げもそこそこ良いんだってよ。行ってみたらどうだ？」

「・・・・・・明久に選り好みをする余裕は無い」

ムツツリーニの言うとおり、今の明久にはそんな余裕は無い。命をつなぐ為にもバイトにすぎるしかないだろう。

「じゃあ、今日の帰りに面接に行ってくるよ」

「おう。頑張れよ」

「・・・・・・（コクリ）」

そんなわけで明久は学校の帰りにそのピザ屋に寄り、その場で面接を受け採用となった。

「お疲れ！ 少し休憩を入れていいぞ！」

「ありがとうございます」

そしてアルバイトの土曜日にアルバイトに行った明久は、何とか午前の仕事を終えていた。今回は前のバイトのようにかんだり、転

ばない事に成功した。

「んじゃあ俺はこれからピザの宅配に行ってくるから、悪いけど店番を頼むわ!」

「あ、はい。分かりました」

ピザ屋のマスターはそう言い残し、ピザを宅配のバイクに乗せながら、バイクに乗り出発した。そしてマスターと入れ替わるように、新しいお客さんが入ってきた。

「はい。いらっしゃいま・・・」

明久はお客さんを迎えに出ようとしたが、動きが固まる。何故なら、

「よお明久。やってるな」

「アキ。今回はちゃんとやってる? またクビになんてされたら大変な事になるわよ」

入ってきたのはいつものメンバー、雄二、美波、姫路、秀吉、ムツリ二の五人だった。

「・・・・・・今は明久君一人だけなんですか?」

「他の人たちは皆宅配とかに行ってるよ。ここが有名なのは本当みたい」

「・・・・・・金はどれぐらい貯まった?」

「まだそんなには・・・・・・。まだ働き始めたから仕方ないけどね」

明久たちが雑談をしていると、店に電話が入る。

「はいもしもし。・・・・えっ? はい、分かりました。いますぐ行きます」

明久は電話を切るが、どことなく表情が曇っている。

「どうした?」

「うん・・・・。今配達の電話が来ちゃってさ。行かなきゃならないんだけど、いま他の店員がいないから、店番どうしよう・・・・」

明久が頭を抱えていると、タイミングよく数人の店員が帰ってきた。

「あ、ちょうど良かった。すいませーん。ちょっと配達行ってくるんで店番お願いできますかー？」

「ああ分かった。早く行って来い」

「ありがとうございます。じゃあちょっと行ってくるね」

「気を付けて行けよ」

「道を間違えないようにするんじゃぞ」

「…………道に迷ったら、交番に尋ねに行け」

「みんなは僕の精神年齢を何歳だと思ってるの？」

「「幼稚園児並」」

「そんなに低くないよ！ もう良いよ！ 行ってきましたーす！」

そう言い、明久はピザを持って宅配に行った。ちなみに、ちゃんとファイズギアは持っている。

「…………そうだ。明久、待て…………。ってもう行っちゃったか」

「どうしたの坂本？」

ピザを注文しようとした美波が尋ねた。

「いや、この前花形のおっさんから明久にこれを渡すように頼まれてたんだ。すっかり忘れてたけどな」

雄二が取り出したのは、赤と黒を基調にしたアナログ式の腕時計のようなものだ。だが普通の腕時計とは違って少し大きく、赤いスイッチと黒いスイッチのようなものがついている。

「では早く渡しに追いかけたほうが良いのではないか？ 今から追いかければ追い付くかもしれんぞ」

「…………ちっ、仕方ねえな。ピザ俺の分まで残しておけよ」

雄二は店を出て、ヘルメットを被りながらバイク・サイドバツシヤーにまたがり出発した。

この時、雄二たちだけじゃなく、明久も気付かなかった。

店内のカウンターの上に、高級なシャンパンが置かれていることを。

雄二がサイドバツシャーで道を進んでいると、眼鏡をかけた知的な外見の男が道の真ん中で立ちながら詩の本を読んでいた。雄二はサイドバツシャーを止め、ヘルメットを脱ぎながら男に言った。

「おい、危ねえぞ！」

男は雄二に一瞬目を向け、それからまた本に目を戻した。

「・・・あなたがカイザのベルトの持ち主ですか」

その言葉に、雄二の鋭い目つきがさらに鋭くなる。

「・・・テメエ、オルフェノクか？」

「・・・ただのオルフェノクではありませんがね」

男――琢磨は本をなぞりながら言った。

「知っていますか？　オルフェノクの力を完全に操る事ができるオルフェノクは、人間の姿でも力を発揮する事ができるんですよ」

琢磨は掌を雄二に向けると、その手から青白い光弾が生み出される。そして、その光弾を雄二に向け放つ。

「うおっ！」

雄二は光弾をかわし、トランクケースからカイザドライバーを取り出し腰につけ、カイザフォンを開きコードを入力する。

『Standing by』

「変身！」

『Complete』

雄二はカイザに変身し、琢磨にパンチを放つ。

「何!？」

カイザは仮面の下で驚愕の表情を浮かべる、何故なら、琢磨が手にした本で自分の拳を止めていたからだ。

「うおおおおお!!」

カイザはパンチの連打を琢磨に放つが、それら全てが止められしまった。

「おいおい・・・、マジかよ」

カイザは呆然とした表情で呟いた。明久や自分が今まで戦ってきたオルフェノクとは格が違う。例えるなら、クロコダイルオルフェノク並の強さだ。

そして、琢磨の顔に模様が浮かび、琢磨はムカデの特性を持つオルフェノク――センチピードオルフェノクに変身した。

「ふんっ！」

センチピードオルフェノクは拳を放つが、カイザは左腕で攻撃をいなし、カウンターで右の拳を放つ。しかしその攻撃はお見通しのようだったようで、逆に拳を止められ胸を蹴られる。

「ぐっ！」

カイザはその蹴りで距離を離される。すると、センチピードオルフェノクは棘のついた鞭を出現させ、カイザを攻撃する。

「ぐああっ！！」

鞭を胸にくらい、カイザはふらつく。センチピードオルフェノクはそんなカイザに追い討ちをかけるように、光弾を連続で発射する。「があああああっ！！」

光弾を直撃を受け、カイザは火花を散らしながら地面を転がる。センチピードオルフェノクはカイザに止めを刺すかのように近づいてくる。絶体絶命に思われたその時。

『バトルモード』

サイドバッシュャーから音声が発せられ、サイドバッシュャーが自動で走ってくる。そして、サイドバッシュャーがバトルモード――二足歩行重戦車形態に変形する。左腕には六連装ミサイル抱・エクザップバスター、右腕に四連装バルカン抱・フォトンバルカンを装備したその姿は、まさに重戦車と言っても間違いはない。そしてバトルモードとなったサイドバッシュャーが、その巨体に似合わぬ速さで、センチピードオルフェノクを殴りつける。

「ぐわああああ!!」

センチピードオルフェノクは吹っ飛び、地面を転がる。カイザはサイドバツシャーに近づく、高くジャンプし運転席に乗る。

「へっ。あのおっさんも、中々面白い事してくれるじゃねえか。あばよ、お前の事はあと一時間ぐらいは忘れねえ!」

カイザは運転席にある画面を操作し、センチピードオルフェノクに向かって六発のミサイルを発射、さらに分裂し数十発のミサイルとなりセンチピードオルフェノクに向かう。

激しい轟音が響き、その場に煙が上がる。そして、煙が上がるとそこにはセンチピードオルフェノクの姿はどこにも無かった。

「逃げられたか。っと、今はそんなことより早く明久に渡さないと
な」

カイザはサイドバツシャーをビークルモードに戻し、道路を走っていた。

その頃、ピザ屋のマスターは配達で道路を走っていた。だが、そのバイクの前に車が立ち塞がった。

「危ねえな! 何をするんだ!」

マスターの怒鳴り声に出てきたのは、サングラスをかけた女と若い男だった。

「乾杯は済ませたかしら?」

「・・・? 何を・・・」

「お前はオルフェノクでありながら人間を襲わない。そんなオルフ

エノクに、生きている価値は無い」

そして女――影山と若い男の顔に模様が浮かび、影山はエビの特性を持ったロブスターオルフェノク、男はさそりの特性を持ったスコピオンオルフェノクに変身した。

「どうする？　今ならチャンスとして、人間を襲えば見逃してあげるけど・・・」

マスターは怯えながらも、しっかりと声を出して言った。

「い、嫌だ、俺は人間だあああ！！」

マスターはそう叫びながら逃げるが、影山はマスターとの距離を一気に詰め、背中を蹴る。

「ぐわっ！」

マスターは地面を転がりながらも逃げようとする。ロブスターオルフェノクは呆れたように言った。

「何してるの？　せめて変身しなさい！」

手に持ったサーベルで攻撃するが、マスターは逃げ回りオルフェノクに変身しようとしないう。そんなマスターに、スコピオンオルフェノクの先端に分銅がついたフレイルが襲い掛かる。

「うわあああああ！！」

マスターはかろうじてかわすが、腰が抜けて動けなくなってしまう。ロブスターオルフェノクとスコピオンオルフェノクはマスターにゆっくりと近付いていく。

「もう大好きなピザが焼けなくなるわよ？　それでも良いの？」

「！！」

その言葉は、マスターにとって一番辛い言葉だった。今自分が死ねば、もうピザは焼けなくなってしまう。そうなるのは絶対に嫌だ。それを防ぐためには、人間を襲うしかない。

「マスター！」

鋭い声が響き渡り、一人の人影が走ってきた。その影は、明久だった。明久はファイズギアを腰につけ、ファイズフォンを開きコードを押す。

『Standing by』

「変身！」

『Complete』

ファイズに変身しロブスターオルフェノクの顔面を殴り、ファイズフォンをフォンブラスターにし、コードを押す。

『Burst Mode』

三発の光弾がスコピオンオルフェノクに向けて放たれ、スコピオンオルフェノクが地面を転がっている内に、ファイズはマスターを連れて逃げる。

「大丈夫ですか？ マスター」

ファイズはマスターに聞くが、何やらマスターの様子がおかしい。そう思ったと同時に、マスターが素早く自分から離れた。

「・・・すまない、許してくれ」

マスターは謝ると、マスターの顔に模様が浮かび上がる。

「！？ マスター！？」

ファイズが驚いている前で、マスターはイルカの性質を持つオルフェノク——ドルフィンオルフェノクに変わった。

「うおおおおお！！」

ドルフィンオルフェノクはファイズに襲い掛かり、パンチをファイズに向かって放つ。ファイズはそのパンチをかわし、後ろへ下がると。そのファイズにドルフィンオルフェノクは一気にファイズとの距離を詰め、ファイズを蹴り飛ばす。ファイズは地面を転がり、ちょうど宅配バイクの場所で止まる。ファイズは宅配バイクに積まれていたピザの箱を一つ掴み、ドルフィンオルフェノクに投げる。ドルフィンオルフェノクは投げられたピザの箱を受け取り、その箱を見る。

「何をする！ ピザを粗末にするな！」

ドルフィンオルフェノクは怒ったように叫びながらファイズに殴りかかるが、ファイズはその拳を掴み、ドルフィンオルフェノクに叫ぶ。

「マスター、やめてください！　あなたが人を殺せるはずがない！
あなたは人間だ！」

「！！」

その言葉に、ドルフィンオルフェノク……マスターの動きが止まる。本当に心までオルフェノク（化物）になっているなら、ピザの事なんて気にかけないだろう。明久がピザを投げて怒ったのは彼の中にピザが好き……、人間の心が残っているからだ。無差別に人間を襲うオルフェノクならともかく、まだ人間の心を持っているマスターを、明久は殺す事ができない。

「うわっ！」

突然、ファイズがフレイルによって吹き飛ばされ地面を転がる。転がりながらも目の前を見ると、ロブスターオルフェノクとスコーピオンオルフェノクが追いついてきていた。

「まだピザを焼きたいんでしょ？　なら迷わないで。人間の心なんて捨てなさい」

「……っく！」

ドルフィンオルフェノクはイルカのヒレ状の剣を手にとると、ファイズに斬りかかる。

「ぐっ！」

ファイズは両腕で斬撃をガードするが、その直後にスコーピオンオルフェノクのフレイルが胸にぶち当たる。さらにロブスターオルフェノクのサーベルが襲い掛かり、ファイズは地面を転がる。その位置にフレイルが振り下ろされるが、ファイズは転がりそれを回避する。フレイルが地面に直撃し、ぽっかりと深い穴が空く。ファイズは立ち上がりファイズショットを取り、ミッションメモリーを挿入する。

『Ready』

ファイズショットにグリップが現れ、それを掴みファイズフォンに手を伸ばす。しかしその前にドルフィンオルフェノクが後ろからファイズを羽交い絞めにし、身動きが取れなくなる。そこにロブス

ターオルフェノクがサーベルで何度もファイズを切り裂き、最後にスコピオンオルフェノクがフレイルを想いっきり振り、ファイズを大きく吹き飛ばす。

「うわあああああ!!」

ファイズは火花を散らしながら吹き飛び、地面を何回も転がる。ようやく止まった時、目の前には三体のオルフェノクがじりじりと距離を詰めながら歩いてくる。さすがに三体相手に戦うのは難しく、マスターを除く二体を倒そうにも、マスターも敵に加わっている以上それも難しい。せめて二体の内どちらかを倒そうと思い、ファイズフォンを開こうとする。

『Burst Mode』

音声が後ろから聞こえ、ファイズが後ろを振り返る前に、光弾が後ろから飛んできて三体のオルフェノクに命中する。

「うわっ!」

「くっ!?!」

三体のオルフェノクがうめき声を出しながら怯んでいる隙に、ファイズは後ろを見る。そこには、カイザブレイガンを構えているカイザー――雄二の姿があった。

「よお明久。どうしてそんなにボロボロにされてるんだ?」

少し嫌味を込めながらカイザが言った。だがオルフェノク達が走って迫ってくるのを見ると、素早くカイザブレイガンの引き金を引き、オルフェノク達を地面に転がし動きを止める。

「明久! これを使い!」

カイザは叫びながらファイズに向かって何かを投げる。それは、赤と黒を基調にしたデジタル時計のようなものだった。

「使えって・・・、こんなものどうやって使うのさ!」

「知るか! 何とかしろ!」

「そんな無責任な!」

ファイズとカイザがケンカしている間に、オルフェノク達が迫ってきている。ファイズは仕方なく、その腕時計を左腕に装着する。

「・・・？ 何だこれ」

腕時計をよく見ると、ミッシンメモリーに似たメモリーカードが装填されている。ファイズは腕時計――腕時計型コントローलデバイス、ファイズアクセルからメモリーカード――アクセルメモリーを外し、ファイズドライバーのミッシンメモリーを外した場所に挿入する。

『Complete』

音声が鳴った次の瞬間、ファイズの姿が変わる。胸部アーマールメタルラングが展開し、肩の定位置に収まる。さらにフォトンブラッドはエネルギー値が上昇し、赤色のフォトンブラッドから出力が二番目に強い銀色に変わり、フォトンストリームが銀色のシルバーストリームに変わる。そして、目の色が黄色から真紅に変わる。新たな進化を遂げたそのフォームの名は、『アクセルフォーム』。

その変化には、オルフェノク達も一瞬動きが止まった。ファイズはファイズアクセルの赤いスイッチ・スタータースイッチを押す。

『Start Up』

音声が流れ、ファイズの周りの景色が歪むほどの高熱が発せられ、ファイズはファイズショットを手に、今にも走り出そうとするような構えを取る。それを見て、オルフェノク達も走り出そうと身構える。

「はあああああああっ！！」

ファイズが走り、オルフェノク達もそれを迎え撃とうと走る。だが、気がつくと、

オルフェノク達の体が、宙を舞っていた。

『Three Two One』

そして、ファイズアクセルの時間表示がゼロになる。

『Time Out』

ファイズはいつの間にかオルフェノク達の後ろに立っており、『Reformation』の音声が流れると通常のファイズの姿に戻った。

何故オルフェノク達が吹き飛ばされたかと言うと、ただ単純にファイズが必殺技・グランインパクトを当てたため吹き飛んだのだ。だが、オルフェノク達の誰もが反応できていなかった。いや、この場合は反応できた方がおかしいのだ。『アクセルフォーム』は十秒間の間に千倍の速度、つまり音速で動く事ができる超音速のフォームだ。今のは言わば音速で走っているファイズにグランインパクトを放たれたのだ。いかにオルフェノクであろうと反応できるはずがない。

「う……わあああ……」

アクセルフォームによるグランインパクト、強化グランインパクトをもろに受けたスコーピオンオルフェノクは倒れたまま灰になり、ロボスターオルフェノクは攻撃が直撃する前に何とか両腕に装備されたシエルクラブで防いだが、ダメージは大きいらしく、少し体に電撃を走らせながらその場を離れた。

「う……ぐ……」

だがドルフィンオルフェノクは腹を押さえながらも立ち上がり、マスターの姿に戻る。元の人間の姿に戻ったマスターに、変身を解いた明久が歩み寄る。

「……マスター。あなたは人間として生きてください」
優しい目で言う明久に、マスターははっとした表情で言った。

「……まさか、あれはわざと……?」

実はファイズはマスターにだけ強化グランインパクトではなく、普通のキックをくらわしたのだ。人間の心を持つマスターには死んで欲しくないという明久の心がそうさせたのだ。

「早く店に戻りましょう。友達が待ってるんです」
明久の言葉に、マスターは明久に背を向ける。

「……店で待ってるぞ」

マスターはそのまま背を向けながら、宅配バイクに向かって歩いていった。

「……明久。あれで良かったのか?」

その後姿を見送る明久に、カイザの変身を解除した雄二が歩いてきながら尋ねた。

「マスターには、人の心があるから。きっと人間は殺さないよ」

「そうか。じゃあ問題も解決したし、早く店に戻ろうぜ。腹が減った」

「僕もピザを作り直さなきゃならないし、一回店に戻るよ」

そして明久と雄二は店に戻る。人間の心を持ったオルフェノクが店長の店に。大切な想いがこもった店に。

第十二話 ピザとバイトと音速の戦士（後書き）

次回から五巻に突入します。
感想お待ちしております。

第十三話 姉と勢力と勉強（前書き）

最近中々執筆が進まない・・・。
初めて一万文字いきました。楽しんでお読みください。

第十三話 姉と勢力と勉強

「・・・・・・・・」

昼休みのFクラスで、雄二は一人で卓袱台にひじをつきながら、何やら考え事をしていた。何故か下にはいているのは、ズボンではなく体育用のハーフパンツになっている。

「坂本、何をそんなに悩んでるの？」

「霧島にズボンを取られた事を悩んでおるのか？」

「いや、それも困るが今は違う」

雄二は尋ねてきた美波と秀吉に言った。さらにそこに姫路とムツツリーニが近づいてきた。

「具合が悪いんですか？」

「・・・・・・・・それも、期末テストの事か？」

「それも違う。俺が今悩んでるのは、これだ」

そう言いながら雄二が出したのは、色々な図が描かれている紙だ。
「・・・・・・・・これは？」

「今の俺達の戦力と、オルフェノクの勢力図だ。考えてみたんだが、明久が前に『オルフェノクの王』について聞いたって言ってたよな」
「うむ」

「今俺達が持つてるベルトはその『オルフェノクの王』を護る為に作られた・・・・。そして、このベルトを作ったのはスマートブレイン。ここまで言えばもう分かるよな？」

「・・・・スマートブレインがベルトを作って、オルフェノクの王を護ろうとしてるってわけ？」

美波が呆然と呟いた。その言葉に、雄二は黙って首を縦に振る。
信じられない話だった。日本に住む者なら誰もが知っている大企業が、オルフェノク達を束ねている。そして、その大企業が自分達

の敵という事実、四人は衝撃を受けた。

「そう考えればつじつまが合う。オルフェノクがあんなに派手に人を殺してるのになんで新聞沙汰にならない理由、警察と結託しているほどの巨大組織……。それほどまでの巨大な権力を持っているのは、スマートブレインしか思いつかねえよ。……。ただ、そうすると少し厄介な事になる」

「厄介な事、ですか？」

「ああ、今オルフェノクに対抗できるのは明久の変身するファイズと、俺が変身するカイザだけだ。花形のおっさんも何かと協力してくれてるが、敵のオルフェノクの戦力は未知数だ。しかも前に明久が戦ったワニのオルフェノクや俺が戦ったオルフェノクは今まで俺達を襲ってきた奴らより強い。敵戦力は未知数の上に、こっちの戦力は少なすぎる。せめて、後一人ぐらい戦力が欲しい」

雄二は険しい顔で言った。そんな雄二に、美波は言った。

「……ねえ坂本」

「何だ？」

「そのベルト、渡しちゃったら？」

「ああ？」

「だって、スマートブレインが狙ってるのってそのベルトなんですよ？　だったら……」

美波の言う事にも一理ある。明久や雄二の命が狙われているのはファイズとカイザに変身してオルフェノクを倒しているからで、ベルトを手に入れてなければこんな事にはなっていない。

だが雄二はため息をついて、

「それができればとくにやってる。もう俺達は何体かオルフェノクを倒してるし、今さらベルトを渡しても殺されないって事にはならないだろ。……。それに、明久が絶対に譲らないと思うしな」

「……………」

その言葉に、美波は口を閉ざす。雄二の言うとおり、明久は美波に今のようなことを言われても、絶対にベルトを渡さないだろう。

オルフェノクに襲われている人々や人を襲うオルフェノク、・・・そして、飛鳥やピザ屋のマスターのような、人間の心を持ったオルフェノクがスマートブレインから狙われている限り。

「そう言えば、明久はどうしたんだ？」

「む、そう言えば話に来ておらん。いつもならすぐに話しに加わろうというのに。卓袱台で寝ておるの・・・！」

明久の卓袱台を見た秀吉が絶句した。

「どうした？ 秀よ・・・！！」

そして、秀吉に続くように明久の卓袱台を見た雄二も絶句した様子で停止した。それを見た姫路達も、同じように卓袱台を見て絶句する。

何故なら、

明久が卓袱台に何冊ものノート、教科書을載せ授業の復習、予習をしていたからだ。

真面目に、カリカリカリカリカリカリカリカリカリカリカリカリカリカリカリという音が聞こえてくる。

「・・・・・・・・あ、明久？」

恐る恐ると言った感じで雄二が明久に声をかける。その声に明久はグリンッ！！と擬音が聞こえるほどの勢いで雄二たちに目を向けた。その凄まじさに、一瞬姫路がひっと悲鳴を上げたほどだ。

「・・・・・・・・何？」

「・・・・・・・・いや何でもない」

明久は黙ってまたノートに目を戻した。その体から出ている、『邪魔をしたら殺す』と言っているようなオーラが怖い。

「(な、何じゃ！？ 明久は一体どうなってしまったのじゃ！)」

「(・・・・・・・・今日あたりには隕石が振ってくるかもしれない)」

「(冗談言ってる場合じゃないでしょ！ いくら何でも異常すぎるわよ！)」

「(あ、明久君一体どうしたんでしょうか・・・)」

「(わからねえ、ただ分かるのは明久に何かが起こったことだ！)」

明久が異常な事に四人はすぐに気付いたが、今聞くと自分達の身に危険が襲い掛かってきそうなので今聞くのはやめた。その後、明久は数人の教師から『吉井、病院に行きなさい』と何回も言われた。

放課後になり、クラスのほとんどが帰り支度を始める。

「雄二、ちょっといい？」

明久が帰り支度を始めている雄二に声をかけた。

「ん？ どうした明久」

「今日なんだけどさ、雄二の家に泊めてくれない？ それで、期末テストの出題範囲の勉強を教えて欲しいんだ」

――ザワッ

言った瞬間、教室にざわめきが広がった。

『おい……聞いたか』

『確かに聞いたぜ。俄かには信じ難いことだが……』

『まさか、アイツらがな……』

『ああ。まさかあの吉井と坂本が……』

『『期末テストの存在を知っているなんて……』』

後ろから聞こえてくる声に明久は色々言いたくなったが、今はそんな場合ではないので後回しにした。

「勉強を教えてほしいだど？」

「うん」

「やれやれ……。お前はまだ七の段が覚えられないのか」

「いやいくら僕でも掛け算は言えるから！」

「ああそうか。三角形の面積の求め方に躓いてるところだったよな」

「底辺×高さ÷二」

「……お前の人生に一体何が起こった？」

「あの、明久君」

雄二と言い合っている明久に、姫路がかばんを抱えてやってきた。今日はまっすぐ家に帰るのだろうか。「なに、姫路さん？」

「あのですね、九九の覚え方にはコツがあるんですけど、」

「言えるからね！？」　いくら僕でも九九ぐらいはきちんと言えられるからね！？」

すごく心配してそうな姫路の表情を見て、明久は自分がそこまでバカだと思われているのかと、心の底から思った。

「しかし、急にどうしたのじゃ？　明久が勉強なぞ、特別な理由でもない限り考え難いのじゃが」

近くに座っていた秀吉が特別な理由というところで姫路に意味深な視線を送る。

「急に勉強に目覚めたんだ」

「誰でも分かる嘘をつくなバカ」

「そうよアキ。本当の事を言いなさい」

何故か明久が勉強をすると言っただけで人が集まってきた。だが確かに、勉強嫌いな明久が勉強しだしたら誰でも驚くだろうが。

「あの、明久君。私で良かったら……一緒に勉強、しませんか？」

おずおずといった感じで姫路が手を上げた。いつもの明久なら飛びつく申し出なのだが、雄二の家に泊まるのならともかく、

「姫路さんの家に泊めてもらうわけにはいかないしなあ……」

「

「え？ 明久君、私の家に来たいんですか？」

「あ、いや、そういう訳じゃないよ」

「あう……。そうなんですか」

何故か姫路が残念そうな顔をしているのを見て、明久は首をかしげる。

「それはそうと明久、朝から気になっていたが、どうして俺の家に泊まりたがる？ 自分の家に何かあったのか？」

「あー、えっと、実は」

「嘘をつくな」

「早いよ！ まだ何も言ってないのに！」

「まあ確かに次の試召戦争のこともあるし、勉強ぐらい教えてやらんでもないが」

「え？ ホント？」

「ただし、お前の家で、だ。その方がやり易いだろ」

言った後、雄二はよそを向いて小さな声で「我が家にはあの母親がいるからな……。…」と呟いた。「って、僕の家はダメだよ！今日はちよっと、その、都合が悪いんだ！」

「都合が悪いだと？ 何かあるのか？」

「う、うん。実は今日、家に改装工事の業者が」

「嘘つけ。本当なら今日はお前の家でボクシングゲームをやる予定だったろうが。改装業者が来るはずないだろ」

「じゃなくて、家の鍵を落としちゃって」

「マンションなんだから管理人に言えば開けてもらえるだろ」

「でもなくて……。い、家がオルフェノクに襲われて……。！」

「襲われてファイズに変身して撃退しながら弁当用意してYシャツにアイロンかけてきたのか？ お前はどこまで大物すぎるんだよ」

「あー、えーっと、他には他には……。！」

「いい加減にしろ。お前の嘘は底が浅いんだよ」

「ぐっ……。…」

もう嘘のネタが詰まったのか、明久が苦い顔をする。

「分かったよ。今日はおとなしく家に帰るよ……」

明久がかばんを担いで立ち上がる。すると、背を向けた明久の肩を秀吉がグッと掴んでいた。

「待つんじゃない明久。何をそこまで隠しておるのじゃ？」

「うえっ！？ いや、別に何も！」

「何かあるのかわからんが、このバカがそこまで隠そうとすることか……」。面白そうだな

雄二がニヤニヤといやらしい目で笑った。

「よし。確認しに行ってみるか」

「ちょ、ちよつと雄二！？ 何言ってるのさ！？」

「そうね。何かアキの新しい一面が見られるかもしれないし」

「私も興味があります」

「……家宅捜査」

「テスト期間で部活もないし、ワシも行ってみようかの」

一同の台詞に明久は慌てながら、

「ダメだよ！ 今日は僕の家はダメなんだ！ その、凄く散らかってるから！」

「あの、それならお手伝いしますけど？ 綺麗にしないと勉強に集中できませんし」

明久は姫路の優しさに涙目になるが、何か思いついたような表情になった。

「でも、散らかっておるのは2000冊以上のエロ本なんだ！」

「……任せておけ(グッ)」

「しまった！ さらにムツツリーニの興味を煽る結果に！？」

「ものすごい逆効果だ！」

「よし、それじゃ意見もまとまった事だし、明久の家に行くか」

「「「おーっ」」」

「やめてーっ！」

明久は全力で抵抗をしたが、結局明久は首根っこを？まれ雄二達に連行されて行った。

「何があるんだろうな」

「ムツツリーニと違って明久は滅多に隠し事をせんからな。何があるのか楽しみじゃ」

「・・・・・・・・・・隠し事なんて何もない」

「女物の下着に興味はあるか、ムツツリーニ」

「・・・・・・・・・・あるわけがない」

「流石に隠し事に慣れとるだけあるの。嘘も堂に入ったものじゃ」
「・・・・・・・・・・！（ブンブン）」

明久の家に帰る途中、明久以外の全員は凄く楽しそうに会話をしながら歩いていった。

「でも、なんででしょうね？ 明久君がそこまで隠すものって」

「何かしらね。今さらいやらしい本なんて隠すとも思えないし」

「そうじゃな・・・・・・・・・・。急に手作りの弁当を持ってきたこと、Yシャツにはアイロンがかかっておったおったことなども合わせて考えると・・・・・・・・・・」

「女でもできたか」

「「・・・・・・・・・・っ!？」」

雄二の一言に、雄二以外の全員が大きく目を見開く。

「あ、アキッ！ どういうこと!? 説明しなさい！」

「む、むう・・・・・・・・・・。明久に伴侶か・・・・・・・・・・。友人としては祝うべきなのじゃが、なんだか釈然とせんというか、妬ましいというか・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・裏切り者・・・・・・・・・・っ!」

「僕、何も言っていないんだけど・・・・・・・・・・」

様々な想像をする秀吉たちに、明久が苦笑しながら言った。

「大丈夫ですよ。明久君が私達に隠れてお付き合いなんで、そんな事をするはずがありません。私は明久君を信じています」

そんな四人の中で、姫路だけが落ち着いた態度を保っている。

「ね、明久君？ 私達に隠れてそんな人がいたりなんて、しませんよね……？」

ただ、目に光が宿っておらず、目も笑っていない、いわばヤ○デレ状態になっているが。

そしてそうしているうちに、明久たちは明久の住むマンションに着いた。

「ま、中に入れば全部わかるだろ。ほら明久。鍵を出せ」

「やだね」

明久はせめてもの抵抗を試みてみた。

「明久。俺がカイザになってドアを壊すか、裸Yシャツの苦しみを味わうか、どっちがいい」

「何その究極の二択！？ ってどっちも嫌だよ！」

「……涙目で上目遣いだとありがたい」

「ムツツリーニ！ ポーズの指定を出して何する気！？ 売るの！？」

抱き枕！？ リバーシブルで裏面は秀吉！？

「なぜそこでワシを巻き込むのじゃ！？」

「土屋君。できれば、Yシャツのボタン上二つは開けてもらえると……」

「値段はできたら安くして」

「姫路さんも最近おかしいからね！？ 美波も何言ってるの！？」

わかったよ！ 開けるよ！ 開ければいいんでしょ！

「……ボタンを？」

「家の鍵を！」

明久は少し怯えながら、何かに祈るような感じで家の鍵を開ける。

「本当に彼女がいるのかしら……」

「少々緊張するの……」

「大丈夫です。そんなこと、ありません・・・っ」

一同が固唾を飲んで見守る中、明久は玄関のドアを開けた。

「それじゃ、あがつてよ」

雄二達を招き入れ、リビングに続くドアを開け放つ。

そしてその直後、明久達の視界に飛び込んできた物が。

「「「・・・・・・・・・・」」」

それは、室内に干された――ブラジャーという女物の下着だった。

「いきなりフォローできない証拠があーっ!？」

明久は凄まじい速さで洗濯物を掴み、別室に放り込む。雄二達の反応を確かめるために、明久がゆっくりと振り返ると、

「・・・・・・・・もう、これ以上ないくらいの物的証拠ね・・・・・・・・」

「

「そ、そうじゃな・・・・・・・・」

「・・・・・・・・殺したいほど、妬ましい・・・・・・・・っ!」

美波達が思い思いの感想を言っていた。

「え、えっと、これは!」

そんな絶望的な状況の中で明久が言い訳のようなものを考えていると、一人落ち着いたままの姫路が笑顔で明久に歩み寄ってきた。

「ダメじゃないですか、明久君」

「え? 何が?」

「あのブラ、明久君にはサイズが合っていないですよ?」

「「「コイツ認めない気だ!」」」

姫路が言ったのは、現実逃避に近い台詞だった。

「姫路さん、これは僕のじゃなくて!」

「あら? これは――――」

姫路の視線は、リビングの卓上に向けられていた。そこに置かれているには、女性用のコットンパフだ。

「ハンペンですね」

「「ハンペン!？」」

化粧用のコットンパフをハンペンと間違えるのも、それはそれで問題だが、姫路はそれほど目の前の現実を見たくないのだろう。そして、姫路はまた別の場所に視線を移した。その目線にあるのは、食卓の上に置かれている女性向けヘルシー向け弁当だ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ひ、姫路さん・・・・・・・・？　どうしたの・・・・・・・・？　そのお弁当が何か・・・・・・・・？」

「しくしくしく・・・・・・・・」

「うええっ!？　どうして急に泣き出すの!？」

「もう、否定し切れません・・・・・・・・」

「ちょっと待って!　どうして女性向けの下着も化粧品もセーフなのにお弁当でアウトになるの!？」

まさか下着や化粧品の方が女性向け弁当よりもあり得ると思われていたんだろうが、明久は思った。

「はぁ・・・・・・・・。もうこうなったら仕方がないよね・・・・・・・・。正直に言うよ。実は今、姉さんが帰ってきているんだ・・・・・・・・」

「

ここまで見られてしまったからにはもう仕方がないと思ったのか、明久は本当の事を白状した。

明久の告白を聞くと、一同は納得の言ったような顔をした。

「そ、そうよね。アキに彼女なんているわけないもんね」

「・・・・・・・・早とちりだった」

「ホッとしたぞい」

秀吉たちが胸を撫で下ろしている。だが、何故彼女の存在よりも先に姉の存在という可能性を思いつかなかったのだろうか。

「そうですか。明久君にはお姉さんがいたんですね。良かったです・

「……」

「まあ、そんなわけだからお弁当とか制服とかもきちんとしていたんだよ。わかってもらえた？」

明久はそこで話を打ち切ろうとする。

「待て明久」

しかしその行動もむなしく、雄二が何かに気付いたかのように言っ

た。「な、なにかな明久？」

「お前に姉がいるのは分かった。だが、それだけでなぜ家に帰るのを嫌がる？」

「あ、そういえばそうですね」

「確におかしいのう」

「……（こくこく）」

「何かまだ隠してるのかしら？」

美波達が雄二の台詞を聞き、同じように疑問を抱き始めてしまった。

「明久。もう全部ゲロって楽になれよ。な？」

雄二が明久の肩をポンポンと叩く。その言葉を聞き、明久も腹をくくる事にした。

「実は……僕の姉さんは、かなり、その……珍妙な人格をしているというか……常識がないというか……だから、一緒にいると大変で、色々と減点とかもされるし、それで家に帰りたくなくて……」

「あ、アキが非常識って言うなんて、どれだけ……？」

「むう……。恐ろしくはあるが、気になるのう……」

「……是非会ってみたい」

「そうですね。会ってみたいです」

その場にいる全員が明久の姉に興味を抱き始めたその時。

「あー……。なんだ。お前ら、そういう下世話な興味は良

くないぞ。誰にだって、隠したい姉とか母親とか、そんなもんがいるモンなんだから」

珍しく雄二が明久に助け舟を出した、一体どういう風の吹き回しだろうか。

「ゆ、雄二・・・・・・・・・・！　ありがとーーー」

ガチャッ

その時、確かに玄関のドアが開く音がした。

『あら・・・・・・・・・・？　姉さんが買い物に行っている間に帰ってきていたのですね、アキくん』

「うわわわわっ！　か、帰ってきた！　皆、早く避難をーーー」

「明久君のお姉さんですか・・・・・・・・・・？　ど、ドキドキします・・・・・・・・・・」

「う、ウチ、きちんと挨拶できるかな・・・・・・・・・・？」

「ダメだ！　会う気満々だ！」

明久が祈り、緊張の一瞬の後、扉が開かれる。

「あら。お客様ですか。ようこそいらっしゃいました。狭い家ですが、ゆっくりして行って下さいね」

扉から現れたのは、七分丈のパンツに半そでのカッターシャツ、その上に薄手のベストの格好をしたショートカットの女性だった。

「「「お、お邪魔してます・・・・・・・・・・」」」

普通の格好に普通の挨拶に、拍子抜けといったような表情で雄二達が挨拶する。

「失礼しました。自己紹介がまだでしたね。私は吉井玲といいます。皆さん、こんな出来の悪い弟と仲良くしてくれて、どうもありがとうございます」

深々とお辞儀をする姉に、雄二も慌てて頭を下げる。

「ああ、どうも。俺は坂本雄二。明久のクラスメイトです」

「・・・・・・・・・・土屋康太、です」

続いてムツツリーニも挨拶した。

「はじめまして。雄二君に康太君」

笑顔で返す玲に、明久は心の底から感動した。そんな明久に、雄二が小声で話しかけてきた。

（おい明久。普通の姉貴じゃないか。これでおかしいと言うなら、お前はどれだけ贅沢者なんだ。俺なんか、俺なんか・・・・・・・・っ！）

（あはは・・・・・・・・ふ、普通でしょ？　だから、もう気が済んだら帰ったほうがいいと思うよ？）

明久と雄二の会話をよそに、挨拶が秀吉の番まで回ってきた。

「ワシは木下秀吉じゃ。よしなに。初対面の者にはよく間違われるのじゃが、ワシは女ではなく――」

「ええ。男の子ですよね？　秀吉くん、ようこそいらっしゃいました」

「・・・・・・・・・・っっ！！」

その言葉を聞いて、秀吉が驚いたように玲の顔を見上げる。

「わ、ワシを一目で男だとわかってくれたのは、主様だけじゃ・・・・・・・・！」

どうやら一目で男だとわかってもらえて感動しているようだ。

「もちろんわかりますよ。だって」

微笑を浮かべて玲が答えた。

「だって、うちのバカでブサイクで甲斐性無しの弟に、女の子の友達なんてできるわけがありませんから」

嫌な確信の仕方である。どうツツコミを入れようかと明久が迷っている、玲はそのまま姫路と美波の方に視線を移し、

「ですから、こちらの二人も男の子ですよね？」

意味のわからない事を言った。

「ちょ、ちょっと姉さん！？　出会い頭になんて失礼な事を言うの

さ！ 三人ともきちんと女の子だからね！？」

「明久！ ワシは男で合つとるぞ！？」

明久は改めて、自らの姉の非常識っぷりに旋律を覚える。そして、明久の言葉に反応したのか、玲がゆっくりと明久に顔を向ける。

「……女の子、ですか……？ まさかアキくんは、家に女の子を連れてくるようになっていたのですか……？」

どうやら家に女子を呼んだ事が気に入らないらしい。何せ手をつなぐだけで不純異性交遊とみなすような姉である。恐らく怒っているのだろう。

「あ、あの、姉さん。これには深い深い事情があつて――」
「……そうですか。女の子でしたか。変な事を言つてごめんなさい」

「実は……って。あれ？」

説明を始めようとする明久を無視し、玲は素直に姫路と美波に頭を下げる。明久は一瞬その光景にポカンとした表情を浮かべる。

「どうかしりましたか、アキくん？」

「あ、いや……。姉さん、怒ってないのかな、って思つて」

「？ あなたは何を言っているのです？ どうして姉さんが怒る必要があるのですか？」

怒らないのが至極当然と言わんばかりに平然としている。

取り越し苦労かと明久が胸を撫で下ろした明久に、玲は笑顔のまま告げた。

「ところで、アキくん」

「ん？ 何？」

「お客様も大勢いらっしゃるようですし、アキくんが楽しみにしていたお医者ごっこは明日でもいいですよ？」

どうやらこの姉は、明久を自殺に追い込むらしい。

「ね、姉さん何言つてんの！？ そんな言い方はやめてよ！ 僕は

姉さんとそんな事をするぐらいなら死んだほうがマシだからね!？」

「何を慌てているのですかアキくん。それより、昨日アキくんに渡した姉さんのナース服がどこにあるか知りませんか？」

「このタイミングでそんな事を聞くなぁーっ!!」

明久は叫びながら、こんな事になるぐらいなら野宿でも何でもするんだったと頭を抱えた。

「それと、不純異性交遊の現行犯として減点を150ほど追加します」

「150!? 多すぎるよ! まだ何もしてないのに!」

「・・・・・・『まだ』?・・・・・・200に変更します」

「うわあああああ!」

「・・・・・・すまん、明久。さっきの言葉は訂正させてもらおう」
雄二が明久の肩をポンと叩いた。同じ苦勞を味わってきたのか、その目には同情と哀れみの色が混じっている。

「ごめんなさい。話が逸れてしまいましたね。貴女方お二人のお名前を伺ってもよろしいでしょうか？」

「あ、はい。申し遅れてすいません。私は姫路瑞希といいます。明久君のクラスメイトです」

「ウチは島田美波です。アキとはともd――」

友達を言おうとしたのだろうか。美波はそこで一旦言葉を切った。

「・・・・あ、アキとは・・・・」

「アキくんとは？」

赤く頬を染めている美波に、玲が笑顔で迫る。何故か黒いオーラがその笑顔に秘められている。

「・・・・あ、アキとは将来一緒に住む予定です!」

「アキくん、ちょっとこちらに来てください」

「何で!? 何で旅行に行くかもしれないって話なのに僕の首を掴んで別の部屋に行こうとするの!? しかも右手に握ってるメリケンサックは何!? アンタ弟に何する気!？」

「大丈夫ですアキくん。アキくんが女の子に騙されないようにお説

教してあげるだけです。私はアキくんの事を愛してますから。・・・
一人の異性として」

「その一言は冗談だよね！？　お願いだから冗談って・・・、・・・
ああああー」

悲鳴らしきものを上げながら、明久は別の部屋に連れて行かれた。
その部屋からは、ドゴ！　ボキ！　ベキヤ！　ミシ！　ぎゃあああ
ああああ！！　という音が連続で聞こえてきた。

「・・・・・・・・・・冥福を祈る」

「（・・・・だが、島田の奴ずいぶんと積極的にいったな）」

「（うむ。恐らく今のままではマズイと思ったのじゃろう。今のところ、明久との距離は島田が一番近いからのう）」

雄二達が言っている側で、美波は顔を真っ赤にし、姫路はそんな美波の顔を見ながら『私もがんばらなくちゃ・・・』と呟いていた。

その後、部屋から戻ってきた玲の提案で、一同は夕食を食べる事になった。作るのは雄二とムツツリーニ、そして奇跡的に生還した明久がやることになった。その後、明久は自信の風呂の写真を秀吉と姫路と美波の三人に見せ付けられ、玲の愛しているという宣言を雄二達に聞かれ、異性関係を聞かれたりと大変な目にあいながらも、何とか食事は無事に終わったのだった。

食事を終え、明久たちはてきぱきと後片付けをし、全員がリビングに集まる。そして、いよいよ姫路が今日の本題を切り出した。

「そろそろ勉強を始めましょうか？」

「そうね。あまり帰りが遅くなっても困るし」

夕食の支度が早かったせいかな、今はまだ七時である。明久自身としてあまりやりたくないが、これをやらなかったら明久の自由は消える。オルフェノクを退治しなければならぬのに、非常識な姉がいるというのはたまったものではない。

「ならば、ワシも一緒に教えてもらおうとするかの」

「………同じく」

いつもFクラスで見せている姿とは全く違う真面目な態度である。この姿を西村先生（鉄人）に見せたら、おそらく目を丸くするだろう。

「皆さんで勉強ですか。それなら良いものがありますよ？」

「良い物？」

「はい。今日部屋を片づけていて見つけました。今持って来ますね」
そう言いながら、玲はリビングを出て行った。その後何かを取り出す音がして、再び戻ってきた。

「参考書というのなんですが、役に立つかもしれませんが」

玲が持ってきた本をテーブルの上に置いた。明久には、何故か見覚えのある本に見えた。

「女子高生 魅惑の大胆写真集」

「アキくんの部屋で見つけました」

「僕のトップシークレットがぁー………っ！！」

玲が持ってきたのは、明久が隠していたエロ本だった。

「保健体育の参考書としてどうぞ」

「どうぞ、じゃないっ！ こんなもんが参考になるかーっ！ あと僕の部屋に勝手に入ったね！？ あんなに入らないでって言ったの

に！」

「いいえ、昨日確かにアキくんは部屋に入って良いと言いました」

「それってもしかして着替えを取りに行く時のこと！？ あの時の会話はこれが目的だったのか！　なんて陰湿卑劣迂遠な作戦なんだ！」

「そ、それじゃあ、あくまで勉強の参考書として……」

「そ、そうね。ウチもちよつと勉強しておこうかな……」

「姫路さんに美波！？　無理に姉さんのセクハラに付き合わなくていいんだよ！？　　というかお願いだから見ないで！」

こんなものを見たら明久の趣味がばれてしまうだろう、明久は必死に二人を止めようとする。

「アキくん、ベッドの下に置いてあったほかの参考書も全て確認しましたが、あなたは前はバストサイズが大きく、かつヘアスタイルはポニーテールの女子という範囲を重点的に学習する傾向がありましたね」

「冷静に考察を述べないで！　いくら言い方を変えて取り繕っても

――――

「……前は何？」

突然ムツリーニがそんな事を言い出した。明久は、石になったかのように動きを止めた。

「ええ、発行日などを調べてみたら現在アキくんは――――」

「や、やめろおおおお！！」

明久が必死に叫ぶが、玲は笑顔で続けた。

「――――バストサイズが小さく、なおかつポニーテールの女子という範囲を重点的に学習する傾向のようです」

「うっきゃあああああああ！！！」

第十三話 姉と勢力と勉強（後書き）

また更新が遅くなるかもしれませんが、楽しんで待っていただけたら幸いです。

感想お待ちしております。

第十四話 勉強会と裏切りと嫉妬（前書き）

大変遅くなりました！ 十四話です！

第十四話 勉強会と裏切りと嫉妬

「というわけで雄二。今日も楽しく勉強会をしよう！」
放課後になり、明久は素早く帰り支度を整え、雄二の席に駆け寄った。

「……………明久。似合わない台詞が気持ち悪いぞ」

「なんとでも言ってよ。今の僕には体裁を気にしてる余裕はないんだから」

実は明久は、今朝また玲に減点されたのだ。このままではテストでかなりの高得点をとらなくてはならなくなる。

「なんだ。また減点でも食らったのか？」

「うん……………。朝からいきなり英語の問題を出されてさ……………」

「そうか。それで、今はどのくらいの減点なんだ？」

「確か、合計で290点。もうかなり厳しいんだよね」

「290か。そうになると、期末の総合目標は1090くらいだな」

「そうなんだよ。今までは絶対調でも1000点ちょっとだったから、それに更に50点以上アップさせないと……………」

総合で1100点程度となると、Eクラスの中堅レベルである。

今のままでは少し心もとない。

「まあ、その程度ならまだなんとかなるだろう」

「え？ そうかな？」

「暗記科目を中心に今から死ぬ気で根性入れたら、それなりに上がるはずだからな。お前の場合、伸び代が残っている世界史あたりが狙い目だ。確か今までは50〜60点程度だったよな？」

「うん。よく覚えてるね」

「一応クラス代表だからな」

どうやら試召戦争の為にクラスメイトの点数をチェックしているようだ。戦力の把握は指揮官として必要最低限の事なのだろう。

「振り分け試験と違って、期末の問題を作るのは田中らしい。お前にはありがたい話だろう？」

「田中先生か……。それなら確かに点数を取り易いかも」

世界史の田中先生はおっとりとした初老の先生で、問題が解き易いと生徒の間では大評判なのだ。いつもなら全員が解き易いと点数に差が出ないので意味がないのだが、今の明久にはありがたい。重要なのは他人との差ではなく、点数そのものだからである。

「下手に理数系に力を入れるよりは、暗記科目に集中したほうが点数には結びつきやすいはずだ」

「そうだね。今から数学なんて勉強してもあまり点数は上がらなそうだし」

そうとなると、明久にとっての期末テストの鍵は世界史が握る事になるだろう。

などとテスト対策の話をしていると、そこに鞆を抱えた秀吉がやって来た。

「なんじゃお主ら。今日も明久の家で勉強会かの？」

「僕の家？ うーん……。今日からは姉さんが仕事でいないから、それでもいいんだけど……」

「けど？」

「今日は雄二の家にしようよ。たまには僕の家以外にも行ってみたいし、何より僕の部屋には参考書とかの勉強道具があまり揃ってないし」

明久はすかさず雄二の家を提案した。

勉強道具などの話も確かにあるが、会場を雄二の家にしたのは雄二自身を巻き込むためである。雄二は自分の興味ない事には驚くほど冷たいので、こうでもしておかねば勉強を教えてくれない恐れが

あるのだ。一応は次の試召戦争に備えるという狙いもあるので協力してくれてはいるが、念には念を入れておいたほうが良い。

「いいよね、雄二？ 昨日は無理を押して僕の家に来たんだし」

「まあ、確かに昨日は無理やり押し切ったようなもんだしな……」

雄二が少し何か考え出した。

「わかった。今日は俺の家でやるか。幸い、おふくろも温泉旅行で不在だしな」

雄二の母親が不在なのがどうして幸いなのかは分からないが、明久が思ったよりすんなりオーケーが出た。これで今日も勉強を教えてもらえるだろう。

「それならば、ワシも同行させてもらっていいかの？ 一人では勉強をする気が起きんのじゃ」

「勿論オーケーだ。というか、どうせいつものメンツが来るんだろ？ それならさっさとしようぜ」

「そうだね。おい、ムツツリーニ、姫路さん、美波ー！」

まだ教室内に残っている三人に呼びかける。

「はい。なんででしょうか明久君？」

「何か用？」

「……どっかに行くとか？」

勉強道具を鞆にしまっていた三人は、それぞれ鞆を手にもちらにやってきた。

「うん。今日は雄二の家でテスト勉強をしようと思うんだけど、良かったら――」

明久の言葉に、姫路とムツツリーニは二つ返事で参加だったが、美波は表情を曇らせていた。

「美波、今日何かあるの？」

「うん……。今週は仕事が休みだからって母親が家にいるはずだったんだけど……。ちょっと急な仕事が入って今日は家にいられなくなったの」

「あ、そうなの？ それじゃ、葉月ちゃんが家に一人ってこと？」

「そうね。悪いけど、今日はウチは帰るわ。勉強はまた今度ね」

残念ではあるが、そういうことなら仕方ない。葉月はまだ小学生である。小学生の少女を家に一人にしておくには可哀想だろう。

美波が鞆を手にして部屋を出ようとする。

そんな美波を雄二が引き留めた。

「待て島田。それなら、場所をお前の家に変更しないか？」

「え？ ウチの家？」

「それは良いのう。島田の妹とは全員が顔見知りじゃし」

「葉月ちゃんとも会えますしね」

「・・・・・・・・・・なんなら、夕飯も作る」

雄二の提案に、一同は乗り気だった。

「美波さえ良かったら、どうかな？」

「う・・・・・・・・・・。そ、そうね・・・・・・・・」

だが、他の全員が乗り気なのに対し、何故か美波はあまり乗り気ではないようだ。

「じゃ、じゃあ、ウチの家にしましょうか・・・・・・・・」

少し考えた後、美波の承認が下りた。これで葉月も寂しくなくなり、勉強も無事に全員でできるだろう。

「ただし！ 絶対にウチの部屋に入っちゃダメだからね！」

美波は何故か明久の目を見てそう言った。ムツツリーニより警戒されたことに、明久は少し心外だった。

「よしっ！ そうと決まれば早速移動だ！ チビツ子も一人じゃ寂しいだろうからな！」

雄二の一言で、明久達は教室を出て美波の家に向かった。

「ただいまー。葉月、いる？」

玄関のドアを開けて美波が呼びかける。すると、

「わわっ、お姉ちゃんですかっ。お、お帰りなさいですっ」

廊下に面した部屋から、小さな影が勢いよく飛び出してきた。

アーモンド状の少し吊り上がった目にツインテールのツインテールの少女、島田美波の妹、島田葉月である。

「？ 葉月、今お姉ちゃんの部屋から出てこなかった？」

どうやら今葉月が飛び出してきたのは美波の部屋らしい。

「あ、あう……。実はその……。独りで寂しかったから、お姉ちゃんの家に行って……。」

言いにくそうに葉月は少し手をもじもじとさせた。

「ぬいぐるみでも取ってこようと思ったの？ そのくらい、お姉ちゃんは別に怒らないのに」

「そ、そうですか？ お姉ちゃん、ありがとうございますっ」

よしよし、と美波は葉月の頭を撫でた。

二人の会話が落ち着くのを見計らって、明久は美波の背中から一歩出て葉月に挨拶した。

「葉月ちゃん、こんにちわ」

「あっ！ バカなお兄ちゃんっ！」

姿を見せるなり、ドンツと勢いよく腰にしがみつけられる。そしてそのまま葉月は額を明久の腹に当ててきた。何故か前のように、額が的確に鳩尾に食い込んでいる。

「キャンっ！」

そこに、犬の鳴き声らしき音が聞こえてきた。明久が前を見ると、小さなチワワ犬、チャコが明久達に寄ってきた。

「あ、チャコちゃん、起きたんですか」

「寝てたの？」

「はいです。起こしちゃ可哀想だと思ったので、寝かしといてあげてたんです」

チャコは明久達に吼えたりもせず、ただそこに座っている。

「こんにちは、葉月ちゃん。お邪魔しますね」

「わあっ。綺麗なお姉ちゃんたちまで。今日はお客さんがいっぱいですっ」

やっぱり小学生に留守番は寂しかったのだろうか、明久達を見ると、葉月は満面の笑みどころか全身で喜びを表現した。相変わらず天真爛漫という言葉が良く似合う。

「ほらほら、葉月。アキから離れなさい。皆が中に入れないでしょ？」

「あ、はいです。それじゃ、バカなお兄ちゃん達、こっちにどうぞっ」

「つとと、そんなに引っ張らなくても大丈夫——ん？」

葉月に手を引かれながら廊下を歩いていくと、その途中にある部屋のドアが開いていて少し見えた。所狭しとぬいぐるみが並べられている。おっして、その中央では見覚えのある大きなキツネが何かを抱えて座っていた。

抱えられている物を明久が見ようとしたその時。

「ちょ、ちよっとアキっっ!？」

「ほえ？」

突然の声に明久が振り返ると、その瞬間に明久の脳天・鼻先・下あごの三ヶ所に衝撃が走り、バランスを崩したところで両手首の関節が一瞬で外された。まさに一瞬の早業。アクセルフォームでもないといけない高度な技だろう。

「何見てるのよ!?!?!？」

おそらく明久は今、地獄を見ているのだろう。

「いい？ この部屋は絶っっつ対に、入ったらダメだからねっ!」

美波は大急ぎで扉を閉め、外された両手首をムツツリーニ手首を

はめてもらっている明久に指を突きつけた。明久は、その扉が地獄の扉だということを即座に理解した。

「やれやれ。お前らは何をやっているんだか……。チビツ子、元気だったか？」

「はいですつ。おつきいお兄ちゃん」

「そうかそうか。それは良かった」

雄二は葉月の頭にポンポンと手を載せた。身長差のせいか、雄二は葉月の頭に手を載せるのが好きなようだ。

「それで、リビングはこっちでいいのか？」

「はいですつ。こっちですつ」

葉月に案内され、明久達はリビングに入った。

「とりあえず適当に座ってもらえる？　今テーブル持ってくるから」
明久達を通すと、美波が勉強道具を広げる為のテーブルを取りに行こうとする。

「？　お姉ちゃん、テーブルなんて何するです？　ランプですか？」

葉月が首を傾げたのを見て、明久はまだ自分が何も話していないことに気付いた。

「葉月。今日はお姉ちゃん達ね、うちでテストのお勉強をするの」
美波がそう言うのと、葉月は少し寂しげに目を伏せた。

「あう……。テストのお勉強ですか……。それじゃあ、葉月は自分のお部屋でおとなしくしてるです……」

察しが良いのか、気が回るのか。葉月は明久たちが何かを言う前に、勉強の邪魔にならないために部屋に行こうとする。それはそれで良い行為なのかも知れない。

だが、

「待って葉月ちゃん。良かったら、僕らと一緒に勉強しよっか？
学校の宿題とか、予習とかはないかな？」

一人で部屋にいるのは寂しいだろうと思ったのか、明久が言った。
「えっ？　葉月も一緒でお勉強していいですかっ？」

パツと葉月の顔が輝く。

「勿論だよ。ね？」

「ああ。どうせ一人に教えるのも二人に教えるのも変わらないからな」

「雄二。それは僕が小学校五年生レベルだと言っているのかな？」

「葉月ちゃん。一緒にお勉強しようね」

「ワシはあまり教えてやれることはないかもしれないが、一緒に勉強するのは大歓迎じゃ」

「・・・・・・保健体育なら教えてあげられる」

ムツツリーニの台詞は、ギリギリでアウトだ。美波が本気なら、恐らく殺される事だろう。

（アキ、いいの？ 今度のテストはかなり頑張らないといけないはずなのに）

美波が葉月に聞こえないように明久に小声で呼びかけてきた。明久のテストの事を心配しているのだろう。

明久が気を遣いすぎだと言うと、美波ははにかんだように、
（・・・・・・ありがと、アキ）

と明久に囁いた。美波の優しい目に、明久は自分の心臓の脈が早まるのを感じた。

「葉月、一緒にお勉強したいですっ」

「おう。それなら勉強道具を持ってくるといい」

「はいですっ」

軽い足音を立てながら、葉月はリビングを出て行く。ただ一緒に勉強するだけなのだが、彼女にはそれがよっぽど嬉しかったのだろう。

「さてと。そんじゃ、テーブルを持ってくるんだろ？ 手伝うぞ島

田」

「あ、大丈夫よ。ウチ一人で」

「そうか。まあ、誰かの写真でも飾ってあるのなら、下手に歩き回れたくないだろうから無理に手伝うとは言わないがな」

「なな何言ってるのよ坂本!？ あんたまさか、さっき部屋の中が見えてたの!？」

「いや、ジョークのつもりだったんだが……………」

「島田は存外乙女じゃな」

「……………毎度御贔屓に、どうも」

「どうやらいつのまにか美波もムツリーニと写真の取引をしていたようだ。恐るべきはムツリーニの人脈だろう。」

「ところで、テーブルはいいとして夕食はどうする？」

「……………何か作る？」

「僕は別にそれでもいいけど」

現在の時刻は午後五時だ。何かを作るのなら今から買い物に行かねば遅くなってしまう。

「今日はピザでも取りましょ。作る時間が勿体無いし」

「そうですね。特に明久君は頑張らないといけませんから、ご飯を作ってしちゃダメです」

二人の気遣いが、明久にはありがたかった。今の明久には少しなら金があるので、勉強を優先できるのは正直助かる話だった。

「なんじゃ。ワシはてつきり島田が手料理を振舞うのかと思っておったのじゃが」

「昨夜、プライドを打ち碎かれたからちよつと、ね……………」

「そうかな？ 美波の料理おいしいと思うけど」

「何だ、まるで食った事があるような言い方だな？」

明久の言葉に疑問を抱いたのか、雄二が尋ねた。

「うん、前にオムライスご馳走になったことがあるんだ。それがすごく美味しくてさ」

「ちょ、ちよつとアキ」

「……………裏切り者……………! (ギリッ)」

その話題を聞いていたムツリーニが怒りに歯を噛み締め、美波が少し頬を赤くする。それを知らずに、明久は続きの言葉を言った。

「あんなにおいしいなら、僕毎日食いたいよ。ははっ」

その一言で、**空気が凍った。**

「・・・あれ？ 何で皆止まってるの？ 美波もそんなに顔を真っ赤にして・・・。。。。。。ちよ、ちよつとムツツリーニ姫路さん！？ 二人とも顔が怖いよ！？ しかも後ろになんか見えてるんだけど！？」

「（・・・あれで無自覚だから恐ろしいな）」

「（うむ……。しかしワシはそのうち明久が姫路に刺されそうで怖いのだが……）」

「（・・・否定できないな）」

雄二と秀吉はそんなことを真顔で話し合う。その後、勉強道具を持った葉月が戻ってきて、一同は勉強を始めた。

二時間ほど勉強をした後、ピザを食べまた勉強。

そして時間はあつという間に過ぎ――

「ん？　もうこんな時間か。そろそろ今日は終わりにするか」

気がつくと、時計は九時半を示していた。

「なんじゃ。あつという間じゃったな」

「・・・・・・・・集中してた」

「すっかり暗くなってますね」

雄二の一言に明久達はペンを置く。雄二や姫路の教え方が上手かつた事もあるのか、サクサクと勉強を進める事ができた。このペースでいけば、玲を外国に帰すことも不可能ではないだろう。

「あとはまた今度にするとして、今日は帰ろうぜ」

「そうですね。美波ちゃん、今日はありがとうございました」

「あ、ううん。こっちこそ色々ありがとう。ほら葉月、お礼を言いなさ———葉月？」

「ZZZZ……」

「あはは。疲れちゃったみたいだね」

葉月はいつの間にか明久の膝の上で眠ってしまっていた。

「もう、葉月ってば……。アキ、悪いけどこっちに寝かしてもらえる？」

「あ、うん。そうしたんだけど……」

ソファアの上に寝かそうとしても、葉月が明久のシャツを握って眠っている。この状態では帰れそうにない。

「こら葉月、起きなさい。アキが帰れないでしょ？」

美波が葉月の肩を叩く。

「んう……」

すると葉月は少しだけ目を開け、

「帰っちゃ、嫌です……」

そう言って更に強くシャツを握り締めた。

「葉月。あんまり我が儘言うと、お姉ちゃん怒るからね」

美波の口調が少しだけ強くなる。この様子を見ると、優しいだけでなく怒る時には怒る良い姉という感じが伝わってくる。

「……お姉ちゃんには、わからないです……」

「え？ 何が？」

「……お姉ちゃんは、いつも一緒にいられるからいいです……でも、葉月はこういう時しか、バカなお兄ちゃんと一緒にいられないです……」

「「……」」

寝ぼけているからこそ聞けた葉月の本音に、明久達は思わず顔を見合わせた。そして、葉月がそこまで明久の事を慕っているという事が分かった。

「あのさ、美波。良かったら、僕はもう少しここで勉強していてもいいかな？」

「え？」

「だな。今のチビッ子の台詞を聞いたら、明久は残るべきだよな」

「そうじゃな。明久よ、モテる男は辛いもう」

「・・・・・・人気者」

雄二達に口々にからかわれるが、悪い気はしなかった。最近はおルフェノクとの殺し合い、常軌を逸した姉などの攻撃的な人々と接していたので、そういった純粋な好意は嬉しかった。

「そ、それじゃあ、悪いけどもう少し葉月に付き合ってもらえる？」
「うん」

美波の許可も下りたので、明久はもう少しここにいたことにした。

「あ、あのっ、それなら私も・・・・・・っ！」

「え？ 姫路さんはダメだよ。女の子があまり遅い時間に出歩いや危ないからね。雄二にでも送ってもらって早く帰らないと」

「でも、心配なんです。その、イロイロと・・・・・・」

「心配なのはわかるけど」

「いいえっ。明久君は私が何を心配しているのか全然わかってませんっ」

「???」

姫路の言葉に、明久は首を傾げた。

「俺が姫路を送るなら、ムッツリーニは秀吉を送るってことでいいか？」

「・・・・・・引き受けた」

「ワシはいまいち釈然とせんが、致し方あるまい・・・・・・」

ぼやぼやしていると更に時間が遅くなってしまう。姫路のような女子が外を一人で歩くのはあぶないだろう。秀吉も外見は女子そのものなので、用心しなければならない。

「あの、やっぱり私も・・・・・・っ！」

それでも尚、姫路は食い下がる。

「いくら言っても、ダメなものはダメだからね姫路さん」

「でもでもっ」

「諦めろ姫路。こうなると明久は考えを曲げないぞ」

「・・・・・・うう・・・・・・。そんなぁ・・・・・・」

いくら何でも女子が外を出歩くにはもう時間が経ちすぎている。

ここは明久に任じたほうが良いだろう。

「それじゃ、島田。今日はありがとうな」

「大勢で押しかけてすまなかったのう」

「・・・・・・ありがとう」

「美波ちゃん、ありがとうございました」

どこか納得できていない姫路を含め、雄二達はお礼を言って玄関に向かう。

「じゃ、また明日。皆」

明久は葉月を膝の上に乗せ寝かしているので、座ったまま挨拶した。

「待って、外まで送るわ」

美波は立ち上がって雄二達についていった。

「さて。それじゃ、続きをやるかな」

一気に人気のなくなったりビングで姫路特製のプリントを手にする。綺麗な字で読みやすい上に、要点がわかるようにまとめられている優れものだ。これさえあれば、成績向上は間違いないだろう。色つきのシートを当て、内容を覚えていく。

「すう、すう・・・・・・」

膝の上からは穏やかな寝息が聞こえてくる。今の明久にとって、葉月に甘えられているというのが幸せだった。最近はおルフェノクの出現に、ファイズに変身しておルフェノクと戦い、更には玲にテストだの生活態度だの口うるさく言われてたのでなおさらだった。

・・・・・・だが、明久には怖かった。この好意を向けられるのが。誰かを好きになるのが。誰かと友達になるのが。前はこんな事全然思いもしなかったが、おルフェノクという存在を知ってからこ

んな事を考えるようになった。・・・これも、全て自分が――――
――――

「ごめんね、アキ。迷惑かけちゃったわね」

そんな事を考えていると、雄二達を送り出した美波が戻ってきた。
「ううん。別に迷惑でもなんでもないよ」

「・・・ありがと」

明久の隣に座りながら美波は葉月の頭を撫でた。

「・・・美波」

「何？ アキ」

「・・・美波は、誰かを裏切るのが怖い？」

その言葉に、美波はキョトンとした顔になった。

「・・・どうしてそんな事を聞くの？　もしかして、アキがいつも坂本に裏切られたりしてるから？　それでウチもアンタを裏切るかもしれないって訳？　・・・別に、裏切るのが怖いって訳じゃないけど・・・」

「違うんだ・・・。・・・僕は皆に裏切られるのが怖いんじゃない。

・・・僕は、僕が誰かを裏切るのが怖いんだ」

「・・・どうしてそんな事を考えるの？　アキがウチ達を裏切るわけじゃないじゃない。まあ確かに試召戦争なら仕方ないかもしれないけど、オルフェノクが関わってる時に、アキが裏切るなんて思わないわ。・・・だって、アキはアキだもん・・・」

美波は下をうつむきながら言った。こうも言い切れるのは、明久の性格を熟知しているからだろう。どんな時でも優しい明久なら、命が関わってる状況で自分達を裏切るはずがない。

「・・・ありがとう」

明久はまだ少し暗い表情だが、それでも無理に笑顔を浮かべながら言った。何故か、美波にはその笑顔が痛々しく見えた。

「・・・ねえアキ、さっきウチの部屋を見た時、ぬいぐるみが見えたでしょ？」

「うん」

「誰が写っていたのか、知りたくない……?」
「ふえ?」

明久と美波の間に、意味深な会話が繰り広げられる。明久は葉月か家族の集合写真が入っているとばかり思っていたが、どうもそうではないらしい。だとすると、考えられるのは美波の好きな人物の写真が入っているのかもしれない。

「んにゅっ!」

「「ひゃあっ!!」」

その時突然寝ていた葉月が身体を起こし、二人は驚き思わず変な声を出す。

「にゅう……」

そして、再び葉月は身体を横たえた。ただ寝ぼけただけかもしれない。

「あ、あはは……びっくりしたよね」

「そ、そうね。びっくりしたよね」

少しの間、二人でぎこちなく笑いあう。

「あ。今で葉月ちゃんが手を離してくれたみたいだ」

「え? あ、ホントね」

どうやら寝ぼけて身体を起こした時に手を離れたようだ。

「それじゃ、僕もそろそろ帰るよ」

葉月の体を抱き上げてソファに横たえる。

「そう。じゃあ、また明日ね」

「うん」

勉強道具を鞆にしまい、リビングのドアに手をかける。

そして、ドアを開けて出て行こうとしたところで、

「……アキ」

「ん?」

「……ウチの部屋の写真……見て帰っても、いいから」

「う、うん」

明久は思わず何かに気おされて頷く。

美波はそれ以上は何も言う事無く、よそを向いてしまった。

「そ、それじゃあ．．．．．」

リビングのドアを閉めて、玄関に向かう。

「．．．．．」

だが、玄関に向かう前に美波の部屋の前に立つ。心の中で、あんな事を言われたら見ないで帰るわけにはいかないという気持ちと、見たくないという気持ちがあぶつかり合う。しかし、明久は美波の部屋のドアを開け、中を覗き込み写真立てを確認した。

「あ、アキは見たかしら．．．．．あの写真．．．．．見たら、流石にあのバカでもわかるわよね．．．．．それで、そうしたら．．．．．」

「んにゅ．．．．．」

「あ。葉月、起きた？」

「はいです．．．．．」

「それなら、きちんと着替えてお部屋で寝なさい。一人が寂しいなら、一緒に寝てあげるから」

葉月に優しい声でそう言いながら、美波は窓の外の夜空を眺めながら思った。

（．．．．．アキ、ウチは絶対にアキを裏切ったりしないから。だから、アキも寂しい顔をしないで。いつでも、ウチはアキの隣にいるから）

「・・・・・・・・」

明久は夜の道をただ一人で歩いていった。美波の部屋にあったのは、自分の写真だった。それは、美波が明久に好意を持っているということになる。しかし、明久は喜べなかった。それどころか、恐れていた事が起こってしまった、という感じだ。別に誰かからの好意を否定する気はないし、したくもない。ただ、自分がその人を裏切るのがとても怖い。

「・・・・・・・・大丈夫だよね」

明久は、そんな感情から目を背け家路を急ぐ。オルフェノクが現れる前までしてきたように。

美波での勉強会から数日後、明久は家路を辿っていた。ついさっきまで雄二達と一緒に霧島家で泊りがけで勉強をしていて、今帰っ

ているところなのだ。

「そう言えば、今日は姉さんと一緒の夕食になるのか」

玲の仕事は午前中なので、今は家にいるはずなのだ。そうとなると、夕食は水だけというわけにはいかないだろう。

「やっぱり、日本食でも作ってあげようかな・・・？」

明久としてはご馳走を作って玲を喜ばせたいし、勉強会のかいあってテスト対策もはかどっているので、夕食を作るくらいなら玲も許してくれるだろう。

「鍋は・・・時期じゃないし、てんぷらは暑そうだし・・・」

頭の中でメニューを考えながら家へと向かうが、中々いい献立が考え浮かばない。

そんな事を考えているうちにマンションに辿り着き、エントランスを通過してエレベーターに乗る。荷物が多くなりそうなので、一旦家に戻ってから買い物に行こうとする。

「ただいまー」

「・・・に、・・・すか」

明久が家のドアを開けると、リビングから玲の声が聞こえてきた。どうやら誰かと電話中らしい。自分の荷物を置くため、通話の邪魔をしないためそつと自分の部屋に行こうとした。・・・こんな声が聞こえるまでは。

「・・・人の弟を騙そうとして、よくそんなことが言えますね」

玲のその声に、明久はギョツとした。内容ではない。声が、冷たすぎるのだ。今まで聞いた事のないぐらいに。

「アキくんを騙そうとしたって、そんな簡単にはさせませんよ？

・・・あなたのような性悪な泥棒猫の考えなどお見通しです。アキくんは渡しませんし、二度とアキくんには触れさせませんし、会わせもさせません。・・・美波さん」

気がつくとも明久は、リビングのドアを勢いよく開け、電話を玲か

らひったくり通話を切った。

「・・・何やってるんだよ、姉さん」

怒りを隠しきれずに、少し怒気がこもっている声で明久は言った。だが玲は涼やかな表情で、

「電話ですよ、アキくん。・・・アキくんを騙そうとした泥棒猫に、忠告の電話をしてたんです。あ、ちなみに番号は悪いとは思いますが、アキくんの携帯電話から知りました」

「・・・美波はそんなことをしない。美波は普通の女の子だ」「何でそんな事がわかるんですか？　もしかしたら裏で何か考えてるかもしれませんよ？　あなたが魅了的に映る事はありませんし、もしいるならあなたを騙そうとしている悪い人だけです。彼女も、あなたを騙そうとしている性悪な」

「黙れっ！！」

明久はとうとう叫んだ。怒りがこもった目で、目の前の姉を睨みつける。

「姉さんに何がわかる・・・、ずっと海外にいて、久しぶりに帰ってきたと思ったら僕の成績の事ばかり心配してる姉さんに。しかもあげくには美波の事を性悪扱い。どうせ姉さんにとって僕とのコミュニケーションや体の心配よりテストの方が重要なんですよ！　わかったよ！　お望みどおり勉強してくるさ！　絶対に凄い点数を取って姉さんに向こうに帰らせてやる！」

明久は怒鳴り終わると、ドアを乱暴に閉め部屋に向かう。もしかしたら自分は、オルフェノクとの戦いや学校生活で疲れていた所に、玲が帰ってきたのがを嬉しかったのかもしれない。だが、姉の反応はテストの心配や明久には嫌がらせとしか思えない行為、しかも美波にわざわざ電話をかけ性悪扱い。それらの原因が重なり、明久は怒りで頭がいっぱいになった。そして部屋にこもり、翌朝まで飲まず食わずで勉強をした。

第十四話 勉強会と裏切りと嫉妬（後書き）

次回はあの人が出ます。
感想お待ちします。

第十五話 テスト当日と名前忘れと姉の想い（前書き）

大変遅くなりました！ 十五話です！

第十五話 テスト当日と名前忘れと姉の想い

いよいよテスト当日となり、明久は教室に一番乗りで来ていた。そして教科書を広げ、最後の仕上げをする。

「おはよ、アキ」

「・・・・・・美波」

美波が明久に挨拶してきたが、明久はどういう態度で美波に接すれば良いか分からなかった。昨日、玲が美波に言った台詞に罪悪感がわいてきて、どう言えば良いのか分からないのだ。玲とは朝顔も見せずにマンションを出たし、一言も喋らなかったもので、夕食をどうしたかも分からない。しかし、玲は美波に性悪や泥棒猫など失礼極まりない事を言っていたので、明久として謝る気はサラサラ無かった。正直、今でもまだ怒りが収まらない。

「・・・・・・もしかして、昨日の玲さんの事？」

「・・・・・・」

無言で明久が顔を上げると、美波は少し悲しそうな顔をしていた。「・・・・別に大丈夫よ。玲さんがアキの事を心配してるのは知ってるし、ウチも葉月がいるから兄妹を想う気持ちは分かるの」

「だけど、いくら何でも美波にあんな事・・・・・・」

昨日玲が美波に言った台詞を思い出し、再び怒りが沸々と沸いてくる。

「ウチは本当に大丈夫よ。だから気にしないで」

「・・・・・・本当にごめん。今度姉さんによく言っておくから」

「ありがとう、テスト頑張るなさいよ」

「うん、美波も頑張ってるね」

美波は明久と別れると、自分の卓袱台に向かった。明久はその後

姿を眺めながら、復習を続ける。

今日の科目は現代国語・英語・世界史・数学？・科学・保健体育の六科目で、残りの科目は明日の二日目となっている。一時間目の現代国語や二時間目のリーディングについてはいつもどおりやれば良いだろう。勝負は三時間目の世界史である。ここで良い点数を取れるかどうかで全てが決まる。

「よしお前ら、席につけ。今日は期末テストの一日目だが――――
――――」

いつもの時間通りにやってきた鉄人が簡単に連絡事項を告げ、大した話も無かった為に五分もせずに朝のHRが終了した。ホームルーム一時間目のテストが始まるまではまだ時間があるので、復習を続ける事にした。勝負の鍵は世界史が握っているので、一つでも多くの単語を覚えなければならぬ。

「はい、勉強道具をしまってください。一時間目のテストを始めますよ」

夢中になって勉強をしていると、ついに監督の教師がやってきた。言われたとおりに勉強道具をしまい、テストの用紙が回されてくるのを待つ。勝負は世界史にかかるとはいえ、他の科目にだろうと気は抜けない。ここで良い点数をとれたら、玲を追い返すのが楽になるからだ。

「毎度の事ですが、注意事項です。机の上には筆記用具以外は置かない事。また、机に何かが書かれている場合はカンニングと見なされる場合がありますので、自分で書いた覚えがなくても確認するようにして下さい。それと、途中退室は無得点扱いとなりますので、よほどの事がない限りは――――」

テストお決まりの常套句を聞き流し、前の席から回ってきたテスト用紙を受け取り、裏面にしたまま後ろの席に回す。

いよいよ、期末試験の始まりだ。

現代国語と英語を特に失敗も無く終え、ついに最大の山場である世界史のテストに時間を迎えた。

「よしお前ら。テストを始めるぞ。筆記用具以外は全部しまうように」

監督の教師は鉄人のようで、野太い声が聞こえる。

「一枚ずつ取って後ろに回すように。問題用紙はチャイムが鳴るまで伏せておく事。いいな？」

前の席から問題用紙と解答用紙が回ってくる。明久は言われたとおりそれぞれ一枚ずつ取り、紙の束を更に後ろの人に回した。

そして、授業開始のチャイムが鳴る。

「始めなさい」

鉄人の合図と共に、シャーペンを手にとって解答用紙に手をかける。まずは何度も間違えてしまった箇所那年と出来事を走り書きでメモし、一通り書き終えた後で問題用紙を表にする。

解ける問題だけを素早く解き、解けない問題が目立ち始めたら最初に戻りじっくりと考える。これは問題数が無制限かつ先に進むにつれ難易度が上がる文月学園のテストならではの解き方だ。解けない問題が目立ち始めたら、そこから先は解けない問題しか出てこないと見てほぼ間違いない。そうなると問題文を読む次官が勿体無いから、考えたら分かりそうな問題のところまで戻って解いていく。このやり方は、雄二と姫路から教わったものだ。この方法でやってみると、それだけで点数に差が出る。テストは本番のやり方一つでも変わるようだ。

夢中で問題を解き、解けそうな問題も無くなってきた頃、テスト終了のチャイムが鳴り響く。

「よし。ペンを置け。解答用紙を後ろの生徒が集めてくるように」

クラスの皆が大きく息を吐く音が響き、鉄人に言われたとおり一番後ろに座っている人が解答用紙を回収して行く様子が見える。その中に、解答用紙を渡さずに粘っている朝倉の姿が見えた。その様子を見た明久は自分も解答用紙を見直す。

そして、ある一つの箇所が気にかかった。

「吉井。回収してくぞ」

「あ」

修正するどころか、懇願する暇もなく解答用紙が回収される。

壇上に集められた解答用紙は鉄人の手で一つにまとめられると、専用の袋に詰められ教室から姿を消した。

「・・・・・・・・・・」

為す術も無く去り行く鉄人の背中を、明久は黙って見送った。

「おう明久。勝負の世界史はどうだった？ きちんと解けたのか？」
そんな明久のところに席を立て雄二がやってきた。

「ああ、うん。ちょっと間違えちゃったけど、今までで一番良くできたよ」

明久が答えると、雄二は小さく肩をすくめた。

「そうか。それはつまらんな。折角お前が真っ青になって今後の対策を考える姿を笑いにきたってのに」

「何を言ってるのさ雄二。まったく洒落にならないよ」

事実、明久の間違いは洒落にならなかった。

「まあ、あれだけ勉強したもんな。点数が下がるわけがないよな」

「まったくだよ。やだなあ。あはははっ」

「ははっ。そうだよな」

雄二と二人で笑い合いながら、さっきしてしまった解答用紙に思いをはせる。

そのミスは、名前の欄に自分の名前ではなくこう書き込んでしまったのだ。

アレクサンドロス大王、と。

明久は、自分の一人暮らしに別れを告げた。

「まったく、貴方という人は……。アキくん、いえ。アレクサンドロス大王と呼んだ方が良いでしょうか？」

家に帰って、昨日の喧嘩で気まずいのも我慢して今日の成果を報告すると、玲は呆れたように言った。

「う……。て、点数はそれなりに良かったと思うんだ。ただ、無記名で0点になっちゃうってだけで……」

あれだけ大見得を切ってこの有様なだから立場が無い。当然昨日のように強く出ることも出来ず、明久は玲の前に正座し項垂れていた。

「もし名前を記入していたら高得点だったとして、だからどうしたと言うんですか。アレクサンドロスくんは受験の本番で同じミスをしてしまったら、そうやって試験管の人に言えば許してもらえると思っているのですか？」

「うぐ……」

確かに、受験の時にそんな言い訳は通用しないだろう。文月学園は常に実社会で通用する生徒の育成をスローガンにしているので、本番の時に通用しない言い訳は一切聞いてもらえない。だからこそ、姫路の振り分け試験の途中退場にも温情が与えられなかったのだ。

「うう……、僕なりに頑張ったのに……」

「ですから、頑張った結果がこれなのでしょう？」

「ごめんなさい……」

「別に謝る事はありません。姉さんは最初からアキくんにも何も期待

していませんでしたから」

「ううう・・・」

何となく期待されていないんだろうな、と思ってはいたが、実際に聞くとかなり傷つく。

「一応、努力していたことは評価に値するとは考えていますが」

「え？　そ、そう？」

「ですが、結果を残せないようでは意味がありません。努力というものとは結果の為の過程に過ぎず、いくらその行動が尊いものであるうとも、過程自体を誇るようになっては何の意味もないのです」

その考えは、何となく明久には分かった。結果を残すというのは、明久で言えば、オルフェノクから人間達と人の心を持ったオルフェノクを護る事だ。オルフェノクを倒す事では決して無い。だから、玲の言う事はどこか納得できた。

「そもそもアキくん。貴方は常日頃から勉学を疎かにしているからこのような事態になるのです。テスト前にバタバタと慌てて勉強を始めるのではなく、きちんと毎日の積み重ねを――」

玲のありがたい説教が続く。

「聞いているのですか、アキくん。だいたいあなたはいつも――」

玲がその続きを言おうとしたが、時計の電子音が鳴った事で説教が止まった。

「あら？　もう七時ですか。お説教に夢中になっていて時間が経つのを忘れてしまいましたね。そろそろお夕飯にしましょうか」

その言葉に、明久は胸を撫で下ろす。その様子に玲は目を細めて、「アキくんのテストは明日もあるようですし、続きは明日の夜にします」

玲の放った言葉に、明久の動きが凍ったように動かなくなる。

「それじゃ、何か簡単な物でも作るよ・・・」

「いいえ。今日は外で済ませましょう。時間も時間ですし」

そこまで空腹なわけではないが、家庭料理好きの玲にしては珍し

く外食が提案される。これは明久が夕食を作り結果が出せなかったら困る、などという理由によるものなのだろうか。

「行きますよ、アキくん」

「う、うん」

財布をポケットにねじ込み、念のためにファイズギアが入ったトランクケースを手にし、明久達はマンションを出た。

「……………」

（…………き、気まずい…………!!）

さっきの説教の最中に食事に行く事が決まったうえ、特に話すこともないので重苦しい沈黙がその場を支配する。明久がため息をしながらそばに置いてあった車のサイドミラーを見る。

その瞬間、明久の呼吸が停止する。

何故なら、そのサイドミラーには灰色の異形——オルフェノクが写っていたからだ。明久がその光景に身を固めていると、オルフェノクは反対側の道へ姿を消した。

「ごめん姉さん！　ちよっと忘れ物！」

「えっ？　アキく……………」

明久はそのオルフェノクが消えた道に走り、後を追う。辿り着いた先は、どこかの工場の近くのようなだった。明久が辺りを見渡すと、眼鏡をかけた男——琢磨とサラリーマン風の男が現れた。

「初めまして、吉井さん。…………あなたの命をもらいます」

そう言うと言磨はセンチピードオルフェノクに、サラリーマン風の男はナマコの性質を持つオルフェノク——シーキュカンバーオルフェノクに姿を変える。

明久はトランクケースからファイズドライバーを取り出し、腰につける。そしてファイズフォンを開き、変身コードを入力する。

『Standing by』

「変身！」

『Complete』

明久はファイズに変身し、センチピードオルフェノクに殴りかか

ろうとするが、その前にシーキュカンバーオルフェノクが襲い掛かる。ファイズは攻撃をかわしシーキュカンバーオルフェノクを殴り飛ばすが、直後にセンチピードオルフェノクがファイズの胸を蹴る。そしてファイズがよろけた隙にシーキュカンバーオルフェノクがファイズの顔面を殴り、センチピードオルフェノクが鞭でファイズを攻撃する！

「うわああああ！！」

ファイズは火花を散らしながら地面に転がる。そんなファイズにさらに追い討ちをかけようとシーキュカンバーオルフェノクが攻撃しようとするが、ファイズは倒れたままシーキュカンバーオルフェノクを蹴り飛ばす。シーキュカンバーオルフェノクは大きく吹き飛ばされ、階段の上まで飛ばされる。ファイズは急いで立ち上がり、階段の上までジャンプし、シーキュカンバーオルフェノクと格闘になる。シーキュカンバーオルフェノクから放たれた拳をかわしながら、腹に拳を叩き込む。

「はあっ！」

格闘の最中にセンチピードオルフェノクから鞭が放たれ、ファイズは間一髪でその攻撃をかわし、ファイズフォンを取り出す。そしてフォンブラスターにしながらコードを押す。

『Burst Mode』

フォンブラスターをセンチピードオルフェノクに向け、引き金を押す。アンテナから光弾が三発放たれ、センチピードオルフェノクに直撃する。

「ぐわああ！！」

センチピードオルフェノクは地面に転がり、ファイズは次に銃口をシーキュカンバーオルフェノクに向け三発の光弾を放つ。それを受けたシーキュカンバーオルフェノクが怯み、ファイズはさらに拳による追いうちをかける。

「ふん！」

シーキュカンバーオルフェノクはゲル状の液体を放ち、ファイズ

はそれをかわす。その液体がファイズの後ろの壁に当たると、その壁はたちまち溶けてしまった。

「あぶなっ・・・！」

ファイズは壁を見ながら、密かに液体に当たらなくて良かったと思った。しかし、その隙にシーキュカンバーオルフェノクが一気に距離を詰め、ファイズの首を絞める。

「う・・・・・・、うおおおおお！！！」

ファイズは腕を何とか引き剥がし、シーキュカンバーオルフェノクを階段の下まで蹴り飛ばす。シーキュカンバーオルフェノクはセンチピードオルフェノクの横に不時着した。

そして、ファイズは左手首に装着されているファイズアクセルからアクセルメモリーを取り、ファイズフォンのミッシェンメモリーと交換、挿入する。

『Complete』

音声が響き、ファイズのフォトンブラッドは銀色に、目は真紅になり、『アクセルフォーム』へのフォームチェンジが完了する。下にいるセンチピードオルフェノク達を見ながら、ファイズはファイズアクセルのスタータースイッチを押す。

『Start Up』

「はあっ！」

センチピードオルフェノクが鞭を振るうと同時、ファイズは階段を飛び降りる。そして、鞭がファイズのいた場所を攻撃した時にはもう既に、ファイズはセンチピードオルフェノクとシーキュカンバーオルフェノクの二体の背後にいた。そしてファイズは二体の腹に強烈なパンチを打ち込む。二体は腹を押さえてうずくまり、ファイズはミッシェンメモリーをポインターに挿入、右足に装着する。そしてシーキュカンバーオルフェノクを蹴り飛ばし、空中に跳び、右足をシーキュカンバーオルフェノクに向ける。

すると、シーキュカンバーオルフェノクに赤い円錐状の光が放たれる。

「やあああああああっ!!」

そして、強化クリムゾンスマッシュがシーキュカンバーオルフェノクに突き刺さり、今度はセンチピードオルフェノクに赤い円錐が向けられる。

「ううっ!」

センチピードオルフェノクは体を回転させる事で何とか強化クリムゾンスマッシュの直撃を避けるが、体には電撃が走る。

『Three Two One』

冷淡に発せられるその音声は、まるで哀れなオルフェノク達の死の秒読みをしているようだった。

『Time Out』

音声が発せられると同時に、シーキュカンバーオルフェノクは赤いΦの記号を浮かべながら灰になり消滅した。

『Reformation』

その音声でファイズは通常の姿に戻り、センチピードオルフェノクはふらつきながら逃走した。

「ふう・・・」

ファイズは変身を解除し、明久の姿に戻る。

「・・・アキくん?」

「!?!?」

突然かけられた声に明久が振り返ると、そこには玲が困惑気味の表情で立っていた。

「ねえ・・・さん・・・! いつから・・・いたの?」

「・・・あなたが『変身!』と叫んだときからです。何やら忘れ物した程度ではすまないような顔をしていたので、後を追ってみたのです」

つまり、最初から見られていたというわけか。明久が頭を抱える
と、玲が明久の服の襟を掴んだ。

「・・・良かった」

「えっ?」

「・・・アキくんが無事で、本当に・・・」

状況を把握できていないが、今のが命を懸けた戦いという事は分かったらしい。そして、顔を下に伏せる。心なしか、声が震えているように聞こえる。

「・・・心配、してくれたの？」

「・・・当たり前でしょう・・・。弟を心配しない姉などどこにもいません。・・・あなたが病院に入院した時だって、どれだけ心配したか・・・」

恐らく明久が病院に入院したときの事を言っているのだろう。その声に、明久は唇を噛む。

昨日は好き勝手な事を言ってしまったが、この姉は明久の心配をしている。常に厳しく言っている言葉も、明久を思っている事なのだろう。

「ごめん・・・」

明久には、ただそれだけしか言えなかった。

「良いです。アキくんが無事なら」

それでも、玲はそう言った。明久は、初めて姉の『弱さ』を見たような気がした。

そして、どれだけ自分が思われているかも。

二人は再び道を歩いていた。綺麗な夕日が二人を照らしている。さっきの事はあまり追及されなかった。ただ、明久が何か大変な事に巻き込まれていることは分かったようだが。

「あのね、姉さん」

「はい」

明久は玲の横顔に話しかけた。少しぶっきらぼうに見える。

「心配してくれてありがとう。僕——姉さんの事、大好きだよ」
「にやにやを」

噛んだ。玲は一呼吸する。

「いきなり何を言い出すのですか」

「あはは。勿論、家族としての好き、だけどね」

「……そんな事を言っでご機嫌を取っても、明日のお説教はやめませんし、いつか本当の事を話してもらいますからね」

「そっか、それは残念」

「当然のことです」

「当然、ね」

「当然です」

「……」

「……」

それっきり押し黙ってしまった玲と、夕暮れの中を並んで歩く。

こうして二人で出かけるのは何年ぶりのことだろう。

「……そのうち」

「ん？ 何、姉さん」

「そのうち、気が向いたら私が夕食を作ってあげてもいいでしょう」

「え？ 本当？」

「ええ。美味しすぎてアキくんが驚くようなものを作ってあげます」

「そっか。それは楽しみだね」

「ただし、気が向いたら、ですが」

きっと気が向くのは当分先になるだろう。結果を求めるくせに料理が全然ダメなのだ。人前に出せるようになるまで練習時間がたっぷりと必要になるだろう。

明久はそんな姉を見て、軽くため息を吐く。

「姉さん」

「なんですか？」

「姉さんは料理の一番のスパイスって、何だか知ってる？」

すると、玲はその言葉にっこりと微笑み、

「愛情、ですよね？」

「えっ？」

明久は少し驚いた。玲はそうゆう問題には弱い節があるので、答えられないと思っていたのだ。そんな明久を見て、玲はクスクスと笑いながら言った。

「外国で会った人が言っていました。どんな調味料にも食材にも勝るものがある。それは料理を作る人の愛情だって」

「へえ・・・どんな人？」

「とても料理が上手な方で、自分の事を『天の道を住^いき、総てを司る男』と言っていました」

「す、凄い人だなあ・・・」

そこまで言い切るとは、かなりの自信家だろう。

「ですが、それでもアキくんには美味しい物を食べてもらいたいですから。・・・いつになるかは分かりませんが。楽しみにしてください」

「うん、楽しみにしてるよ」

二人が楽しそうに歩く道は、とても温かだった。

明久たちが外食を終え帰ってきた夜、明久が風呂に入っている隙に、玲は一本の電話をかけた。

『はい、もしもし』

その声は、美波だった。玲は美波のところに電話をかけたのだ。
「もしもし、美波さん？」

『・・・玲さん？』

美波の声は、どこかキョトンとしているようだった。

「昨日は申し訳ありません。少し言い過ぎました」

『えっ？ い、いえ。ウチは』

「―――ですが」

そこで、玲の雰囲気が変わる。

「それでも、アキくんを渡しません。絶対に。アキくんを愛してるのは私ですから」

『・・・！ う、ウチもアキを絶対に諦めません！ あ、玲さんには絶対に渡しません！』

玲の声に、美波は強めに言い返す。

「・・・良いでしょう。島田美波さん。私は今日より、あなたを『恋敵』と認識する事にします」

『望むところです！ ぜえったいにアキは渡しませんから！』

「はい。私も望むところです。美波さん。それでは」

そして、通話が途切れる。明久の知らないところで、明久を愛する二人の戦いが行われようとしていた。果たして、この戦いに勝利するのは誰なのか。それは、まだ誰も分からない。

―――そして、もう一つの運命も動き出す。

「じゃ、社長！ 大変です！」

スマートブレインの社長席に、秘書が慌てて駆け込んできた。社長席に座っている村上はゆっくりと秘書に目を向ける。

「どうしました？ やけに騒々しいですが」

その言葉には、余裕が込められていた。しかし次の瞬間に放たれた秘書の言葉に、その余裕は吹き飛ぶ事になる。

「デルタのベルトが・・・、盗み出されました！」

「!? 犯人は!？」

さすがの村上も、顔に焦りが生じている。

「社内のオルフェノクです。すでに逃走されています！」

「・・・クソッ! すぐに追っ手を使い、ベルトを取り戻してください!」

「はいっ!」

その言葉に、秘書は急いで社長室を出る。村上は、齒を噛み締めながら憤怒の表情を浮かべた。

「はあはあ・・・」

ある路地裏に、一人の男が逃げていた。男の顔は青く、何かに怯えているような感じだ。

「ようやく見つけたぞ」

そんな男の目の前に、ニット帽をかぶった男が立ち塞がる。

「馬鹿なことをしたな? まさか、デルタのベルトを盗むとは。悪いが、お前を倒してベルトを回収すれば、俺はラッキークローバー入りだ。・・・死ね」

「う、うわあああああ!!」

その言葉に恐怖しながら、男はナメクジの性質を持つオルフェノク——スネイルオルフェノクに変わるが、それより早くニット帽の男はミミズの性質を持つオルフェノク、ワームオルフェノクに変わり、一気に距離を詰め、三日月状の刃でスネイルオルフェノクを切り裂く。スネイルオルフェノクは青い炎を上げながら、灰になり消滅した。ワームオルフェノクは元の男の姿に戻るが、そこである異変に気がつく。

「……デルタのベルトが無いな。まさか、別の場所に隠したのか？ ……用心深いやつだ」

男は灰を見ながら、忌々しげに呟いた。

スネイルオルフェノクが倒されたその時、スネイルオルフェノクとワームオルフェノクのいた場所から遠く離れた道に、一つのトラंकケースが落ちていた。どうやらスネイルオルフェノクは隠していたわけではなく、逃げている時に追っ手に殺されるかもしれない恐怖で落としてしまったらしい。そして、そのトラंकケースに近づくと影が一つあった。

「……？ これは……」

その影は。

ドリル状のツインテールをした影だった。

第十五話 テスト当日と名前忘れと姉の想い（後書き）

感想お待ちします

第十六話 デルタと補習と警告

「・・・はあ・・・、・・・はあ・・・」

夜の暗い夜道を一人の少女が走っていた。髪型はドリルを思わせるツインテールをしており、両手にはトランクケースが抱えられていた。

少女――清水美春は後ろ振り返りながら、全速力で走っている。そして、そんな彼女に三日月上の刃が襲い掛かる。

「・・・っ!!」

美春は頭を下に伏せながら刃をかわすが、勢い余って前へ転んでしまい、トランクケースの中身が冷たい地面に散らばる。刃はブーメランのように旋回しながら、後ろから追ってきた襲撃者の手の中に納まる。

「もうこれまでだ。あとはそのベルトとお前の命を奪うだけだ。運が悪かったと思って諦めろ」

襲撃者――ワームオルフェノクは美春に冷たく言いながら、じりじりと距離を詰める。

「・・・死ぬわけにはいきません。お姉様と結ばれるまでは、死ぬわけにはいかないんです!!」

美春は叫び返しながら、後ろに下がる。そんな美春の目にあるものが映った。それは、地面に散らばったベルトと説明書のような紙だった。美春は急いで紙を拾い上げ、速読する。

「何をする気だ？」

ワームオルフェノクは怪訝そうに言った。美春は説明書を読み終え、地面に落ちたベルト――デルタドライバーを腰に着け、音声認識方式の携帯電話型ツール・デルタフォンを手にする。

「!? お前まさか!」

「鬼が出るか蛇がでるか、試させてもらいます」

美春はデルタフォンを口元に近づけ、叫ぶ!

「変身!」

『Standing by』

そして、デルタフォンを右腰にあるデジタルビデオ型マルチウエポン・デルタムーバーにセットする。

『Complete』

音声が流れると同時に、ファイズアクセルフォームと同等の力を持つブライトカラーのフォトンストリームが美春の体を包み、強い輝きが放たれる――。

「・・・そ、そんなバカな・・・、うわあああああ!!!」

数分後、ワームオルフェノクは灰になり消滅した。その身に赤い炎と△の記号を浮かび上がらせながら。

「・・・すごいです・・・!! これがこのベルトの力・・・!!」

ワームオルフェノクが灰になった場所には一つの影が立っていた。その姿はファイズとカイザに似ており、複眼の色はオレンジ、体にはブライトカラーのフォトンストリーム。その姿の名は第三のライダー、デルタ。

そしてデルタの変身者・美春は自分の手を見つめながら嬉しそうに言った。

「・・・は、あははははは! すごいです・・・! この力があれば、何でもできる!! お姉様を、いえ・・・お姉様というあの豚

野郎と他の豚共もすべて消せる！！　待っててくださいお姉様……。すぐに美春が豚野郎共を皆殺しにして、お姉様とだけの樂園エデンを作り上げます！　あははははははははははっ！！」

月と星が輝く夜空に、壊れた少女の笑い声が響いた……。。

期末試験も終わり明久達は夏休みに入った。本来ならば夏休みなので家で過ごすか外にでて遊ぶかなのだが、明久達Fクラスは補習に出ていた。そして補習を受けに学校に來た明久たちと言うと・・。

『ぐあああああっ！　い、嫌だ！　目を閉じたくない！　最悪のビジュアルが瞼の裏に張り付いて離れない！』

『起きねえ！　福村が起きねえよ！　おい、しっかりしろよ！』

『空気を！　新鮮で涼しい空気をくれ！！』

阿鼻叫喚の地獄絵図の中に叩き込まれていた。何故こんな事になっているかというと、事の発端は明久と雄二がこの補習じしゅくから逃げ出そうと話し合っていたところに、他のFクラスの連中が協力しようとしたのだ。そして逃げ出そうとしたとき、鉄人にばれてしまった。逃げようとした代償に鉄人から聞かされたのは・・・、聞くも暑苦しいレスリング談義だった。そのせいで耳を塞いでいる姫路と美波、そして誘いに出遅れた秀吉三人を除いたFクラスはもはや精神崩壊まで追い詰められていた。

「――――そして、制限時間いっぱいまで使った俺達の寝技の攻防は続き――――ん？　なんだお前ら。もうダウンか？」

数分経ち、気がつくとFクラスのほとんどは卓袱台に突っ伏して気を失っていた。

「やれやれ、仕方がない。十分間だけ休憩を入れよう。脱走なんてくだらないことを考えた自分を反省するように」

鉄人は耳を塞いでいる三人にジェスチャーで手を離すように伝え、休憩の旨を伝えて教員用の席に座った。休憩時間を取っても教室から出て行く気はないらしいのは、明久達の脱走を警戒しているからだろう。

死屍累々の教室の中で、耳を塞ぎ鉄人の話を聞いていなかった姫路達が明久達のところにやってきた。

「あの、明久君。何があったんですか？ 皆さんとても苦しそうですねですけど……」

姫路が卓袱台に突っ伏しているクラスメイト達を心配そうに見ている。

「えーっと、なんていうか、言葉の体罰というか、精神攻撃を受けたというか……」

説明をしたいところだが、そのためには例の話を思い返さなければならぬ。明久は正直そんなことはしたくなかった。

「まったく、どうせまたくだらない事でしょ。脱走なんて考えたんだから、先生だって怒って当然じゃない」

姫路の隣では美波がため息でもつきそうな表情で明久を見ていた。「そうは言うがな、島田。俺と明久の席は脱走を考えても仕方ないくらい酷いもんだぞ。全身から水分が全てなくなっちまいそうなくらいだ」

雄二の言うとおり、明久と雄二の席の日当たりは良好を通り越して過剰だ。このクラスにはカーテンがないので、日光を防ぐ事もできない。カーテンの有無など今まで気にしなかったが、ここでカーテンのありがたみを思い知る事になるとは思ってもよらなかった。

「そうなの？ ウチの席はそこまで暑くないからよくわからないけど」

「私も風が入ってきてくれるので結構大丈夫です」

「俺達の席は日当たり最高で風通し最低のワーストポジションだから」

らな。本当に酷いもんだ」

「酷いって、どのくらい酷いんですか？」

「明久の成績ぐらいだ」

「人間の耐えられるレベルじゃないわね」

その言葉に明久はムツとなるが、本当の事なので何も言い返せなかった。

「でも、確かにこの席は雄二の席ぐらい酷いんだよ。さっきペンのアルミ部分に触ってたら軽く火傷しちゃったしね」

おそらく鉄板でもしたら目玉焼きぐらい作れるだろうと明久は思った。

「火傷したの？ どれどれ？」

「あ、いや。そこまで酷いものじゃないけど」

美波が自然な動きで明久の手を取る。どうやら火傷の心配をしているらしい。

「なんじゃ島田。お主、随分と明久に優しいではないか」

「そうです。美波ちゃんは明久君に近すぎますっ」

そんな明久達の様子を見て、秀吉と姫路がそんな事を言った。

「べ、別にアキに優しいってワケじゃ……！ ただ、怪我してたらウチが殴る時に手加減しなくちゃいけないってだけで……！！」

どうやら怪我をしていても殴る事は殴るらしい。

「でも、僕も美波は優しいと思うよ」

「え……？ あ、アキまで何言ってるのよ」

「面倒見がいいし、細かいところに気がつくし、妹思いだし。胸は小さいし」

「何ですってー！！」

「は、はいはい、落ち着いて」

拳を振るおうとする美波に、明久は少し腰を引かせながら右手で美波の頭を撫でる。

「こんなもので、ウチを落ち着かせられると思ったら大間違いふに

「やあ」

「・・・落ち着いてる」

「ち、違いわよ！ 落ち着いてるわけじゃふにゃあ」

明久に頭を撫でられるたび、猫のように甘えた声を出しながら美波は気持ち良さそうな表情になる。さっきの明久の胸が小さい発言は、貧乳好きの明久にとって褒め言葉だったのだが、どうやらそこまで気がついていないらしい。

「じゃがまあ、確かにこの席は暑いろう。お主らが脱走を企てるのも無理はないかもしれん」

秀吉が明久の卓袱台に手を当てながら言った。

「そう言えば、秀吉はおとなしくしていたよね。脱走の話は聞こえなかったの？」

「いや、聞こえておったが・・・ワシの席はお主らの席よりも涼しいからの。まどろんでおったら誘いに乗り遅れたのじゃ」

いくら明久達よりもマシだと言ってもこの暑さの中で居眠りが出来るとは、やはり秀吉はただものではないかもしれない。もしかしたら起きてるように見せかけて眠るという演技をしていたのかもしれない。

「なんじゃ。ワシが脱走に乗らんのはまずかったかの？」

「いや、まずくはないよ。ただ、いつも一緒につるんでるバカ仲間としては、いないと寂しいなって思っただけで」

こういう事に関しては女子である姫路や美波は誘いにくい。仲の良い友達とバカ仲間とは似ているようで違う。

「そうじゃったか・・・」

「？ 秀吉、嬉しそうだね？」

気のせいかな、秀吉が笑顔を浮かべているように見える。

「うむ。正直なことを言えば、バカ仲間と言ってももらえるのは嬉しいぞい。最近のお主はワシを女と見ておるように見えたからの。外見が姉上に似ておるといふ部分以外はどうでも良いのかと、少々気にしておったところじゃ」

確かに秀吉は姉の優子と瓜二つの上に、十分可愛い部類に入るだろう。だが、

「秀吉もおかしなことを気にしているね」

「いや、最近のワシの扱いを鑑かんみれば決しておかしくはないと思うのじゃが……」

明久が笑い飛ばすと、秀吉は納得がいかないとでも言うように口をとがらせた。

「どうしてそんな事を気にしているのだろうか。」

「だって、外見以外はもういいなんて、そんなわけないじゃないか」

「じゃが、ワシは」

「確かに秀吉は可愛いと思うけど、それだけでこうやって一緒にいるわけじゃないからね。一緒に遊んだり、勉強したりして、秀吉の中身の良いところを一杯知ってるから、こうして一緒にいるんだよ」
見た目で友達を選ぶなど、そんなのはおかしい事だろう。少なくとも明久はそんな人間ではない。

「……っ!!」

「ん？ どうしたの秀吉？」

「こ、こっちを見るでないっ」

そう言うと、何故だか秀吉は隠れるようにこちらに背を向けてしまった。

「瑞希……。木下ってズルイわよね……。女の子みたいに扱われてるクセに、こういう時だけ異性を意識させないであんな事言って貰えるんだもの……」

「ですよね……。私、頑張っているのが虚しくなってきたやいます……」

姫路と美波はため息混じりに何かを愚痴りあっていた。

「んむ……。？　ところで明久。ワシを女として見ておるという部分是否定されなかったような気がするのじゃが？」

「あはは。秀吉もおかしなことを気にしてるね。別にそんなことは

口にしないで」

「何故明言を避けるのじゃ!? ええい! お主はワシを異性と思
っておるのか、きっちり『はい』か『いいえ』で答えるのじゃ!」

「はエス」

「むう………。二つが混ざってどちらかわからんような返事
——ではないぞい!? さてはお主、『はい』と『イエス』を
混ぜおったな!? やはりワシを女と思っておるのじゃろ!」

「ところで雄二。ムツツリーニがかなり危険な状態に見えるんだ
けど」

「答えるまでもないと言わんばかりにスルーされておる!？」

いつもなら休み時間には明久達と一緒に集まってくるかカメラを
いじっているムツツリーニが、何故か今日は死んだようにじっとし
ている。

「アイツの想像力は常人の比じゃないからな。さっきの恐ろしい話
を聞いただけで鉄人とブラジル人の暑苦しいレスリングが脳内で鮮
明な画像になって浮かび上がったんだろ」

「……それはひとたまりもないね」

その話を聞いて明久は納得した。どおりで死んだようにピクリも
動かないはずである。

「それにしても暑いな……。さっきから全然汗が引かない
ぞ……」

「そうだよね……。こんな環境だと勉強する気なんて全然
出てこないよね」

畳と卓袱台という設備が今は暑苦しさを増すための物にも見えて
きてしまう。明久もこれには流石に応えるようだ。

「なによアキ。アンタ、この間の期末試験は随分とやる気があった
みたいなのに、今はもういつも通りに戻っちゃったの?」

「この前のは姉さんを撃退する為だったから例外だよ。元々あまり
勉強は好きじゃないからね」

テストの結果、玲は日本に戻ってくることになった。今は引越し

のための準備のため一旦両親の元に帰っているが、明久の自由はもはや風前の灯火である。

だからこそ夏休みを満喫したかったのだが、そこに補習である。もはや、明久に自由な時間はほぼ残されていないと言って良いだろう。

「それに、この前の試験はもう一つ理由があったからな」

明久と同じように勉強する気に翳りを見せている雄二が言う。

「もう一つの理由って、試験召喚獣の装備のリセットというお話ですか？」

明久達が頑張っていたもう一つの理由がこれだ。本来ならば召喚獣の点数はリセットされないはずだったのだが、今回特別に理事長から召喚獣の点数をリセットし、召喚獣の装備を一新する事が許されたのだ。そのため、明久と雄二はかなり頑張ったのだ。本人達の召喚獣の装備や木刀やメリケンサックなので、一新したい気持ちも分からなくはない。

「うん。僕や雄二の装備はめっちゃ弱いからね。新しい装備になればもっと強くなれると思ったんだけど……」

「お前はよりによってその大事な試験で名前の記入ミスをやらかしたからな。また学ランに木刀だろうな」

「うう……。せめて金属製の武器が欲しいよ……」

木刀の素材は木なので、相手の武器とぶつかり合うとすり減っていく気がするので明久としては嫌だった。

「まあ、あの結果では明久の装備は変わらんじやろうが、雄二はどうなのじゃ？ おぬしは去年の振り分け試験からかなり点数が向上しておらんかったかの？」

「ん？ そういやそうだな。周りの連中の点数ばかり気にしてあまり自分の点数や装備を気にしていなかったな」

「雄二は指揮を取る立場だもんね。あまり自分が直接戦う場面を想定しないよね」

「ああ。俺の装備が向上するよりも周りの連中が強くなるほうがよ

つぽど勝負がやりやすいからな」

自然にそんな考えが浮かぶのだから、雄二は根っからの指揮官肌なのだろう。

「ワシも期末試験は結構出来が良かったからの。もしかしたら良い装備になっておるかもしれん」

「ウチも振り分け試験よりも問題が読めたから、ちよつと強くなってるかも」

秀吉と美波も点数が上がってきているようだ。それを見て明久はあることを思いついた。

「あ。それなら一度召喚獣を呼び出してみようよ。皆がどんな装備になっているのか気になるし」

もしかしたら明久の装備も良いものになっているかもしれない。

前の装備が結構最低だったため、あれ以下になることもないだろう。

「そうだな。戦力の把握は試召戦争に必要不可欠だ。幸いにも鉄人がいることだし、召喚許可をもらって確認しようぜ」

「そうだね。すいませーん、西村せんせーい」

明久が黒板近くに座って教室の様子を見ていた鉄人に呼びかける。すると鉄人は怪訝そうな表情をしつつ明久達のところにやってきた。

「どうした吉井。お前が俺を呼ぶなんて珍しいな」

確かに会話をするたびに生傷が増える相手に好きこのんで自分から話しかける明久もバカではない。そのため鉄人の反応はある意味正しいと言えるだろう。

「すいません。ちよつと先生にお願いしたい事があったもので」

「お願いだど？ おかしなことじゃないだろうな」

「はい。ちよつと・・・」

「おーい。吉井」

明久が鉄人に許可を貰おうとしたその時、同クラスの須川が明久を呼んだ。

「どうしたの？」

「なんかお前を呼んでる人が廊下にいるぞ」

「えっ？ 誰だろう・・・？ ごめん雄二。話しといて」

「ああ、分かった」

雄二にそう言い、鉄人に軽く礼をしながら廊下に向かう。そこにいたのは――

「花形さん？」

そこにいたのは、彼らの協力者であり学園長の親友、花形だった。
「久しぶりだね」

「あ、はい。お久しぶりです。どうしたんですか、こんなところまで？」

「実は君に話しておきたいことがあってね。後で坂本君にも話しておいてくれ」

花形は明久の目をまっすぐに見据え、話し始めた。

「昨日、スマートブレインからベルトが盗み出された」

「っ！？」

「ベルトはデルタのベルトだ。五本の中で最も初期に作られたベルトでツールも少ないが、ファイズやカイザよりも強大な力を誇る危険な物だ」

花形の言葉に驚愕しながらも、明久は言葉を紡ぐ。

「でも・・・、一体誰が？」

「どうやら社内のオルフェノクのようなだ。恐らくデルタのベルトを使って強大な力を振るおうとしたのだろう・・・だが、そのベルトがまだスマートブレインに回収されていない。もしかしたら、そのベルトを使って君達に襲い掛かるかもしれない。十分に気をつけてくれ」

「でも、そのベルトを奪えば逆に戦力が増えますよね？」

「・・・そう簡単にはいかないだろうがね・・・」

その言葉に明久が眉をひそめると、花形が理由を言った。

「デルタには変身者の闘争本能を活性化させる装置、デモンズスレートが胸部に装備されている。これによってベルトの不適合者は攻

撃的な性格に変貌していくという欠陥がある。まだ『カイザの記号』しかできていないし、君のような適合者がいるならば話は別なのだが……。とにかく、変身者は選ぶ必要があるかもしれない」

「・・・そのことで気になってたんですが・・・」

明久は重々しく言った。まるで聞きたくないようなことを聞くかのように。

「ファイズとかに変身する条件って、何なんですか？ どうして僕はファイズに変身できたんですか？ 教えてください」

その場を思い沈黙が包む。そして、花形が口を開いた。

「それは――――」

「きゃーっ！」

その時、Fクラスの教室の中から悲鳴のようなものが上がった。

「っ！？」 すいません、話はまた今度！」

明久はそう言うと、Fクラスの中に戻っていった。一人残された

花形は、明久が消えたFクラスへと目を向ける。

「・・・もしも君がその真実を知れば、君は恐らく君ではなくなるかもしれない。・・・だがそれも仕方がない事だ。それも君がファイズギアの適合者であるがゆえの宿命なのだから・・・」

花形はFクラスの教室に背を向け歩き出す。

その影は、花形のものとは違う異形の姿になっていた。

第十六話 デルタと補習と警告（後書き）

最近早く更新できなくて申し訳ありません。
感想お待ちしております。

第十七話 お化けと肝試しと悪の影（前書き）

遅れて申し訳ありません！　今までで最長の話です。

第十七話 お化けと肝試しと悪の影

「・・・つまり、調整に失敗して召喚獣がお化けみたいになってたって事？」

教室に戻った明久が見たのは、様々な妖怪に姿を変えた召喚獣の姿だった。雄二と秀吉の話によると、今回の調整は幾ばくかの偶然やオカルト的な要素が含まれているが、今回は調整がオカルトの部分が色濃く出てしまったことで、召喚獣の姿が妖怪のものになってしまったらしい。

「ああ、鉄人の話じゃ召喚者の特徴や本質から呼び出される妖怪が決定されるらしい」

明久の問いに雄二が答えた。それを聞いて明久は納得した。呼び出された召喚獣は、雄二は狼男。これは恐らく雄二の特徴が野生だからだろう。秀吉は化け猫。これはただ単純に特徴が『可愛い』からだろう。ムツツリーニは吸血鬼。言われてみれば常に血を欲しているイメージがあるし、若い女が好きという点も酷似している。姫路はサキュバス。雄二の考察によると『大胆』だかららしい。そして美波は、ぬりかべ。これを聞いたとき、明久は笑ったら自分の命がここで終わるという直感を感じた。ちなみにFクラスはゾンビ。性根が腐っていると言う分かりやすい原因だった。

「へえー、じゃあ僕の召喚獣は何だろ。試獣^{サモン}召喚」

明久が呟くと、甲冑を着て大剣を持った召喚獣が現れた。しかし大剣を持っている逆の手にはその召喚獣の生首が抱えられている。その姿を見て、姫路と美波がわずかに息を飲むのが聞こえた。

「首がなくてこの格好ってことは、デュラハンか？」

「確か召喚者の特徴や本質から決まるんだよね？　そうするとデュラハンが選ばれたっていうのは、僕の騎士道精神が召喚獣に影響を与えたからってことだね」

明久が自慢げに言ったが、雄二がため息でもつきそうな表情で言った。

「明久。現実から目を背けるな」

「え？　違うの？　そうになると他に考えられるのは、甲冑の似合う男らしさとか、大剣を振るう力強さとか」

「恐らく『頭がない』バカ』だからじゃな」

「言ったあー！　僕が必死に目を逸らしていた事実を秀吉が包み隠さずに言ったあー！」

まさか試験召喚システムにまでバカにされるとは明久も予想外だったろう。この事実から必死に目を逸らしていたが、現実は残酷である。

「じゃが、こうしてみる限りは以前の召喚獣よりも強そうではないか。武器も金属のようじゃし、鎧もつけておる」

「そ、そうだよね。前よりは強そうだよね」

特徴や本質などはともかく、強くなった事は素直に喜ぶべきだろう。

「俺には強くなったようには見えないけどな」

だが、またもや雄二が水を差すような事を言ってきた。これにはさすがに明久も不満げな表情になる。

「なんだよ雄二。何が不満なのさ」

「その取り外しができる頭が問題だろ。戦ってる最中に頭が取れたらどうなる？」

雄二が召喚獣の手をしている首を指差す。

「……………狙われるね、確実に」

「そうじゃな」

頭は急所と言ってもいいぐらいの致命的な部分だ。それが体に守られず地面に転がっていたら無防備もいいところだ。

「そういうことだ。つまり明久の召喚獣はどちらかの手で自分の頭を抱えないとならない。片腕しか使えないなんてハンデもいいところだな」

「う……………確かに」

確かにそう言われれば装備が多少上昇したところで強くなったとはとても言えない。むしろ以前の召喚獣の方が、装備が少し頼りなかった分両手が自在に使えたのでそっちの方が強かったかもしれない。これでは弱点が増えたといっても過言ではない。

「それはそうと、この召喚獣はきちんと次の試召戦争までには直るのか？　こんなのでクラス間の勝負なんてやったら妖怪大戦争になっちゃうだろ」

「そ、それは困ります……………。怖いのも困りますし、私の召喚獣は恥ずかしいですし……………」

明久の袖を少し力を入れて掴みながら姫路が言った。確かにこの召喚獣で戦争などやったら、怖いものが苦手な姫路や美波が気絶しそうである。

「召喚システムの調整については俺もよく分からん。学園長なら何か知っているかもしれないがな」

鉄人が眉根を寄せる。これは教師側にとっても好ましい事態ではないようだ。

「確かにその辺りは鉄人よりもババアに聞いたほうが良さそうだな。なんたって召喚システムの開発者様だからな」

「そうだね。学園長に聞いてみようか」

明久と雄二の二人は立ち上がり、学園長室を目指して歩き出す。試召戦争は二人だけでなくFクラス全体にとって大事なもので、このまま放って置くことはできない。急いで学園長に確認する必要が二人にはあった。

『キサマらっ！　ドサクサに紛れて脱走か！』

「しまった雄二！ 気付かれたよ！」

「走れ明久！ 学園長室に逃げ込めばこっちのもんだ！」

「了解っ！」

こうして二人は、鉄人に追われながら学園長室まで走った。

「んで、どうなんだ学え————ババア」

「教えてください、学え————ババア」

「……どうしてアンタ達はアタシを素直に学園長と呼べないのかねえ……」

明久達が問い詰めると、学園長は呆れたようにため息をついた。

それを見て明久達はしまった、と思った。最近鉄人やムツツリーなどとニックネームで呼ぶことが多くなっていたので、ニックネームの方で呼ぶ癖がついてしまったようだ。

「すいません学園長」

「はンッ。今更言い直しても教えてやるもんかい。このクソガキどもが」

「そんな！？ 酷いですよババア長！」

「その呼び方は今までで一番酷いさね！？」

明久は慌てて自分の口を閉ざす。どうやら勢い余っておかしな混ざり方になってしまったらしい。

「おい明久。巷で若いと評判の学園長（笑）にあまり失礼な発言をするな」

「アンタも十分失礼だよクソジャリ」

雄二の一言でさらに学園長の機嫌が悪くなる。それを見た明久は少し焦った。このままでは理由を教えてもらえなくなるかもしれない。しかし雄二は冷静に続けた。

「んで、ババア。正直なところどうなんだ。きちんと復旧するの？」

「はあ？ 復旧？ 何を言っているんだいボウズども。それだとまるで召喚システムに欠陥があるみたいじゃないか」

学園長はバカを見るような目で明久を見る。明久は心外だと思っただが、周りの噂などから考えれば明久がそんな目で見られるのは至極当然だろう。

「だって、まるでも何も、見るからに調整失敗しているじゃないですか」

「いいや、違うね」

通販番組の外国人みたいに学園長は首を振る。

「アレはちょっとした遊び心さ」

「遊び心？ どういうことですか？」

明久達には、どう見ても失敗にしか見えなかった調整が、遊び心とは一体どういうことだろうか。

「今は夏だからねえ。肝試しにはもってこいの季節だろう？」

「は？」

その言葉を聞いて明久達の目が丸くなる。

「つまり、ババアは肝試しの季節に合わせて召喚獣も妖怪仕様にカスタマイズしたち言いたいのか？」

「そうさ。あれは夏休みでも登校する可愛い生徒たちへの、アタシからのささやかなプレゼントさ」

「プレゼントって、そんなバカな……」

本当にそうだとしたら、事前に告知ぐらいはしておくはずだ。それを言わない時点でかなり怪しい。

「ん……そうか。まあ、ババアがそう言うのならそういうことにしておくか」

「え？ 本当の事を聞かないの？」

雄二の意外な一言に、明久は驚いた。雄二の性格なら学園長の弱みを握ったとでも言わんばかりに問い詰めそうだからだ。

「別にここでババアに『実は調整失敗だった』なんて言わせたところでメリットはないだろ。それより、学園長のありがたい心遣いに甘えさせてもらおうぜ」

「甘えさせてもらうって……それってつまり、さっき言われたように召喚獣を使って肝試しをやるってこと？」

「ああ。学園長もそれを考えた上でのプレゼントって言ってるんだろ？ 俺達に召喚獣の異変が伝わった以上は、世間体を考えると学園側も何もしないわけにもいかないだろうしな」

雄二が視線を送ると、学園長は小さく嘆息して頷いた。

「やれやれ……。本当にアンタはこういうことだけには頭が回るねえ……」

頭が回るとい言葉聞いて、明久は首を傾げた。明久には雄二と学園長の言っている言葉が全く理解できないからだ。

「つまり、試験的なシステムとして運営している以上、学園側は召喚システムの調整を失敗したとは言にくいってことだ。隠し切れるならそれで良かったんだが、生徒にばれた以上はそうもいかない」

「ああ、なるほど。だから肝試しをやることで『元から計画していた出来事』にしようってわけか」

世間から注目を浴びるということは、大きな評価を得やすいと同時に、失敗したという事実も暴露されやすい。今回はそれを考えての行動なのだろう。

「じゃあ、そういうことで残り二日の補習期間は肝試しってことでいいんだよね？」

雄二が嬉しそうに学園長に問う。恐らく最初からこの肝試しを利用して、鉄人の補習^{じしゅく}を潰す気だったのだろう。明久は内心舌を巻くと同時に、そんなことを考えた雄二に拍手を送ってやりたくなった。補習がなくなるのは明久にとっても嬉しいことだからだ。

「いや、ただの肝試しなら却下さね。あくまでも召喚獣は学習意欲向上の為のツールだからね。見た目だけで楽しむのは授業の一環とは認めないよ」

そこだけは譲れない、と言わんばかりに学園長が首を振る。

つまり、どこかに点数を使った勝負の要素を織り込まなければダメということだろう。

「それならチェックポイントでも作って、そこで勝負させるか。それなら文句はないだろう？」

「そうさねえ……。ルール次第だけど、それなら認めてもいいかもしれないね」

「よし。決まりだな」

雄二が満足そうに頷く。

こうして、学園と試験召喚システムを使った一風変わった肝試しが行われることになった。

『おーい！ 誰かその釘をとってくれー！』

『暗幕足りないぞ！ 体育館からひっぺがしてこい！』

『ねえ、ここの装飾って涸れ井戸だけでいいのー？』

「これはまた、凄い騒ぎじゃな」

「うん。雄二が鉄人の補習をサボる為に本気で手を回していたからね」

翌日、文月学園の新校舎3Fは肝試しの為の改裝作業で大いに賑わっていた。

「それにしても、まさかAクラスまで協力してくれるとは思わなかったよ」

肝試しの会場に使う教室はA～Dクラスのものだ。折角やるのなら、広さがあって涼しさを演出できる教室を、という理由で提案してみた明久達だったが、本当に教室を使わせてくれるとは予想外だった。

「Aクラスとてワシらと同じ歳の高校生じゃ。勉強ばかりでは息が詰まるじゃろうからな。期末試験も終わったばかりじゃし、渡りに船といったところじゃろ」

「そりゃそっか。遊びより勉強が好きな高校生なんてそうそういないよね」

世の中には同じ性格の人間が大勢いるわけではない。もしかしたらそんな人物もいるかもしれないが。

「わ、私はできれば、肝試しよりはお勉強の方が……」

困ったように姫路が呟く。遊びとは言っても肝試しなので、怖いものが苦手な姫路にとっては勉強の方がマシなのだろう。

「だ、大丈夫よ瑞希。どうせ周りは全部作り物なんだし、お化けはウチらの召喚獣なんだから、怖いことなんて一つもないわ」

「それはそうですけど、それでもやっぱり苦手です……」

姫路を諭すというよりは、自分に言い聞かせるように思える美波の台詞。

「あれ？ 美波ってこういうの苦手だっけ？」

「そ、そんなことないわよ！ こんなもの、怖くも何ともないから目を瞑っていても平気なんだから！」

目を瞑っているのは怖がっている証拠なのではないか、と明久は思いながらその言葉を飲み込んだ。そんな事を言って美波の理不尽

な暴力を受けるのはあまり賢い選択とは言えない。

「な、何よアキその目は！　ウチの言っている事が信用できないって言うの！？」

「うーん………。だって、さっきから美波は怖がっているようにしか見えないからさ」

「じよ、冗談じゃないわ！　怖い訳ないじゃない！」

美波はこれ以上ないぐらいに動揺している。それを見た明久の頭に、少しからかってみようという考えが浮かんだ。

「そう言えば、噂で聞いたんだけど」

「な、何よ」

「この学校の建っている場所って………実はワケありらしいよ」

「わ、ワケありってなんですか………」

美波の隣にいた姫路も不安げに明久を見つめている。

「あははっ。それはね———本当にお化けが出るんだってさああああああっ！」

「きゃああああああっ！」

これは明久の声に驚いた姫路の声である。

「いやああああああっ！」

そしてこれは、姫路と同じように明久の声に驚いた美波の叫び声だ。

「みぎゃああああああっ！」

ちなみにこれは、驚いた美波が勢いよく飛びついてきたおかげで頸椎に深刻なダメージを受けた明久の叫び声だ。文字通りに痛いほどの恐怖を明久は知った。

「ご、ごめん美波……。冗談だから、離れて……。くれないかな………」

安心させるために微笑を作りながら美波に話しかける。ここで解放してもらわなければ明久の命に関わる。

「う、うそ……。っ！　だって、ウチには聞こえてくるもの・

「……！『呪う、クロス』って……！！」

明久はその言葉に少し笑いそうになった。いくら何でもそんな幻聴が聞こえるはずがないと思ったからだ。しかし、次の瞬間その考えは粉々にぶち壊される。

『吉井……！！あの野郎……！！』

『コロスコロスコロスコロスコロス……！！』

『吉井……！！。テメエの罪を数えて、地獄を楽しみな』

視界の隅にFFF団の黒装束が目に入った。どうやら彼らにとって今の明久の状況は呪い殺したいほどに妬ましいらしい。

「あ、明久君……！！っ！私にも聞こえます……！！っ！！」

彼らの声が聞こえたのか、姫路も怯えた様子で明久の方を見ている。周りは肝試しのためにかなり薄暗い状況なので、これは怖いだろう。

「……！！明久」

「「きゃあああーっ！」」

美波と姫路の悲鳴と同時にコキュツと小気味良い音が明久の腰部から聞こえてきた。恐らくこの音は腰骨から絶対に聞こえてはいけない音だろう。

「だ、誰かと思ったら土屋君ですか……！！。驚かさないでください……！！」

「ま、まったくよ……！！。おかげでアキの腰がおかしな方向を向いちゃったじゃない」

「……！！ごめん」

ムツツリーニが申し訳なさそうに謝った。

「それで、ムツツリーニ。僕に何か用？」

死の抱擁から解放されながらムツリーニに尋ねる。女子に抱きつかれるというのは本来ならば嬉しい出来事なのだが、何故か喜びよりも先に恐怖が先行してしまう。

「……………向こうのロッカーを動かして欲しい」ムツリーニがAクラスの教室の隅に置いてある大きいロッカーを指差した。さすがAクラスなだけあって、ロッカーまでもが立派なものだ。あれを人の力で動かすのは難しいだろう。

「わかったよ。それじゃ、召喚許可を」

「……………もう頼んである」

ムツリーニの後ろの方に世界史の田中先生の姿が見える。こういう雑用の時だと先生の許可もスムーズなので大いに助かる。

「オッケー。んじゃ、試^{サモン}獣召喚っ」

床に幾何学的な模様が描かれ、姿を改めた召喚獣が姿を現す。今までの召喚獣とは違い手足が長いので、こういった作業の時は便利かもしれない。

のっしのっしと召喚獣を動かして目的のロッカーの前に立たせる。

「このロッカーをどけたらいいんだね？」

「……………（コクリ）」

指示を受けた召喚獣がロッカーに手をかけた時、コロリと頭が外れた。

「……………っ!？」

姫路と美波が息を飲む様子が見て取れた。確かに今の薄暗い教室の中でこの光景はちよつと怖い。

「頭が外れちゃうのは不便だなあ……………」

「……………ガムテープで固定するとか？」

「うーん……………。一旦消すとまたテープを貼らなきゃいけないって面倒だし、折角の肝試しなんだから首が外れないと意味がないし……………このままでいいや」

システムの調整が終わったら召喚獣は元に戻されるので、今しか味わえないこの感覚を味わう事にした。

「じゃあ動かすよ。――――よいしょと」

頭を床に転がしおいて両手でがっしりとロッカーを掴ませる。人の何倍もの力を持つ召喚獣はその重たげなロッカーを抱え上げた。あとはこのロッカーを持っていくだけと明久が思ったその時。

「痛あつ！」

突然、明久の頭に激痛が走った。慌てて召喚獣の首を見る。

『死ね！このゲス野郎があああ！！』

『絶望がテメエのゴールだ吉井iiiiiiii！！』

『ありがたく思え、処刑タイムだ！』

見てみると、Fクラスのはぼ全員が明久の召喚獣の頭を思いつきり踏みつけている。しかも今は召喚獣にロッカーを抱えさせているので頭を取り戻すのは難しいし、召喚獣に指示を出している間は明久自身が動くのも厳しい。

「――「試獣^{サモン}召喚っ！」――」

しかもFクラスのメンバーが召喚獣を呼び出した。召喚フィールド内にゾンビが溢れ出てくる。

「パス行くぞー。おらあつ！」

「あがあつ」

「ナイスパス。くたばれクソ野郎が……！ どりやあつ！」

「ふぎやあつ」

「オツケー！ シュートおつ！」

「うぐあつ」

デュラハンの首でゾンビがサッカーをする景色は、地獄絵図と言っても良いほどのものだった。しかも人の何倍もの力を持つ召喚獣に蹴られまくっているので、さっきFクラスのメンバーに踏まれて

いたよりもかなり痛い。明久は心の中で助けを求めた。

「待つんだ。それ以上吉井君を苛めるのなら、僕が相手になろう」

その明久の助けに答えるかのように、Aクラス次席の少年、久保利光が現れた。

「ありがとう久保君！ 助かるよ！」

「気にしないでいいよ吉井君。君の事は僕が護るよ——いつまでも」

その言葉を聞いた瞬間、明久の背筋に寒気が走った。

「Aクラスがどうした！ 俺達の邪魔をするなら誰だろうと皆殺しだ！」

「僕は負けない……！ そう。僕が今まで勉強を頑張ってきたのは、きつとこういう時に吉井君を護るためなんだ——試^{サモン}獣召喚っ！」

久保が召喚獣を召喚する。装備はわらやボロ布などを着ており、みすばらしい格好だ。何の妖怪だろうか。

「ムツツリーニ。あれは何の物の怪か分かるのか？」

「……迷ひ神」

未だに蹴られ続けている明久の召喚獣の頭を気にした風もなく、秀吉とムツツリーニが呑気に会話をしている。

「……人を迷わせる妖怪。一説では、道に迷って果てた人の魂が道連れを探しているとか」

「なるほど……。人の道に迷って、仲間を引きずり込もうとする連中というわけじゃな……」

秀吉とムツツリーニがそんな会話をしているなか、いよいよ試召戦争が始まろうとしていた。

「かかれーっ！！」

「来るなら来いっ！ 僕は絶対に負けない！」

ゾンビVS迷ひ神の戦いが始まり、生首を抱えているバイ〇ハザードもびっくりの大量のゾンビの群れに迷ひ神が襲い掛かり、向こうも対抗して腐った身体で引っ掻きや噛みつきを繰り返してくる。

飛び散る腐肉に、宙を舞う生首。弾け飛ぶ四肢。

「「「きゃあああああーっっ!!」」」

そのあまりに凄惨な光景に、姫路や美波は元より、クラスにいた他の生徒達も悲鳴を上げている。なまじ等身大になっている分タチが悪い。

『こ、こっちに來ないで! 試獣召喚!』

『大丈夫かミホ!? 畜生、俺の彼女をよくもビビらせてくれたな・
・・・・! 試獣召喚っ!』

『彼女だと・・・・・? 今コイツ彼女って言ったぞ! 裏切り者だ!』

『『殺せええっ!!』』』

あっという間に広がる混乱の輪。今や先生を中心とした召喚フィールドは阿鼻叫喚の妖怪大戦現場となっていた。

あまりにも騒がしくて、先生が召喚フィールドを取り消そうとしたその時。

「「「お前らうるせえんだよ!!」」」

三階ではあまり見ない生徒達が大声で怒鳴り込んできた。何人か見知った顔があるが、明久の記憶が正しければその数人は三年生のはずだ。

「騒がしいと思ったらやっぱりまたお前か! 吉井!」

「お前はつくづく目障りなヤツだな・・・・・!」

坊主頭の三年生とモヒカン頭の三年生が明久の顔を見て嫌そうに

顔を歪めた。明久にはその三年生二人の顔に見覚えがあった。

「変た——変態先輩でしたっけ？」

「おい！？　今言い直そうとしたくせに俺達の顔を確認して言い直すのをやめなかったか！？」

「お前俺達を心の底から変態だと思っているだろ！　常村と夏川だ！　いい加減名前くらい覚えろ！」

そこで明久は思い出した。文化祭で散々邪魔してきた常夏コンビだ。

「それで常夏先輩。どうしたんですか？」

とりあえず召喚獣にロッカーを一旦下ろさせ常夏コンビに向き直る。

「テメエ……。個人を覚えられないからってまとめやがったな。。。。」

「さすがはあの吉井明久だ。脳の容量が小さすぎるぜ」

常夏コンビは明久に向かって失礼な言葉を吐く。しかし事実なので文句のつけようがない。

「っていうかお前らうるせえんだよ！　俺達への当てつけかコラ！」

「夏期講習に集中できねえだろうが！」

常夏コンビと一緒にいる他の三年生たちも「そうだそうだ」と騒ぎ立てる。何故か殺気だって見えるのは、受験勉強でピリピリしているせいだろうか。確かに夏を制するものは受験を制するというくらいにこの時期は受験生にとって大事な時期だ。下の階でこうもぎゃあぎゃあと騒がしくされたらたまったものではないだろう。三年生達が怒るのも無理はない。そう思った明久は素直に謝っておく事にした。

「すいません。上の階まで響いているとは——」

「おいおいセンパイ方。そいつは酷い言いがかりじゃないか？」

頭を下げようとしていると、そこに雄二がやってきた。

「え？　雄二。言いがかりってどういうこと？」

「口実を設けて難癖をつけることだ。いちゃもんとも言っ」

「言葉の意味は聞いてないよ！さてはキサマ僕をそこまでバカだと思っているな！？」

「・・・・・・・・え・・・・・・・・？」

「なんだその『何を今更』って顔は！ 僕をそこまでバカだと思っているのは雄二だけに決まってるじゃないか！ 他の人は皆一一一って待った！ どうして皆気まずそうに目を逸らすの！？ 僕が目を見てよ！」

「明久。この件は今度ゆっくりと話そう。今は他の話があるから、な？」

雄二の子供を諭すような言い方が腹立たしい。

「それで、えーと・・・・・・・・何の話だったか？」

「三年生の文句が言いがかりではないか、という話じゃ」

そうだったな、と呟くと雄二は先輩達のほうに向かって説明を続けた。

「俺達が騒がしいのは認めるが、これだってれっきとした試験召喚獣を使った勉強の一つだ。学園長だってそれは認めている」

確かにこれも試験召喚獣を使った催し物だ。これを否定するのなら試召戦争も、ひいてはこの学校のシステム自体も否定する事になる。学園長のお墨付きがある以上、頭ごなしに否定される謂れはない。

「それに何より、ここは新校舎だ。古くてボロイ旧校舎ならともかく、試召戦争という騒ぎを前提として作られた新校舎で、下の階の騒ぎ声が上の階の戸を閉めた教室の中にまで聞こえるわけがないだろう？」

雄二の言うとおり、学校の校舎というものは、普通の学校でも大抵は鉄筋入りのコンクリート造り上下階の音なんてほとんど聞こえない。それが更に、試召戦争という騒ぎを前提とした作られたこの校舎なら、明久達の騒ぎ声程度が聞こえるわけがないのだ。

少なくとも、教室の中で授業を受けている分にはだが。

「要するに、だ。センパイ方は勉強に飽きてフラフラしているとこ

ろで俺達が何か楽しげなことをしているのに気がついて、八つ当たりをしにきたってワケだ」

雄二がそう言うのと、常夏コンビや他の三年生はバツが悪そうに目を逸らした。何かピリピリする気は分かったが、ずいぶん器が小さい。

「それじゃあ言わせてもらおうが坂本よお！ お前らは迷惑極まりないんだよ！ 学年全体での覗き騒ぎに、挙句の果てには吉井を除く二年全員が停学だぞ！？ この学校の評判が落ちて俺達三年までバカだと思われたらどうしてくれんだ！ 内心に響くじゃねえか！」
「「「う………」」」

今度は雄二を筆頭に、二年生男子全員が目を逸らす。向こうの言い分ももっともだ。あの一件は文月学園のイメージに大きくかわった事は間違いない。

そんな雄二たちを見て見て、常夏の片割れは得意げに鼻を鳴らして言葉を続けた。

「だいたいお前ら二年は出来が悪い連中が多すぎるんだよ。バカの代名詞の観察処分者だって二年にしかいねえし、学園祭で校舎を花火で破壊したのだってそのクズコンビだろ？」

「呼ばれたよ雄二。謝りなよ」

「お前のことだろ明久」

「お前ら二人ともだクズ」

「「そんなバカな！？」」

「なんでお前らはそこまで心外そうな顔ができるんだ！？ 普通に考えたら当然の評価だろ！？」

心底心外そうな顔をする二人に、常夏の片割れが驚きながら言った。

「まあ、明久が気に入らないというそちらの言い分はわかった」

「待って雄二。そうやって全ての罪を僕に押しつけようとするのは良くない事だと思う」

「僕もこいつらは気に入りませんね」

そう言ったのは、Bクラス所属の根本だった。卑怯な事を好み、かつて明久の怒りに触れ雄二に女装されたことがある。

「おお。気が合うじゃねえか」

「ええ。僕もそう思います」

お互い明久と雄二を目の敵にしているせいか、意気投合している。こうしてみると完璧にマンガなどに出てくる悪役である。

「さて、じゃあ生意気な後輩にお仕置きといくか。試^{サモン}獣召喚っ！」

常夏の片割れの夏川が召喚獣を呼び出す。すると、幾何学的模様の中から頭が牛で大きな槌を持つ鬼、牛頭が現れた。夏川の本質は悪役と言ったところだろう。妖怪の姿の召喚獣を見ても驚かないのは、学園長から召喚システムの変化について説明があったからかもしれない。

「さて吉井よお。お仕置きの時間だぜ」

「く……っ！ やっぱり僕の召喚獣狙いか！ でも、どれが僕の召喚獣なのかわかるわけが——」

「こいつだろ」

「あがあっ！」

棚を床に下ろしていた明久のデュラハンが牛鬼に殴られる。明久にフィードバックがはしり、痛みが伝わる。

「さ、流石腐っても三年のAクラス……！ 一瞬で僕の召喚獣を見抜くなんて、鋭い洞察力だと褒めて」

「いや。頭が無いなんてバカな召喚獣は明らかにお前しかいないだろ」

「鋭い洞察力だと褒めておこう！」

夏村の台詞を打ち消すように明久は大きな声を張り上げた。

「吉井君。加勢するよ。理不尽な先輩の仕打ちに従う事はない」

「ありがとう久保君！」

久保がいつの間にかデュラハンの頭を取り返し、明久の隣に来て牛頭と対峙した。

「常村、頼む」

「ああ、分かった。加勢してやるよ。試獸^{サモン}召喚っ」

明久の人数が増えたのを見て、すかさず夏川が後ろのソフトモヒカンの常村に応援を求める。出て来た召喚獸は牛頭との組み合わせにピッタリの、馬の頭に槍を構えている馬頭。地獄で囚人を監視している鬼のコンビとは、弱者を虐げるのがこの二人の本質という事なのだろう。お世辞にもあまり良い性格とは言えない。

「さっき坂本が言ったように、これはあくまで試験召喚獸を使った模擬戦だから問題ないよな？　これだってうちの学校では立派な授業の一環だからな」

逃がさないためか、夏川が先手を打つ。

『Aクラス

常村勇作

&

Aクラス

夏川俊平

世界史

174点

&

163点』

表示された点数はAクラスの平均くらいのものであった。前に召喚大会で日本史勝負をしたときもこのくらいだったので、常夏コンビの社会科目の点数は大体このぐらいなのだろう。

そして、対峙する明久と久保の点数が表示されるのを待っている
と――

「どこ見てんだオイ。随分と余裕じゃねえか」

「が……っ！」

突然明久の肩に衝撃が走る。明久達が注意を逸らしている間に牛頭がデュラハンに攻撃を仕掛けてきたらしい。

「痛えか？　そいつは何よりだ……なあっ！」

体勢を崩したデュラハンに牛頭と馬頭がそれぞれ追撃を仕掛けようと武器を振りかぶる。今体勢では避けられない。

「吉井君っ！」

そこにすかさず久保の迷ひ神が割って入った。体当たりで夏川の牛頭を突き飛ばし、その後ろにいた馬頭も一緒に巻き込まれて吹っ

飛んだ。ただの体当たりで二体吹き飛ぶとは、学年次席は伊達ではない。

「な・・・・・・・・っ！ こいつ、結構やるぞ・・・・・・・・！」

「吉井もだ。さっきの一撃がほとんど聞いてないなんてどういこうとだ・・・・・・・・？」

常夏コンビが予想以上の明久達の強さにおののく。

「あまり甘く見ないでくださいね変態先輩。こっちだっていつまでもバカのままだじゃないんですから」

明久がニヤリと口の端に笑みを浮かべて二人に言う。明久の態度に触発されたのか、その場の全員が明久達の点数に注目する。

『Aクラス 久保利光 & 334クラス アレ

クサンドロス大王

世界史 357点 & 161点』

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「さあ勝負はここからだ！ この僕の本当の力を見せて――――」

「・・・・・・・・おうコラ。ちょっと待てそのバカ」

「・・・・・・・・何か不都合な点でも？」

「不都合な点しか見あたらねえよ・・・・・・・・」

常村が頭に手を当てて呆れている。それも当然の反応だろう。

言い訳の為に明久が口を開く前に夏川が怒鳴り声を上げる。

「誰だよアレクサンドロス大王って！ しかも334クラスなんて学校拡張しすぎだろ！？ 明らかにこれはお前の点数じゃねえだろうが！」

「ち、違いますよ！ ちょっと間違えちゃっただけで、これは正真正銘僕の点数です！ 名前のミスなんて誰もが一度はやることじゃないですか！」

「無記名ならともかく、何を間違えたら名前がアレクサンドロス大王になるんだ！？」

「そ、それその、えーっと・・・・・・・・」

どう説明しても明久がバカにされるような状況に、明久の言葉が

詰まる。

「おい夏川。最近は試験召喚システムの調子が悪いらしいからな。もしかすると名前の間違いはその影響かもしれないぞ」

「ん？ ああそうか。確かにそうでもなければこんなことはありえないか」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そう言われてしまうと、本当の事を言い出せなくなる。

「まあ、名前の部分は不具合だとしてもだ。お前がこの学校の汚点だということに変わりはないねえ——」

「不具合とは聞き捨てならないねえ」

更に言い募る夏川の言葉を遮り、不機嫌そうな声が聞こえてきた。

「あ、学園長」

「まったく・・・・・・・・。吉井のバカについてシステムが原因なんて言われたらたまったもんじゃないさね。それは真正銘このジャリ自身のミスさ」

学園長にはシステムの調整システムの失敗を認めるわけにはいかない理由があるので、不具合呼ばわりされるのは嫌なのだろう。

「けど、こっちのミスと思われるのも癪だしね。その名前の部分くらいは後で直しておいてやろうかね」

そんな事情も手伝ってか、学園長から優しい言葉が出る。

「それで、こんなところまで来てどうしたんですか学園長？ 僕らに何か用でも？」

「ああ。ちよいと二年生に伝えておくことがあってね。坂本はいるかい？」

「ん？ 何だババア？」

離れた場所で召喚獣勝負をニヤニヤと見ていた雄二が学園長に呼ばれて一歩前に出た。

「この肝試し、学園側が援助してやろうじゃないか。大掛かりな設営も召喚の為の教師も応援する。せいぜい派手にやるこったね」

「そいつはまた、随分と気前がいいな。どういうことだ？」

「その代わり、作ったものはそのままにしておくこと。盆休みあたりに一般公開でもしてやろうかと思っているんでね」

「イメージアップ戦略か。涙ぐましいことだな」

「アンタ達がどんどん評判を下げてくれるからねえ。こっちも苦勞するさ」

「どうやら宣伝効果を狙っての援助らしい。学園長も大変だ。」

「元々この召喚獣の変更はそれが目的だったからね」

学園長が念を押すように強調する。そういうことにしておかねば肝試しが中止になってしまうので明久は黙っておく事にした。

「それと・・・折角だからね。三年もこの肝試しに参加したらどうだい？　こんなところで小競り合いをしているよりはその方が有意義さね」

そう言って学園長が水を向けると、先頭に立っていた夏川と常村が鼻を鳴らして答えた。

「冗談じゃねえ。こんなクズどもと仲良く肩を並べて肝試しなんてやってられるか」

「だよな。胸くそ悪い」

その後ろにいるほかの先輩達も言葉には出さないが同様の意思を態度で示している。どうにも二年生と三年生の溝は深そうだ。

「そういう態度を取られると、是が非でも参加させたくなるねえ・・・よし、決めたよ。明日の夏期講習・補習の最終日は全員参加の肝試しにするよ」

その言葉に、常夏コンビが目を白黒させる。

「これはあくまで補習と夏期講習の仕上げだからね。補習と講習の参加者は余す事無く全員参加すること。いいね」

そう告げると、学園長は満足したように颯爽と教室を出て行ってしまった。何やら面倒な事になりそうな気を、明久は感じ取っていた。

「やれやれ・・・ま、そういうわけだセンパイ。楽しくやろうぜ」

「うるせえ！ 俺はお前らなんざと仲良くやるつもりはねえ！」

「だろうな。俺もアンタらは気に入くわねえ。……ってことで、こういうのはどうだ？」

「ああ？」

「驚かす側と驚かされる側に分かれて勝負をする。適当な罰ゲームでもつけて、な」

「二年と三年で分かれて、ってことか」

「ああ。それなら仲良くやる必要はないだろ？」

敵と味方に分かれるということなので、確かに仲良く必要性はまったくない。更に溝が深まる可能性はあるが。

「悪かねえな。当然俺達三年が驚かす側だよな？ 俺達はお前らにお灸を据えてやる必要があるんだからな」

相手を怖がらせて笑おうって魂胆だろう。だが、雄二もそう気質の持ち主なので、驚かす側を譲るとは思えない。

「ああ。別にそれで構わない」

「え？」

明久にとって、それは少し予想外だった。雄二の目的は補習から逃れる事なので、この際肝試しはどうでもいいということなのだろうか。

「決まりだな。……ルールと負けた方への罰は？」

「コイツが最初俺達が予定していたルールだ。文句があれば一応聞くが」

そう言って雄二が取り出したのはA4サイズのプリントだ。どうやら準備の間に姿が見えなかったのはルール表を作っていたかららしい。

明久は雄二から一枚受け取りざっと目を通す。

？二人一組での行動が必須。一人だけになった場合のチェックポイント通過は認めない。

※一人になっても失格ではない。

？二人のうちどちらかが悲鳴をあげてしまったら、両者ともに失格とする。

？チェックポイントはA～Dの各クラスに一つずつ。合計四箇所とする。

？チェックポイントでは各ポイントを守る代表者二名（クラス代表でなくとも可）と召喚獣で勝負する。撃破でチェックポイント通過扱いとなる。

？一組でもチェックポイントを全て通過できれば驚かされる側、通過者を一組も出さなければ驚かす側の勝利とする。

？驚かす側の一般生徒は召喚獣でのバトルは認めない。あくまでも驚かすだけとする。

？召喚時に必要となる教師は各クラスに一名ずつ配置する。

？通過の確認用として驚かされる側はカメラを携帯する。

「へえ。結構凝ったルールだね。面白そうだよ」

「あとはこれに設備への手出しを禁止するって項目を追加する予定だ。学園長がうるさそうだから」

雄二の言う事はもったもた。肝試しが終わったら一般公開するので、壊れていたら困るだろう。

「坂本。この悲鳴の定義はどうなっている？」

常村がプリントを見ながら雄二に尋ねた。

確かに悲鳴というだけでは曖昧な気もする。仲間内だけで遊ぶ分にはいいかもしれないが、二年生と三年生の勝負となると話は別だ。きっちり定義づけしておかねばあとで揉め事の種になる。

「ん？ その部分か。そうだな……。そこは声の大きさを判別するか。カメラを携帯させるわけだし、そこから拾う音声が一値を超えたら失格ってことでどうだ？」

「そんなことができるのか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・問題ない」

カメラと言えばムツツリーニだ。下心の為に身につけたその技術は、威張れる事ではないが不可能ではない。

「チェックポイントの勝負科目はどう決める？」

「それについてはお互いに一つずつ科目を指定ってことでどうだ？」

「一つずつ？ 二つずつじゃないのか？」

「ああ。もう既に科学と現国の教師には話をしちまったからな。受験で選択されやすいその二つならそこまで有利不利もないし問題ないだろ？」

A～Dクラスなので、チェックポイントも全部で四つある。そのうち二つは現代国語と科学で決定済みで、残る二つをそれぞれ選ぶということだろう。

「坂本よお。それよりさっさと負けた側の罰を聞かせろよ」

夏川がいやらしい笑みを浮かべて言う。あの顔はなんとしても明久達をはめてやろうという顔だ。

「そうだな。負けた側は二学期にある体育祭の準備や片づけを相手の分まで引き受けるってことでどうだ？」

体育祭は二学期に予定されている。それは結構大掛かりなイベントで、準備も片付けもそれなりに手がかかる。サボれるものならサボりたいというのは誰もが抱く共通の考えだが、

「おいおい坂本。お前にしちゃ随分ヌルイ提案じゃねえか。さてはテメエ、勝つ自信がねえな？」

常村が言うとおりの雄二にしては簡単すぎる罰ゲームだ。何か目論見があるのだろうか。

「アンタらと勝負するって話自体、皆に知らせてないからな。勝手に決める罰ゲームとしてはこの程度が妥当だろ？ 俺も、アンタも」

いくら学園長のお墨付きとは言え、そこまで酷い罰ゲームを勝手に決めるのは相談無しでは難しい。確かに雄二の言うとおりの、片付け程度が妥当だろう。

「・・・・・・・・・・けっ」

「そう逸るなよセンパイ。勝負がしたいのならアンタらはチェックポイントにいてくれたらいい。そうしたら、俺と明久が個人的な勝負をしてやるからさ」

雄二の言葉に明久の目が点になる。何故自分まで、という心情なのだろう。

「チェックポイントで直接勝負か……面白れえ。その話、乗ったぜ」

「そんじゃ、勝負は明日ってことで。楽しみにしてるぜ、センパイ？」

「クズどもが。年上の怖さを思い知らせてやる」

こうして、気が付けば肝試しは三年生をも巻き込んだ大規模な催しになった。

しかし、面倒な準備作業のある脅かし役を押し付けられても気付かないとは、やはり受験生はストレスが溜まっているのだろう。

「へっ、上等だ。どんな手を使っても構わねえ。絶対に勝ってあいつらに身の程ってモンをしてもらおうじゃねえか」

雄二達との会話を終えた後、夏川が嫌な笑みを浮かべながら言った。

「僕も協力します。僕もあのクズどもにはムカついてところでしたからね」

「だけど、お前と同じBクラスもいんだろ。そいつらはいいいのか？」

常夏コンビについてきた根本に常村が尋ねると、根本は笑いながら答えた。

「別にあんなやつらどうでもいいですよ。僕は吉井と坂本が苦しめばそれでいいんです」

「はっ。言うじゃねえか。気に入ったぜ！」

笑い合いながら三人が廊下を歩いていると、目の前に少女が立ち塞がった。

「……あの豚野郎を殺すんですか？」

「ん？ 誰だお前」

夏川が尋ねるが、少女は無視して続ける。

「あの豚野郎を殺すのであれば、良い手があります。しかも肝試しなんてまどろっこしい手を使わずに済む、もっと良い方法が」

少女――清水美春は手でデルタフォンをくるくると回しながら狂った笑みを浮かべた。

第十七話 お化けと肝試しと悪の影（後書き）

感想お待ちしています。

第十八話 ペアと誘拐と対決（前書き）

総合評価ポイントが百件突破しました。これも皆様の応援のおかげです。本当にありがとうございます。これから頑張ります。

第十八話 ペアと誘拐と対決

「うわぁ・・・・・・・・。なんか、凄い事になったね・・・・・・・・」
「そうじゃな・・・・・・・・。ここまでやるとなれば、学園側もかなりの投資が必要じゃったろうに・・・・・・・・」

翌日、明久達はお化け屋敷と化した新校舎三階を覗き、正直驚いた。薄暗い雰囲気といい、外観からでも伝わってくるほどに複雑そうな構造といい、まさかここまで凝った作りになるとは思っていなかったからだ。

「こりゃ三年側も結構本気だな。連中も講習最終日くらいはハメを外したかったってところか？」

流石に雄二も、応援してくれた学園側や設営を仕切った三年生がここもだやるとは思わなかったようで、感嘆の声を上げていた。

「こ、ここまで頑張ってくれなくても良かったんですけど・・・・・・・・」
・

「そ、そうよね。頑張りすぎよね」

雰囲気満点な造りになっている装飾を見て、姫路と美波は顔に縦線を入れていた。苦手な人にはこの上なく嫌な演出に見えることだろう。

「雄二。僕らは旧校舎に集合だったよね」

「ああ。三年は新校舎三階、俺たちは旧校舎三階でそれぞれ準備。開始時刻になったら一組目のメンバーから順次新校舎に入って行くって寸法だ」

旧校舎と新校舎を繋ぐ渡り廊下には防火シャッターが下ろされていて、雰囲気は伝わってくるものの中の様子は窺えない。恐らくあの中では常夏コンビや他の三年生達が舌なめずりしながら明久達を

脅かそうと準備しているだろう。

「・・・・・・・・・・・・・・・・カメラの準備もできている」

ムツツリーニが大きな鞆を掲げてみせた。あの中には何台かのカメラが入っているようで、明久達はそのカメラを持って中へ進んでいくらしい。不正チェックと通過の証拠、あとは待っている人を退屈させない為や、色々と理由があってカメラを使うことになっているが、明久はよく三年生に反対されなかったなと思った。もしかしたら三年生側は『カメラで事前に知っていたら驚かなくなるからダメ』と言ってくるかもしれないのだが、意外とすんなりこちらの要求を受け入れた。よっぽど自信があるのだろうか。

「俺達の準備はカメラとモニターの用意と、組み合わせ作りだな」

「あ。そっか。組み合わせをまだ決めてなかったよね」

ルールでは肝試しは基本二人一組。これは全くその手のものを怖がらない人がいても肝試しが盛り上がるように、という処置のつもりらしい。状況が変わって三年生との勝負となった今、勝つためには全く怖がらない人同士を組み合わせるのがセオリーなのかもしれない。

「ま、組み合わせは折角だから極力男女のペアになるようにするか。その方が盛り上がるだろ」

「え？ 雄二、いいの？」

勝負にこだわる雄二らしくない発言である。

「別に良いだろ。俺は地獄の鉄人補習フルコースをサボりたかっただけだからな。肝試しの準備も三年がやってくれたんだ。体育祭の準備や片付けくらい引き受けてもそう大した問題じゃないだろ」

「じゃが、雄二と明久はあの常夏コンビと個人的な勝負の約束をしておるではないか」

「んなもん、あの場でアイツらを炊き付けるための方便だ。面倒な設営作業を押し付けることに成功した今となっては、そんなもん受けなくても何の問題もない」

「ふーん。なるほどね。だから男女ペアってことにしたのか」

明久は納得したように頷いた。

「で、本音は？」

「翔子にペアを組むように脅された腹いせに全員を巻き込んでやろうと思った」

大体が明久の想像通りだったため、あまり驚きはなかった。

それに明久としてはこういうイベントは男より女子と一緒にの方が嬉しいので、こういう考えは大賛成だった。あとは明久と組んでくれる人物を探すだけだ。

現在の候補は、姫路と秀吉、そして美波だ。

姫路か秀吉でも誘おうかと思ったその時、明久の耳にこんな声が聞こえてきた。

『須川会長。木下にペアを申し込もうとした異端者を発見しました』

『連れて行け』

『はっ。調理方法はいかように？』

『生爪フルコースだ』

『かしこまりました』

この声を聞き、秀吉は諦めた。いや、もしかしたら姫路でも誘った時点で殺されるかもしれない。こういうときに限って彼らは人間以上の力を発揮するものだから手に負えない。下手をすればオルフェノクも殺せそうなほど、彼らの嫉妬の力は恐ろしいのだ。

そんな訳で仕方なくムツツリーニでも誘おうかと思ったその時、自分のYシャツが誰かに引っ張られている感触を感じ、後ろを振り向く。

そこには、顔を少し赤くした美波がいた。

「どうしたの美波？」

「・・・あ、アキ。もし良かったら、ウチとペアにならない？ ど

うせアンタはパートナーのアテなんてないだろうし、ウチはあんな作り物怖くないし。だからウチがペアになってあげてもいいわよ」
美波はこう言ってるが、明らかに明久とペアを組みたくて仕方がない顔をしている。後半の台詞は照れ隠しだろう。

「？ 別に良いけど」

そして鈍感な明久はそんなことを知る由もなく、あっさりとOKした。明久としては女子と組みたかったし、かと言って自分から誘おうものなら爪を剥がされるのでこの誘いは断る理由がない。

「じゃ、じゃあよろしくね。アキ」

そう言った美波の顔は少し嬉しそうだった。そんな美波に姫路の非難するような声が聞こえてきた。

「み、美波ちゃんずるいですっ！ 私だって明久君と」

「う・・・・・。ごめんね、瑞希・・・・・。でも、アキと一緒に
行ったら、チェックポイントであの召喚獣をアキの前に曝さらさな
いといけないわよ？」

「はう・・・・・っ！ そ、それは・・・・・！」

姫路がかなり困ったような顔をした。確かに、姫路と一緒に
行くようになったらそういう恥ずかしい思いも強要する事になる。こ
れはかなり危なかったかもしれない。

「まあ組み合わせはだいたい決めておいて細かい部分は後からでも
いいだろ。まずは他の参加者達を楽しませてやらないとな」

ぽんぽん、と手を叩いて雄二が言う。

「？ どうしたの雄二？ 他の人を優先するなんて、らしくないじ
ゃないか」

「俺達はこの肝試しを企画した側だからな。自分達が楽しむのは後
回しだ。まずは皆をもてなすのが筋ってもんだろ」

「本音は？」

「翔子とペアになった以上、他の連中にクリアさせて俺は参加しな
いで済むように仕向きたい」

明久でも分かる単純明快な理由である。

「さて。そろそろ突入順とかも決めなきゃならんし、くっちゃべつてないで集合場所に急ぐぞ」

「あ、うん。本部は僕らのFクラスだったよね？」

「ああ。Eクラスも待機場所として用意してあるけどな。流石にFクラスだけじゃ人数が多くて入りきらない」

参加者は補習が義務付けられたFクラス五十名と夏期講習に参加していた百名程度。大体学年の半分くらいだ。

「ムツツリーニ。モニターの準備は？」

「……………問題は。Aクラスの設備のディスプレイを運び込んである」

「よし。そんじゃ、夏の風物詩を気軽に楽しもうぜ」

「そうだね。今回は酷い罰もないし、楽しもうか」

「うむ。体育祭の片付けすら程度ならば今までに比べれば楽なものじゃ」

「わ、私はあまり、楽しみじゃないです……………」

「う、ウチはまあ、アキを盾にできるから、ちょっと楽しみだけど」

「……………色々と良いショットを期待している」

明久達はそれぞれの思いを抱きながらFクラスへと向かう。美波は明久達の後を追うように歩き出そうとした。

「!？」

その時突然、美波は誰かに背後から口をハンカチで塞がれた。声を出そうとしたがものすごい力で物陰に引き寄せられる。そして首筋に電気が走ったような衝撃を受け、意識が一気に遠ざかりそうになる。姫路達は気付いていないのか、すぐに視界から消えてしまった。

「これでよし、あとは吉井だな」

「でも、坂本はどうするんだ？」

「別にあいつはいつでも殺せます。まずは吉井です。あのバカから殺さなきゃ腹の虫が収まりませんよ。この学校が始まって以来のバ

カのクセに生意気なんですよあいつ」

頭の上から耳障りな男の声が三人ほど聞こえてきた。しかも聞き覚えのある声だ。

「それもそうだな。そのためにこの女を餌にするってわけか」

「それにあの女もこいつを御所望だったしな。あいつの機嫌を取れて、吉井を殺せれば一石二鳥だ」

ギャハハハと下卑た笑い声が耳に入る。美波は何とか逃げようとしたが、体が動かない。

(ア………キ………)

明久の顔を思い浮かべながら、美波は意識を完全に失った。

《ね、ねえ………。あの角、怪しくない………?》

《そ、そうだな………。何か出てきそうだな………》

ムツツリーニが設置したモニターから、尖兵として出撃していたBクラスの男女ペアの送ってる映像と音声が流れてくる。まず最初に向かうことになっているのは、作りの関係上Bクラスの教室のチェックポイントで、そこは古めかしい江戸時代あたりの町並みをモチーフとした作りになっている。演出のために光量が絞られていてボヤけた感じのその画は、皆のいる教室で見いても結構なスリルがあった。

しかし、今の明久には肝試しより心配なものがあった。

(・・・美波)

パートナーである美波とまったく連絡が取れないのだ。最初いなくなったときはトイレか何かに行ったと思っていたのだが、いくら何でも長すぎる。あれから何回連絡しても電話に出ない。

そして、もう一回電話してみようとしてみたその瞬間。いきなり手の中のファイズフォンが鳴り出した。ファイズフォンを開いて画面を見ると、相手は美波だった。

「美波!？」

名前を見た瞬間、明久はファイズフォンを耳に当てる。

『吉井明久だな?』

しかし、その声は美波のものではない。いや、それ以前に機械か何かで声が変わえられていて男か女かすらも分からない。

「・・・誰ですか?」

その声を聞き、明久は怪訝そうに相手に尋ねた。だが相手はその問いを無視し、驚くべき一言を放った。

『島田美波は預かった。返してほしければ学校の体育倉庫まで来い。もし誰かにバラしたら、島田の命はないと思え』

「ちよっ・・・!!」

明久が叫ぶ前に、通話が切れてしまった。明久頭の中が真っ白になり、何も考えられなくなる。嘘だと信じたいが、嘘だと言い切れる証拠もない。心臓が早くなり、モニターから聞こえる悲鳴が遠くから聞こえるような錯覚すら受ける。

「どうしたのじゃ? 明久」

「秀吉・・・」

呆然と立っている明久に尋ねてきたのは秀吉だった。明久の顔を心配そうな表情で見つめている。いつもの明久ならばその表情にドキッとするかもしれないが、今の明久にはそんな余裕はない。

「明久、どうした?」

そんな二人の様子を見て雄二も明久のほうに寄って来た。

「な、何でもないよ」

「嘘つくな。お前がそんな顔して、何もない訳ないだろ。正直に言え」

ここで嘘をついてもどうせ雄二たちにはわかるので、明久は仕方なく今の電話の事を話した。

「・・・島田が？ それは本当かの？」

「・・・うん。美波はまだ来てないし、誘拐されたって決め付けるわけじゃないけど・・・」

「だが、島田が帰ってこないのも事実だ。・・・チっ、誰だそんなことするバカは」

その犯人に腹が立っているのか、雄二が舌打ちした。

「とりあえず僕は行くよ」

「しかし・・・」

「待て秀吉。犯人は明久一人で来いって言ってるんだ。それに犯人が一人だけとも限らない。もしかしたらどこかで監視してるかもしれないし、明久が一人じゃないって知れば、何をしでかすかわからねえ。ここは明久一人に行かすしかねえ」

雄二は秀吉の肩を押さえながらそう言うのと、明久に向き直る。

「俺達は肝試しがあるからここから離れられねえ。だから行けるのはお前一人だけだ。大丈夫か？」

「大丈夫も何も、行かなきゃダメなんだ」

明久は雄二の言葉に頷きながら言った。そして雄二たちに背を向け、一気に外に向かって走り出した。

「・・・死ぬでないぞ、明久」

秀吉はそう小さく言った。言った後に唇を噛んだ。こんな時に自分は何もできない。自分はまるで女のように扱われ、明久や雄二は危険な場所に進んでいく。それなのに、自分はただ安全地帯で見ているしかない。

秀吉にはそれが悔しくてたまらなかった。

「ここだな・・・」

明久は指示通り体育倉庫の前まで来ていた。肝試しに生徒の全員が集まっているせいか、体育倉庫の周りには人っ子一人いない。

「美波ー？」

明久は静かに体育倉庫の扉を開けながら美波の名前を呼ぶ。

「おいおい、マジで来たぜ」

「良いじゃねえか。これでこいつを好きなだけボコれるんだからな」
「そうですね」

声のした方に首を向けると、そこにはニヤニヤと嫌な笑みを浮かべる常夏コンビと根本が佇んでいた。

「常夏先輩に根本君・・・、まさかアンタ達が？」

「ああ。俺達が島田を誘拐したんだよ。お前を誘き寄せる餌としてな」

常夏の片割れのソフトモヒカンの三年、常村の言葉に明久は頭が沸騰しそうになる。そんなことのために美波を誘拐したことに對する怒りが沸々と沸いてくる。

「ま、この作戦を考えたのは俺たちじゃねえけどな・・・つと、そんな事をお前に言っても仕方ねえか」

「そんな事より、もうやるぞ常村！」

「俺達はもうコイツをボコボコにしたくて仕方ないんですよ！」
「そうだな。じゃあ・・・やるぞ！」

常村が叫んだと同時に明久は思わず身構える。だが、常村達は手を前にかざしただけだ。そしてその手の指から赤い電撃が流れるのが見えた瞬間、明久は思いっきり体育倉庫の壁に叩きつけられた。

「がはっ・・・！？」

あまりの衝撃に肺から全ての酸素が吐き出される。そのまま床に落ちる。受身に失敗し、体にダメージが走る。

「痛えか？ 安心しろよ、今日はこの程度で済ます気はねえからよ！」

夏川の蹴りが明久の顔面に入り、明久は壁に激突する。明久は立ち上がり夏川に反撃しようとする。だが。

「おおっと。言っておくが、間違っても反撃しようとすんなよ？」

今島田の所には俺らの仲間がもう一人いる。俺らに手を出せば島田がどうなるか保証できないぜ？」

「！！」

明久はその言葉を聞き拳を止める。もし自分が反撃すれば美波がどうなるか分からない。分からない以上、反撃できない。

「さーて吉井。楽しい楽しいお仕置きの始まりだぜ」

三人が笑いながら木刀と金属バットと鉄パイプを手にし、明久にじりじりと歩き寄る。

次の瞬間、殴られる音が連続した。

「ん・・・」

うめき声を出しながら美波は目を覚ました。

「ここ・・・、体育館？」

美波がいるのは体育館だった。手足が窮屈な感じを覚え手足を見てみると、両手と両足が縄で縛られていて体の自由がきかなくなっている。何とか解けないかと思いい激しく動いてみるが、まったく解ける様子はない。

「どうしてウチ、こんなところに・・・」

「おはようございます。お姉様」

突然声がし、美波が顔を向けるとそこには彼女をお姉様と慕う少女――清水美春が笑顔で立っていた。

「美春！ 悪いけどこの縄解いてくれない？」

しかし美春は笑顔を浮かべたままその場を動こうとしない。そして美波は気付いた。その笑顔は一見さわやかだが、どこか狂気が織り込まれていることに。

「すいませんお姉様。その縄を解くわけにはいきません。何故ならお姉様は一生美春と暮らすからです」

「何を・・・言ってるの？」

美波はその笑顔に恐怖を覚えながら美春に言う。

「お姉様は美春と一緒に暮らすほうが幸せなんです。しかしあの豚野郎がいるかぎりお姉様は美春と一緒に成れない・・・。だから、少々荒っぽい手段を使ってお姉様をここに連れてきたんです。そのことは謝ります。しかし、あの豚野郎は・・・」

美春が続きを言おうとした時体育館の扉が開いた。美波が目を向けるとそこには明久達が常夏コンビと呼んでいた先輩とBクラス所属の根本が立っていた。常夏コンビの片割れの三年、常村の手には何かボロ布のようなものが握られている。

「どうやら丁度来たようですね。お姉様、喜んで見てください。お姉様に纏わり付くあの豚野郎の死骸を」

美春の言葉と同時に、常夏コンビ達が美春達の前まで歩いてきて、常村が手にしていたボロ布を美波の目の前に投げた。

それを見て、美波の思考が停止する。

何故なら、それは、

「ア・・・・・・・・・・・・・・・・キ・・・・・・・・・・・・・・・・？」

美波の目の前に転がされたボロ布らしきものは、まぎれもなく明久だった。だがその姿は変わり果てていた。顔は鮮血で染まり、目は半分開かれたまま、焦点が合っていなかった。ピクリと動かな

いたため、生きているのか死んでいるかも分からない。制服はボロボロで、体のあちこちには殴られた痕がある。

「随分と派手にやりましたね」

「何だよ、マズかったのか？ 殺すつもりでやれって言ったのはお前だろう？」

美春の言葉に、夏川が顔をしかめながら言った。しかし美春は笑顔を浮かべながら首を振り、

「いいえ。これで充分です。さあお姉様、これでお姉様に纏わり付く豚野郎は駆除しました。あとは・・・」

そう言うと、美春は手に持っていたトランクケースからベルトのような物を取り出し腰に付ける。そして

音声認識方式携帯電話型ツール——デルタフォンを取り出し、口元に近づける。

「・・・変身」

『Standing by』

音声が発声されると、美春はベルト——デルタドライバーの右腰に付属されているデルタムーバーに装着する。

『Complete』

ブライトカラーのフォトンストリームが美春の体を包み、同色の光が体育館を照らす。光が止むと、そこにはオレンジ色の複眼にブライトカラーのフォトンストリームが特徴的なライダー、デルタが立っていた。

「おいおい。まだまだ吉井に追い討ちかけるのか？」

常村が笑いながらそう言った。それに続き夏川も笑い出そうとした。

しかしそれは叶わなかった。

何故なら。

デルタの拳が夏川に直撃し、夏川が体育館の壁に激突したからだ。

「はっ？」

常村が気がついた時は既に遅く、夏川は床に落ち動かなくなった。そして何が起きているのか分からない常村に突進し、腹に強烈な蹴りを入れる。常村は口から胃液を吐き出しながら三メートル飛び、ゴロゴロと床を転がり動かなくなった。

「う、わ」

根本が悲鳴を出そうとしたが、頭をデルタに？まれそのまま床に叩きつけられた。凄まじい音が響き、根本も他の二人のように動かなくなった。

「これで邪魔者はいなくなりましたわ。さあお姉様！ そんな豚野郎から離れて早く美春と一緒に離れましょう！」

デルタは明るく言ったが、美波は全く動かない。

「……い……やだ。死んじゃやだよ……。お願いだから、目を覚ましてよ。もう一度、美波って言ってよ。もう一度、ウチを見てよ。お願い……。何でもするから目を覚ましてよアキ……！」

美波の瞳から涙がこぼれ、明久の顔にかかる。しかしそれでも明久は目を覚まさない。

「？ 何をしているのですかお姉様？ そんな豚野郎とは早く離れて」

「・・・何ですよ。どうしてアキをこんな目に合わせたのよ！」

涙を流しながら美波はデルタに叫ぶ。その目には、怒りと憎しみが込められていた。

「決まっているじゃありませんか！ お姉様との樂園を作るためですわ！ それもこんな豚共や男共がいらない、私達だけの樂園を！ 他の女共は皆奴隷で、私達だけが王の樂園を！ だからまずはお姉様に纏わり付くそのゴミ以下の豚野郎を殺したんです！ その男共は最初から殺すつもりでしたわ。どうせこの学園の男共は全員殺

すつもりでしたし……。さあお姉様、美春と一緒にこの学校の王になりましょう」

デルタが狂ったように笑いながら美波に手を伸ばした。しかし美波はその手を憎しみのこもった目で睨みつけながら言った。

「・・・美春。ウチはずっとアンタは少し変だけど、本当は良いやつだって信じてたわ。だけどアキをこんな目にあわせて王になるですって？　・・・教えてあげるわ美春。ウチは王なんて興味ないし、アンタと一緒にいる気もない。ウチが望むのは、アキと一緒にいることよ。・・・そのアキを殺したアンタを、ウチは絶対に許さない！　絶対に殺してやるわ！　許さない、絶対に許さない！！」

美波の憎しみの視線を受け、デルタは驚いたように身を震わす。「そんな・・・なんで。美春はお姉様のためにここまでしたのに！　何でお姉様は美春を愛してくれないんですか！　どうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうしてどうして！！」

デルタは狂ったように叫びながら頭を両手で抱え激しく体を動かす。だが急にその動きが止まった。

「・・・あははは、そうか。その豚野郎がお姉様とずっと一緒にいたからお姉様は壊れてしまったんですね。安心してくださいお姉様、すぐに美春が直して差し上げますから・・・」

「来なさいよ。アキと一緒に死ねるなら本望よ！」

じりじりと近づくデルタに美波は叫ぶ。今の美波に逃げる事など頭がない。今頭にあるのは目の前の相手に対する怒りと殺意、憎悪だけだ。そしてデルタが美波に襲い掛かろうとしたその時。

「・・・・・・・・っぐ」

「アキ！？」

美波のすぐ側で倒れていた明久が目を覚ました。しかし体に残っているダメージは大きく、体を満足に動かす事もできない。ゆったりとした動作ながら体を起こし、その場を見回す。

「・・・・・・・・こは・・・・・・・・？　・・・美波！」

明久の目が美波を捉え、美波にゆっくりと近づく。

「大丈夫？ 怪我とかない？」

「・・・自分の事の心配しなさいよ、バカ・・・！」

明久がまだ死んでいなかったことに美波は思わず涙を流した。しかも大怪我をしているというのに自分の心配をしてくれる事に美波は嬉しく思ったが、同時に明久自身の心配もしてほしいと思った。

「・・・ファイア」

『Burst Mode』

突然放たれた音声に、明久は後ろを振り返る。そこにはデルタフオンとデルタムーバーが合体した銃――『ブラスターモード』のデルタムーバーを手にし、それを明久達に向けているデルタの姿があった。

「！！」

明久は反射的に美波を抱え、その場から弾かれるように離れる。

その瞬間、デルタムーバーからエネルギー弾が放たれ、明久達の間を襲う。

「あれがデルタ・・・！」

明久がデルタの力に驚いている隙に、またデルタが明久に銃口を向ける。

「しぶといですね・・・！ こうなったら肉片残さずに殺すしかないようですねえ！！」

またエネルギー弾が発射され、明久は走ってそれをかわす。しかしそれは長くは続かないだろう。明久の体にダメージが残っている上に、美波を抱えているこの状態では満足に逃げ回る事もできない。このままではそのうち絶対に撃たれる。どうすればこの状況を切り抜けられるか明久が考えを巡らした直後、

ドゴン！ と体育館のドアが吹き飛ばされた。

驚いた明久とデルタが目を見ると、そこにはバトルモードとなったオートバジンが立っていた。そしてオートバジンは一気にデルタに接近し、胸に拳を入れる。

「がはっ！」

さらにオートバジンは追撃にもう一回拳をデルタにかまし、デルタを大きく吹き飛ばす。そして前輪を構え、前輪に仕込まれたガトリングガンから銃弾を乱射しデルタに放つ！

「がああああっ！」

デルタは銃弾をもろにくらい大きく吹き飛ばされる。その隙にオートバジンは手に持っていた何かを明久に投げる。

自分の足元に放り投げられた物を見ると、それはファイズギアの入ったトランクケースだった。

明久はそれを見ると美波を下ろし、トランクケースからファイズドライバーを取り出し腰に付ける。

「やめてアキ！」

そして明久がファイズフォンを開いた瞬間、美波が今にも泣き出しそうな声で明久を呼んだ。

「今戦ったらアキが死んじゃう！ さっきまでボロボロだったのに、戦えるわけじゃないじゃない！」

確かに今の明久は常夏コンビ達にボロボロにされたため、今立っているだけで精一杯の状態だ。そんな状態でまともに戦う事などできないだろう。しかし明久は笑顔を浮かべ言った。

「大丈夫だよ美波。絶対に清水さんを助けてみせる」

「どうして・・・!? 美春はあんたを殺そうとしたのよ！」

殺そうとした相手すらも助けようとする気持ちだが、美波には理解できなかった。明久はただ笑って続けた。

「彼女は今デルタの力に支配されてるだけなんだ。だったら僕が助

けないといけない。ここで彼女を見捨てたら、僕は人の心を失ったオルフェノクと同じになる。それに、彼女をこのままにしたら彼女が望んでもいないのに誰かを傷つけちゃう。だから助ける」

たとえ敵であろうと、その力に支配され、苦しんでいる者を放って置くわけにはいかない。絶対に助け出してみせる。それが明久の正義であり、誇りなのだ。

明久は開いたファイズフォンに変身コードを入力する。

『S t a n d i n g b y』

「変身！」

『C o m p l e t e』

紅色のフォトンストリームが明久の体を包み、明久はファイズに変身する。

「あなたも美春と同じようなベルトを持っていたんですね。だけど結果は変わりません。お前のような豚野郎はここでぶち殺します！」

「負けないよ。僕は絶対に、君を助ける！」

体育館にお互いの声が響き、明久と美春の戦いの火蓋が切って落とされた。

第十八話 ペアと誘拐と対決（後書き）

感想お待ちしています。

第十九話 超絶バイクとピンチとニューデルタ（前書き）

デルタ登場編最終話です。お楽しみください。

第十九話 超絶バイクとピンチとニューデルタ

激しい火花を散らして、ファイズとデルタのパンチがお互いの胸に当たる。お互いの攻撃に二人は後ろへ後ずさるが、さきにデルタが体勢を立て直しファイズにパンチを放つ。しかしファイズはパンチをかわし、逆にキックをデルタの胸に叩き込む。

「くっ！」

今度はデルタがファイズに突っ込み右腕を横殴りに放つがファイズは頭を下げそれをかわし、拳をデルタの胸に放つ。

「があああっ！」

デルタは二メートルほど吹き飛び、胸を押さえながらふらふらと立ち上がる。

「何故ですか・・・！ 何故、美春がこんな死にかけの豚野郎に・・・！！」

デルタが憎しみのこもった声で言った。確かにデルタのパワーはファイズやカイザより強いし、明久は動くごとに激痛が伴う重傷を負っている。しかし伊達にFクラスや美波の暴行を受けてきたわけではなく、まだ動けなくなるほどではない。それにもう一つ、明久と美春の間に決定的に違うものがある。

それは、経験の差だ。

明久は今まで何体ものオルフェノクと戦ってきた経験があるが、美春はオルフェノクとは一回ぐらいしか戦った事のない上に、デルタの力に操られているのに等しい状態だ。経験の差がある上に力を使いこなしている者と操られている者とは、どちらかが強いなど一目瞭然だ。

美春は舌打ちするとデルタムーバーを外し口元に近づける。

「……………Three Eight Two One」

そして何かを咄くと体育館の窓を破り外に逃げた。ファイズはデルタが破った窓から外に出ると辺りを見渡す。

刹那、ファイズの体を衝撃が襲った。

「があああああああっ!？」

ファイズはいきなりきた衝撃と激しい激痛を感じながら吹き飛び、地面を転がる。ファイズが痛みをこらえながら起き上がると、目の前にそれはあった。

見た目はバイクのようだが、そのバイクはあまりにも巨大すぎる。しかも普通のバイクは空中を飛行できないはずだが、目の前のバイクはタイヤを90°回転させ、搭載している巨大なジェットエンジンを利用することでそれを可能としている。

そのバイクの名はジェットスライガー。操縦者より走行能力を優先として作られたバイクで、最高時速1300kmを誇る化け物バイクだ。

ジェットスライガーの運転席にはデルタが座っており、どうやらこのジェットスライガーはデルタが呼び出したものらしい。

「手間をかかせてくれましたね・・・、・・・死ねっ!!」

その言葉と同時にジェットスライガーがファイズに突進し、ファイズは思いつきりぶち当たり後方に飛ぶ。ファイズは地面に体を横たえていたが、ゆっくりと体を起こすとファイズフォンをベルトから外し、あるコードを入力する。

『ジェットスライガー Come Closer』

ファイズはファイズフォンをベルトに戻しデルタの方に向き直る。デルタはどうやらまたファイズに突進攻撃をくらわせようとしているらしく、ジェットスライガー操り猛スピードでこちらに向かっている。ファイズはそれに挑むかのように走り出した。デルタはその行為を心の中で嘲りながらそのまま突進する。

だが、デルタの耳に何かの音が聞こえてきた。その音はファイズの後方から聞こえてきており、デルタが目を向けるとそこには、もう一台のジェットスライガーが向かってきていた。

「なっ!？」

デルタが驚いている隙にジェットスライガーは既にファイズの横に併走しており、ファイズは高く跳躍してジェットスライガーの運転席に飛び乗ると、そのままデルタのジェットスライガーの横をすり抜けて空中に浮かぶ。デルタのジェットスライガーも後を追う様に空中に飛行する。ファイズはファイズフォンを取り出し折り曲げてフォンブラスターの形態にし、コードを入力する。

『Burst Mode』

そして操縦席からフォンブラスターを握った右腕をデルタのジェットスライガーに向け、フォンブラスターからエネルギー弾を放つ。しかしデルタのジェットスライガーはそれをかわし、今度は逆にデルタがブラスターモードのデルタムーバーをファイズに向けエネルギー弾を放つ。ファイズもそれをかわしファイズブラスターからエネルギー弾を放つが、的が飛んでいるので中々当たらない。このまま膠着状態に入ると思われたが、両者の考えは外れた。

突然、明久の目の前にバトルモードのオートバジンが飛行してきたからだ。さらに左腕に装備しているバスターホイールを乱射しデルタを蜂の巣にする。

「あああああああ!!」

ファイズはデルタが銃弾の雨に撃たれている隙にジェットスライガーを操作し、一気にデルタのジェットスライガーに体当たりを仕掛けた!

「う、わあああああああ!!」

かなりの巨体を誇るジェットスライガーに体当たりされた事で、デルタはジェットスライガーの運転席から弾き飛ばされ地面に衝突する。さらには体当たりされた衝撃でベルトが外れ、デルタは美春の姿に戻り、外れたベルトは美春の前に落ちてきた。

「う、ぐ・・・」

地面に倒れながらも美春はデルタのベルトに手を伸ばす。しかしその手はベルトに届く前に力なく崩れ落ちた。ファイズはジェット

スライガーから下りると、落ちているデルタのベルトを拾う。そしてそのまま変身を解除しようとファイズフォンに手を伸ばす。

だが変身を解除しようとしたファイズを。
どこからか放たれた光弾が襲った。

「っ……!？」

突然撃たれたファイズは何が起きたか理解できなかった。地面を転がりながらも何とか体を起こして光弾が放たれた場所に目を向けると、

そこには『ラッキークローバー』の琢磨と黒服の男が三人ほどいた。手には何かベルトらしきものを握っている。

「吉井さん、今日こそもらいますよ。あなたの命。そしてデルタのベルトと、ついでにファイズのベルトももらいましょう」

琢磨は言い終わるとセンチピードオルフェノクに姿を変える。同時に、黒服の男達が一步前に出てバックルを腰に付ける。

「総員、変身せよ」

黒服の男の一人が放ったその言葉を合図にするかのように一斉に黒服の男達がベルトに付いているバックル——————スマートバックルを横に倒す。

『『Complete』』

一斉に音声が鳴り響き、男達の姿が変わる。その姿もファイズなどに似ているが、違うのがフォトンブラッドがないという点だ。理由は単純で、生産数を上げるためにフォトンブラッドが外されたのだ。ギリシャ文字のο（オミクロン）をモチーフとして作られた量産型ライダー、それがこのライダー——————ライオトルーパーだ。

そしてセンチピードオルフェノクとライオトルーパーが一斉にフ

アイズに襲い掛かる。ファイズは何とか応戦しようとライオトルーパーの一人を殴るが、二人のライオトルーパーが短剣型武器『アクセレイガン』でファイズの背中を斬り付ける。ふらついたファイズをさらにセンチピードオルフェノクが鞭で追い討ちをかけ、また二人のライオトルーパーがファイズをアクセレイガンで斬り付け、一人のライオトルーパーがアクセレイガンの刃を傾け銃形態の『ガンモード』にし、光弾を放ちファイズを撃ち抜く。

ファイズはその猛攻に耐え切れず地面を転がり、センチピードオルフェノクとライオトルーパーはじりじりとファイズとの距離を詰める。ファイズはデルタとの連戦で体が限界に近づいていたため、体を上手く動かすことができず、まさに絶体絶命のピンチという状態だ。

「明久！！」

その時、倒れているファイズの耳に声が飛び込んできた。ファイズが顔を起すと、そこには雄二が腰にベルトを巻きながら走ってきた。そして雄二は手にしているカイザフォンにコードを入力する。

『standing by』

「変身！」

『Complete』

雄二はカイザに変身し、カイザブレイガンをベルトから外しミッションメモリーを挿入する。

『Ready』

カイザブレイガンから黄色のフォトンブラッドの刃が形成され、その刃でライオトルーパーを斬り付ける。

「起きろ明久あ！！」

「・・・分かってるよ！！」

カイザの激励にファイズは何とか起き上がり、センチピードオルフェノクにキックをくらわす。しかしセンチピードオルフェノクはそれを両腕で防ぎ、逆に拳をファイズの顔面に入れる。ファイズはよろめきながらもセンチピードオルフェノクの腹に拳を入れ、腹を

押さえるセンチピードオルフェノクの肩をつかみ腹に膝蹴りを何回も叩き込む。その隙をつき背後からライオトルーパーがアクセレイガンで斬り付けようとするが、カイザのカイザブレイガンからフォトンブラッド弾が放たれライオトルーパーに直撃する。

見た目は拮抗しているように見えるが、それでもやはり数がものを言う。センチピードオルフェノクとライオトルーパーの連携攻撃にファイズとカイザは押されつつあった。

「明久！ 雄二！」

またもや明久達を呼ぶ声が聞こえ、ファイズとカイザが目を向けると、そこには雄二の後を追ってきたのか秀吉、瑞希、ムッツリー、二の三人がいた。

「みんな！ 危ないからどこかに隠れてて！」

ライオトルーパーの一人を蹴り飛ばしながらファイズが叫ぶ。だが、

「そんなことができるはずがないじゃろうが！」

「そうです！ 明久君達を置いて行ける訳がありません！」

「……………俺達は逃げるわけには行かない」

三人とも頑としてゆずらない。とは言っても三人は戦力に数えられないのは事実だ。その事に奥歯を噛み締める秀吉の目に、ある物が映った。

それは、地面に転がっているデルタギアだった。

秀吉はデルタギアに向かって一気に駆け出し、一瞬でデルタギアを拾いベルトを腰に着ける。

「！？ 秀吉！？」

それを見たファイズが驚愕の声を出す。秀吉はデルタフォンを口元に近づけ、変身の体勢に入る。

「ダメだ秀吉！ もし変身したら秀吉の人格が変わっちゃうかもしれないし、人格が変わる以外にも何が起こるか分からないんだよ！ だから早くベルトを捨てるんだ！」

「……………それがどうしたのじゃ！！」

秀吉から放たれた大声に、思わずその場の全員の体が強張る。

「ワシの体などどうなっても良い。性格が変わっても別に困りはせん。ワシは……、明久や雄二が命がけで戦っておるというのに、ワシだけがただ安全な場所で見ているのが嫌なのじゃっ!!」秀吉の演技でも何でもない本気の叫びに、明久達はただ黙って立っていた。自分の友達が命を失うかもしれないのに、自分だけが安全地帯で見ている。それは友達思いの秀吉にとって、何よりも辛い事なのだろう。だからこそ、彼は欲しかったのかもしれない。

大切な友達を助けられる力を。

大切な友達を護ることのできる力を。

そして秀吉はデルタフォンを口元に近づける。

その口から放たれる言葉は一つ。

その言葉は友達を護る力を得る言葉。

彼の大切なものを護ることのできる姿に変わる、決意の言葉。

「変身！」

『Standing by』

手にしたデルタフォンをデルタドライバーの右腰に装着されているデルタムーバーに合体させる。

『Complete』

音声が響き、秀吉の体をブライトカラーのフォトンストリームが包みこみ、同時に強い光が放たれる。その光が止むと、そこにはデルタに変身した秀吉が静かに佇んでいた。

「はあっ！」

秀吉————デルタはセンチピードオルフェノクに突っ込み、腹に蹴りを叩き込む。さらにセンチピードオルフェノクが怯んだ隙に右拳、左拳と流れるような拳打の嵐を放つ。

しかし後ろから迫っていたライオトルーパーがデルタを羽交い絞めにした。その隙にセンチピードオルフェノクは鞭をデルタに振るおうとする。だがデルタは冷静にデルタムーバーを外し口元に近づける。

「ファイア！」

『Burst Mode』

音声が鳴り、デルタムーバーは『ブラスターモード』に変わる。

デルタムーバーをセンチピードオルフェノクに向け光弾を撃ち、センチピードオルフェノクは光弾に怯み鞭を落とす。そのままデルタは羽交い絞めになっているライオトルーパーに銃口を向け、光弾を連射し拘束を解く。光弾をくらい地面を転がったライオトルーパーの側に、ファイズとカイザの攻撃を受けた二人のライオトルーパーが吹き飛んできた。デルタの横に二人のライダー、ファイズとカイザが並び、三人はそれぞれミッシンメモリーを取り出し、ファイズはファイズポインターに、カイザはカイザポインターに、デルタはデルタムーバーにそれぞれ挿入する。

『『Ready』』

ミッシンメモリーが挿入されたことでファイズポインターとカイザポインターは変形し、デルタムーバーは銃身が伸びる。ファイズとカイザはそれぞれのポインターを右足に装着し、ファイズフォンとカイザフォンを開きENTERキーを押す。

『『Exceed Charge』』

ベルトからフォトンブラッドが送り出され、フォトンブラッドがポインターに注入される。

「チェック！」

『Exceed Charge』

デルタがデルタムーバーに音声入力したことで、ベルトからデルタムーバーにフォトンブラッドが注入される。そしてファイズがライオトルーパーに紅い円錐状の光を放ち、カイザはもう一体のライオトルーパーに四角錐状の黄色い光を放つ。デルタは最後のライオ

トルーパーの一人にデルタムーバーの引き金を引くと、青白い三角錐状の光がライオトルーパーに放たれる。

「やああああああああっ!!」

「らああああああああっ!!」

「はああああああああっ!!」

ファイズが跳び蹴りで放つ『クリムゾンスマッシュ』、カイザが両足蹴りで放つ『ゴルドスマッシュ』、そしてデルタが跳び蹴りで放つ『ルシファーズハンマー』が三人のライオトルーパーに炸裂する!

「「ぐわああああああっ!!」」

三人のライダーがライオトルーパー達の背後に現れると同時、ファイズとカイザの必殺蹴りが命中したライオトルーパーはΦの記号とXの記号を浮かべ、青い炎を上げながら灰へとなり、デルタの跳び蹴りを受けたライオトルーパーはΔの記号を浮かべ赤い炎を上げながら灰へと変わった。

「ひっ……!!」

センチピードオルフェノクは怯えた声を出しながら、その場から逃げて行った。三人は変身を解除すると、まず最初に明久が秀吉に駆け寄った。

「秀吉! 大丈夫!? 怪我とかない!?!」

慌てている明久の行動に秀吉は少し困ったような表情をしながらも、すぐに笑顔になる。

「うむ。ワシは大丈夫じゃ」

その言葉を聞いて明久はホッとした。見ている限りは秀吉には美春のように、性格が凶暴になるなどの変化は見られない。どうやら秀吉は変身しても何の異常も起こってないようだ。その事にホッとしていると、明久は一気に眠気を感じた。

「あれ、何か眠い……」

「あ、明久!?!」

秀吉の慌てた声が聞こえてきたが、明久の意識は闇に沈んでいっ

た。

美春との激闘の翌日、明久は病院に入院していた。原因は勿論常夏コンビと根本にリンチされたことや、美春や琢磨とライオトルーパーの激闘のせいである。しかし幸いというか何と言うか、明久自身の体が頑丈な事や、傷の直りが早いこともあって命には関わらないらしい。とは言っても重傷なのは変わりないらしく、病院に二日ほど入院する事になった。ちなみに肝試しのほうは何とか二年側が勝利したらしい。

「何か最近、病院に入院ばかりしているような気がするよ・・・」

「入院ばかりって・・・、まだ二回じゃない」

「普通の人は二回も入院しないと思うよ？」

明久に返事を返しているのは美波だ。現在明久が寝ているベッドの横でパイプ椅子に座り話している。

「そう言えば、清水さんは？」

その言葉を言った瞬間、美波の顔が陰しくなる。

「・・・・・・・・今は家に停学中よ。それ以外は知らないわ」

美波の言葉には少し棘があった。自分の好きな人物を傷つけられ、拳句の果てには自分と明久を殺そうとしたので、それも当然とも言えるだろう。

「・・・これで清水さんが元に戻ってくれたら良いんだけど・・・」
「自分が傷つけられても相手の心配をするのね」

「だって、清水さんはただデルタの力に踊らされてただけだから。
清水さんを責めるなんてできないよ」

明久の言葉には何の嘘もない。彼は本当に美春はただデルタの力に踊らされていたと思っっているのだ。確かに彼女はデルタの力に脅かされていたが、明久を憎む心が元になり、明久や美波を傷つけたのは確かだ。だが明久はそれを知っても、美春を許すだろう。それが吉井明久という人物であり、吉井明久の性格なのだから。

「・・・はあ、あんたって本当にバカね」

「分かってるよ」

「救いようのないバカね」

「いやそこまで言うの!？」

明久が慌ててるのを横目に見ながら、美波は少し笑った。

(・・・でも、ウチはアキのそういうところが好きだよ)

誰にでも優しい明久を見て、明久がその性格のままいつまでも自分の側にいて欲しいと美波は心の底から思った。

「ねえアキ。夏休みなんだけど、もしアキが退院したら海に行かない?」

「え? 海?」

「うん。せっかくの夏休みなんだからどこかに行かないと勿体無いでしょ? 後で坂本達も誘って計画立てようと思うんだけど」

美波の言葉に明久は少し間を空けて言った。

「うん。良いよ」

「本当!? じゃあ行く海の事だけどーーーーー」

美波は楽しそうに海に行く計画を話し出す。

今までの戦いとは無縁の、楽しくて刺激的な夏休みが始まる。

第十九話 超絶バイクとピンチとニューデルタ（後書き）

次回から6、5巻に入ります。
感想お待ちしております。

第二十話 夏と海辺と喧嘩（前書き）

お待ちせしました。夏休み編スタートです。

第二十話 夏と海辺と喧嘩

夏休みの補習も終わり、とうとう本格的な夏休みになった。夏休みの計画を練り、明久達は泊りがけの旅行を行うことになった。ちなみに泊りがけとなったとき、玲が明久を折檻し、明久は危うくあの世へ旅立ちそうになった。

そして旅行当日。抜けるような青空に浮かぶ入道雲が浮かんでいた。わずかに感じられるそよ風がその形を少しずつ変えていく。この光景を見ると、いよいよ夏本番といった雰囲気だ。海水浴に出かける日としては、これ以上はない絶好のコンディションと言えるだろう。

「今日は海に行く日としては最高の天気だな」

降り注ぐ日差しに顔をしかめることもなく、Tシャツにハーフパンツといった、いかにも夏な感じの格好をした雄二が呟く。雄二は体格が良いのでラフな格好が凄くよく似合う。実はそういった格好にひそかに憧れている明久としては羨ましい限りだった。

「まったくじゃ。むね————ではなく心が躍るのう」

こちらは薄手の白のパーカーと七分丈のパンツを組み合わせている秀吉だ。秀吉はスポーツバッグを抱えて車の到着を今か今かと待ち構えていた。

「……………血液パックが痛まないか心配」

ロールアップのジーンズ姿のムツリーニが抱えていたクーラーボックスに心配そうに目をやる。たぶんその中に、ムツリーニの命を支える血液パックが大量に入っているんだろう。海といえば異性の水着だ。明久とて油断していたら簡単に三途の川を渡る羽目になるだろう。

「ところで明久君。今更なんですけど、この人数が車に乗り切れるんですか？」

タイトなデニムのスカートとTシャツの上にキャミソールを重ねた格好の姫路が旅行鞆を両手に抱えて明久の方を見ている。いつもとはイメージの違う服装で明久の目には新鮮に見えた。

「そういえばそうね。お姉さんを入れたら九人だから普通の車の免許で大丈夫なの？」

「うん。僕と雄二はオートバジンとサイドバツシャーで行くし、姉さんも大丈夫って言ってたしね」

明久と雄二がバイクで行くのは、ただ単に折角バイクを持っているのだから使わないと勿体無いのと、二人でも減ったほうが荷物を積み込めるからだ。

「・・・・・・自動車の中型免許は十一人以上から」

「ボクも昨夜ネットで調べたけど、普通免許でも車次第で十人までは乗せても大丈夫みたいだよ」

明久の代わりにAクラスコンビの霧島と工藤が説明した。霧島はミニスカートにパールトーンのサマーセーターを合わせていた。熱い外気を忘れさせてくれるようなピンクと白の組み合わせが目に見える。いい。

「ん？ 吉井君。そんなにボクの格好が気になる？」

「い、いやっ。別に」

「・・・・・・あ、さては・・・・・・」

「な、何かな？」

「ボクのキャミの中が気になっちゃうのかな？」

「べ、別にそういうわけじゃ・・・・・・！」

「あははっ。見たいのなら、もっと堂々と見たらいいのに。ボクは全然構わないよ？」

工藤はショートパンツに上はキャミソールだけという露出の激しい服装だ。さっきから水着と思われる日焼けのあとがチラチラと見えているので明久は色々と困っていた。

明久が目を逸らしていると、近くにいた雄二が工藤の格好を見て目を細めていた。

「そうか。そういえば工藤は水泳部に入っていたんだったな。随分と健康的な日焼け跡がついて（ブスリー——ビクンビクン）」

「……浮気は禁止」

冷静に目を潰す霧島と地面でのたうつ雄二の姿。明久はその光景を見ながら少しは学習すればいいのにと内心思った。

「まったく、この二人は相変わらずだよね————」

「（ササッ）そ、そうですね」

「（ササッ）ほ、ホント、仲が良いわよね」

「待って二人とも。気のせいかもしれないけど、今チョキを僕目の向けて構えていなかった？」

最近姫路と美波が音や殺気を感じさせる事なく攻撃を加えてくることがある。美波はともかく姫路までもがそこまで熟達するなど、色々な意味で彼女にFクラスはよくない影響を与えているのかもしれない。

少しの間そうやって雑談をしていると、目ざといムツツリーニが最初にその気配に気が付いた。

「……車が来た」

「んむ？ おお。そのようじゃな」

マイクロバスかと思えるほど大きな車がやってきて、ゆっくりと明久達の前に止まった。

その運転席のドアが開くと、そこから姿を現したのは、

「あら……？ すいません。お待ちせしてしまったようですね」

明久の血の繋がった実の姉、吉井玲だ。明久としては色々と規格外の玲の運転は少し心配だったのだが、この様子だと問題なさそうなのでホッとした。

「いや、俺達が勝手に早く集まっただけなんだ」

「うむ。つい気が逸ってしまっただけ」

「・・・・・・・・・・楽しみ」

「玲さん。今日はお招き頂いてありがとうございます」

「ウチもこの旅行を楽しみにしてました」

まずは面識のある雄二達五人が玲に声をかける。玲はその挨拶を聞くと、

「そう言っ頂けると私も嬉しいです」

と微笑んだ。

続いて、初対面の霧島と工藤が玲の前に立ち、会釈をした。

「・・・・・・・・初めまして。坂本雄二の妻の翔子「ちょっと待て！

何を勝手に（ブスリーーーーーービクンビクン）」・・・・・・・・

・翔子です」

「こんにちは、吉井君のお姉さん。ボクは工藤愛子っていいいます」

「初めまして、翔子さんと愛子さん。私は明久の姉の玲です」

和やかに挨拶が続く。こうして見ると、女子が多くて結構華やかだ。いつもはFクラスというむさ苦しい空間にいるので、とても新鮮な感じだ。

「さて、こうしていても仕方ありませんので、早速向かいましょうか」

玲が車を指差す。

「そうだね。時間も勿体無いからとりあえず出発しようか。皆も適当に乗っちゃってよ。僕と雄二はバイクで行くから」

「「はい」」

秀吉達が荷物を抱え車に乗り込む。

「ねえアキ」

「? どうしたの?」

車に乗り込む前に、ふとオートバジンの方を見た美波が言った。

「それ何?」

美波が指差したのは、オートバジンの後部座席にある少し大きめのバッグだ。

「ああ。それ中にファイズギアの入ったトランクケースが入ってる

んだ。いつオルフェノクが来るか分からないしね」

「・・・ふん」

何故か美波の顔が一気に不機嫌そうになる。明久は首を傾げながら尋ねた。

「どうしたの？ 美波」

「別に。何でもないわ」

美波はぶっきらぼうに言いながら、車の中に乗っていった。明久はどうして不機嫌になったのか理解できず、また首を傾げた。

「・・・さっ。僕達も行こう、雄二」

「あ、ああ・・・」

明久の呼びかけに雄二が目を抑えながらサイドバッシュャーにまたがりヘルメットを被る。明久もオートバジンにまたがりヘルメットを被りエンジンをかける。

いよいよ楽しい旅行の始まりである。

三時間後、長い道の間を経て辿り着いたペンションは、緑に囲まれつつも潮の香りが届くような好立地だった。

「わぁ・・・。。。。眺めもいいですね・・・。。。。」

「凄いわね。風も気持ちいいし」

「・・・・・・・・絶好のロケーション」

「晴れて良かったよね」

車を降りた女子勢が外を見て感嘆の声を上げた。

小高い丘の上というだけあって、眺めも良い。建物自体はちよっ

と古いが、夏の海を楽しむには最高の条件が揃っていると言えるだろう。

「さて。どうするんだ？ 荷物を置いてすぐにでも海に向かうか？」

「そうだね。海が見えたら泳ぎたくて仕方なくなっちゃうし」

「……（コクコク）」

夏の海というのはどうしてこんなにも楽しそうなのだろうか。遠くから見ているだけでも、今すぐ水着になって海に駆け出したいくらいにテンションが上がってくるから不思議だ。

「それでは荷物を部屋に運んだら海に行きましょうか」

「「はーい」「」」

そんなこんなで明久達が着替えを終えて二十分後。

「やっぱり俺達は待たされるわけだ」

「仕方ないよ。向こうは水着の準備に時間がかかるんだから」

「……こっちも美罪の準備に時間がかかるから助かる」

男三人で浜辺で女子勢の着替えを待つ。パラソルの陰に入りながらのんびりしていると、遠くから微かに妙な会話が聞こえてきた。

「……む。明久達はあそこじゃな。おーい、お主ら——
——」

『あ、あなたっ！ 何をしているんですか！？』

『んむ？ なんじゃ、監視員の方じゃな。そんなに血相を変えてどうしたのじゃ？』

『どうじたのじゃ、じゃありませんっ！ どうしてあなた、上を着てないんですか！』

『……？ どうしてと言われても、普通男物の水着に上は着ないものじゃと』

『女の子が男物の水着を着る時点で間違っているんです！ とにか

くこっちに来なさい!』

『ま、待つんじゃ! ワシは男じゃからこれで良いと』

『私の目が黒いうちは、この海水浴場でそんな過激な格好は許しませんからね! ここは子供たちも大勢いるし、怖いお兄さんとかも一杯入るんだから!』

『だから違うのじゃ! とにかくワシの話を――――!』

『上を着ない限り、絶対に海水浴場のは入らせませんからね! と優で脱いでもダメですよ! きちんと遠くから双眼鏡で監視しますからね!』

『だから待つんじゃと言うとるのに――――!』

何故か、今かすかに聞こえてきた声が秀吉に似ていたような気がしたが……気のせいだろうか?

なかなか皆がやってこないの、適当に準備体操代わりに足首を回したりして時間を潰す。

「それにしても、今回は玲さん様々だな」

そんな時、雄二が海を見ながらそんなことを言った。

「ん? 車の事?」

「それもあるが、『不純異性交遊禁止』ってヤツだ。あれのおかげで翔子がおとなしくなってくれて助かる」

「ああ、それね。それは別に僕以外には適用されないと思うけど……」

それに、玲はきっと雄二と霧島を婚約者同士だと思っているので、おそろく何もしないだろう。

「いや。全員に、ってことにしておいてくれ。その方が都合がいい」「え? どうしようかな?」

明久が勿体つけるように言った。雄二に頼まれると、どうしてか二つ返事で引き受けようって気がしなくなるのが明久には不思議だった。

「別に、言いたいなら言っても良いが、その時はお前にも相応の報いを受けてもらう」

「報い？」

「島田とのキスをばらす」

「天地神明に誓って黙っておくよ」

もしもばらされたら、明久の明日は無いだろう。

「そーいやお前、他にも頬にもキスされてたなんてことがあったよな」

「ああ、葉月ちゃんからされたことがあるけど・・・」

明久が少し顔を赤くしながら言った。小学生とはいえ異性に頬にキスされたのだから当然の反応なのかもしれない。

「・・・・・・っ！（ササツ）」

ムツツリーニの目がぎらりと光を放った。そしてその手には既に四台のカメラが握られている。どうやら女性陣の到着のようだ。

「あ、皆来たみたいだね」

「そうだな」

「・・・・・・とにかく、撮影を」

ムツツリーニが器用に四台のカメラ全てを同時に構える。恐らく逆行補正などピント修正も完璧に成されているのだろう。つくづく底の知らない男だと男だと明久は思った。

「お待たせっ。準備に手間取っちゃってゴメンね」

そんな元気な声でやってきたのは、工藤だ。下はジーンズを短くしたようなパンツで上は普通に水着だが、水泳部の水着とはサイズがだいぶ違うのか、肩や腹部分の日焼けの境界線がはっきりと見え

てしまっている。いかにも『夏』という感じの麦わら帽子を被っていて、それがまた似合っていて可愛い。

「流石水泳部だな。水着も麦わら帽子も似合ってるもんだ」

「そうかな？　ありがと、坂本君。……ん？」

「……（ササッ）」

「あははっ。ムツツリーニ君ってば。僕の水着、撮りたいのなら堂々と撮ればいいのに。いつも言ってるけど、別にボクは怒ったりしないから。ね？」

「……自惚れるな、工藤愛子」

「え？　どういふことかなムツツリーニ君？」

「……貴様の水着に興味など微塵も（ダバダバダバ）——これは熱射病のせい」

「おお。頑張ったなムツツリーニ。28秒だぞ」

「凄いいじゃないかムツツリーニ。鼻血の新記録更新だよ」

「吉井君に坂本君。そんな悠長なことを言っていないで助けてあげようよ……」

まるで蛇口を捻ったようにとめどなく流れる鼻血を心配して、工藤がムツツリーニに駆け寄る。

「あ、工藤さん。君が今近づくと——」

「……日差しがキツくなってきた……っ！

（ブシャアアアッ）」

「え？　ちょ、ちよつとムツツリーニ君！？　ムツツリーニ君ってば！　大丈夫なの！？　鼻血が噴水みたいになってるけど！？」

「……最近の熱射病はタチが悪い（ブシャアアアアッ）」

「もうコレ熱射病とかじゃなくて新型ウィルスか何かじゃないかな！？」

頸動脈を切り裂いてもここまでの血は出ないだろうというほどの血が流れ出る。流石にここまで出血が激しくなるのを黙って見られなくなったのか、明久がゆっくりとムツツリーニに近づく。

「ムツツリーニ」

「・・・・・・・・・・明久・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・遺言は？」

「何言ってるの吉井君！？ 縁起でもないよ！？」

「・・・・・・・・・・来世は、鳥に生まれてきますように・・・・・・・・・・」

「ムツツリーニ君もそこで乗らないの！ ちゃんと助かるからっ！」

「・・・・・・・・・・そして、空から女子更衣室を思う存分覗けますように・・・・・・・・・・」

「しかも生まれ変わってもやることはそれなの！？ もうちょっと現世の死因から何かを学ぼうよ！」

ムツツリーニは笑顔のまま顔を鮮血に染めて逝った。性格にはまだ死んでいないが、この様子では目覚めるのは少し先だろう。

「すいません。お待たせしちゃいました」

「・・・・・・・・・・お待たせ」

工藤に遅れること少し。今度は霧島と姫路がやってきた。水着は前にプールで見たのと同じみいだだが、ロケーションが変わっただけで全然違う印象を受けるから不思議だ。

「・・・・・・・・・・愛子。あまり土屋をいじめないように」

「いや、ボクなにもしてないんだけど・・・・・・・・・・」

霧島が倒れ臥すムツツリーニを見て工藤に告げる。どうやらムツツリーニの顔の鼻血の原因がよく分かっていないようだ。

「違いますよ翔子ちゃん。土屋君は工藤さんの水着姿があまりにも可愛いから興奮しちゃったんですよ。ね、土屋君？」

「・・・・・・・・・・そんな事実の確認されていない」

虫の息ながらも必死に否定するムツツリーニ。顔を鼻血で染めているくせに、こういうところは素直ではない。

「・・・・・・・・・・興奮？」

「はい。土屋君も男の子ですから」

「・・・・・・・・・・そう」

姫路の声を聞くと、霧島は一つ頷いた後にゆっくりと雄二に歩み寄った。

「・・・・・・・・雄二」

「んあ？　なんだ翔子？」

「・・・・・・・・えい（ブスリ）」

「ふごあっ！？　（ブシャアアッ）」

そして、雄二の鼻に霧島の白魚のような指が滑り込み、そこから間欠泉のごとく鼻血が湧き上がった。

「・・・・・・・・これで、いい」

「いいわけあるかあっ！　いきなり何しやがる！　（ブシャアアアッ）」

「・・・・・・・・だって、雄二は私の水着に興奮しないといけないから」

どうやらそれで実力行使したらしい。だが、そんなことをしなくても明久には充分鼻血ものだった。

「霧島さんも姫路さんも綺麗だからなあ・・・・・・・・」

「え・・・・・・・・っ！？　あ、明久君！？　そんな、綺麗だなんて、恥ずかしいです・・・・・・・・」

「んあっ！？　ご、ゴメン！　つい口に出ちゃった！」

パレオの裾を合わせるような仕草をしつつ姫路が体を縮めている。そんな事を言う気はなかったのだが、思わず独り言が出てしまったらしい。

「ふんっ。どうせウチは綺麗じゃないですよーだ」

今度は背中側からちよつとご機嫌斜めの声が聞こえてきた。この声からすると、声の主は美波だろう。

「って、あれ？　美波は水着変えたの？　この前とは違うみたいだけど・・・・・・・・」

振り向いてみると、パーカーを羽織っていて全部は見えないものの、美波の水着はこのセパレートタイプとは違ってワンピースタイプのものだった。というより、あれは競泳用の水着だろう。

「こ、これはその、今日はたくさん泳ぐ気だったからで！　ほら、最近アイスやジュースが美味しくて、体重が増えちゃったから・・・」

・・・！

「ふーん」

しどろもどろになっている美波を見て明久は眉をひそめたが、余計な事を言うとか節制を喰らいそうなので黙る事にした。

「皆さんお待ちせしました」

そしてついに、美波の後ろから明久の最も恐れている人物、吉井玲が浮き輪を片手に現れた。

「あ、玲さ————ん——ん——」

美波が声の主へ顔を向けて・・・・・・そのまま動きが止まる。

「美波さん？」

「いいんです・・・・・・。ウチはもう、瑞希や玲さんには一生勝てないんです・・・・・・」

「???」

何を言われているかわからないようで、玲は小さく首を傾げた。

そんな玲を見ながら明久は内心ホッとしていた。

「良かった・・・・・・。姉さんが普通の水着を選んでくれて、本当に良かった・・・・・・！」

玲が着ているのは、どこにでもあるような普通のビキニだ。おかしな点はどこにも見当たらない。もしかしたらスクール水着でも着てくるのかもしれないと思っていたので、普通のビキニ水着だったのは本当に良かった。

「そんな心配はしなくても大丈夫ですよアキくん。サイズが無くて、選択肢が殆どありませんでしたから」

「待つんだ姉さん。選択肢があったらどうする気だったんだ」

玲のその一言で、安心しかけた明久の背筋に寒気が走った。

「・・・・・・玲さん」

「はい、何ですか翔子さん？」

「・・・・・・少しだけ、失礼」

むんずっ

そんな擬音が聞こえてくるような、霧島の行為。

「? どうかしましたか、翔子さん」

「・・・・・・凄い・・・・・・」

なぜか霧島は、玲の胸を鷲掴みにして戦っていた。

「あ、玲さんっ！ 私も失礼しますっ！」

そして今度は後ろから、姫路が玲の腰に手を回す。

「??? 瑞希さん。あなたも何か？」

「・・・・・・いえ・・・・・・なんでも・・・・・・ないです」

姫路は力なくそう答えると、静かに玲から離れて――――

――美波の隣に座り込んだ。

「・・・・・・しくしくしく・・・・・・」

「あ。瑞希・・・・・・。いらっしやい・・・・・・」

「美波ちゃん・・・・・・。海って、残酷ですね・・・・・・」

「違うのよ瑞希。残酷なのはきつと、神様なのよ」

まるで生気を感じられない目をした美波が姫路を暖かく迎え入れている。

そのせいか、二人の周りには葬式のような雰囲気漂っている。

「ほらほら皆、元気出しなよ。最後の一人も来たみたいだし、ね？」

そんな空気を払拭するかのように工藤が明るい声を出しながら視線を送る。するとその先には、ゆっくりとこちらに歩いてくる秀吉の姿があった。

「すまぬ皆の衆・・・・・・。ワシが一番最後のようじゃな・・・・・・」

頭上の天気とは裏腹に、淀んだ口調の秀吉。

「どうかしましたか、秀吉君。随分と元気が無いようですが」

「そうだね。着替えの前は『今度こそワシを男として認識させるのじゃ！』なんて張り切ってたのに」

「放っておいて欲しいのじゃ・・・・・・」

俯いて呟く秀吉は、何故か水着の上に見覚えのないTシャツを着ていた。

海でひとしきり泳ぎ、明久の持ってきたスイカとバットを使つての血で血を洗うスイカ割りを無事におえ、明久達は昼時に入った。

男性陣がスイカを持ってきたからということで、今度は女性陣が昼の焼きそばやカレーを買いに行っていた。

「ねえ雄二」

「なんだ？」

「急に肩の辺りが軽くなったような気がするんだけど」

「奇遇だな。俺もだ」

さっきまで明久達を感じていた嫌な気配のようなものが綺麗さっぱり無くなっている。それは恐らく、

「女性陣がいなくなって妬みの視線がなくなったから、だよね」

「だろうな。まったく、厄介なもんだ」

美人揃いで目立つ分、一緒にいる男としてはキツイ部分もある。きつと、男と女のレベルが釣り合っていない、とか思われていたのだろう。

「あれ？　ところでムツツリーニは？」

「ああ。さっきカメラのレンズを洗浄するとか言っただけに行っただぞ」

「ふーん。どうせまた鼻血で汚しちゃうくせにね」

「それでも動かずにはられないんだろ」

「まあ、それがムツツリーニっていう男だもんね」

雄二と適当な会話をしながら周囲を見回してみる。海とはカップルばかりのイメージがあったが、こうしてみると女性だけであるグループもいる。

「お待たせしました二人とも。ただいま戻りました」

「あ、お帰り。結構時間がかかったね。混んできたの？」

ボケーンとしているところに、色々な食べ物や飲み物を携えた女性陣が帰ってきた。

「いや、そこまで混んでおったわけじゃないのじゃが……」
ジュースのペットボトルを持っている秀吉が苦々しく呟く。何かあったのだろうか。

「ボクたち、またナンパされちゃったんだよね」

「え？ また？」

スイカ割りの前にもナンパされていたのだが、どうやらまたされたいらしい。そんなことになるのなら、誰か男が一人付いて行けば良かったかもしれない。

「さっきは特に、美波ちゃんと翔子ちゃんが随分と迫られて困ってましたよね」

姫路が苦笑いを浮かべながら美波と霧島に視線を送る。

「ホント、ウチああいいうのって苦手なのに……」

「……私も、苦手」

執拗に迫られていたという二人は疲れた顔をしていた。

「ふえー。それは大変だったね」

「いつものように腕力で片付ければ良かったんじゃないか？」

言いながら、雄二と二人で荷物を受け取ろうと手を伸ばす。

「こらこら、そんな態度じゃダメだよ吉井君に坂本君」

すると、その伸ばした手をペチン、と工藤に叩かれてしまった。

「そんな態度って言われても」

「何がダメなんだ？」

「何がダメなんだ――――って、はあ……。二人とも、本当に女心が分かってないね……」

工藤がこれみよがしに大きなため息をつく。

玲がいるから大丈夫だろうと思ったんだけど……という前に、不機嫌そうな声が割って入った。

「こらアキ。アンタ、ウチらが困っていても気にならないって言う

の？」

「明久君。それはちょっと冷たいと思います」

「あ、いやそういうわけじゃ……」

美波と姫路がジト目で明久の方を見る。そういうつもりはなく、単純に心配はいらないと思ったのが。

「……雄二」

「ん？」

「……雄二ははもっと、ヤキモチを妬いたり心配したりするべき」

「いやだから俺なりに心配はしていると痛だだっ！　ちょっと待て！　お前が俺に何を要求しているのかさっぱりわからねえ！」

「……分かるまで教えてあげる。……身体に」

「ふぐあああっ！」

感情表現がストレートな霧島は怒りのたけを素直に雄二にぶつけていた。

「そうよね。アキたちはもっとウチらのことを心配するべきよね」

「ですね……。少しくらいは妬いてもらわないと、なんだかちよっと……」

「じゃあ、少し心配させてやりましょ。このままじゃ釈然としないし」

「いいですね。ちよっと意地悪しちゃいましょうか」

「ん？　どしたの、姫路さんに美波？」

隣では美波と姫路が顔を寄せて何かを囁き合っていた。

「ねえ瑞希。ああいうのって、いつどこに行っても出てくるから困るわよね」

「そうですね。困っちゃいますね」

美波と姫路がなぜか明久の方を見ながらそんな事を言う。

「あれ？　美波や姫路さんってよくナンパされるの？」

今まではそういった話を聞いたことが無いような気がするので、明久が尋ねた。

「はい。それはもう、いつでも！」

「そうよ。それはもう、どこでも！」

妙に力強い返事なのが気になった。

「でも、その割にはさっき随分と慣れていない反応に見えたけど・・・」

「そ、そんなことないです！いつものこと過ぎて呆れて声も出なかっただけです！」

「そ、そうよ！ 瑞希の言うとおりでわ！ 鈍くて恋愛ごとに縁の無いアキにはわからないでしょうけどねっ！」

鈍くて縁が無い、という言葉に明久がムツとする。

「そんなことないねっ！ 僕だってナンパくらい余裕で――――」

「明久君。余裕で、なんですか？」

「アキ。余裕で、何かしら」

明久は何故か分からないが、ナンパぐらい余裕でできると言った瞬間、自分が殺される錯覚を覚えた。

「えーっと、余裕で、その・・・」

「まさか、できる、とでも言うんですか？ 明久君が？」

「アキ。アンタ何を言ってるの？ アンタにナンパなんてできるわけがないじゃない」

「む」

「そうですよ。明久君にナンパなんて似合いませんし、うまくいくとも思えません。見栄を張っちゃダメです」

「むむ」

「アキくん。人には向き不向きというものがあります。アキくんは恋愛ごと全般に向いていませんから、異性との交遊はお友達までにしておくべきだと思います」

「むむむっ」

隣で聞いていた玲までもが口を挟んできた。

「……雄二も、全然女心が分かっていない。……だから、モテない」

「く……っ！ 言ってくれるじゃねえか……っ！」
霧島に顔を鷲？みにされたまま、雄二が呻く。よくあの状態で普通に喋るな、と明久は思った。

「まったく、吉井君も坂本君も反省しないとダメだよ？ ほらほら代表も、その程度で許してあげなよ。買ってきた飲み物が温くなっちゃうから、ね？」

工藤がそう言って締めると、渋々と言った感じで霧島は雄二の顔面から手を離し、昼飯タイムに入った。

「まったく……。あそこまで言うことないじゃないか……」

昼食を終えた明久は一人雄二達のいる砂浜から少し離れた海岸を歩いていた。周囲には人っ子一人の影も見られず、ただ静かに波の音が響いている。自分にナンパなどできるはずがないと言われている事に腹を立たせながら、本当にナンパでもするかと周囲を見回す。
「た、助けてくれー！」

「!？」

突然男の助けを呼ぶ声が聞こえ、その声の方向へ走る。そこに辿り着くと、そこには若い男がタコの性質を持つオルフェノク――
――オクトパスオルフェノクに襲われていたところだった。

明久がオクトパスオルフェノクに飛び掛る前に、オクトパスオルフェノクの顔面から触手が飛び出し、男の口に入り込む。触手が男の口から抜けると、男は瞬く間に灰へと変わっていった。

「ん？ 何だもう一人いたのか」

オクトパスオルフェノクがゆっくりと明久に近づく。はつきり言っている状況はかなりまずい。雄二達との連絡用にファイズフォンは持ってきているが、肝心のファイズドライバーが無い。なんとか逃げてみるかと明久が走り出そうとしたその時、明久の耳にジェット音のようなものが入った。後ろを振り返ると、バトルモードになったオートバジンがバスターホイールを明久の後ろにいるオクトパスオルフェノクに向けていた。このコースでは明久が銃弾の巻き添えになること間違い無しだ。

「おうわぁ！」

間一髪それを察した明久が避けると、バスターホイールから放たれた銃弾はオクトパスオルフェノクに直撃した。

「ぎゃあああああああ！！」

オクトパスオルフェノクが倒れた隙に明久はオートバジンから何かを投げられる。それはファイズドライバーの入ったトランクケースだった。明久は急いでトランクケースからファイズドライバーを取り出し、腰に着ける。そしてファイズフォンを開き、変身コードを押す。

『S t a n d i n g b y 』

「変身！」

『C o m p l e t e 』

明久はファイズへと変身し、オートバジンの左ハンドルにミッシェンメモリーを挿入する。

『R e a d y 』

音声が鳴ると同時に左ハンドルが抜かれ、紅色のフォトンブラッドの刀身が形成されたことでファイズエッジとなる。

「おらぁ！」

オクトパスオルフェノクの腕が伸び、鋭い左ストレートがファイズに襲い掛かる。ファイズはファイズエッジを縦に構える事で左ストレートを防御しするが、今度は右ストレートがファイズの胸に直撃する。

「ぐっ！」

ファイズは倒れこみ、その隙にオクトパスオルフェノクがファイズに突進する。しかしファイズは持っているファイズエッジをオクトパスオルフェノクの胸に投げつける。

「がっ!？」

ファイズエッジがオクトパスオルフェノクの胸に当たり、ファイズは急いで立ち上がり宙に浮かんだファイズエッジを掴み取る。そして怯んだオクトパスオルフェノクを何回も切り裂く！

「舐めるな！」

オクトパスオルフェノクの顔面から触手が放たれるが、ファイズエッジでその触手を切り裂き、また数回斬り付けるとオクトパスオルフェノクが後ろに吹き飛ばされる。ファイズは追撃しようとオクトパスオルフェノクに突進した。

「く、くそ！ 覚えてろ！」

オクトパスオルフェノクは悔しそうな声でそう言うと、顔面の触手から墨を吐き出す。

「うわっ!？」

墨は煙幕となりファイズの視界を遮る。視界が晴れると、オクトパスオルフェノクの姿はどこにもなかった。それを確認するとファイズは変身を解除し、明久の姿に戻る。

「逃げられちゃったか……。早く探し出さないと……。！」

オルフェノクを野放しにしたら、海に來ている人達を襲うかもしれない。そう考えた明久はオルフェノクを捜す事にした。ちなみにこの時明久の頭からは、美波達の事などすっかり抜け落ちていた。

オクトパスオルフェノクを捜し出してから数時間経ち、すっかり夕暮れ時になった。結局オクトパスオルフェノクは見つからず、誰も襲われていなかった。まあ被害が無いのであればそれに越した事はないのだが。

時間が夕暮れ時になったこともあり、明久はとりあえず美波達がいる砂浜へ戻ることにした。そしてどうやってオルフェノクを捜しだそうと思ったその時。

「アキッ!!」

突然声をかけられ、後ろを振り返る。そこには怒った表情をしている美波が立っていた。後ろには雄二達もいる。

「こんな時間までアンタどこに行ってたのよ! まさか女の子をナンパしてたんじゃないでしょうね!？」

「落ち着け島田。コイツが一人でナンパなんて出来るわけがないだろ」

昼の明久なら反論してたかもしれないが、今の明久はそれどころではないので聞き流す事にした。

「・・・はあ。まあ良いわ。アンタがこんな時間までどこかに行つてのかは聞かないであげるわ。それよりアキ、夜のお祭りのことなんだけど・・・」

しかし今の明久にはその言葉は耳に入っていなかった。今はオルフェノクを捜し出す事が最優先だからだ。

「ちょっとアキ。聞いているの？」

「そんな事はどうでも良いとして、それより雄二と秀吉。実はオルフェノクが出たんだ」

美波の言葉を流し、明久は雄二と秀吉にオルフェノクの話を持ち出す。

「オルフェノクじゃと？」

「うん。もしかしたら今この辺にいるかもしれないんだ。でもどうやって捜そうと思ってる。だから二人に相談してみようと思ってる……」

雄二？ どうしてそんなに青ざめてるの？」

明久が雄二の顔を見ると、雄二の顔は怒った霧島を見るときのように青ざめている。よく見ると秀吉も少し顔が引きつっている。二人の視線を追ってみると、顔を伏せている美波がいた。

「……何よ、どうでもいい事って……」

「美波？」

明久が心配そうに声をかけるが、美波は何も答えず続けた。

「—————こんなときでも、オルフェノクオルフェノクオルフェノク！ そんなに夏休みより、皆というより、……ウチというよりオルフェノクと戦いたいなら、勝手に戦ってくればいいじゃない！！」

顔を上げた美波の顔は大量の涙で溢れていた。声も明久が聞いたことの無い涙声だった。明久が呆然としていると、美波は明久に背を向け走り去って行った。

「……明久」

その声に明久が雄二達の方を見ると、全員が呆れたような表情を浮かべていた。

「……お前は少し自分の性格を見直したほうが良いかもしれないな」

「すまぬ明久。ワシも雄二に同感じゃ」

「……一回性格を直してみるべき」

「ごめんなさい明久君。私もそう思います」

「……そうすれば、島田の気持ちも分かるはず」

雄二達の言葉に、明久はただ呆然とするしかなかった。

第二十話 夏と海辺と喧嘩（後書き）

感想お待ちします。

第二十一話 浴衣と祭りと花火（前書き）

お待たせしました。旅行編ラストです。

第二十一話 浴衣と祭りと花火

日が沈み、明久達はペンションに戻っていた。近くの町で開かれている祭りに出かけるための準備をするためだ。今は女性陣が着替えに行き、男性陣はリビングに残っている。しかし一つ大きな問題が残っていた。明久と美波がともに口を聞いていないのだ。明久が謝ろうにも美波から避けられてしまうし、実は明久自身もどうして美波があそこまで怒っていたのか分からない。

「・・・はあ」

ペンションのリビングのソファに座りながら明久がため息をついた。ペンションに戻る前に何回か美波に謝ろうとしても避けられてしまうし、オルフェノクは見つからない。そんな明久を見かねてか、秀吉が言った。

「明久、どうしたのじゃ？」

「いや、それがさあ・・・」

「どうせ、島田がどうして怒ったか分からないって言うんだろ？」

「どうして分かるの!？」

「・・・分からないほうがおかしい」

明久が驚いていると、ムツツリーニが大したことではないかのよう to 言った。明久自身自覚はないが、明久の性格をよく知っている雄二達にしてみれば簡単なことなのかもしれない。

「まったく・・・。お主のその鈍感が天然ならば逆に大したものじゃ。島田がどうしてあそこまで怒ったのか分かんとは・・・」
「？」

首を傾げる明久に、雄二が言った。

「明久。お前文化祭からろくに行事を楽しんでないだろ？」

「えっ？」

「うむ。合宿の時はオルフェノクに襲われ怪我をしておったし、この前の肝試しはまたオルフェノク……。楽しむどころか命懸けの戦いの連続じゃったな」

確かに言われてみればそうかもしれない。最近は行事を楽しみどころか、その行事にオルフェノクが関わっていた為、満足に楽しむ事すらできなかった。

「そもそも、この旅行の計画を立ち上げたのは島田だ」

「美波が？」

「ああ、オルフェノクとの戦いの連続で怪我ばかりしてるお前に楽しい思い出を作ってもらいたって、楽しそうに話してたぞ」

「……………それを無駄にされたようなものだから、怒るのは当然」

雄二達の言葉に明久は言葉を失った。自分が病院で呑気に寝ているときにも、美波は自分の事を心配してくれていたのだ。そして、自分に楽しい思い出を作ってほしいという願いを込めて今回の旅行を計画した。

それなのに自分はオルフェノクを優先した。楽しい思い出を作るより、オルフェノクを倒す事を優先したのだ。これでは怒られて当たり前だ。せつかくの楽しい旅行が、それで潰されてしまったのだから。

「だけどオルフェノクは……」

「それだったら俺か秀吉だけに言えいいだろ。それを堂々と島田の目の前で言いやがって。俺達だけに話せば俺達だけでカタをつけたのに、島田にとって楽しんでもらいたいお前本人がオルフェノクに食いついてどうすんだ。……こういうのも何だが、少しは島田の気持ちも考えろバカ」

雄二の言葉に明久は目を伏せる。確かに雄二の言うとおり、自分は少し無神経すぎたのかもしれない。自分では気をつけてたつもり

なのだが、その結果、美波を傷つけてしまった。どうすればいいかと明久が頭を抱えたその時。

「「お待たせー」」

華やかな声上がり、それと同時にリビングのドアが開かれる。

「皆、随分と時間がかかってたんだね————おっ！」

「お、凄いな。そんなもんを用意していたのか」

「・・・・・・時間がかかるのも納得」

「なるほど、浴衣じゃったか。全員よく似合っておるではないか」

ドアから姿を覗かせた女性陣は、青や紫、ピンクに白と色とりどりの浴衣を着ていた。いや、色だけではない。柄もそれぞれ違って、朝顔や牡丹、葡萄ぶどうなんと言うのもある。こうして並んでいるのを見ると、まるで浴衣のニューモデルをお披露目するファッションショーに来ている気分だ。勿論全員が可愛い上にスタイルが良いのもその一因でもある。

「へえ〜。綺麗だね〜。髪形も変えてるから、グッと色っぽくなってるよ」

「そ、そうですか？」

姫路が袖を広げてくるっと回ってみせる。

「まさか私も着る事になるとは思いませんでした」

その隣では、玲が戸惑ったように自分の浴衣を見下ろしている。

だが、明久が見た限り、玲の浴衣は無かったはずである。

「皆で着ようって前からこっそり相談してたんですよ。玲さんの分は翔子ちゃんが用意してくれたんです」

「・・・・・・着ていないのがあったから」

霧島と玲なら身長も近いので丁度良かったのだろう。

「ウチ、浴衣って初めて着るかも」

「あ、そっか。美波は海外育ちだもんね」

「アンタには言っていないわ」

そう言うのと美波は明久からプイツと顔を逸らしてしまった。どうやらまだ機嫌は悪いようだ。これでは元の仲に戻るまで少し時間がかかるだろう。そんな美波の側では霧島が雄二に話しかけていた。

「・・・・・・雄二。私の浴衣、どう？」

表情からはあまり窺えないが、霧島がどこか照れくさそうに雄二の前に一歩出て浴衣姿を披露している。長い黒髪と浴衣の鮮やかな紫がよく映えている。

「ん？ ああ、そうだな・・・・・・。まあ似合ってるんじゃないか？」

雄二は少し迷ったような素振りを見せたが、とりあえずといった感じで形だけ褒めた。

「・・・・・・じゃあ、私と結婚したい？」

「全然」

「・・・・・・じゃあ、私と婚約を結びたい？」

「微塵も」

「・・・・・・じゃあ、雄二――――」

「まっぴらだ」

「――――生きて、いたい・・・・・・？」

「おおっ！ 翔子は本当に可愛いな！ 見間違えたぜっ！」

「・・・・・・雄二は素直じゃない」

「お前な・・・・・・。一応言っとくと、今のは『脅迫』って言うんだぞ・・・・・・」

「・・・・・・恋愛では手段を選んじゃいけないって、お義母さんが言ってた」

一見その言葉だけ聞くと恋愛に一途とも言えるが、話の中身は立派な脅迫である。

「さて。それじゃあお祭りに行きましょうか」

玲がばんばん、と手を叩いて明久達を促す。

「じゃあ行くか。正直腹が減って仕方ねえ」

「・・・・・・たこ焼き、焼きそば、お好み焼き」

そう言われると、明久も空腹を感じてきた。ソースの焦げる匂いが妙に恋しくなってくる。

「ほら、アキ君も用意をしてください」

「はい」

返事をし、玄関に向かおうとしたその時。

「きゃっ」

小さな悲鳴が聞こえ、顔を向けると美波が少し転びそうになっていた。慌てて明久が美波の腕をつかみ転倒するのを防ぐ。

「大丈夫？ 美波」

明久が心配そうに声をかける。すると、それを見た秀吉がまるで何かを企んでいるような笑みを浮かべて言った。

「どうやら島田はまだ浴衣に慣れていないようじゃのう。明久、転ばないように手を繋いで言ったらどうじゃ？」

秀吉の言葉に美波は顔を赤くし何か言おうとしたが、何か思い直すと思つて明久に手をさし出した。

「し、仕方ないわね。転ぶといけないから、今回は手を繋いであげるわ。感謝しなさいよアキ！」

顔は相変わらず横を向いているが、顔は赤い。どうやら少し照れ臭さが混じっているようだ。明久も女子と手を繋ぐなどあまりないので少し顔を赤らめていたが、やがてそつと美波の手を握った。

「じゃ、じゃあ行こうか」

明久は美波の手を握りながら玄関へと向かう。ふと後ろを振り返ると、笑顔で鋭い殺気を放っている姫路と玲（特に玲の殺気は尋常なものではない）、そして笑顔で笑っている秀吉の顔が目に入った。どうやら今のは明久と美波を思つての行動だったらしい。明久は心の中でありがとうと伝えたと美波の手を引いて玄関へと向かう。美波は手を引かれながら、握られたその手を見て思った。

（・・・・あつたかい）

美波は握られたその手を、少し強めに握った。

大きな公園を使った夏祭りは明久達が着く頃にはすでに大勢の人でにぎわっていた。

「あら………？ 珍しいですね。ドネルケバブですか」

出店の暖簾のれんを見て、玲が呟く。

「珍しい？ そんなことないと思うけど。前から無かったっけ？」

「五年前にはあまり見かけませんでしたね。今はこういった物が出店の定番なんでしょうか」

「定番かどうかはわからないけど、結構見かけるよ。美味しいし」

「そうですか。では食べてみる事にしましょう。アキくんは食べますか？ 買ってきてあげますよ？」

「あ、じゃあ半分こする？ 姉さんも色々食べてみたいでしょ？」

「そうしましょうか」

財布の入った巾着を片手に玲が出店に並ぶ。まだ空いているせいか、すぐに出来たてのドネルケバブを渡されて戻ってきた。

「これは美味しそうですね。アキくん、先に食べますか？」

「いや、後で良いよ。お先に姉さんからどうぞ」

「そうですか。それでは、お言葉に甘えて————はむっ玲が湯気の出ているケバブにかぶりつく。もぐもぐと口を動かしている姿を見ると、それだけで明久の腹が鳴りそうだった。

「はい。アキくんもどうぞ」

「うん。ありがと」

玲からケバブを受け取り、同じようにかぶりつく。

「うんっ。美味しい」

ケバブの味は祭りの雰囲気ともあいまってか、美味しさが倍増しているように思えた。

「あらあらアキくん。そんなに一生懸命頬張って……。やつぱり美味しかったんじゃないですか」

玲に言われて、思わず夢中で齧り付いていた自分に気付く。

「ごめん姉さん。つい食べ過ぎちゃった。もう一つ買ってくるよ」

「いえいえ。アキくんが食べたいのならあげますよ」

くすくすと玲が笑いながら言う。何故だか凄く嬉しそうである。

「じゃあ、ありがたくもらうよ」

「はい、どうぞ」

言われた通り、残った分も遠慮なく頂戴する。

「アキくん、こっちを向いてください」

「ん？ なに？」

最後の一欠片まで美味しく平らげていると、玲に呼びかけられた。

「慌てて食べすぎです。ソースがついてますよ」

そう言って巾着からハンカチを取り出すと、玲は明久の頬に手を伸ばす。

「慌てなくても、誰も取ったりしませんから」

ソースがついたであろう箇所を玲がハンカチで拭った。そのハンカチから、柑橘系の良い匂いが仄かに薰ってきた。

「あ、ありがと、姉さん」

「いいえ。このくらいお安い御用です」

ハンカチを仕舞いながら微笑んでいる。なにかいつもと雰囲気が違う。何かあるのだろうか。

疑念に首を傾げつつ食べ終えたケバブの包装紙を丸めていると、横手から別の声が聞こえてきた。

「明久君。たこ焼きを買ってきてみたんですけど、食べますか？」
にこにこ朗らかな笑みを浮かべている姫路が、たこ焼きの入っ

た箱を片手に明久達のほうにやってきた。これはまた美味しそうだ。
「どうもありがとう。じゃあ一つもらってもいい？」

どう見ても姫路の手作りでもないもので、ここはありがたくもらっておくことにする。いつも塩などしか舐めていなかった明久としては、栄養がたくさん取れて幸せである。

「はいっ。それじゃ————」

姫路がたこ焼きに楊枝をさして持ち上げる。

「あーん」

「ほえ？」

思わぬ行動に、思わず間拔けな声が口をついて出てしまった。

「？　どうかしましたか明久君？　食べないんですか？」

「あ、いや。もらうけど……」

微笑んだまま姫路がたこ焼きを明久の口に寄せてくる。

「あ、あーん」

「はい、どうぞ」

口を開くと、姫路の手でたこ焼きが明久の口に運ばれた。柔らかい生地と歯ごたえのあるタコがソースの辛みととてもよく合う。

「うん。美味しい美味しい」

「そうですか？　それは良かったです」

姫路はそのまま同じ楊枝でもう一つたこ焼きを取り、今度は自分の口に入れる。そのやり取りを見て明久はまるでカップルみたいだと思うが、そこで重要な事実に気付いた。————一側に不純異性交遊禁止を決めた玲がいることを。

「ご、ごめんなさい姉さん！　これは不純異性交遊じゃないんですっ！」

明久は頭を抱えての防御体勢をとった。優しいとすっかり油断していた。殺されるかと明久が怯えていると、予想の上をいく言葉がかけられた。

「？　急に頭を抱えてどうしたんですか、アキくん？」

そんな言葉が投げかけられただけで、予想された玲から報復攻撃

が訪れる事はなかった。

「え？ あれ？ どういうこと？」

「アキくんは変な子ですね。ほら、そんなところにしゃがみこんでいては周りの人の迷惑になりますよ？」

「明久君。怒られたりなんてしませんから、安心してください」

玲と姫路の二人はそんな明久を見てクスクスと笑い合っていた。いつもと様子の違う二人を見て、明久は首を傾げた。いつもなら折檻を受けてもおかしくないのだが、何故か今日は二人とも優しい。

「アキってば、しゃがみこんでどうかしたの？ 頭でも痛くなった？」

頭の上から聞こえてくる、からかうような声。

立ち上がって目をやると、そこには頭にお面、右手にヨーヨーと巾着、左手にわたあめという完全装備の美波がいた。どうやら出発するときに比べると、大分機嫌が良くなったようだ。

「いや、なんでもないよ。気にしないで」

そこまで人でごった返しているわけではないので邪魔はならないかもしれないが、すぐにその場に立ち上がる。周囲の人の視線がちよっとだけ恥ずかしかった。

「テンションが上がり過ぎちゃってめまいでも起こしたの？ アキってば子供ね」

「いやいや。そう言う美波の方こそ、すっごいはしゃいでるじゃないか」

「え？ そ、そう？ そんなことないと思うけど」

「そこまで色々手に抱えてるのに、はしゃいでないってことはないと思うよ」

「こ、これは、だって………出店のお兄さんがオマケしてくれるって言うから、つい」

ここまで絵に書いたような格好だと、更に金魚とリング飴も持たせてフルオプションにしてみた気がする。

「美波さんはドイツ暮らしが長かったんですね。無理もありませ

ん」

「美波ちゃんが楽しそうで私も嬉しいです」

玲と姫路がそんな美波を楽しげに見ていた。

「アキ。わたあめ食べる？ 甘くて美味しいわよ」

「わたあめか。久しぶりだなあ。ちよっともらおうかな」

「うん。いいわよ。はいっ」

さっきの姫路と同じように、美波がわたあめを明久の口に寄せる。何故かさっきから皆が明久に優しいので、明久は戸惑ってばかりだった。

「？ いないの？」

「あ、もうよ」

端の方にかぶり付くと、その名の通り綿のような飴が口の中に甘みをアピールし、そのまま溶けてなくなっていた。とても懐かしい味で、食べたのはおそらく小学生の頃以来だろう。

「向こうで射的っていうのがあったんだけど、あれってどうやるの？」

「ああ、射的ね。あれはオモチャのピストルで置いてある景品を撃って、下に落としたら貰えるってゲームでさ」

「へえ。面白そう！ 行ってみましょ！」

「ちよ、ちよっと美波！ そんな急ぐと浴衣がはだけちゃうよ！」

「大丈夫！ 大分慣れてきたから！」

美波もやたら機嫌がいい。これが祭りの力というものなのだろうか。

そんな時間が三十分ぐらい続いた頃、明久と美波は一緒に歩いて

いた。

「楽しいわねー。来てよかった!」

「それは良かったね」

明久は笑顔の美波を見て、自分も顔を綻ばせた。あそこまで怒ったときはどうなるかと思っていたが、ここまで機嫌が良くなるとは思わなかった。

「アキも、来て良かった?」

美波が上目づかいで尋ねた。明久はそんな美波に顔を赤くしながらも、何とか返事を返した。

「も、もちろん! 来て良かったよ!」

「良かった!」

美波は花が開くように笑った。その笑顔はまさに花で、明久はドキッとした。しかし次の瞬間、美波の笑顔は悲しげな笑顔に変わった。

「・・・ウチもね。分かってるんだ。アキは戦わなくちゃならないって」

どこか憂いを帯びた笑顔に、明久の心が引き締まる。

「だけどね。それでもアキには楽しい思い出を作ってもらいたいんだ。だって、高校生活って、あと一年しかないわけじゃない? 一年後はたぶん進学や就職で忙しくなるから、今みたいに皆と一緒に遊べるかどうか分からないじゃない。それなのに、その貴重な時間をオルフェノクの為に潰すのって、何か寂しくてさ・・・。しかもアキは最近オルフェノクのせいで皆と行事がまったく楽しめてないし。だから、瑞希も玲さんも嬉しいんだと思う。アキが楽しい思い出と一緒に過ごしてくれてるから」

美波の言葉で、ようやく明久に姫路達が優しかったのか合点があった。彼女達は素直に嬉しかったのだ。明久と一緒に楽しい時間を共有できる事が。明久と一緒に過ごせる事が。その事を考えると、明久の胸は暖かくなった。自分にはこんなに自分の事を考えてくれる人がいる。自分は決して一人ではない。

明久は、恐らく誰よりも自分の事を想ってくれている目の前の少女を見つめ言った。

「・・・美波」

「なに？」

「ありがとう」

美波はその言葉に一瞬キョトンとしながらも、へへっと嬉しそうに笑って答えた。

「どういたしまして」

二人はそのまま黙って歩き続け、やがて誰もいない海辺に辿り着いた。

「結構遠いところまで来ちゃったね」

「そうね。でも、そろそろ始まるわよ」

えっ？ と明久が声を上げる前にそれは来た。

ドォン！！ という轟音と共に。

夜空に色とりどりの花火が打ち上げられた。

「わぁっ・・・！」

美波が感動したような声を上げた。それも当然だろう。夜空に打ち上げられた花火は次々とカラフルな色を咲かせ、まさに夜空に咲く花と言っても過言ではないのだから。その光景は明久も夢中になった。

「今日、花火だったんだ」

「うん。それにしても、花火とウチ達の旅行が重なったのは運が良かったわね。もしかしたら、神様が夏休みをアキが楽しく過ごせるようにしてくれたのかしら？」

「うーん。そうなら嬉しいけどね」

笑いながら明久が言った。その笑顔につられ、美波も笑い出す。二人で笑いあった後は、手を繋いで黙って花火を見ていた。

そして数分が経ち、全ての花火が打ち終わったのか、夜空には元の静寂が戻っていた。

「さっ、帰ろうか」

「そうね」

明久と美波が海辺を離れようとした瞬間、ざっと後ろから砂を踏む音が聞こえた。明久が振り返ると、そこには昼間出会ったタコの性質を持つオルフェノク——————オクトパスオルフェノクがいた。

「ふふふ。昼間はずいぶんと調子に乗っていたが、今度はそう簡単には」

「美波。下がって。早く終わらせるから」

「絶対よ。手間かかったら関節外すわ」

物騒な言葉を聞きながら、明久はあらかじめ腰に巻いていたファイズドライバーを服の下から出し、ファイズフォンを取り出して変身コードを押す。

『Standing by』

「変身！」

『Complete』

赤いフォトンストリームに包まれ、明久はファイズに変身する。そして素早く左手首に装着されているファイズアクセルからアクセルメモリーを抜き、ファイズフォンにあるミッションメモリーと交換し、ファイズフォンに挿入する。

『Complete』

音声が発声され、ファイズの複眼が真紅になり、フォトンストリームは銀色になることで『アクセルフォーム』へと変わる。ファイズはファイズポインターにミッションメモリーを挿入し、ファイズアクセルのスタータースイッチを押す。

『Start Up』

その瞬間、ファイズは音速の世界に突入する。ファイズが飛び上がると同時に、赤い円錐状の光がオクトパスオルフェノクを包み込

むかのように現れる。

「えっ！　ちよっ………！！」

「やああああああ！！」

オクトパスオルフェノクが何か言おうとしたが、それを言う前にファイズの『強化クリムゾンスマッシュ』が連続でオクトパスオルフェノクに直撃する！

『Three Two One』

「お、俺……、まだ攻撃すらしてないのにiiiiiiii！！」

『Time out』

悲しい断末魔を海辺に響かせながら、オクトパスオルフェノクはΦの記号をその身に浮かべ、青色の炎を浮かべ灰に変わり崩れ落ちた。

『Reformation』

音声が鳴ると、ファイズは元の姿に戻る。そしてそのままファイズフォンを操作し、明久の姿に戻る。

「さっ。みんなの所に戻ろう」

明久が美波に呼びかけると、美波は恥ずかしそうに手を出した。

「……手」

「えっ？」

「手。繋いで」

顔を赤くしながら言った美波に明久も恥ずかしそうに顔を赤くしたが、やがて静かに微笑んで美波の手を？んだ。二人はそのまま手を繋いで雄二達のところへ戻った。

ペンションに戻った明久達は、その庭に設置されているコンロでバーベキューをすることになった。明久達は皿や飲み物の準備をし、雄二はバーベキューを見ている。

「おい。そろそろ焼けたぞー」

バーベキューを見ていた雄二の声が聞こえ、遅れて肉汁の焦げる匂いが漂ってくる。他にも醤油の焦げる匂いもするので、恐らく焼きおにぎりや焼とうもろこしなども作ったのだろう。その匂いを嗅いだけで、明久の腹の虫が鳴りそうだった。

「だってさ。ほら、かなり遅いけど夕飯にしようよ」

飲み物やコップをいくつか確保し、雄二のいるコンロへと向かう。それにしても、何故か雄二にはタオルを頭に巻きトングを手にする姿が様になるのだろうか。いかにも夏の海、という感じがつくづく羨ましい。

「おう明久。丁度良く焼けてるぞ。たっぷり食え」

「うん。ありがとう。じゃあはいこれ、雄二の分の飲み物」

紙皿の上に雄二が焦げたラードを載せてくれたので、そのお礼に明久は手に持っていたサラダ油を紙コップに注いで雄二に渡した。

「……………！！」

「ほれお主ら。睨み合っておらんで食わんか。焦げてしまうぞい」

「……………うまい」

秀吉とムツリーニはすでに焼けた肉を皿に載せて食べ始めていた。明久も急いで食べなくてはと思い、肉を箸で掴む。

「いっただっきまーす！」

網の上には肉やおにぎりの他に、つぶ貝やエリンギなどもあった。どれもこれも美味しそうで迷ってしまいうだった。

「へえー。美味しそう。坂本って、こういうことはホント器用よね」

「……………私の自慢の夫」

「バカなこと言ってないで早く食え。ポケットとしてるとなくなっち

まうぞ」

「・・・・・・・・・・うん」

食べ物をごんごん焼きながらも炭を足したり風を送ったりと、いくつもの作業を同時にこなす雄二。勿論その間に焼けてる食べ物を口に入れるのも忘れない。そして焼けてる食べ物を、美波達がごんごん取っていく。

その光景を見ながら、明久はこの旅行に来て良かったと心の底から思った。皆が自分に気を心配し、計画してくれた旅行。その旅行を皆と過ごせることが、明久にはとても嬉しかった。そしてその嬉しさをかみ締めながら、明久は肉をほおぼりジュースを飲む。

この日は、明久の夏休みの最高の思い出になった。

同時刻、明久達がバーベキューを楽しんでいるそのころ、スマートレイン本社で社長、村上は資料を読んでいた。村上が資料を置き目を揉んだそのとき、社長室の扉がノックされた。

「入ってください」

村上がそう答えると、秘書の女が紙束を片手に抱え入ってきた。

「社長、例の資料を持ってきました」

秘書の女は片手に抱えていた紙束を村上に渡すと、村上はそれを受け取りゆっくりと読み出した。部屋にはペラペラとページをめくる音が響いていたが、やがて一枚の紙に村上の手が止まり、ページをめくる音も止まる。

「はは、そういうことか」

少し低めに笑い出した村上に秘書は怪訝な目を向けながら、村上に尋ねた。

「一体、何がそんなにおかしいのですか？」

「いえ、ようやく分かったんですよ」

村上はどこか楽しそうな笑みを浮かべながら秘書に言った。

「吉井君がファイズに変身できた理由がね」

第二十一話 浴衣と祭りと花火（後書き）

次回、『ピクニックと弁当と明久の真実』
感想楽しみにします。

第二十二話 ピクニックと弁当と明久の真実（前書き）

今回は早く投稿できました。お楽しみください。

第二十二話 ピクニックと弁当と明久の真実

「ピクニック？」

海への旅行の泊りがけの三日後、明久はフェイスフォンから聞こえてくる雄二の言葉を聞いて言った。電話の向こうの雄二はああ、と言って続けた。

『何でも今度はマジで俺達高校生だけの思い出を作ろうって張り切ってたぞ。それで、今回は玲さんが来るのはダメらしい。今回は俺達高校生だけで作りたいんだよ』

玲はすでに成人しており、高校生ではない。だから今回は玲は参加できないのだろう。明久は少し考え込むような姿勢をとり、再び雄二に尋ねた。

「ほかに誰が来るの？」

『いつものメンバーだ。島田に姫路、秀吉にムッツリーニに工藤に翔子の六人だ』

どうやら確かにいつものメンバーのようだ。しかし明久はここで、あることに気づいた。ピクニックといったら、弁当が定番。そして今回のメンバーには、あの必殺料理人の姫路がいる。明久がそのことに気づき顔を青白くさせると、雄二がやたらと嬉しそうな声音で言った。

『明久。今回の弁当の事を気にしてるだろ？』

「・・・よく分かったね」

『あの姫路の料理を食ってんだ。俺もそう予想して震えかけたが、今回はその心配はない。島田が弁当を作ってくれるらしい』

「本当!？」

美波の料理は姫路の料理とは違い、料理に入れてはいけない物質などを入れていないし、味も絶品だ。もしも美波が作ってきてくれるというのならば、それは逆に嬉しい。

『ああ。だから今回は安心しろ。もっとも、お前が姫路の料理を食わないことになったのが残念だけだな』

「うるさい。で、ピクニックはいつ？」

『三日後だ。集合時間や場所は後で伝えてやる』

「うん。分かった」

通話を切り、ファイズフォンを閉じる。そして部屋の片隅にあるファイズギアの入っているトランクケースを見つめる。

「・・・オルフェノクが出たら僕達がいないとね」

そう呟くと、明久はピクニックの準備をするため、自分の部屋に向かった。

三日後、明久達がピクニックに来た場所は電車に乗って三十分の駅から少し歩いた所にあった。そこは芝生が緑色の絨毯のように見える広場で、夏休みの今では多数の人はいてもおかしくはないのだが、今日は人気がまったくない。

「それにしても、今日も良い天気で良かったね」

背伸びをしながら明久が言った。今日の天気は海に行った日のように雲一つない晴天で、真上から降り注ぐ日光が気持ち良い。

「とりあえず、レジャーシートを敷かぬか？」

「そうね。とりあえずまず先に敷いちゃいましょうか」

秀吉の言葉に美波が大きめのレジャーシートを取り出し、芝生に敷き皆がその上に荷物を置く。

「さて、まずは何する？」

「バドミントンでもない？　ボク、家からラケットとシャトル持ってきたけど」

工藤が持ってきたバッグからバドミントンで使うやや小さめのラケットとシャトルを取り出しながら言った。

「じゃあまずバドミントンをしようか。ね、みんな」

「そうだな。そうするか」

「………工藤愛子。お前には負けない」

ムツツリーに静かに工藤への闘志を燃やす。工藤には色々と因縁があるため、このような勝負でも負けられないらしい。

バドミントンをする順番は、全員が行ったジャンケンの結果、まず最初に美波と姫路がやることになった。

「姫路さんと美波かー。この場合、やっぱり美波が勝つよね？」

「ああ。姫路の場合少し体が弱いからな。この勝負は島田が断然有利……！？」

言い切ろうとした瞬間、雄二の顔が驚愕に染められた。それだけではなく、明久やムツツリー二の顔も

驚愕で染められる。何故なら、姫路が打ったシャトルが芝生に勢いよく打ち込まれたからだ。

「な、何今の！？　ラケットがシャトルに当たった音じゃないよアレ！？　しかも芝生に落ちた時の音が地響きがしそうなぐらいの音だったよ……！」

「………人間では絶対に不可能なはず………！！」

「い、一体どういうことだ？　どうして姫路があんな危険な打ち方を知ってやがるんだ……！？」

「うわあ！？　今度は美波の打ったシャトルが地面に埋まったよ！？　どうしてあそこまでの力が出せるのさ……！」

目の前で行われているハイレベルすぎる戦いに明久達が戦慄する。秀吉はそんな明久達から離れ、霧島と工藤に話しかけた。

「霧島に工藤よ。何故に島田と姫路はあそこまで本気なのじゃ？」

「………試合する前に、二人が話していた。この試合に勝つ

た方が、吉井をデートに誘うって」

「だからあの二人あそこまで頑張ってるんだと思うよ？ でも吉井君もちょっとにくいよね。あんなに可愛い女の子二人にデートの誘われそうなのに、まったく気付かないんだから」

工藤の台詞を聞きながら秀吉は少し苦笑した。確かにあそこまで想いを寄せられているのにも関わらず、まったく気付いていないのだから、もはや怒るのを通り越して呆れてしまう。とは言っても、それが吉井明久という人物の性格なので仕方ないのかもしれないが、そんな事をしみじみと思いながら、秀吉は明久とのデートをかけた姫路と美波の勝負を再び見ることにした。

美波と姫路の勝負は両者引き分けとなり、結果的に明久とのデートは無しになった。その結果を知りしばらく二人はうなだれており、明久はそんなに勝負がつかなかったのが悔しかったのかと、かなりの外的なことを思いながら首をかしげていた。

その次はムツツリー二と工藤の勝負となった。素早いムツツリー二の勝利になると思われたが、工藤が途中スカートをめくるような動作をすると、ムツツリー二から大量の鼻血が噴出し、気絶したため工藤の勝利となった。明久と雄二の勝負は、途中までは至って普通のプレイだったが、途中から反則ぎりぎりの行為が目立ち、ついには殴り合いに発展したため勝負は無しとなった。

「雄二。次こそは決着をつけようじゃないか」

「上等だ。次こそはテメエを土に返してやるよ」

「何故お主らは正々堂々と戦おうとしないのじゃ・・・」

レジャーシートに座って言い合う二人を見ながら秀吉がため息混じりに言った。

「じゃあそろそろお昼だし、お弁当出すわよ」

美波が持ってきたバッグから大きめの弁当箱を取り出し、蓋を開ける。中には唐揚げにポテトサラダ、卵焼きなど、色とりどりの食べ物が入っていた。

「おお、随分気合が入ってるな」

「うむ。島田は良い嫁になるのお」

「な、何言ってるのよ木下！」

「あはは、照れなくてもいいと思うよ？」

顔を赤くする美波に工藤が笑いながら言った。

「皆さんそろそろ食べましょうか」

「・・・・・・腹減った」

そして、皆が両手を合わせる。

『いただきまーす！』

全員の声が重なり、それぞれの箸が料理を掴む。

「むう。やはり美味しいのお」

「うん。美波ちゃんって料理が上手なんだね」

皆からの評判は中々上々である。美波も嬉しそうにしており、満面の笑みを浮かべている。明久はお握りをほお張りながら、雄二と霧島の方を見る。

「・・・・・・雄二」

「ん？ どうした翔子」

「・・・・・・あーん」

「断る」

霧島から差し出されたタコさんウィンナーを見て、雄二は即答した。

「・・・・・・ひどい」

「ひどいじゃねえ。お前がそんなことしてくると何か嫌な予感がするんだよ」

「・・・・・・・・そんなことない」

霧島が意地でも食べさせようとしたのか、雄二に少し寄る。だがその拍子に、霧島の陰に隠れていた物が雄二の目に入った。それはビンらしきもので、ラベルにはこう書かれている。

痺れ薬。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・雄二、アーン」

「何もないかのようにウィンナーを近づけるんじゃない！ てか完璧に薬を盛ってるよな！？」

「・・・・・・・・そんなの。ただ栄養剤を入れただけ。それより早く食べて」

「ふざけんな！ しかも薬盛ったっていうのは否定しないんだ！ んなもん誰が食ってごあああああああ！！」

「・・・・・・・・いいから早く食べて」

雄二にアイアンクローをかけながら無理やり雄二の口にウィンナーを入れようとする。雄二はアイアンクローをされながらも、懸命にその腕を止めようとしている。その光景を明久は食べ物や次々と口に放り込みながら見ていた。もはや二人のそのやりとりは日常茶飯事なので、いちいち気にしていられない。雄二がようやくアイアンクローから開放されたときは、美波の料理はほとんど残されていなかった。

「はぁ。美味しかったです」

「そうだね」

食事を終えた明久達は、レジャーシートに座り食休みをとっていた。さんさんと輝く太陽が眩しく、風が爽やかに吹いている。その風を受け、木々がそよそよと揺れている。

「・・・平和だなー」

その光景を見ながら明久が呟いた。

「いきなりどうしたの？ アキ」

「いや、最近戦いばかりだったからさ。こんなにのんびりしてるのが随分久しぶりなような気がするんだよ」

それは確かにそうなのかもしれない。最近はおルフェノクとの戦いの連続だった。今のようなのんびりとしている時間はそうはなかった。そう考えると、今のような時間はまさに『平和』なのかもしれない。

「・・・いつまでもこんな時間が続けばいいのにね」

美波がぼそりと呟いた。それが無理なことは、美波も十分分かっている。しかしそれでも明久には戦いに行つてほしくないし、今のような時間を過ごしてほしい。それは無論、自分の大好きな人物だからこそ人一倍そう思うのだ。そしてそれは、美波と同じ感情を抱く姫路もそう思っているだろう。

「うん。だから、早くこの戦いを終わらせなきゃいけない。この時間がいつまでも続くように」

明久の言葉に迷いはない。早くこの戦いを終わらせ、平和な時間を取り戻す。それが明久の目指しているものなのだ。

「・・・無理はしないでね」

「分かってるよ」

心配そうな美波に明久は笑顔で答えた。束の間の休息でも、明久はここにいて良かったと思う。自分の大切な人がいてくれるこの場所に。

そして目を細め、少し寝転ぼうとしたとしたその時。

「見つけましたよ。吉井さん、坂本さん、木下さん」

聞こえてきた声に明久が勢いよく起き上がると、眼鏡をかけた男
「——————ラッキークローバーの琢磨と、同じくラッキーク
ローバーの影山と、帽子を被った金髪の男が歩いてくるのが見えた。
「村上さんから言われていましたね。こうなったからには、あなた
達が持つ三本のベルトを奪って来いと言われていましたね。・・・
生死問わずでね」

「だから、悪いけど死んでもらうわ」

三人が立ち止まると、琢磨はセンチピードオルフェノクに、影山
はロブスターオルフェノクに、金髪の男は象の性質を持つオルフェ
ノク————エレファントオルフェノクに姿を変えた。

「な、何アレ!？」

オルフェノクの姿を初めて見た工藤が驚きの声を上げた。明久達
は持ってきたトランクケースを開き、それぞれのベルトを腰につけ
る。

「まったく、こんな時にまで来るんじゃないっつうの!!」

「本当だよ・・・!」

「まったくじゃな・・・!」

悪態をつきながら明久と雄二は変身コードを押し、秀吉はデルタ
フォンを口元に近づける。

『『Standing by』』

「「変身!」」

『Standing by』』

『『Complete』』

「こ、今度はなに!？」

工藤がまたもや驚きの声を上げるが、三人はそれを無視するかの
ようにそれぞれファイズとカイザとデルタに変身し、オルフェノク
達に突っ込む。

ファイズはセンチピードオルフェノクと向かい合い、拳ををセン
チピードオルフェノクに放つ。しかしセンチピードオルフェノクは
その拳を掴み、カウンターに左拳をファイズの胸に放つ。

「ぐっ！」

ファイズは少しよろめきながらも、次にセンチピードオルフェノクの顔を蹴ろうとする。だが今度は放ったその蹴りをセンチピードオルフェノクの腕に阻まれ、逆に光弾を食らってしまう。

「うわああ！」

火花を散らしながらファイズは芝生に吹き飛ばされる。

「僕達があなたに負けて何もしてなかったとでも思っていたのですか？ 舐めてもらっちゃ困るんですよ！」

センチピードオルフェノクが鞭を出現させ、それで起き上がろうとしたファイズを攻撃する。ファイズはその攻撃をまともに受けてしまい、大きく体勢を崩してしまう。

「ふんっ！」

「うわああああっ！」

センチピードオルフェノクが一気にファイズとの距離を詰め、強烈な蹴りをファイズに食らわせる。蹴りを受けたファイズは大きく吹き飛ばされてしまい、しかも衝撃でベルトが外れ明久の姿に強制的に戻される。

「うわああああっ！」

「があああああっ！」

さらに、明久の反対方向にカイザとデルタが大きく吹き飛ばされ、二人も明久と同じようにベルトが外れ変身が強制解除されてしまう。

「雄二・・・、秀吉・・・」

明久は二人に駆け寄ろうとするが、明久の目の前にセンチピードオルフェノクが立ち塞がる。雄二と秀吉の前にも、ロブスターオルフェノクとエレファントオルフェノクが立ち塞がり、合流できない状況になっていた。

「これで終わりですね。安心してください。あなた達を殺したら、すぐに彼女達もあの世へ送ってあげます」

センチピードオルフェノクが勝ち誇るように言った。それも当然だろう。明久達は変身を解除され、オルフェノクに対抗する力を失

ってしまっている。その力を得るベルトは自分達とは離れたところにあり、取りに行こうとしても恐らく途中で殺されてしまう。まさに絶体絶命、打つ手がない。このままでは明久達は殺され、やがては美波達も殺されてしまう。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

明久は自分の両手を見る。それから、何かを迷ったような表情になる。だが、意を決したようにその表情を消してセンチピードオルフェノクを睨みつける。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ぎっ」

今の状況を切り抜ける方法は、実は一つだけあった。しかし明久としてはそれは避けたかった。その方法は、明久が最も嫌っているからだ。

「ぎっ、があああああああああああああっ!!」

だが、それでセンチピードオルフェノクを退散させ、美波達を助けることができるのなら。

それは明久にとってかなり安い買い物だった。

「があああああああああああああああああああああああ
あああああっ!!!!」

明久は顔を上空に向け、大声で叫ぶ。

「・・・・？ 何だ？」

「・・・・明久？」

「アキ？」

その突然の行動に、美波達はおろかセンチピードオルフェノク達の動きすらも止まり、その場にいる全員が明久を見つめた。

そして、

明久の目が灰色になり、顔に何かの模様が浮かぶ。

「何!？」

「う、嘘でしょ……？」

「が、があああああああああああああああああああああああああああああああつ！！！！」

その光景を見て全員驚愕する中で、明久はただ吼え続ける。その姿から凄まじいエネルギーが放出され、明久の姿が変わっていく。――――そして、エネルギーの放出と叫びが収まったとき、明久の姿は変わっていた。

下半身はまるで恐竜の脚部を連想させる、ティラノレグ。腰の辺りに付けられているのは大腿部を保護する強化外骨格、ティルデイバイダー。上半身は鋭角的な意匠が目立ち、まるで全てを切り裂く刃を連想させる。そして、ティラノサウルスの意匠が施された頭部。

これこそが、明久のもう一つの姿。

地上最大の動物である恐竜のティラノサウルスの性質を持つ、
明久のオルフェノクとしての姿。

テイラノオルフェノク。

「うおおおおお！」

明久——ティラノオルフェノクが咆哮を上げると、ティラノオルフェノクから凄まじい冷気が発せられる。その冷気に芝生が凍りつき、センチピードオルフェノク達の足元が凍りつく。

「があああっ！」

「うわああああっ！」

「ああああああっ！」

ティラノオルフェノクがまた吼えたと、センチピードオルフェノク達の氷が弾けとび、それによりセンチピードオルフェノク達が吹き飛ぶ。

「があああああああっ！！！」

ティラノオルフェノクは凄まじい速さで一気にエレファントオルフェノクに近づくと、拳でエレファントオルフェノクを殴る。

「ぐああああああっ！」

エレファントオルフェノクは大きく吹き飛び、ティラノオルフェノクはエレファントオルフェノクを追いながら右上腕に刃——————アームセイバーを出現させる。そしてふらつきながら立ち上がったエレファントオルフェノクをアームセイバーで何回も切り裂く！

「があああっ！！！」

さらにエレファントオルフェノクを蹴り飛ばすと、地面に右腕を突っ込む。地面から右腕を上げると、その手にはティラノサウルスの頭部を模した斧、ティラガブリューが握られていた。

「おおおおおおっ！！！」

一気にエレファントオルフェノクとの距離を詰め、エレファントオルフェノクの胸に向かって大きくティラガブリューを振りかぶり、強烈な斬撃を食らわせる。

「ぐ、ぐああああああっ！！！」

エレファントオルフェノクは断末魔を上げ、青い炎を上げながら灰になっていった。

「く、くそっ！」

センチピードオルフェノクとロブスターオルフェノクがティラノオルフェノクに襲い掛かるが、ティラノオルフェノクの肩に刃――――シヨルダーセイバーが出現し、ティラノオルフェノクがシヨルダーセイバーを外しセンチピードオルフェノクとロブスターオルフェノクに投げる。シヨルダーセイバーはブーメランのような軌道を描きながら、センチピードオルフェノクとロブスターオルフェノクを切り裂く！

「ぐああああっ！！」

「うわああああっ！！」

センチピードオルフェノクとロブスターオルフェノクは芝生に倒れ、ティラノオルフェノクはティラガブリューを手にながらじりじりと二人に近づく。

「ひっ……！！」

センチピードオルフェノクは怯えた声を出し、ふらつきながらも林のほうへと逃げていった。ロブスターオルフェノクもその様子を見て、センチピードオルフェノクの後を追うかのように逃げて行った。ティラノオルフェノクはその二人を追って、林のほうへと消えていった。

「坂本君！ 木下君！」

その様子を呆然と見ていた雄二と秀吉に姫路の声がかかった。その声に二人が我に帰ると、姫路達が駆け寄ってきた。

「大丈夫ですか！？」

「ああ……」

姫路の言葉に雄二が重々しく答えた。傷を受けたわけではない。

目の前の事実が衝撃的過ぎたのだ。

「……坂本」

雄二が目を向けると、美波がふらふらと近づいて来た。

「嘘、よね？ アキが、アキがオルフェノクなんて……」

「……」

「嘘よ……。そんなの夢だって言ってよ……。そんなの

何かの間違いだっって言つてよ!!」

美波は芝生に両手をついて泣き出した。美波の瞳から大粒の涙がこぼれた。生き残ったにも関わらず、その場の雰囲気は限りなく重く、美波の涙が雨のように芝生に落ちていった。

林では再びセンチピードオルフェノクとロブスターオルフェノクと追ってきたティラノオルフェノクとの戦闘が再開されていた。

「う、うわああああっ!」

悲鳴混じりにセンチピードオルフェノクが鞭を振るうが、ティラノオルフェノクは鞭をかわし、センチピードオルフェノクの顔を殴り飛ばす。次にロブスターオルフェノクがサーベルで斬りかかるが、ティラノオルフェノクはティラガブリューでサーベルを難なく防ぎ、サーベルを弾き返し逆にロブスターオルフェノクを斬る。

「うわああああっ!」

ロブスターオルフェノクは吹き飛び、地面を転がる。さらにティラノオルフェノクはセンチピードオルフェノクをティラガブリューで切り裂き、最後に左拳をセンチピードオルフェノクの胸に当て大きく吹き飛ばす。センチピードオルフェノクとロブスターオルフェノクは何とか立ち上がるが、ティラノオルフェノクはテイルディバ

イダーを變形させ、巨大な尻尾のようにする。そしてその尻尾状になったテイルディバイダーでセンチピードオルフェノクとロボスターオルフェノクを薙ぎ払う。

「うわあああああっ！！」

両者は叫びながらすぐ近くにある崖に叩き落とされるが、底は川になっており、二人は川に落ちて水柱を上げながら姿を消した。

「はあ、はあ・・・」

ティラノオルフェノクは息をつきながら、元の姿――――
――明久の姿に戻る。

「・・・ははっ、ばらしちゃった。みんなに・・・」

明久は自嘲するかのように笑いながら、膝をついた。

「・・・僕の、化け物の姿を」

今の姿は、明久がもつとも見られたくない姿だった。この姿を見ればもう誰も近くに来てはくれない。皆が自分を化け物を見るような目で見えるかもしれない。美波達はそんなことはないかもしれないが、明久は怖かった。この力に溺れて美波達を傷つけてしまうことが。この姿のせいで美波達に避けられてしまうことが。しかし、とうとう見せてしまった。そうなったからには、もう前のような日常には戻れない。さっきまで願っていた平和にはもう帰れない。そんな事は、もう嫌というほど分かりきってしまっていた。

「う、ううううう・・・」

明久は両手を地面について泣いた。もう帰ることのできない日常と、そこに住む大切な人々の事を思いながら。

第二十二話 ピクニックと弁当と明久の真実（後書き）

感想お待ちします。

ティラノオルフェノク紹介

・ティラノオルフェノク

吉井明久が変身するオルフェノク。地上最大の恐竜の中でも暴君と言われている恐竜、ティラノサウルスの性質を持つオルフェノク。ビルすらも一瞬で凍りつかせる、氷河期を思わせる冷気を操るほか、腕から出現させるアームセイバー、肩から出現させブーメランのように使うことができるショルダーセイバー、巨大な尻尾に変形させ相手を叩きのめすテイルデイベイダー、自身の力を用いて作ることのできるティラノサウルスの頭部を模した斧、ティラガブリューなどの武装や特殊能力を持ち、並みのオルフェノクとは一線を画した力を持つ。

346

姿は仮面ライダーオーズの映司グリードのフリルなどを無くし、プトティラコンボのティラノレッグを組み込み上半身に仮面ライダーWのフアングジョーカーの鋭角的なデザインを入れたような感じ。

武器

・ティラガブリュー

ティラノオルフェノクが地面に手をつ込み作り出す斧。外見はプトティラコンボのメダガブリューをそのまま灰色にした感じ。

・アームセイバー

ティラノオルフェノクの右上腕に出現する刃。

・シヨルダーセイバー

ティラノオルフェノクの肩に出現する刃。ブーメランのように投げること、離れた相手を切り刻むことが可能。

・テイルディバイダー

ティラノオルフェノクの強化外骨格。変形させることで巨大な尻尾にすることが可能。

ティラノにした理由は、最初はたっくんのようにウルフにしようかと思いましたが、それではつまらないのではないかと思い、ティラノサウルスにしました。ウルフを期待していた方々、申し訳ありませんでした。

ティラノオルフェノク紹介（後書き）

感想お待ちしております。

第二十三話 涙と恐怖と敵対（前書き）

遅くなって申し訳ありません。先週から今週の月曜までテストがあったって、勉強の為執筆に集中出来ませんでした。本当に申し訳ありませんでした。

第二十三話 涙と恐怖と敵対

明久がオルフェノクと発覚してから一ヶ月が過ぎた。その間に夏休みは明け、雄二達は再び学校に通っている。そして平穏な日常が戻ってきた――というわけにはいかなかった。

「島田」

「・・・・・・・・・・」

「島田」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・島田！！」

「は、はい！」

今は朝のホームルームの時間なのだが、美波は鉄人に何度も呼ばれているにも拘わらず全く反応を見せず、大声を出した事でようやく反応を見せた。

「どうした、最近お前変だぞ。何かあったのか？」

「い、いいえ。何でもありません」

「・・・・そうか」

鉄人は気を取り直して次の生徒の名前を呼ぶ。美波は卓袱台に肘をつき、はあっとため息をつく。その様子を姫路や秀吉が心配そうに見ている。

最近美波の様子が変だというのは、誰の目から見ても一目瞭然だった。常にボーっとしているし、授業にも身が入っていない。おまけに前は受ける授業の教科書を間違えていたし、得意なはずの数学の問題は間違えてばかりの状況が続いていた。その理由は誰にも分からないが、雄二達は知っていた。

「吉井、は今日もないか・・・」

美波はいつも明久が座っている卓袱台を見る。しかしその席に座っていた本人は今はおらず、ただの空席となっている。

明久はあれ以来、一度も家に帰ってきていないらしい。しかも学校にも来ていない。明久が姿を消した後自分達で捜したりしたもの、影も形もつかめずにいた。それから美波は変わった。元気が無くなりいつもボーっとするようになった。そんな美波を雄二達は心配しているのだが、本人は平気と笑っていたし、ちゃんと授業にはついていけている。だが無理に笑っている事は雄二達にはお見通しだし、頬に涙の痕がついていたことも見抜いている。しかし元氣付けようにも今の自分達ではそんなことすらも出来ない。それができるのは今現在姿を消している張本人――――明久だけだろう。

(・・・あの阿呆め。どこで何をしておるのじゃ)

秀吉は姿を消している明久に内心苛立ちを感じながらも表面上は冷静を装う。

そして今日も、一日はあっという間に過ぎていった。

「美波、起きて。授業終わったよ」

(・・・アキ?)

美波はその声に伏せていた顔をゆっくりと上げる。そこには、自分が会いたくて堪らなかった相手――――明久が微笑を浮かべていた。

「もう帰ろう」

「・・・うん！」

美波が笑いながら手を伸ばす。だがその手が明久の手を握る前に、美波の視界が真っ白に染められた。

「・・・」

気が付くと美波は一人卓袱台寄りかかっていた。どうやら寝てしまっていたらしい。目の前に会いたくて堪らなかった明久の姿はない。

「・・・えぐっ。ひぐっ。うあああああっ・・・」

美波は顔を伏せて泣き出してしまった。明久に会えないのが寂しくて堪らない。出来るのであれば今すぐにでも会いたい。だが会うのが怖い。もし会っても、明久に恐怖を覚えてしまうかもしれない。そうになったら二度と明久に触れないかもしれないし、最悪口も利かないかもしれない。明久に会いたいという気持ちはあるが、同時に会いたくないという気持ちは自分の中にあった。

そんなジレンマを抱え、美波はただひたすら泣き続けた。

「美波ちゃん・・・」

美波が振り返ると、そこには姫路が心配そうな表情を浮かべ立っていた。よく見ると姫路の後ろには雄二達もいる。

「大丈夫か、島田」

「べ、別に大丈夫よ」

「・・・そんなに目を腫らして言っても、説得力がない」

美波がごしごしと乱暴に涙を拭くのを心配そうに見ながらムツツリーニが言った。

「・・・ねえ。ボク思っただけどさ」

秀吉の隣で話を聞いていた工藤が言った。何故彼女がここにいるかという、この間オルフェノクとファイズを見たことにより、雄二達からファイズやオルフェノクの事について教えられたのだ。彼女の性格から考えてみると、隠し通すことはほぼ不可能なので妥当な判断だろう。

「確かオルフェノクって一度死んじゃった人間が生き返ってなった

んだよね？　ってことは、吉井君も一度死んだって事だけど・・・、誰か心当たりとか無い？」

「心当たりか・・・」

雄二が考え込むような姿勢を取り、秀吉やムツリーニも考え始める。そして、ムツリーニがポツリと言った。

「・・・姫路の手料理と、島田の暴力」

「うむ？　ムツリーニよ、まさかそんなことは・・・」

「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

否定できないのが逆に恐ろしい。

「ま、まあとりあえずまた明久を捜して――――」

だが、突然雄二の声が遮られた。携帯電話の着信音が聞こえ、それが雄二の声を遮ったのだ。

「む？　すまんワシじゃ」

音源は秀吉の携帯電話だった。秀吉は携帯電話を取り、通話ボタンを押す。

「もしもし、誰じゃ？」

『・・・秀吉？』

その声には聞き覚えがあった。その声は――――

「明久っ!？」

今自分達在必死に捜している人物――吉井明久だった。秀吉の声に、雄二達の視線が秀吉に集中する。

「お主今どこ何をしておるのじゃ!？　今すぐ説明せい!!」

『・・・今は言えない。それより、伝えたい事があるから一人で今すぐ学校近くのバッテリーングセンターに来てくれない？　質問はそこで聞くよ』

「それは構わんが、お主は一体何を」

しかし秀吉が言う前に、通話は途切れた。秀吉はしばらく携帯電話を見つめていたが、渋々といった感じで携帯電話をポケットに入れた。

「あのバカは何だって？」

「一人でバッティングセンターに来いと言っておった。とりあえず、今から行ってみる」

「何してんだあのバカ」

雄二が呆れたように言った。秀吉は荷物をまとめ、教室から出て行く準備をする。

「木下、ウチも行っちゃダメ？」

美波が秀吉に心配そうな表情で尋ねた。秀吉は一瞬迷ったような表情を浮かべたが、すぐに真剣な顔になりきっぱりと言った。

「ダメじゃ。明久は一人で来いと言ったのじゃ。そう言われたからにはそれに答えなければならん。心配するでない」

秀吉は荷物を持つと、美波と雄二達に見送られながら教室から出て行った。

二十分後秀吉はバッティングセンターに着いた。店内に入り、明久の姿がないか捜してみる。

「秀吉」

突然背後からかけられた声に振り返ってみると、明久が立っていた。顔は笑っているが少し疲れているような印象を抱かせる。家にも帰っていないのを考えてみると、ろくな食事も取っていないのだろう。

「明久！ お主・・・」

「ちょっと待って秀吉。色々言いたいことはあると思うけど、少し打たない？ 僕が奢るから」

明久がバッターボックスを指差しながら言った。秀吉は言葉を続けようとするが、明久から無言で二百円を差し出されると、仕方なく二百円を受け取りバッターボックスに向かう。そして配置されて

いる機会の投入口に金を入れる。横を見ると明久も同じように二百円を投入口に入れていた。バッティングマシンが動き、ボールが飛ばされてくる。速度が百二十キロはあるが、二人はファイズとデルタでの戦闘経験があるため軽々と打った。その後ボールが打ち出されるが、二人は空高くボールを飛ばしていく。

「ところで秀吉。何か聞きたいことがあったんじゃないの？」

三球目を打ったとき、明久が言った。

「確かオルフェノクというのは一度死亡した人間が蘇ってなったんじゃない？ お主は何歳ごろに死んだのじゃ？ 別に答えたくないなら答えなくとも良いのじゃが」

「別に良いよ。僕が死んだのは姫路さんと会う前だから、大体小学校に上がる前ぐらいかな」

「そんなに昔からなっておったのか……。自分がオルフェノクという自覚は？」

「あつたけど、その時はオルフェノクなんて知らなかったし、ただ自分が気味の悪い『化け物』っていうこと分かってたよ」

化け物という単語に秀吉は息が詰まりそうになった。今明久は何のためらいもなくそう言った。まるで自分がその通りこの世には存在してはいけないかのように。

「お主一体何を言っておるのじゃ！ お主は化け物などではない！」

「………庇わなくていいよ。秀吉はいつも優しいからね」

「これはワシの本心じゃ！」

二人で言い合いながらもバットでボールを打ち返していく。やがてマシンが止まり、二人はバッテリーボックスから出て側にあるベンチに座る。

「明久、お主はワシ達の大切な友達じゃ。何故自分を化け物などというのじゃ？」

「化け物じゃなかったらなんだっていうの？ いつか誰かを傷つけてしまうかもしれない力を持って、いつか誰かを殺してしまうかもしれない姿を持ってる、僕のどこが化け物じゃないのさ……。も

しかしたら、僕がファイズになって戦っていたのは、オルフェノクである自分を否定するためだったのかもしれない」

明久は笑みを浮かべていた。しかしその笑顔は同時に悲しそうでもあった。

「それで、秀吉にお願いがあるんだ」

明久の言葉に秀吉は首を傾げながらも耳を傾ける。

「ファイズギアは秀吉が持つてるんだよね？」

「うむ」

「もし僕が人間としての意志を失って完全にオルフェノクになったら、僕を殺してほしい」

「なっ・・・！ お主は何を言っておるのじゃ！」

秀吉は狼狽しながらも、明久に詰め寄る。

「ワシはたとえお主がオルフェノクでも、絶対にお主は殺さん！」

大丈夫じゃ、お主にはきつと、また自信を持ってベルトを着ける日が来る」

秀吉は笑顔で励ますが、明久は相変わらず寂しそうな笑顔を浮かべ、

「・・・ありがとう。秀吉がそう言ってくれたこと、忘れないよ」

明久はベンチから立ち上がり、店内から出て行ってしまった。

「明久！！」

秀吉が明久を呼び止めようと叫ぶが、明久の姿はもう無かった。

秀吉はそのまま棒のように立っていたが、奥歯を噛み締め、掌に爪が食い込むほど手を握り締めながら呟いた。

「・・・・・・・・島田はどうする気じゃ、たわけめ・・・・・・・・！！」

明久はバッテリーセンターから出ると、そのままでも無く歩いていた。そんな彼の前に、一台の青い小型車が止まった。そして運転席の扉が開き、一人の女性が出てきた。女性は青い服に身を包み、笑みを浮かべている。だがその笑みはどこか不気味さを秘めた笑顔だ。

「はーい♪ あなたが吉井明久君ね♪ お姉さん、可愛い男の子が大好きなの。チュッ♪」

女性――スマートレディが明久に投げキッスをするが、明久は警戒を解かずにスマートレディを睨んでいる。そんな明久を見ても、スマートレディの笑顔は崩れない。ただただ、まるで赤ん坊に話しかけるような口調で話しかけてくる。

「社長さんからの伝言です！ 今すぐスマートブレインの社長室まで来てくださーいとのことですよ！」

「・・・もし断ったら？」

「残念、拒否権はありませーん♪」

どうやら黙って来いということらしい。明久は罨かもしれないと考えたが、このままいても仕方ないのであえてここは敵の作戦に乗る事にした。

「・・・分かった」

スマートレディは一瞬笑顔を明久に向けると、そのまま車の運転席に乗り込む。明久も車の助手席に座り、二人を乗せた車はスマートブレイン本社へと走り出した。

「ようこそ吉井君。ラッキークローバー本社へ。私がラッキークローバー社長、村上です」

車に乗ってスマートブレインまで連れてこられた明久は、エレベーターに乗り社長室に来ていた。明久の目の前にいる男はこのスマートブレインの社長――つまり、全てのオルフェノクの黒幕という事になる。男――村上は明久の顔をじつと見る。明久の表情には敵意と警戒が込められていたが、村上は余裕の態度を取りながらふっと笑みを浮かべる。

「そう硬くならなくてください。何も戦争しに來たわけではないのでね」

「・・・じゃあ一体何のようで僕を呼び出したの？」

明久は警戒を解かずに村上を睨みながら尋ねる。村上は相変わらず笑みを浮かべたまま、

「あなたに、ラッキークローバーに入ってほしいのです」

さりと驚愕の一言を放った。その一言に明久の表情が困惑に変わる。

「何を考えているのかしら、村上君」

明久の後ろから声が聞こえ、明久が後ろを振り返ると琢磨と影山が歩いてきていた。

「彼はオルフェノクを何人も殺している。その彼をラッキークローバーに入れる？　とても正気の沙汰とは思えませんね」

確かに明久はこれまでに何人ものオルフェノクを殺している。敵を仲間に引き入れるなどどうかしているとは思えない。だが村上は相変わらず余裕の態度を保ったままだ。

「別に当たり前の事を言っただけですよ。彼は世にも珍しい恐竜の性質を持つオルフェノクです。それに、あなた達を平気で撃退する

事の出来る力を持つ。ラッキークローバーに入れないのは勿体無い
と思いますがね」

「しかし・・・」

「ではこうしましょう」

何か言おうとした琢磨を遮るかのように村上が言った。

「まずあなたの友達を殺し、ファイズとカイザとデルタのベルトを奪ってきてください。これはあなたが人間の心を捨てる事が出来るかを試しているのでもありますからね。もしも出来れば、晴れてあなたをラッキークローバーに入れましょう。どうですか？」

村上のその笑顔はまるで悪魔のようだった。明久にかつて友だった者を殺させ、完全に人間の心を捨てさせれば、自分の駒へと変えることができる。そうすれば最終的には、強力な戦力と三本のベルトを取り戻す事ができる。村上から見れば一石二鳥だろう。琢磨と影山はそんなことができるはずないと思っていた。この、明らかに人間の心を持っている少年にそんなことができるわけがない。二人はそう考えていた。

「・・・分かったよ。ベルトを奪ってくれば良いんだね」

しかしそんな二人の予想とは反対に、明久はあっさりと承諾した。琢磨と影山が驚いている前で、村上は満足そうな笑顔を浮かべる。

「ではよろしく願います。幸運を祈っていますよ」

村上の言葉に明久はコクリと頷いた。琢磨と影山からは見えないが、明久の表情はまるで人形のように無表情だった。

「・・・じゃあ明久は姫路と会う前からオルフェノクだったってわけか」

「うむ。本人が言っておったのじゃから間違いないじゃろうな」

明久と別れ、下校途中の雄二、姫路、美波、ムッツリーニ、工藤、霧島達六人と合流した秀吉は明久と話したことを雄二達に報告していた。

「・・・私、知りませんでした。明久君がそんな昔から苦しんでいたなんて」

「・・・瑞希・・・」

「・・・どうして、気がついてあげられなかったんでしょうね・・・」

姫路の瞳から涙が溢れた。姫路は涙を拭うが、中々止まらない。

そんな姫路を美波は黙ってハンカチで涙を拭った。場に重苦しい空気が満たされ、姫路のすすり泣く声だけが響く。

「見つけたぞ・・・」

そんな雄二達に、突然声かけられた。その声の方向に目をやると、スキンヘッドの男が立っていた。その男は顔に模様を浮かび上がらせ、毒キノコの性質を持つオルフェノク——トードスツールオルフェノクへと姿を変えた。それを見ると、秀吉はデルタギアの入ったトランクケースからデルタドライバーを出し腰に着ける。そしてデルタフォンを口元に近づける。

「変身！」

『Standing by』

『Complete』

秀吉はデルタに変身し、トードスツールオルフェノクに突っ込む。トードスツールオルフェノクの顔面に拳を入れ、さらに腹に蹴りを入れる。その力にトードスツールオルフェノクは吹き飛び、廃ビルの中に転がっていく。デルタはそんなトードスツールオルフェノクに追い討ちをかけるかのように突っ込んでいく。

「おらあ！」

その時、トードスツールオルフェノクの手には鉄棍が現れ、デルタに向けて縦に振るう。

「うわっ！」

デルタはかろうじて避けるが、鉄棍が振り下ろされた地面は砕けた。おそらく食らえばただではすまないだろう。デルタは右腰のデルタムーバーを外し、口元に近づける。

「ファイア！」

『Burst Mode』

『ブラスターモード』になったデルタムーバーを持ち、デルタはトードスツールオルフェノクに突進する。

「はっ！ バカの一つ覚えだな！」

トードスツールオルフェノクは鉄棍を横に振るい、デルタを粉々にしようとする。デルタはギリギリで下に避け、そのまま突っ込む。だが――

「甘いんだよ！」

横に振られた鉄棍はそのままデルタめがけ斜めに振り下ろされる。このままでは顔面に直撃するだろう。トードスツールオルフェノクが己の勝利を確信し笑みを浮かべたその瞬間、

「おおおおおおっ！！」

デルタは銃口をトードスツールオルフェノクの腹部に向け、光弾を乱射する！

「ぐわああああああっ！」

トードスツールオルフェノクは吹き飛び、地面を転がる。その拍子に鉄棍を取り落とした事で、デルタへの攻撃も防ぐ事ができた。

デルタはミッションメモリーを外し、デルタムーバーに挿入すると、デルタムーバーの銃身が伸びる。

『Ready』

「チェック！」

『Exceed Charge』

デルタムーバーにフォトンブラッドが注入されると、デルタがトードスツールオルフェノクにデルタムーバーを向け引き金を引く。デルタムーバーから三角錘状の青白い光が放たれ、トードスツールオルフェノクを拘束する。

「はあああああああっ!!」

そして拘束されたトードスツールオルフェノクに、『ルシファーズハンマー』が放たれる!

「ぐわああああああっ!」

デルタがトードスツールオルフェノクの背後に現れると同時に、トードスツールオルフェノクは△の記号を浮かび上がらせ、赤い炎を上げ灰へとなくなっていった。

そして戦いの終わったそこに雄二達が現れ、それを見たデルタも変身を解除しようとする。

しかし、変身を解除しようとしたその時、デルタの目にある二人組の姿が飛び込んできた。その二人組――琢磨と影山を見て、デルタは臨戦態勢に入り、雄二達も警戒する。

「安心してください。あなた達の相手は僕達ではありません」

琢磨のその言葉に雄二達が眉をひそめると、コンクリートの柱の影から一人の人影が現れた。その人影は、

「明……久?」

紛れもなく、吉井明久本人だった。だがその表情はまるで人形のように無表情で、何を考えているか全く分からない。

「さあ吉井君。あの子達を倒して、ベルトを奪いなさい」

すると影山の言葉に反応するかのように、明久の顔に模様が浮かび、明久はティラノオルフェノクに姿を変えた。

「明ひ……?」

デルタがティラノオルフェノクに呼びかけようとした瞬間、

ティラノオルフェノクの拳がデルタの胸に直撃した。

「がはっ・・・!?!」

あまりの威力にデルタの肺から全ての酸素が吐き出される。

「うおおおおおおおっ!!」

ティラノオルフェノクはそのままデルタに突っ込み、デルタを蹴り飛ばす。デルタはそのまま吹き飛び、地面をゴロゴロと転がる。体を襲う激痛に叫びそうになりながらも、デルタはなんとか立ち上がる事ができた。だがティラノオルフェノクは右上腕にアームセイバーを出現させると、アームセイバーで数回デルタを斬り付ける。
「がっ・・・!」

デルタがふらふらとよろめいているにも関わらず、ティラノオルフェノクはさらに追撃を加えようとする。

「やめろ明久!」

「明久君!」

雄二と姫路がティラノオルフェノクに呼びかけるが、まったく反応を見せない。まるで、本当に人の心を捨ててしまったかのように。

「アキ! やめて! アキ!!」

戦場に、美波の悲しい声が大きく響き渡った。

第二十三話 涙と恐怖と敵対（後書き）

感想お待ちします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5132v/>

バカとテストと紅き閃光

2011年12月7日00時47分発行